

語り継ぐ 13

兵庫県立舞子高等学校
環境防災科 13期生

今のまちからは想像できない

22年前の『あの日』

目には見えない想いを

高校生が語り継ぐ

『阪神・淡路大震災』

題 名	名 前	頁
忘れない	秋 田 航 志	1
環境防災科として生きる	東 捷 嗣	5
次世代への教訓	五十嵐 亮 太	9
「あの日」の想いを語り継ぐ	泉 茉 宥	12
知るきっかけ	井手口 健 司	16
様々な視点から見た阪神・淡路大震災	今 井 秀 斗	20
語り継ぐ	加賀谷 あかり	24
語り継ぐ	勝 谷 勇 介	28
家族の阪神・淡路大震災を語り継ぐ	小 西 こころ	32
語り継ぐ	酒 井 彩 花	36
祖母の被災体験から	坂 惠 遼 介	40
阪神・淡路大震災を語り継ぐ	坂 田 有里亜	44
忘れてはいけない	阪 本 湊 童	47
母から聞いたこと	庄 司 優 果	51
阪神・淡路大震災を知らない僕に出来ること	高 木 真	55
震災と私	宝 田 奈々美	59
震災の重さ	武 中 大 空	63
黒い影	異 真 美	66
災害	谷 壮 志	70
僕の知らない震災	田 野 伶 弥	73
姫路から見た阪神・淡路大震災	民 谷 美友斗	78
“経験していないからこそ語り継ぐ”	中 村 磨 奈	82
「私にできること」	新 山 琴 音	85
自分に照らし合わせて考えてみる	西 尾 玲 音	89
当時の話を受けて	西 村 映 輝	92
災害と心	羽田野 矢 雲	97
～次世代に語り継ぐ～	平 石 冴	102
二度と繰り返さないために	平 佐 光	106
『次の世代へ』	福 永 誠 拓	110
井戸水に助けられた家族	藤 田 瑞 輝	114
未来へ	松 下 真咲樹	117
聞いてみた	望 月 龍之介	121
防災を続けること	安 田 も え	125
私にできること	山 下 舞	130
軌跡	山 本 篤 弥	134
隠れた被災者	山 本 泰 成	138
知らないからこそ伝える	山 本 千 智	143
語り継ぐ	横 山 楓 華	147
外側から見た大震災	義 経 有 貴	151
長田区での被災	余 嶋 芹 絵	154

忘れない

秋田 航志

私は阪神・淡路大震災を体験しておらず、私の実体験から語り継ぐことができない。従って、母から聞いた体験談を書こうと思う。

1 震災前の生活

私の両親は、当時2歳の姉と3人で暮らしていた。当時住んでいた場所は、垂水区城が山にある父の会社の集合住宅である。家は5階建てで、4階に住んでいた。

2 震災の朝

(1) 午前5時46分

この時は突然やって来た。まだ、就寝中であつたが、激しく突き上げられる様な揺れと食器が食器棚の扉を開き、食器が落ちる音に驚き、とび起きた。今まで経験したことがない揺れの大きさに、布団から出ることも出来ず、ひたすら早く揺れが収まることを祈っていた。後に聞くと20秒程の揺れだと聞いたが、2分にも3分にも感じられた。

(2) 揺れの直後

揺れが落ち着くと、父はすぐ岐阜県に住んでいる母方の祖父母に、家族が全員無事であることを電話した。幸いにもすぐに電話を掛けたので、つながることができた。祖父母は、ニュースで地震のことを知り、心配していたのでとても安心したとも言っていた。

3 避難所生活

(1) 避難所に行くまで

その後、すぐに会社の自治会の役員の方の呼びかけにより、近くにある兵庫県立視覚特別支援学校（当時の兵庫県立盲学校）の体育館に避難した。避難した際に、震災当時は冬ということもあり、とても寒かったので、家から姉の着替えと毛布を持って避難した。

(2) 避難所での暮らし

避難所である体育館に着くと、体育館の真ん中にストーブが準備されており、それを囲むようなかたちで大勢の人達が集まっていた。幸い、当時住んでいた社宅は近所付き合いが良く、夏祭りなどの季節に合わせた行事なども行っていたので、震災前からほとんど全員が顔見知りの状態だった。そのため、周りに顔見知りの人達がいる中で、肩を寄せ合って座っていた。その間にも何度か余震が起こり、そのたびに体育館の照明が激しく揺れた。余震前には、「ゴー」という地鳴りが鳴り、その後に揺れが来た。それが聞こえるたびに、また大きな揺れが来るのではないかと恐怖を感じていた。その傍らでひたすらラジオを聞いていて、その情報をみんなに伝えている人もいた。ラジオだけが唯一の情報源でもあった。時間がたつごとに徐々に被害の大きさを知った。阪神高速道路の崩壊、ビルの崩壊、長田の火災等、次々に報道されるが、経験したことがなかったので想像することができなかった。

その後、電気のブレーカーを落とすようにという指示が出たので、一旦家に戻った。戻る道中、長田の方を見ると、空は黒煙で真っ黒で灰まで降っていた。

また体育館に戻ったところで、会社からの支給でおにぎりやパン、飲み物が支給された。しかし、体育館の中はとても一杯になり、幼い姉がいたので、両親は車の中で過ごすことを決めた。車の中は狭かったが、大きな声を出したり、おむつ替えをする時などに気を遣わなくていいからだ。

そして、集合住宅の壁には、ちょうど中心部分に亀裂が入っていた。だが、危険があるとは思わず、自宅と車中泊を行き来しながら過ごした。

また、神戸は今まで地震があまりなかった町だと思っており、地震はこないものだと思っていた。従って、母は食品の備蓄や防災対策はしていなかった。とりあえず、地震の起きる前の朝に炊けていたご飯でおにぎりを作り、それとペットボトルのお茶でなんとかしのいでいた。夜中も何度も余震が繰り返し続き、その度に肩を寄せ合い、恐怖心と闘っていた。

4 震災発生の翌日から

次の日になっても何も変わらない日々。勿論、ライフラインは全て止まっていた。食事は冷蔵庫にあった食材をカセットコンロで簡単に調理して食べていた。トイレはお風呂に溜まっていた水で流していた。スーパーが開いたと聞けば、急いで行き並んだ。しかし、欲しい水や調理の手間がなくすぐに食べられる食品は、すでに売り切れており、棚には並んでいない状態だった。スーパーに行く道中でも、道路に亀裂が入り、盛り上がっている場所があちこちに見られた。また、ガス漏れをしているのか、ガスの臭いがする場所もあった。給水車が来ると聞けば、急いで並んだ。しかし、1時間並んでも、2時間並んでも、なかなか来なかった。幼い姉を連れて並ぶのは難しく、途中で諦めた。お風呂には入れず、水がないので、体を拭くにも拭くことができなかった。姉は、肌が弱く、お風呂が入れない状態が続いたせいで、オムツかぶれになってしまった。このまま神戸にいても何も変わらないと思い、母と姉は、神戸を立つことを決めた。その決断をしたのは、地震発生から5日後のことだった。

父は仕事のため、総合運動公園近くの、父方の祖父母の家へ身を寄せることになった。

母は姉を連れ、同じ集合住宅で暮らし、幼い子を抱えていた友達の車と一緒に乗せてもらい、西脇まで連れて行ってもらった。そこから、何度も電車を乗り継ぎ、母方の祖父母の家のある、岐阜にたどり着いた。

祖父母の家へ行ってから姉はすぐインフルエンザにかかり、病院でお世話になった。その時もまた、母の友達や近所の方々に優しい言葉を何度もかけていただいた。とても嬉しかったし、そのことは、今でも感謝していると言っていた。

それから、1ヶ月後の3月4日にライフラインが復旧してから母と姉は、神戸に戻った。

5 父の職場

父の職場は、明石にあったため、被害はさほど大きくなかった。2日程度休業にはなったが、何人かで車に乗り合わせて、出勤していた。職場の様子はキャビネットが倒れていたり、机の引き出しが出ていたりしたという。しかし、電気や水道はつながっていた。神戸にある別の工場では、スプリンクラーが回っていたり、護岸（水害を防ぐため、川岸や海岸に堤防を築くこと）が崩れていた。

6 現状と問題点

震災はとても人生の中で大きな出来事であり、ショックなことでもあった。震災前まではいつも通り生活できていたはずだったのに、地震が起きた後は、生活が一変してしまった。だが、あの震災から21年たった。今回、語り継ぐということで、思い出そうとしても記憶が曖昧な所もあった。震災で被害を受けて、大変な思いをしたのは覚えているが、どんどんと忘れてきている。また、その時はとにかく必死に生活をし、精一杯生きようとしていた。後から思えば、日記などを残しておけばよかった。

地震が起きた時は、上記の通り、社宅に住んでいた。そのため、人と人とのつながりは強かった。しかし、現在住んでいる所では自治会もない。震災当時は、自治会の役員の人達がすばやく指示を出し、スムーズに避難することができた。だが、自治会のない今、地域の関わりが少ないのが現状だ。もし今地震が起きた時、取りまとめる人がいない中での避難は、阪神・淡路大震災の時のようにスムーズにはいかないだろう。

また、地震が起きた直後には、すぐに地震対策を行った。具体的には、ガラスの飛び散り防止のシールを貼ったり、家具転倒の防止のために様々なグッズを購入した。避難用品を補充したり、食器棚の扉を開かないようにするグッズなど、地震によって実際に困ったことをもとに、改善法を考えすぐに行動に移した。

他にも、復旧が進み始めた時に、これを機にもう1度備えを充実させなければいけないと思った母は、非常食について見直した。震災時には食料があまりなく、慌てて買い出しに走ったが、その時買って食べた食べ物は決しておいしいと言えるものではなかった。従って、今は非常食を用意するのではなく、日常的に食べているものや使っているものを多めにストックするようにしている。そして、それを使ったり、食べたりした分だけ買い足すようにしている。こういった、いつもとあまり変わらない食べ物を口にするのもストレスの軽減だと思う。震災当時に食べていた物は、いつもと違い、あまりおいしくなく、そこから少しストレスが溜まった。だから、いつも通りに近い食事が1日でも多くできることによって、安心感が出て、落ち着くことができるといった事も大切だ。

7 母の思い

地震は、たくさんの悲劇を生み、たくさんの人を苦しめた。しかし、そこから目を背けても何も変わらない。目を背けることによって、またあの悲劇が起きるだけだ。だから、私たちは地震によってあのような悲劇が起きたことを受け止め、もう2度と繰り返さないように次の災害に備えることが大切だと感じた。

8 感想

(1) 母の話を聞いて

母からこのような話を聞いたことがなかったので、今回話が聞けて良かった。聞く前は、この話を聞くと母はとても辛くなるのではないかと不安だった。しかし、この機会に思い切って聞いてみると、母が真剣に自分が体験したこと全てを話してくれた。私は、それが少し嬉しかった。母は話し終えるといつものように笑いながら、世間話をしていたので安心した。ここで、私が思ったことは、こういった辛い話を身近な人から直接聞くのも大切なことだと感じた。親や親戚から話を聞くのは、恥ずかしいし、相手も辛くなるかもしれないと考えてしまうだろう。だが、阪神・淡路大震災という、実際に起こった災害を知らなければいけない。身近な人が震災時に思ったことを聞くことにより、次いつ起こるかわからない災害に対して、聞いた教訓を活かせるのではないのだろうか。また、防災に対しても意識を高めることができるのではないかと思った。他にも、身近な人が阪神・淡路大震災のとき、どのような苦労をしたのかという話を聞くと、自分のことのように思えて災害の怖さを感じることができる。このように、身近な人から話を聞くと親近感があり、よりリアルに感じられると思った。

そして、「次は、私達が伝えていく番だ」と強く思った。話を聞いた後も、私が伝えてもいいのかという迷いが、心の奥でずっとあった。また、最初は周りの人たちに、「体験していないのに伝えられるのか？」と言われてしまうのが少し怖く、あまりこの文章を書くのに気が進まなかった。しかし、母から聞いた話を読み返していくうちにこんなに大変な思いをしていたのかと改めて感じた。その時に、私に真剣に話して、伝えてくれた思いをここで止まらせてはいけないと感じた。私は、震災を体験したことがない。だが、知ろうとしてきた。授業内で学び、考え、1.17のつどいにも何回か参加させて頂いた。震災を体験した人達のようにはいかないけれど、その時に感じたことも踏まえ、次の世代に伝えていきたいと思った。

(2) 伝えたいこと

母の話の中で「日頃から、近所の人達とのコミュニケーションがあったから」という言葉が、何度も出てきた。環境防災科の授業の中で、過去の災害について学ぶことが多い。その中で、どのようにしたらこの問題は防げたのだからと、考える時がある。その時決まって、地域とのコミュニティがしっかりしていたら防げていただろうと、考える時が多々ある。だが、口では何とでもいえるが、実際、どのようなことが利点なのか分かっていなかった。というよりも、あまり考えてこなかった。だが、母からの話を聞いている中で、理解することができた。災害直後に必要なのは、「自助」である。自分の命を守るために。どのような行動をとるか考え、それを、実際の行動に移すというものだ。しかし、災害後の待っている避難所生活などでは、「共助」が大切だ。その時に、コミュニティがしっかりしていたところでは、今まで築きあげてきたことが役に立つ。それは、安心感だ。孤立して避難するより、団体に避難した方が、安心感が全然違うと感じた。団体に避難することにより、孤独感を感じることが少なく済む。また、困ったことがあると、共有ができ、全員で解決策を考えることができる。他にも、たくさんの情報を手にすることができ、状況の把握がしやすいなど、様々な利点が考えられる。また、これは、地域コミュニティがしっかりしていればしているほど良いと思う。母が住んでいた社宅では、季節に合わせた行事を行っていたのが、地域コミュニティを強くしたと考えられる。

しかし、現在では、母の時代のように、地域コミュニティがしっかりしているとは思えない。私の住んでいる家の周りの人達とは、あいさつも交わすことがない。この状況では、災害が起こった時に、避難所での「共助」ができるとは考えにくい。従って、この状況を改善するためには、地域のお祭りに積極的参加したり、あいさつだけでもいいので、近所の人と一言でも話すという事が大切だと思った。今は、一戸建てに住んでおり、社宅に住んでいた頃よりは地域とのかかわりが難しくなっているが、そこを改善できるかで、これから起きる災害に対しての対応というのは変わってくるのではないかと思う。また、語り継ぐときは、地域と関わることの大切さと、関わることによってどのようなことができるか、重点的に伝えていきたいと思った。

(3) 私にできること

私は、環境防災科に入って、防災について学んできた。阪神・淡路大震災を始め、過去に起きた災害について学んできた。海外の災害も学んできた。そんな私に今できることは、学校の特徴を生かした活動や、学んだ知識を生かした活動ができる。具体的には、募金活動や被災地支援活動である。募金活動では舞子高校として駅前に立ち、募金活動するという活動である。この活動では、私達の思いだけでなく、実際に現地に行けなくてもその人の思いを届けることができ、結果として被災地支援を行うことができる。被災地支援活動では、実際に被災地に行って、ボランティア活動を行うというものだ。東日本大震災が起こった時も先輩の方々が地震が起きて間もない被災地を訪問し活動した。現在は、熊本県と大分県に被害をもたらした平成28年熊本地震の支援の仕方を考えている。そういった時に、過去に起きた災害の教訓を踏まえて考えている。過去の教訓というのは、現在も通じるものが多い。このように、過去の災害を踏まえ、現在どのような支援ができるのか考え、それをたくさんの人達と共有していきたい。

また、備えの大切さを伝えていきたい。阪神・淡路大震災を体験した人達でも、備えができていない家庭が多い。あれだけ大きな被害が出た大震災でも、時間が経てば風化が進み、地震に対しての備えが不十分になってくる。備えが不十分になると、地震に対応しきれず、同じようなことがまた起きる。これから起きると言われている、南海トラフ地震に対して、今すぐにでも、備えなければいけない。従って、私は、阪神・淡路大震災を語り継ぐうえで、備えの大切さについて、もう1度考え、理解してほしいと思った。

他にもできることは、探せばいくらかも見つかると思う。だから、自分自身で積極的に行動していき、自分が持っているスキルを十分に使い、活動していきたいと思う。

(4) 将来の夢

私の将来の夢は、地方公務員になることだ。地方公務員になろうと思ったのは、テレビ番組がきっかけだ。その番組では、地方公務員についての特集が組まれていた。以前は、地方公務員というと、地味なイメージだった。しかし、そのテレビ番組を見て、印象は、180度変わった。地方公務員と一言で言っても、様々な仕事内容があった。その中に、町おこしというものがあった。地域でイベントを開いたり、マスコットキャラクターを作ったりといった内容だった。私は、そんな町おこしがしたいと思っていた。

だが、環境防災科に入って、防災のことを学んでいくうちに、防災の大切さを学んだ。防災といえば、環境防災科に入る前は、設備面のことだけを考えていた。耐震化であったり、堤防などといった、災害時に役立つ機能のことだ。しかし、それは間違っていた。耐震化などの設備面もとても大切だ。だが、それだけが、防災につながるわけではない。避難訓練などといった、あらゆる災害を想定しての訓練や、近所の人とあいさつなどの会話をするだけでも防災につながると思った。さらに、ボランティア活動にたくさん参加させていただいた際に、たくさんの方と関わり、話す機会があった。その中で、人と話す楽しさやコミュニケーションの大切さを学んだ。また、語り継ぐを行っていくうちに、語り継ぐ大切さを学んだ。誰かが語り継がなければ、過去の災害は忘れられてしまうと強く感じた。今まで、環境防災科に入る前は災害に対して、このようなことは考えてこなかった。だが、今回母の話を聞いて、語り継がなければいけないという責任感を感じた。このようにたくさんの事を学び、感じてきた私はこのことを私の職業で生かせるのではないかと思った。それは、まちづくりというものだ。地域の人の声を拾い、改善するために行動する。個人ではできないことも、行政という立場であらゆることができ、防災対策がしっかりとできているまちづくりをしたいと思うようになった。しかし、この夢を実現するためには、まだまだ知識が足りない。それを、これから生きていく上で補っていきたい。そして、災害が起きた後のことについても行政という立場から考えていき、できる支援をしていきたいと思っている。

私は、まだ防災について知識が浅いのでこれからも防災に関わっていき、全員が防災対策が当たり前に行っている、そんな町を作っていきたいと思っている。

環境防災科として生きる

東 捷嗣

1 はじめに

僕は、阪神・淡路大震災発生の3年後に生まれた。そのため、阪神・淡路大震災を経験していない。そんな僕にできることは、阪神・淡路大震災当時の話を聞き、伝えることだ。僕は、当時須磨区に住んでいた父に話を聞いた。

2 1995年1月17日

(1) 阪神・淡路大震災発生

阪神・淡路大震災当時、父は須磨にある実家で、祖父、祖母、父、そして父の妹にあたる叔母の4人で暮らしていた。

結婚式を1か月後に控えていた父は実家の二階で寝ていた。

朝方、父は今までに経験したことのないようなドーンという衝撃と共に目が覚めた。部屋の照明は激しく揺れており、目は覚めたものの何が起こったのか全くわからない状況の中で、祖母が父と叔母を呼ぶ声がして部屋を飛び出した。

(2) 揺れが起きて

幸いにも家族4人は無事で確認したのちにとりあえず外へ出た。家は倒壊していなかったが、リスクを考え、暗闇の中家の前に停めてあった車に乗り込み、寒さをしのぎながら余震の恐怖に耐え続けていた。父は生まれてから本格的な地震を経験したことがなかったので、少し大きな余震が起こるたびにビクッとしていた。

3 少し落ち着いて

(1) 耳を疑う情報

少し落ち着いた頃に、車のカーラジオをつけると、高速道路が倒れている。家屋がほとんどつぶれている。あちこちで火事が起きている。聞いただけでは何が何かわからず耳を疑うような情報ばかりだった。

(2) テレビで見る神戸

阪神・淡路大震災当日は、婚約者である母が愛媛県から神戸にきて結婚式の打ち合わせをする予定だったので、母に電話をすると、母からも電話をかけていたが、全くつながらない状況だった。父が母に無事を伝えるとテレビで神戸の状況を見ることができる母から神戸の様子を色々と説明してもらい、父はそこでやっと自分の状況を理解することができた。

(3) 結婚式

落ち着いてから、打ち合わせする予定だったホテルと新居用に借りていた賃貸マンションの様子を見に行った。垂水で借りていたマンションの被害はほとんどなかったが、西神のホテルの内部はひびだらけでうす暗く、シーンとしていた。避難生活で苦労している人がたくさんおり、まだ復興どころではない神戸で結婚式という華やかな事を行ってもいいのか悩んだが、延期するにしてもいつになったらまともにできるかわからないので式の内容と招待する人を変更して予定通りの2月11日に行った。三宮方面のホテルだったら被害が大きいため無理だったが、西神方面は比較的被害が小さかったため行うことができた。

結婚式当日、京都に住んでいた伯父と伯母は車で神戸へ向かっていたが、高速が倒れていて利用できなかった。そのため有馬の方を遠回りしてきたが、その道も渋滞で伯父はイライラして一度帰ろうとしたが、息子に運転を代わってもらい、タクシーの運転手に早い道を聞きながら進み、普通よりも1時間遅く会場に着いた。

4 地震後の生活

(1) ライフラインと食料

地震直後、停電は早い段階で解消したけれど、ガスと水道の復旧はなかなか進まなかった。水に関しては、仕事場が西神南で水が出たそうで、事務所で汲んで持っかえったり、実家近くの公園の井戸水を汲ん

で生活用水としていた。当然お風呂には入れなかったため、尼崎の親戚のところへ行きお風呂を使わせてもらったり、三木にある銭湯に行ったりしていた。

食料に関しては、地震直後、近所のコンビニ、スーパーの食べられるものは全て無くなっていた。父は仕事の関係で三木方面に行っていたので、三木のスーパーでパン等を大量に買い込んで、灘区で避難生活をしていた親戚に持って行ったそうで、そのとき親戚がとても喜んでくれたのがとてもうれしかったそうだ。

(2) いつもと違う街

地震後は、高速道路は倒壊しており、電車も使えなかった。それに、倒壊した建物で道がふさがれ、地域の生活道路まで車であふれていた。日が経つにつれて「生活物資配達中」と手書きで書いた紙を車に貼り付けている県外ナンバーの怪しい車も目に付くようになり余計に身動きが取れなくなった。このとき、通常なら30分で着くような道に5時間くらい平気がかかっていた。

神戸から西宮辺りまでは被害が大きかったが、三木、三田方面や、武庫川を越して尼崎や大阪はほとんど普段通りの生活をしており、まるで別世界のように感じたことがショックだったそうだ。

5 父が阪神・淡路大震災を通して思うこと

阪神・淡路大震災から今年で21年が過ぎた。父はあっという間の21年だったと言っている。幸いにも父の親戚や知人の中には亡くなった人はおらず家を失った人もいなかった。しかし、だからと言ってこの地震が父にとって小さいものだったかというそうではなく、父や父の周りの人たちの防災に対する意識が高くなったことは間違いないそうだ。

阪神・淡路大震災に限らず、地震や水害などの大災害が毎年のように起こっている今日、その中で活動してくれているNPO法人、ボランティア、警察、消防、自衛隊などの行政、その他様々な方々の活動や経験はその人にとっても、この社会においても貴重なものとなっているはず。その経験を経験だけで終わらせず、教訓として今後の災害に活かすために全ての関係者で情報を共有し、伝えることが大切だと言ってくれた。また、今後日本のどこで、いつどんな災害が起こるかわからないなかで、被害をゼロにすることはできないと思うが、少しでも被害を少なくすることはできる。そのためにも地震を経験したものが率先して防災に取り組んでいかなければならないと思っており、災害を防ぐことは自然の力に逆らうためできないが、災害から身を防ぐことは自分たちの意識、行動次第で可能だと思うので、しっかりした知識や備えで身を防ぎたいと話してくれた。

6 叔父の話

結婚式の話のときに出てきた叔父にも少しだが話を聞いた。叔父は1月17日、仕事で中国にいた。テレビで地震を知ったそうで、そのときのニュースで倒れている高速のことが報道され、驚いたとともに、ニュースでは高速道路が倒れてタクシーが下敷きになり運転手が死亡したと言っていたそうで、もっと被害があっただろうと思っていた。

地震が起きたことを受けて、次の日には飛行機で日本に帰ってきたが、夜、日本上空を飛んでいるときに、乗客のほとんどが窓によっていったそうで、なにかと思ひ見てみると火事で炎上している長田のまちが見えた。しかし、その飛行機に乗っていた人は地震が起きたので帰国している人が多かったらしく、全員が興味津々に街を見てはおらず、うつむいている人もいた。

7 まとめ

(1) 父の話を聞いて

父が須磨に住んでいたこと、被害があまり大きくなかったことは今までに聞いたことがあったので知っていた。そして、それだけを聞いていたのでメディアで見たりするような阪神・淡路大震災は経験しておらずそんなに変わらずに過ごしていたのだと勝手に思っていた。しかし、今回この語り継ぐを書くにあたって詳しく話を聞くと、父も阪神・淡路大震災の被災者であることを感じた。

父は幸いにも大きい被害にはあっておらず、ケガなどもせず知人や親戚も亡くなっていない。だから被害が小さいから良かったことなかった。ではなく、被害をあまり受けてないからこそその阪神・淡路大震災があると思う。例えば、家が全壊して長期期間の避難所生活を余儀なくされた人や、身近な人を亡くした人であれば、きっと被災後はしばらくの間自分のこと、自分が生きること、精いっぱい、周りに目をやることは

できないと思う。しかし父は自分も被災者でありながら、避難生活していた親戚に食料を届けて喜びを感じている。そんなことは、被災者と支援者(非被災者)の関係であることだと思っていたが、被災者と被災者同士の助け合い。そういったことを父は感じたのだと思う。

父が阪神・淡路大震災を幸いにも無事で乗り越えてくれたこと、知人などにも被害があまり及ばなかったことを本当に幸運に思う。

(2) 環境防災科に入って

僕が環境防災科に入学してから3年、いつかは書くものだと思っていた「語り継ぐ」。その「語り継ぐ」を書く時になり考えるのが、自分は“環境防災科で一体何を学んできたのだろう”。ということだ。

僕が環境防災科に入った時、災害や防災に関する知識は皆無と言っていいほどで、自分の街で起きた阪神・淡路大震災のことについても詳しいことはほとんど知らなかった。

そんな僕がなぜ環境防災科に入りたいと思ったのかというと、消防学校体験入校、地域でのボランティア活動、東北訪問、ネパール訪問などの他の高校では体験しにくいようなことが色々できておもしろそうで、その中で将来自分がしたいことなどが見つければいいと思っていた。そのため今までにしてきたボランティアやいろんな活動の行動源は好奇心と思いきり、そんな好奇心からしてきた活動全てが自分のためになることで考えさせられることばかりだった。

高2の夏に初めて行った東北はとても大きい衝撃を受けた。写真や動画などで津波の恐ろしさや津波の恐怖は知っていた。知っているつもりだった。しかし直接目でみるものすべてが初めて見るようなものだった。バスからみた津波に流された街、何もない。あるのはコンクリートの土台。今までに見たことのない広さの空き地で、そこに住宅街があったとは思えなかった。大川小学校、大川の悲劇と言われている。写真では散々見てきた、そこで起きた出来事も学習してから行った。なのに、その場に自分の足で立つと言葉が出なかった。建物からは鉄骨がむき出し、生活のあとがあった。建物を見て高1の夏に訪れた原爆ドームを彷彿させられた。

高2の冬に行ったネパールでは「違い」に驚かされた。本来夏に行く予定だったが、参加申し込みを出した直後の夜のニュースを見た時の衝撃は忘れられない。自分が行こうとしている国の街が地震によって破壊され、日本よりも建築技術が低く防災の意識も低いネパールでは甚大な被害を受けた。

しかし、地震から8か月後のネパールに訪問し、建物や道はひどい被害を受けていたが、街の人々は想像以上に普通に過ごしており地震が起きたことをあまり感じなかった。

日本では街灯がほとんどの場所にあり、水道の水が飲めることが当たり前で、どこに行ってもガイドや案内が詳しく書かれている。だが、ネパールでは街灯がほとんどなく日が沈むと真っ暗で、水道の水は飲むとお腹を壊し、空港などでも丁寧な案内はなかった。不親切という見方もできるが、日本人は案内などに甘えず自分で考え自分から動くという能力をなくしているのではないのかなと思った。

日本では当たり前のことでも国を飛び出し他の国にいくと当たり前が当たり前ではないことが分かった。

(3) 自分の夢

僕は今、高校の保健体育の教師になりたいと思っている。元々は、認知症の祖母と暮らしていたこともあって、お年寄りの方と話をしたり、お世話をするのが好きで、介護などの福祉系の仕事に就こうと思っていた。しかし、介護と、学校の先生にも興味があった。どちらか悩んだときに、先生になろうと思った。なぜなら、今環境防災科で習ってきた災害や防災のことを伝えていくには、高校の教師が良いと思ったからである。すべてを大人任せにせず、若者が自ら行動するからこそできることが多くあると思う。平成28年熊本地震の際に環境防災科の生徒が主体となり募金をしたときには、2日間で100万円もの義援金が集まった。このように若者には大きい力がある。そのように自ら考え自主的に行動できる若者を育てて生きたい。僕が教師となった時に、生徒の心にしっかり寄り添って、一人一人の気持ちを汲みとり生徒の長所を伸ばすような教師になりたいと思っている。

(4) これから

環境防災科に入学してこれまでに様々な活動をしてきたが、それで自己満足で終わってはいけない。まだまだこれから色んな活動をすると思う。その一つに、4月14日に発生した熊本地震の被災地支援活動だ。この活動は、今までに僕がしてきたなかでも初めてのタイプのボランティアで、なにをするのか、具体的な内容は全く分からず、環境防災科で培ってきた知識などが発揮されるのだと思う。本当にその場その場で活動を指示されるので、臨機応変に対応することが必要となる。正直不安でいっぱいだが、自分のやれることを

したいと思っている。

夏には、自身2回目となる東北被災地訪問がある。きっと2回目の東北は初めて行った東北とはちがう訪問になると思う。1年たってなにが変わったのか、復旧は進んでいるのかなど2回目だから分かることや感じられることがあると思うので、視野を広くもち色んなものに目を向けたい。

(5) 感想

環境防災科で様々な災害や防災の学習をしてきたし、被災地も訪問したけれど、どの災害も、経験していない。そんな僕にできることは、直接被災地に行き、自分の目で見て、感じることや、災害を経験した人に話をしてもらう。つまり、語ってもらうことだ。語ることが、災害を経験したものの使命であり、そしてその話を継いでいくことが僕達、災害を経験していないものの使命だと思う。

僕は、環境防災科で様々なことを学んできたが、ここで学んできたことをここで終わらせるのではなく、将来自分が就いた職業やこれからの人生に活かしていきたいと思う。そして、しっかり伝えていくことがこの「語り継ぐ」をすることの意味だと思う。最初にも述べたが、僕は阪神・淡路大震災の3年後に生まれたため阪神・淡路大震災のことは知らない。それを自分なりの伝え方や言葉で伝えていき、阪神・淡路大震災を風化させないことが今を生きる僕たちの使命であり、環境防災科にいる意味だと思う。僕は環境防災科で、学んできたことを全て役に立つ知識だと思っており、ここで勉強できていることを誇りに思っている。だから、これから先、出身校を聞かれたときに胸を張って言いたい。

「舞子高校環境防災科です」

次世代への教訓

五十嵐 亮太

○祖母（当時52歳）に聴いて

1 阪神・淡路大震災が起きるまで

（1）地震に対する意識

地震に対する意識は微塵も無かった。もちろん家具の固定、備蓄品などの対策をするという概念すら無かった。

（2）なぜ？

祖母は生まれてから阪神・淡路大震災まで一度も小さな地震さえ体験したことが無かった。他県では、小さな地震が起きたということを聞いていたが、神戸には、一度も地震が起きたことが無かった。これらの出来事によって、神戸には地震が来ないと思い込んでいた。

2 1995年1月17日午前5時46分

（1）何をしていたのか

大久保にある家で息子（伯父）と暮らしていた。祖母は寝ていた。息子は朝早い出勤で、朝風呂が日課で、当時はガスで沸かすタイプの風呂に入るため、風呂が温まるのを布団の中で待っていた。

（2）思ったこと、感じたこと

布団で寝ていた祖母は、驚いた。下から突き上げる縦揺れがドンと一回起こった後、激しい横揺れが続いた。揺れの長さは体感的に5分くらい続いたようだ。最初は、何が起きたか分からなかった。台所にある食器棚が倒れ、食器が飛び出したのを見て、初めて地震が起きたということを実感した。

3 揺れが治まった後

（1）取った行動

息子が朝風呂が日課であることを知っていた祖母は、ベランダにあるガスの元栓を消しに向かった。しかし、ベランダに行くには、食器が散乱した台所を通って行かなければならなかった。だが、そんなことよりも火を消すことだけを考えていて、食器で足を切り怪我をした。スリッパを履くことや電気を点けることよりも、火を消すことを優先した。火を消すことを優先した理由は特に無い。直感的に、揺れているから火事になると思い、咄嗟に判断をした。

火を消した後、看護師として働いていた祖母は、ライフラインに影響は無く、勤務先である王塚台の偕生病院に現状を確認するため電話を掛けた。しかし、10回くらい電話を掛けたが、1度も通じなかった。

午前6時05分頃、部屋の電気を点け、テレビを点けた。ニュースキャスターが何度も何度も地震が発生したことを繰り返し言っていた。また阪神高速道路を支える柱が折れ、横倒れになっている映像や多くの死者が出ているという情報、交通機関（バス、電車）も寸断されていた。恐怖を感じると共に助かったという安心感が芽生えたようだ。

しばらくして、阪急六甲駅付近に祖母の母と居住していた祖母の兄から、母が足を骨折して、家（木造、瓦、平屋、築100年）が潰れた（半壊）と電話が掛かってきた。

その後、職場である偕生病院に向かった。いつもは車で行くが、渋滞があったため、自転車で裏道を通り30分ほどで職場に着いた。途中には、潰れた家を5、6件見た。病院に入ると、怪我人が押し寄せていた。それに対して、医師や看護師の人数が不足、この日は日勤で10人出勤する予定だったが、祖母1人と、前日の出勤者しかいなかった。そのため、患者を一気に治療することが出来ず、重症患者から応急処置を施した。院内では、水が止まり、電気も点かず、非常灯で代用した。

午後9時頃、帰宅した。テレビには、長田の火災の報道がされていた。地割れで防火水槽の水が無く、被害が拡大して、多数の死傷者が出ていると聞いた。

11時過ぎに布団に入ったが、不安で寝れなかった。

（2）1月18日

祖母は、普段より早めの午前5時に起床し、7時頃に昨日と同じルートで出勤した。すると病院に祖母の

兄から、骨折した母が自衛隊のヘリコプターで三木市の市民病院に搬送されたと電話が掛かってきた。後から分かった事で、祖母の兄は、骨折した母が、家から自衛隊に王子公園のヘリコプター基地に連れて行かれ、三木市の市民病院に搬送されて、自衛隊から電話があるまで、母がどこで、何をしているのかが分からず、不安に駆られていたようだ。祖母は連絡を受け、僕の父に車で病院に送ってもらった。通常は30分程度で着くが、その日は渋滞で2時間30分ほど掛った。祖母は翌日も母に付き添った。

(3) 1月19日

三木市は被害が少なかった為、スーパーなどの店が開いていて、骨折した母の世話をするため、日用品や入院必需品などを購入した。この日は3日後の22日に足を骨折した祖母の母の手術の話があり、高齢のため手術失敗の可能性があるとされたが、無事成功した。

(4) 1月23日

22日の手術からずっと付き添い、この日の夜に帰宅した。

その頃、テレビでは、主に避難所の様子や死者の把握の報道がされていた。

4 地震後の変化

ハード面の変化として、家具の固定や水などの備蓄品を置くようになったと言う。ソフト面の変化としては、地震に対して備えようという意識は芽生えたが、それと共に、阪神・淡路大震災やそれ以降の新潟県中越地震、東日本大震災、平成28年（2016年）熊本地震などがあり、様々な不安が募っている。

5 感想

僕が、この文書を作成するに当たって、祖母に阪神・淡路大震災に関する話を聞いた。阪神・淡路大震災を体験した人にインタビューをすることを祖母に決めた理由は、阪神・淡路大震災に少しでも繋がりを持っている事を出来るだけ多く知り、伝えるためには、長い期間で震災を見つめることが大切だと思ったからである。

祖母の話を聴き、僕自身が考えたことが4つある。

1つ目は、地震に対する意識が無かったことについて、感じたことや環境防災科で学んできた知識を生かして話していきたい。これまで祖母以外にも阪神・淡路大震災を体験した方々から何度か話を聴いてきたが、誰もが神戸に地震が来るとは思っていなかったと話す。確かに祖母は阪神・淡路大震災まで神戸では、小さな地震すら体験した覚えが無いという。僕は、そのように思い込んでいたのも仕方が無かったのではないかなと思った。平成28年（2016年）熊本地震を例に出してみる。テレビでは、南海トラフ地震や首都直下地震が注目されている中、熊本で死者を出すほどの地震が起こることを誰が想定しただろうか。熊本県や大分県の被災者は、自分の所にこんな大きな地震が来るとは思っていなかったと話していたということを知ったことがある。阪神・淡路大震災前よりは、新潟県中越地震や東日本大震災が起こっていて、人々の防災意識は高まっているに違いない。それなのに、平成28年（2016年）熊本地震も阪神・淡路大震災と同じ過ちを繰り返しているのではないかなと思う。つまり、人々の防災意識の低さを示している。

2つ目は、祖母の取った行動について考えていきたい。祖母が、揺れが治まってから最初にとった行動は、風呂のガスの根元栓を閉めに行ったことだ。祖母が冷静に判断をし、行動に移していなければ、また、その場に祖母がいなかったら、もしかしたら、祖母や周りの住人に甚大な被害が出ていたかもしれない。また、もし祖母が長田区のような木造建築の家や密集化している地域に住んでいたら、ガスの元栓も消しに行けず、悲惨な事になっていただろう。正直、祖母に阪神・淡路大震災の体験談を聴くまで、家が損壊したり、家具が倒れたりしたのは、神戸市全域と芦屋市や西宮市周辺くらいだと思っていた。しかし、明石市の大久保周辺でも、家具が倒れたりしたということを知り、改めて阪神・淡路大震災の悲惨さを実感した。実際に、祖母の母が、阪急六甲駅の近くで、木造建築で屋根が瓦、築100年ほどの老朽家屋に住んでいたことから、足を骨折し、家が半壊するという被害をもたらした。

3つ目は、祖母の出勤先である王塚台の偕生病院でのことを聞いたことについて考えていきたい。医師や看護師の人数不足によって、患者の治療に時間がかかった。これは、災害時などの異常が発生した時に備えた整備体制が整ってなかったことが原因と考えられる。しかし、祖母を含めて、医師や看護師も被災者の1人である。そのことも配慮しながら、今後どのような整備体制を整えていくべきかが課題だと思う。また、この病院では、水、電気などのライフラインが遮断された。電気は、非常灯を代用したが、水に代わる物は

無かった。病院に入院していて、寝たきりの人などがいれば、避難所などに移動することが出来ないで、入院者一人ひとりに水などの備蓄品や、災害時に役立つ非常持ち出し袋なども備えておく必要がある。つまり、病院は災害時に被災者の命を守る重要な施設であるため、病院が被害を受けると、周囲への影響は凄まじい。だから、病院は多くの人を守るために、耐震化や災害時に備えた備蓄品の整備をしておくことが大切である。

最後に、祖母の阪神・淡路大震災以後の変化について考えていきたい。祖母は、ハード面の変化として、家具の固定や備蓄品を置くようになった事については、家具の固定だけではなく、寝室には大きな物を置かない事や、位置を配慮する事、備蓄品もどこに置くのが良いのかを考える必要がある。例えば、備蓄品を置かなければ、外に出る時に通る玄関や車の中、寝室、外の倉庫など様々な場所にいくつか備えていなければならない。1つの場所にしか備蓄品を置いていなければ、もしその場所が崩れていたりすると、備蓄品を持って避難することが出来ない。そんな時に、他の場所にも整備していれば、困ることは無いのだ。備蓄品を整備出来ていない人は、逸早く備える事はもちろん、備えて終わりではなく、災害時を想定して、どのように、何を、どこに備えるのかを考えておくことが大切である。

祖母から聴いた話とこれまで環境防災科で学んできた阪神・淡路大震災についての課題や教訓をまとめる。

まず、阪神・淡路大震災において、多くの方々が深い傷を負うような甚大な被害が出た1番の原因と言えるのが、人々の防災意識の低さである。災害において被害を最小限に食い止めるには、対策なしでは実現することが出来ない。耐震化をしていれば、家が壊れる事は無い。備蓄品を備えていれば、避難生活でのストレスを少しは軽減できる。避難場所や避難経路を確認しておけば、災害時の混乱を防ぐ事が出来る。地域コミュニティが強化されていれば、共助（地域や近隣の住民と助け合うこと）が実現できる。これらのように、対策は災害時に自分や身近な人、地域住民などを守る非常に重要な役割を果たしている。また、一番いけないのは、同じ過ちを繰り返すことだと思う。いずれ、南海トラフ巨大地震が起こると想定されている。30年以内に70%という数字を聞くが、南海トラフ巨大地震は100%起こると言っている人もいる。明日起こるかもしれない南海トラフ巨大地震に備えて、今すぐにでも行動に移しておく必要がある。阪神・淡路大震災などの過去の災害からの教訓を受け継ぎ、今、何をすべきなのか。一人ひとりがそれぞれ考え、行動に移すことが自分の命を守り、さらに周囲の人々を守り、それが社会の防災力の向上へと繋がり、減災を実現できるのだ。

僕は、この阪神・淡路大震災を語り継ぐことを趣旨とした文書を作成することに強い責任感を感じている。僕は、阪神・淡路大震災を体験していない世代である。どのように伝えようか、何を伝えようか、と思った。日本の終戦から70年が過ぎ、後40年、50年すれば、戦争を体験した人がいなくなってしまう。その中で、後世に戦争を語り継いでいくには、若者の力が必要になる。阪神・淡路大震災もいつかは体験していない人がいなくなる日が来る。僕たちが阪神・淡路大震災を体験した人から話を聴き、それを後世に語り継ぐ。そうすることで、教訓を生かし、さらに災害に強い社会を作り、同じ過ちを防ぐことが出来るはずだ。想定は単なる予想であり、絶対とは限らない。いつ、どこで災害が起きても対応できるように、最悪の状態を考えて対策をすることが大切である。また、僕は、災害について考える上でいつも大切にしていることがある。それは災害を様々な視点から見つめることだ。高齢者、障がい者、妊婦者、乳幼児、外国人など様々な人がいる。さらに、高齢者の中にも、人それぞれのニーズがある。これは、障がい者や妊婦者、乳幼児、外国人などにも言える。災害に対してそれぞれの感覚、感情があるためそれぞれの人に合った対策、対応をしなければならない。だから僕は、様々な人から阪神・淡路大震災や過去の災害の体験談を聴き、様々な人に過去の教訓を伝えたい。僕は、環境防災科で防災を学んでいる以上、伝えるという使命を果たさなければならない。学び、伝え、そして、一人ひとりの防災意識の向上を目指し、伝え続けていく。

「あの日」の想いを語り継ぐ

泉 茉莉

1 はじめに

私は、阪神・淡路大震災を経験していない。だから実際に経験した人から当時の様子を聞き、それを語り継いでいくことしかできない。この「語り継ぐ」を通して父と母の経験談を詳しく聞くことができて良かったと思う。

当時父は新長田で、両親と姉3人と暮らしていた。母は西区で、父と姉と暮らしていた。

2 1月16日震災前日の様子

父は、前日は仕事の帰りも遅く、ぐったり眠りについた。翌日の泊まり勤務に備え、ゆっくり昼まで寝ようとしていた。母は、特に普段と変わらない生活をしていた。

3 1月17日地震発生

(1) 父の体験

目が覚めるとグラグラと揺れたままですぐに立ち上がったが、周りに手をつかないと立ってられないくらいの揺れだった。気が付くとタンスが倒れて姉が下敷きになり、揺れながらタンスを押しつけて無事救うことができた。

(2) 母の体験

ぐっすり眠っていた中、夢かと思うぐらいすごい地響きのような音と共に、身体が全く動かせず揺れている感じがして、頭上の洋服ダンスの上に置いてある、ショーケース入りひな人形が落ちないか、心配しながらじっとしていた。何が起きているのかわからず怖かった。台所では、早朝から起きていた父が、食器棚の扉が開かぬよう、おさえながら「地震やなー」と言っていた。食器棚は割れ、中の皿は数枚割れていた。揺れている時間がとても長く感じた。

(3) 外の様子

母は、外は、特に変わった様子はなかったが、何が起きたかわからないほど、シーンとしていた。よく見ると、道路が割れていた。

父は、あたりの電気がすべて消えて、信号も消えて、ガスのにおいが漂っていたのが印象的だった。

(4) 安否の確認

母は、全員家の中で寝ていた為、無事はすぐ確認できた。

父は、正直周りに気遣う模様はなく、親や姉の無事だけを確認して飛び出したので、住宅の下の人ばかりで出会って「大丈夫やった？」と話すのがやっとだった。

(5) 復旧

母は、数日後、割れたガラスの修理をした。自宅はすぐに片づけられる程度だったため、部屋の片づけをした。ライフラインについては、水が1週間止まり、ガスは2週間程度止まった。電気は特になく、大丈夫だった。

父は、台所のガラス類や、戸のガラスなどのすべてが割れ、転倒物のせいでグチャグチャになった部屋を、生活のできる状態にするまで何か月もかかった。

(6) 復興

母は、その時まで、地震の怖さを知らなかったため、備蓄等一切していなかった。この数日間で、水道が止まる不便が身に染みた。電気は通っていたため、テレビにより何が起きているか、常に見ることができたからよかった。情報収集の大切さと、水の確保と、数日の食料等の備蓄の大切さを知った。

(7) 近所の人との関わり

母は、あいにく、近所の人とのつながりを感じるような事はなかった。北区に住んでいたため、被害が少なかった事も、要因の一つかもしれない。当時付き合っていた父の所に被害が多かった（大きかった）ため、何度か食べ物等を差し入れた。

(8) 震災による不便

母は、一番の不便は、水不足だった。トイレも、食事も、どちらにも水が一番大切だった。カセットコンロが役立った。水をお鍋に入れに行ったら、歩くところぼれて、なかなか多くは持ち帰れず、水を入れるものも必要だと感じた。

父は、電気、水、ガスは当たり前にあるものだと思っていたが、やはり生活する上でなくてはならないものだと、改めて痛感した。

(9) 仕事への復帰

母は、1か月間は、休みだった。一か月後、職場のホテルオークラ神戸は、コップや皿、すべてが割れており、レストラン内は、ドリンク類の瓶割れ等があり、たくさん汚れるなどのかなり建物の中に被害があり、掃除等を、作業員で一週間ほどした。ホテル営業再開まで、地震発生より2か月後だった。

父は、仕事場の被害より自分の所のほうに被害が強かったので、1～2か月ほど休んでいた。電気工事なので、逆に直していく仕事が多かった。

4 震災から21年経った今、感じたこと

(母)

兄や私は、それぞれの夢や目標を持ち、入学して環境防災科で災害についても学ぶことができたと思う。母も改めて地震の起こったときにどんな事から大切だっただろうかと、考え直す機会をもらった。水や食料も大切だけれど、やっぱり家族の安否確認が一番大切だと思っている。だから、どこで待ち合わせし、どのように合流するのかを、本当に話しておく必要があるし、今決めている小学校が、もし被害が大きかったらどうするのかとかも話し合わないといけないと思う。母は、知り合いがなくなる事もなく、被害も少ない北区で被災したから復興も早かったし、本当の地震の恐ろしさは、兄や私に教えてもらえて勉強になった。南海トラフに負けぬよう、卒業を迎えるこの一年で、家族で本気で話し合いをしよう。と、話してくれた。

まとめとしては、当時、スーパーやコンビニ、至る所で水やお米やその他の必要なものが全て売り切れ、何人もの人が、一人で買い占めていく姿が特に印象に残っている。不安な気持ちの現れであり、当然といえば当然だけれど、自分たちさえ安心になればそれでいいという考えは、大きな災害時には少し控えるべきだと感じた。こういった時でも、思いやりや助け合いが必要だと思う。そういう不安を減らすために、備蓄が必要になる。自分たちの数日分、きちんとあればそこまで切羽詰る事はないと思う。甘いお菓子や娯楽品や本等も必要な気もした。トイレの不便さには、オムツ等普通なら考えられないが、大災害になると、オムツさえ必要になるのではと思う。また、当時真冬で、すごく寒い日々が続く車中の寒さをしのぐため、暖房を入れたが、ガソリン不足で一人何リットルと決められ、大変不安だった人も多い。周りも同じ状況だが、欲しいものが欲しい分手に入らない日々が本当に精神的につらかった。被害の少なかった私たちでも、他県の友達より、物資を送られ大変助かった。

(父)

これから先、何が起ころうともおかしくない世の中なので、常にもしもの対応ができるようにしてほしい。家の中でも、できるだけ落下や転倒で下敷きにならないように睡眠をとるとか、「こうなるかもしれない」という風にしっかり考え、まずは、自分の身を1番に守って行動してほしい。

5 私にとっての阪神・淡路大震災

(1) 高校にはいるまで

小学校のとき、道徳の授業で初めて地震のことを知り、阪神・淡路大震災について勉強した。当時のことを知り、地震の恐ろしさを感じたのを覚えている。非常持ち出し袋の中身を考えたり、避難訓練をしたり、「しあわせ運べるように」を歌ったりもした。1月17日には、教室の窓をすべて開けてそれぞれの教室で、全校生徒で「しあわせ運べるように」を歌ったのが一番印象に残っている。

中学校のとき、東日本大震災が起こった。学校から帰ってきてテレビをつけると恐ろしい映像が流れていた。最初は何が起こっているのか考えられなかった。けれども、津波の映像が流れ、言葉を失った。津波を見たことがなかったため、すごく怖くなった。でもこのときは、他人事のように思っていたのだと思う。

(2) 環境防災科に入ろうと思ったきっかけ

私の兄が環境防災科に進学していたということが一番のきっかけとなった。兄が参加しているボランティア活動の話を聞きもっと興味を持った。また、将来必要な知識を培っていきたくと考えた。

そして、防災を学ぶことを一番に考え、環境防災科で学んだことを活かしそれを伝えていける人間になりたいと思ったからだ。

また、ボランティアを通して、初めて会う様々な年齢の人たちとたくさん交流することで、学校生活だけでは学べないコミュニケーション能力や、場面に応じてなにをすべきか考え、行動できる力を身につけたと思ったからだ。

(3) 環境防災科に入ってから・感じたこと

環境防災科に進学してから、ボランティア活動に参加したことは数少ない。中でも1年に1度しかなく、3年間継続して参加したボランティアがある。それは、「こばと聴覚特別支援学校」のボランティアだ。聴覚に障がいがある子どもたちに、地震、津波の恐ろしさを伝え、いざというときに自分の命は自分で守れるように、防災教育をするという内容だ。初めは「子どもたちと関わることができるなんていいなあ」という気持ちで参加した。けれども、劇などの練習を重ねるごとに、「地震と津波の恐ろしさを幼い子どもたちに伝えるようにしないといけない」と思うようになっていた。本番は、上手くいったけれど、たくさん課題が残った。その課題を次の世代へと伝え、さらにいいものにしていけないといけない。私は、このボランティアに参加してから、「神戸聴覚特別支援学校」のボランティアにも参加した。この交流でできたお友達と未だに繋がりがある。この2つのボランティアがきっかけとなり、約1年間、「手話」を習っていた。「もっと子どもたちに手話を使って分かりやすく防災を教えたい。」「お友達と手話でもっと会話したい。」と思ったからだ。また、この経験は必ずこれからの生活にも役立てられると思った。例えば、災害時の避難所で聴覚障害者の手助けをしたり、話を聞いたりすることも出来ると思う。将来仕事で手話を使う時がくるかもしれない。この、高校生の間に、こんなにいい経験をする事ができて良かったと思っている。

6 夢と防災

私が将来したい仕事は、医療事務で、小児科などで働くことだ。

今まで医療事務関係のお仕事のことをあまり知らなかったけど、医療事務のオープンキャンパスに行ったり、調べてそのお仕事に魅力を感じた。中でも小児科や、病院の受付に興味を持った。医療事務の仕事は本当にやりがいのある仕事で、自分自身を成長させる事もできる。先生や看護師の方々からも、いろいろな知識を教えて頂くこともできるし、患者さんからも感謝してもらえる事もある。受付窓口において、入り口から入ってこられた患者さんと一番初めに顔を合わせるのも、医療事務の仕事をしている人達だ。様々な事情や不安を抱えて来院される方に少しでも安心していただけるようにしたい。

その世界と防災の関わりは、災害が起こった時、患者さんや、スタッフ自身の安全の確保や、緊急避難誘導をしたり、防災との関わりは、多いと思う。

東日本大震災では、医療機関も大きな被害をうけた。災害発生時の対処能力を高めるには、災害を想定しての事前の準備が重要になる。医療事務員ができることは他にもあると思うけれども、私は防災マニュアルの作成をしたいと思っている。また、連絡手段を確保し、周知しておくこと、患者用のマニュアルの作成をしたり、必需品の備蓄をしたり、できることはいくらかもあると思う。

防災の広げ方としては、クリニックの受付スタッフだとしたら、携帯や待合室のテレビなどで、緊急地震速報が流れた場合、待合室の患者さんに落ち着いた声で「ただ今、緊急地震速報が流れました。皆さんイスに座って雑誌やバックなどで頭部を保護してください」とお伝えし、その後、ラジオのスイッチの確認、出入り口の確保をしたり、ケガをした患者さんがいないか確認をする。そして外へ避難する場合は、緊急持ち出し袋を待って患者さんを誘導する。怖がっている子どもへの声かけは優しくするように心がけないといけない。スタッフは、とっさに声を出し動けるようにしておくことが大切だと思う。それから、1年間の活動内容を計画し、それに基づいて防災訓練をするのがいいと思う。

患者さんへの防災教育としては、①年に1回、避難訓練を実施する。②災害伝言ダイヤル(171)の体験利用日に、クリニック側が録音した緊急メッセージを、実際にダイヤルを操作して、確認して頂く。③災害対策の講演会を開く。スタッフ間の活動としては、①防災マニュアルを作成する。②医師、看護師、事務の行動基準を定めたアクションカードを作成する。③自分の力で歩くことが出来ない患者さんの避難を想

定して、実際に人を乗せておんぶで階段を降りる訓練をする。

こういった訓練をすることによって、迅速に行動することが出来ると思う。スタッフがどんなに防災の知識があつたり、完璧だと思つていても、想定外のことが起こるということも考えておかなければいけない。また、スタッフだけではなく、患者さんお一人お一人の日頃からの心構えや備えも大切である。自分のクリニックだけではなく、近隣のクリニックと一緒に訓練等をするというのも、いざという時に役立つと思う。

7 「語り継ぐ」を書いて

兄のときにも「語り継ぐ」があつたけれど、もう一度一から話しをしてもらえとは思つていなかった。自分は経験していないけれど、経験した人がこんなにも身近な所にいるのに今まで震災の話はほんの少し、家族の会話で出てくるくらいだった。この「語り継ぐ」を通してではあるけれど、父と母のその時の様子や、これからの防災に対する意識を知ることができて良かった。

環境防災科に入り、防災を学んでいる兄妹がいるのにも関わらず、今まで防災に対しての意識は低く、何もしていなかった。けれど、今年に入ってやっと備蓄や持ち出し袋や災害時にどこに行くなどの話をするようになった。また、熊本地震が起きてからもっと防災意識が高まった。こうして日頃から備えておくと、災害がきても迅速に行動することができるし、怖いものはないと思う。ただ、災害時に家にいたら…という想定での備えだけではいけないし、想定外のことが起こるのは当たり前なので、まだまだできることはあると思う。そのできることを見つけ、意見を共有し合い、家族みんなで次の災害に備えたい。

また、母から学んだのは、地域コミュニティの大切さと、命があれば乗り越えられるということだ。私の住んでいる地域は家がたくさん建っているし、人も少なくないのに地域コミュニティがない。災害が起きてからでは遅いので、もっと日頃から挨拶を心がけ、コミュニケーションをとることが大切になってくる。朝ラジオ体操を呼び掛けたり、定期的に地域の住民で集まり顔を合わせたり、そういう企画をしていきたい。そしていざという時に地域住民で助け合えたらいいと思う。助け合いだけではなく、日頃からコミュニケーションをとることによって、避難所での生活が孤独ではなくなると思う。こういった地域コミュニティの大切さを学んだ。

そして、とにかく不便の連続だが、その不便を乗り越える心の準備が大切であり、命があれば乗り越えられるということ。生きていく中で互いの命を尊重しあい、協力することの大切さを学ぶことができた。まだまだ防災に対する知識を増やしていかないといけないと感じた。今のままでは地域を引っ張っていくことはできないと思う。環境防災科で培ったことをこれから先も忘れずに過ごしていきたい。

知るきっかけ

井手口 健司

1 阪神・淡路大震災の概要

発生日時…平成7年1月17日午前5時46分。

震源…淡路島北部(北緯34度36分、東経135度02分) 規模…M7.3

死者…6,434人 行方不明者…3人 負傷者…43,792人

全壊…約10万5,000棟 半壊…約14万4,000棟

「阪神・淡路大震災について（確定報）（平成18年5月19日、消防庁）」より

阪神・淡路大震災が発生して今年で21年目を迎えた。私は阪神・淡路大震災を経験していない。

また、私たちの下の世代もまた、阪神・淡路大震災を経験していない。そのような私たちがどのように阪神・淡路大震災を知り、同じ体験をしないためにどのような行動を取るのか。そのことを教えてもらうために、語り継ぐことが大切だ。また、数字だけではわからない部分を知るために、私は看護師をしている母、料理店で働いていた父に当時のことを聞くことにした。

2 両親の行動

(1) 病院 5時46分

母は1月17日当直で病院にいた。5時46分はちょうど休憩室で朝食を食べていたときだった。

いきなり揺れ始め、揺れが収まるまでその場でじっとしていた。

揺れが収まるとすぐに病室を見て回り、外傷のある方に応急処置を行い、倒れてしまいそうな危険な物を倒していった。水道管の破裂で水浸しの所をふき取り、元栓閉めた。停電しており暗かったため、患者さんに動かないように声掛けをしながら、余震の都度、安全確認に周る。病院の電話がつながっていたため、電話の対応もしていた。使用出来そうな薬剤の確保をしていた。ガラスの物が多く、破損している物もたくさんあったので、分別をしていた。

外が大変なことになっているのがわかったのは、明るくなってきてからだった。それまでは病院の対応に追われていた。

(2) 1月17日 母の行動

7時過ぎに家の様子を見るため車で家に戻ったが、家族の安全を確認し1分ほどですぐに病院に戻り、心肺停止の方の対応、外傷のある方の対応をしていた。

火事で火が近づいて来ているのを見ながら夕方まで病院の片付けなどをして、歩いて家まで戻り、病気の母と障がいのある弟と、2歳と1歳の子どもを連れて、単身赴任中の父(祖父)のいる岡山まで夜になって連れて行った。

(3) 1月17日 父の行動

揺れが収まり、何時間か経った後に家の片付けをして、食べられる物と水の確保をしていた。

勤めていた店を見に原付で行くが、ビルの出入り口が閉まっていたので入ることができなかった。

食料と水を求めに店に行くも、何もなく買うことが出来なかった。

家の近くの学校へ行くが、人が多く家族で避難することが出来ず、夜になるまで住むことのできない家にいた。夜になると、岡山まで車で家族を連れて行った。その途中でやっと食事をする事が出来た。

家族を岡山まで送った後、食料と水を確保して神戸へ戻っていった。

(4) 生活が落ち着くまで

地震が発生して間もないときは、住んでいた家が全壊だったが、避難所にすぐ行っていなかったため入ることが出来ず、全壊の家の中で暮らしていた。2日後に電気が付いたので4月下旬まで、水は学校に汲みに行き、ガスは止まったままだったので、電気器具やカセットボンベを使い調理をしていた。

洗濯はコインランドリーを利用していた。入浴は知り合いの家や自衛隊のお風呂や病院のシャワーを使い、銭湯が開いてからは銭湯へ行っていた。病気の母(祖母)が入院していたので、障がい者の弟を連れて生活するのが困難だったため、多くの方の協力を得て垂水養護学校内に避難所を作ってもらい、ボランティアの方

と2月初めから8月初めまで、弟は避難所生活を送っていた。

2月初めから4月下旬まで、2歳と1歳の子どもと全壊の家で生活をしていた。日中は病院内に保育所があったので預けて母は働くことができた。仮設住宅には、申込みをしても、抽選で当たらず、家を探しても借りることができなかった。

3月中旬から、産休に入って毎日不動産に足を運ぶも、「子どもが小さいこと」「障がいのある弟がいる」という条件があり、家が決まるまで時間がかかった。

知人に個人的に相談をしてもらい、2年間の賃貸ということで、家が見つかり引っ越しすることはでき、やっと生活が落ち着いた。

3 阪神・淡路大震災が残したもの

(1) 良い面 母

いつ災害が起こるかわからない事がわかった。災害に対し、準備をして置くことが大切ということがわかった。今まではボランティアという言葉をあまり耳にせず、このときに初めてボランティアの存在を知ることが出来た。人の優しさに助けられた。

(2) 悪い面 父

今まで過ごしてきた生活が別の世界になってしまった。そして、今まで築き上げてきた地域コミュニティが薄くなってしまった。生活が困難な状況なのに、詐欺をする人がいて信頼できる人が少なくなった。

(3) 阪神・淡路大震災から21年目を迎えて今思うこと

震災後の大変だった頃のことを知っている人が少なくなって来ている。震災後に生まれ育った子どもたちにどのように伝えていくべきか、どうしたら思いが伝わり理解してもらえるかが不安である。

追悼式へ20年目と21年目の2年連続で参加したが、21年目では節目が過ぎたので人が少なかった。節目ごとではなく、毎年1月17日に阪神・淡路大震災のことをもう一度思い出し、同じことがなくなることを願っている。

(4) 東日本大震災・平成28年熊本地震で思うこと

東日本大震災では、津波の被害がひどい状況で、住宅、仕事等の復旧、復興には阪神・淡路大震災のときより長い時間がかかってしまうと思う。阪神・淡路大震災のとき多くの支援をいただき、支えられたので今度は自分が恩返しをする番である。手伝えることは少ないが、教訓を活かし復興してほしい。仮設の問題や放射線の問題があると思うが、1つ1つコツコツと進んでいってほしい。今年中に観光で東北へ訪れたい。

平成28年熊本地震では、余震が多く被害がどうなっていくか分からない。今は募金をする事しか出来ないが、何か手伝えることがあれば手伝いたい。また、今回の地震で知人が被災したので早く普段の生活に戻ることを祈る。

これから起こるといわれている「南海トラフ巨大地震」の前兆だと思い、非常用持ち出し袋や、家具の固定の備えをしていかないといけないと思う。もう二度と阪神・淡路大震災と同じ生活を送りたくない。

(5) 今（平日午後1時）、南海トラフ巨大地震が起きたらどう行動する？

今は姉弟全員一人でも行動できる年齢なので、きっと一番に病院に駆けつけると思う。家族と集合する場所は、高校の避難所にする。しかし、病院に行かないといけないので、家族を信じ救急対応を行う。(母)

まず、家族全員に連絡を取る。そして家に残り必要な食糧、水を確保し家族全員揃うのを車で待っている。

(父)

身の安全を確保する。そのあとに家族に連絡し、被害が最小限になるように警察署で仕事をする。家族の元へはすぐに帰れないと思う。(長女)

県外の仕事に行っているかもしれないので、家族の安否をまず確認する。それから、出来るだけ多くの情報を得る。神戸に帰れたら、真っ先に家族の元へ行く。それから仕事場に戻り、早期復旧に全力を尽くす。

(長男)

津波に備える。ポートアイランドに居ると思うので、出来る限り早く三ノ宮へ戻りたい。ポータライナーが混雑するので、安全に避難できるよう呼びかけをすると思う。それから、家族と合流するか、共助に最善を尽くす。(次男)

学校に居るので、全体の指示に従う。環境防災科として普通科の生徒に指示を通し、死者0人を目指す。初めてのことでしか起こらないと思うので、臨機応変に対応したい。(私)

4 知らないことを知る

(1) 親から阪神・淡路大震災を聴いて

私は親から阪神・淡路大震災当時のことを聴くのは2回目だった。1回目は中学3年生の1月、この環境防災科に入学したいと思い、話してもらおう機会を作ってもらった。このときは、母の友人がPTSDになり、子どもと心中したこと、家を買うときに詐欺にあったこと、弟の面倒を見るのがどれだけ辛かったかなど、全て話してくれた。話してくれている間、母は泣いていた。私もいつの間にか泣いていた。なぜかは覚えていない。人の死について真剣に向き合ったことがなかったので、そのときの私には聴くことが精いっぱいだった。そして、高校3年生になり、もう一度親から阪神・淡路大震災当時のことを話してもらうことになった。中学3年生のときの記憶もあり、環境防災科に入学して心のケアなどを学んだので、今回は泣かずに最後まで聴くことが出来ると思った。しかし、親が中学3年生のときに話してくれた内容とは異なったことを話してくれた。前回聴いた話は一切してくれなかった。「なぜ話してくれなかったのか」と尋ねることもできなかった。私は親にも思い出したくない記憶があるのだと知った。そして、私にも気を遣ってくれたのかも知れない。私自身震災の話聴くと心苦しくなるときがある。だから、話さないでいてくれたのだと思う。

阪神・淡路大震災当時のことを話してもらえなければ、私は母に弟がいたということ、祖父が単身赴任で岡山県に住んでいたこと、祖母がいつ亡くなったか、この家に住むことになった理由を知ることが出来なかった。特に、祖母が広島県で4歳の頃、原爆に遭って被ばくしたことを知ることは今回以外ではなかった。阪神・淡路大震災のことを聴いて、震災のこと以外の家族の話聴くことが出来た。私が産まれるまでに多くの困難が家族を襲い、私の知らないところで身内が亡くなっていった。私は家族のことについて知らないことが多かった。

(2) 風化

阪神・淡路大震災を経験した人でも、21年目を迎えると震災のことを忘れてしまう人が多い。私の父は脳梗塞になり少し記憶障害があるので、震災当時のことははっきりとは覚えていない。母と父で内容がかみ合わなかった。また、震災から10年、20年と節目にならないと報道が少なくなっていった。

阪神・淡路大震災を経験しても備えをしない、自助・共助を大切にすることを忘れている人が多い。私は、街中や地域の自治体で阪神・淡路大震災のことについてヒアリングさせてもらえる機会があり、ヒアリングを行った。震災当時は家具などが散乱したと言っていた。しかし、その経験から家具の固定などをしていると聞かれるとしていないという人が多かった。経験した人が備えを疎かにしていると被害が減らないと思う。だから経験した人だからわかることを経験していない人に伝え続けて、被害を減らすこと、風化させないことを同時に行っていかなければいけない。震災体験、教訓を忘れずに話してくれる間に、今の若い人たちが話を聴き、忘れないようにし、知識を行動に変えていかなければいけない。

阪神・淡路大震災が起き、新潟中越地震が起き、東日本大震災が起き、平成28年熊本地震が起きている。東日本大震災から5年が経っているが、仮設住宅も多くまだまだ支援が必要となっている。そのときに、平成28年熊本地震が起こった。メディアや東北への支援は熊本、大分に集中していく。このように、復旧、復興途中で次の災害が起こると1つ前の災害が世間の記憶から薄れていってしまう。

(3) 東北訪問

私は高校1年生のときに、環境防災科の卒業生が企画した交流会に参加した。東日本大震災から3年が経った被災地を訪問した。そこで、私は宮城県の同級生、先輩方と知り合いに東日本大震災で遭った被害、友人を失ったお話を聴いた。私が聴いたお話を少し話す。

その人は、中学1年生のときに仲の良かった友達とケンカをしていた。謝ることが出来ずに2年生になり、関わるのが少なくなり謝りたいと思うが謝る機会がなかった。そして、東日本大震災が起こり、仲の良かった友達は亡くなってしまった。そのとき、その人は「謝りたかった」という後悔をした。気持ちを伝えられることが出来るのは、そのときしかない。気持ちを伝えられずに後悔するより気持ちを伝えて後悔する方がいい。

私は、素直に気持ちを伝える大切さを教えてもらった。このことは誰にでも出来ることであり、すぐに行動に移せることだと思う。誰にでも気持ちを伝えることが出来ずに後悔をしたことがあるはずだ。その後悔をしないように私はこのお話を伝えていきたい。

この交流会を通じ、私は当たり前が当たり前じゃない。日常に感謝することを学んだ。地震が来るまでは、当たり前の日常を送れていた。しかし、地震が起こり、津波が海岸沿いを襲った。今までは漁業をしていた

が家、職業、地域コミュニティーを津波が飲み込み、当たり前だった生活を送ることが出来なくなった。それはこれから起こるとされている南海トラフ巨大地震でも同じかもしれない。東日本大震災で学んだことを伝え、生活していきたい。同じことを繰り返さないようにしたい。

高校2年生でも学校のボランティアとして東北へ訪問した。そのときは、大川小学校へ訪れた。そこで、私は子どもたちが亡くなったと想像すると涙することしか出来なかった。言葉にすることの出来ない感情がこみ上げてきた。私は「助けることの出来た命」を助けられる防災を考えていきたいと思った。

私は東日本大震災を経験していないが、このお話を聴き、災害が身近なことだと思った。

5 感想

私は環境防災科に入学する前は、災害が起きても自分は大丈夫だと思っていた。だが、入学してから防災、災害を学ぶにつれて、今までの自分は根拠のない大丈夫だと気付いた。災害はいつ起きるか分からない。何が起きるか分からない。その恐怖に打ち勝つには、備えしかない。私の家族は、阪神・淡路大震災のときに多くの反省があった。その反省を活かすことが大切だと思った。

私は改めて地域コミュニティーの大切さを知った。多くの方の協力がなければ今の生活に戻れていない。そのとき協力していただいた方と何度か会った。会ったことを親に話すと、私の生まれていないときのお話をしてくれる。また、今でも電話をして、つながりは消えていない。また会うことが出来たら感謝を伝えたい。

私は阪神・淡路大震災の出来事を風化させたくない。また、東日本大震災の出来事も風化させたくない。日本は地震大国と言われている。私が生きている間に南海トラフ巨大地震が起きる。そのとき、阪神・淡路大震災の教訓を活かしていきたい。また、東日本大震災の教訓もいかさなければならない。そうしないとまた同じ過ちを繰り返してしまう。私は同じ過ちを繰り返さないために、自分の足で被災地に行き、そこで出会う人のお話を聴きたい。そしてそのことを、まずは自分の家族、友人。そして地域に伝えていきたい。

私は阪神・淡路大震災を経験していない。産まれてもいないので何も知らない。何も知らないことに対して、どのように行動するかで被害の大きさが変わってくる。私は被害を最小限に抑えたい。だから語り継ぐ。また、語り継ぐことによって、話していただいた方の少しの後悔が解消されると思う。語り継ぐことは自分のためにもなり、相手のためにもなる。そのお互いが良い関係になり、いざというときの協力者になると思う。この協力者を増やし、全員が支え合い巨大な災害にも負けない社会を作りたい。

6 将来

私は大学でも防災を続けたい。なぜかという、防災を学び続け災害時に多くの方を助けられる人になりたいからだ。また、高校生の間にできた友人と大学でも関わり続けて高校生の間で出来なかったことを実現したい。そして、高校生で聴くことのできなかった親の本音を、大学では聴けるようにしたい。私は、阪神・淡路大震災を経験していない若者に向けて、一緒に防災を学び、命を大切にしていきたい。

様々な視点から見た阪神・淡路大震災

今井 秀斗

1 はじめに

阪神・淡路大震災が発生して今年で21年が経過した。町並みは当時と比べると、見違えるほど綺麗になり、震災を経験していない私のような世代にはこの町を見ても、震災によって本当に被害を受けたのかという疑問を持ってしまうかもしれない。しかし、当時の震災を経験された方々のお話を聞くと、震災の被害というものは、町並みのような目に見える部分以外にも見ることが出来ない人間の心にも深く残るということが分かる。

私の両親は震災当時、関西にはまだ住んでおらず、被害も受けることは無かったため、震災についてあまり記憶が無い様だった。そこで私は震災を経験された方々に直接お話を聞き、当時の出来事を知ることにした。お話を聞いた方々の中でも住んでいた地域はバラバラで被害も人それぞれだったため様々な視点から阪神・淡路大震災というものを知ることが出来た。

2 各地の被災状況の違い

(1) 西明石の場合

この男性は西明石に1994年の6月に一軒家を建てた後、翌年の1月に被災した。

2階では男性とその奥さん、そして親の娘（当時3才）と共に寝ており、その下の階では両親が寝ていた。男性は揺れによって起き、揺れが収まるまでの間、布団の中で台所のお茶碗が割れる音を聞いていた。寝室には大きな箆箆が置かれていたが、両側にあったため上手くお互いが支えとなり怪我も無かった。

揺れが収まってからすぐに家の建築をした方々が周辺の家の確認で回っており、男性も確認してもらったところ、家はヒビが少し入っていた程度の被害だったため、応急修理を施してもらい、そのままこの家で住むことにした。男性は今ではこの対応は、建築の方々は震災の少し前に建てたばかりの家が崩れていないかという心配で家を回っていたのではないかと考えている。

6時過ぎあたりに西明石駅からバスが出ていることを知り、男性は仕事のために身支度をしてバスに乗り、高塚高校まで向かった。バスの中から周辺を見渡していると、道路の信号は止まっており、公衆電話の前には人の列が出来ていることが見て取れた。無事に学校に着くと西神付近は地盤が強いようで被害が少なかった。そのためその場での大きな話といえば生徒の一人が話した「金魚鉢の水が揺れによってこぼれてしまい、後片付けが大変だ」という程度の話であった。

学校では教師が協力して生徒の安否確認を行い、それぞれリストアップしていく作業に明け暮れていた。男性は当時3年生のクラスを受け持っており、同じように作業を行っていた。安否確認には1週間以上かかったが、クラスの生徒が全員無事であることが確認出来た。しかし、学校全体では2名の犠牲者が出てしまった。

男性はこの作業で長田から登校している生徒の安否確認をする中で、初めて長田の被害の凄まじさを知ったのである。そこで男性を含めた教師4人で直接長田へ安否確認を行うため、西神から当時地下鉄が通っていた伊川谷まで行き、電車を乗り換えて長田に向かった。

長田に着き、生徒の家を確認していく中で崩れてしまった家もあったが、無事であると書いている紙が貼られており、安否確認が出来た。また崩れかけのビルの中を確認しに入るときに周りに警察などはおらず、先生のうちの1人が入ると決めたため、全員が入らざるを得ない状況だった。男性は今思うと危険な行為をしたと語り、1人が残って万が一に備えるといった考えは当時は出来なかったという。

その後の生活として、西明石の家ではプロパンガスを使って生活をしており、苦しくはなかった。ただ電気は付いたり消えたりを繰り返し、水に限ってはしばらく止まっていた。高校もさほど被害は無かったため、グラウンドを自衛隊の駐屯地として利用してもらっていた。そのため高校再開は震災発生から2週間経ってからになり、センター試験に遅れをとってしまうこととなった。

長田から来ていた生徒の中では震災で亡くなった方の遺体を運ぶ作業を経験した生徒もおり震災前より顔つきが変わっていた。同じような体験をした生徒で進路を変えて自衛隊に入ることを決意した生徒もいた。

現在も男性は同じ家に住んでおり、家具の固定をして今後に備えている。しかし、台所には何も手を付けておらず、新しく買った家具も固定出来ていないようだ。

(2) 西神ニュータウンの場合 1

同じく神戸市内で被災されたこの女性は、当時西神中央駅の近くのマンションの一階に夫とお腹の中にいる子供と住んでいた。揺れ始めた頃、女性は一人で起きており当時の状況をよく覚えていた。

揺れは大きく、収まるまで頭を押さえる以外には何も出来なかった。被害として、寝室には何も物を置いていなかったため、戸棚の中の食器が割れただけで全員が無事であった。マンションとしての被害は正式には一部損壊とされていたが、見た目は全く被害を感じさせられなかった。実際にマンションのライフラインはすぐに復旧した。しかし交通面では地下鉄や駐車場のゲート等が一部動いていなかった。

女性は当時友が丘高校で教員をしていたため、電話で生徒の確認を行っていた。3日後には実際に現地に outward、安否確認を行った。しかしこの女性はお腹に子供がおり、インフルエンザや体への負担を考慮して同じような作業を行えず、ボランティアのような活動にも参加できなかった。安否確認の結果学校内では亡くなった生徒はいなかったが、避難所生活をしている生徒はいた。

震災の情報を集めるために普段は英語用に使用していた電池式のラジオを使用した。

このときは死者が数人であると報道されていたが、女性はここで初めて人が亡くなってしまうほど大きな地震だと知り、驚いたようだ。

現在では水を二箱用意し、防災グッズも目にすると思うようにしている。ただ水はクローゼットに入っており、非常時に出せない、防災グッズの点検を怠って把握しきれていないといった問題があるようだ。また九州での地震の影響で、防災グッズの点検などを行いたいと思うと同時に阪神・淡路の記憶が薄れていることを実感した。

(3) 西神ニュータウンの場合 2

同じく西神ニュータウンに住んでいた男性はもうすぐ5歳になるという時期に震災を経験した。

男性はまだ小さかったこともあり、揺れを感じずに寝ていた。このとき両親と小学1年生だった兄0才の妹も1階の同じ部屋に寝ていた。揺れが収まり、ぼんやりと目を覚ますと家具を固定していなかったことからお皿や本が散乱していた。寝室には筆筒を置いていたが、筆筒が重かったため、被害はなく、全員の無事は確認できた。男性はこのときはまだ地震が起きたと認識できていなかったため、普段温厚である父が暴れたのかと思った。

西神周辺は大きな被害は無く、電車はその日のうちに復旧していた。男性の家も無事だったので余震が続いている間は2階を整理し生活をしていた。ここで問題となったのが水道が止まっていて生活用水が確保できないことである。そこで男性は兄と共に近くの公園に停まっている給水車から水を貰い生活をしていた。

ある日、男性は父親に連れられて復旧前の長田を歩いていた。その町並みを見て男性は「戦争映画を観ているようだ」という印象を持った。長田の2丁目には仮設住宅が建てられ、男性の叔母さんの両親がそこに住んでいたため、よく遊びに行くようになった。男性はこの訪問を改めて思うと、一種のボランティアだったのではと考えていた。

震災が発生してから学校の授業に変化が見られるようになった。それは防災教育を多く取り組むようになったことである。その中では「しあわせ運べるように」を作曲された臼井先生が来られて授業を受けることもあった。

現在も男性は同じ家に住んでいて、震災を経験して改めて両親と話す機会があった。そのとき両親は「あまりにも揺れが強く、真下が震源地なのではと思っていた」「被災者であるという意識は無い」という話をしていた。男性自身も震災を経験し、中学まで小さな地震でも恐怖を感じていた。しかし今思うと自分に大きな影響が無ければ印象に残ることは少なく、そのような点では私達のような震災を経験していない世代と近いと思っているようだった。

男性はそんな中、防災として現在はペットボトルに水を溜めている。しかし家具の固定はまだ出来ていない。というのも、心のどこかでもう地震は起きないと思ひ込み、すぐに行動に移さなくても大丈夫という気持ちがあるからである。また東日本大震災が発生したときには支援として東北のお酒を買い支援していた。そのため今回の熊本の地震でも支援のためにお酒を買おうと思っているようだ。

(4) 洲本市の場合

洲本市に住んでいた男性は当時小学2年生だった。揺れ始めた時には家の2階で寝ており背後の筆筒が

倒れてくるのではといった恐怖が一瞬頭を過ったが、特にこれといった被害はなかったため、地震による揺れや地響きに関してはあまり記憶に無かった。唯一覚えていることは1階で起きた出来事や被害の記憶である。

1階では揺れの最中に食器の音や親の声が聞こえ、恐怖覚えた。揺れが収まった頃、1階から叔母の「えらいこっちゃ、大丈夫か」といった声が聞こえたため、兄弟と両親で1階に駆け付けた。ここで全員の無事を確認、家の被害もそれほど無かったことが分かった。テレビも無事に映るため、その日から情報を集めることは出来た。震度は4～5ほどであった。

被害が殆どないことから避難所には避難せず、家の家具や食器の片づけを行った。この作業が震災による被害がなかった分、大変な作業であった。

(5) 長田の場合

このお話をされた女性は当時学生で、東京の寮に住んでいた。震災を知ったのは関西に住む友人から「地震があった。そっちの家も危ない」といった内容の電話を貰ってからであった。女性は実家の安否を確認するために、電話をかけようとするも寮生活中はなかなか電話は使えず、使えても繋がらないという状況だった。そのためニュースから情報を得るほうが早かった。ニュースでは関西の震度をそれぞれ発表していたが、神戸はすぐには出なかった。電話を何度かかけなおしている間にやっと震度が6であると発表された。そのニュースでは他にも火災が起きている映像を流しており風景などを見て実家の方では無いと分かっているながらも、もしかしてと思いながら過ごしていた。

2月に入り、交通面がある程度回復した頃になんとかして実家に物資を持って帰ることが出来た。家は崖の上にあり、耐震などもしていなかった。そのため家は傾いてしまい、全壊と判定された。揺れによって建物から向こうが見えるような状態でも、両親は動こうとはしなかった。また両親に会うと「お前に何が出来、すぐ帰れ」と言われてしまった。しかしガラスを踏んでいたり、電気やガスが無くて心配だったため、すぐ温めて食べることが出来るご飯などを兄弟と手分けして持っていつていた。ただし両親は元々即席の食べ物などをあまり食べないため、同じようなものばかり持ってくると飽き飽きした表情をしていた。

東日本大震災が発生し、そのとき初めて両親に震災について聞くことが出来た。すると「自分と比べて東北の方が酷い」という発言があった。また女性自身も改めて震災について考えたとき、当時は自分達の場所が揺れるという発想は無く、東京が震源だと思っていた。また実家が全壊したため復興と共にこちらに帰ってきて、新しい家のローンを一緒に払い、生活を何とか立て直すことが大変だった。

これまで女性は震災を体験するまで戦争の体験等を語る人はもっと上の世代のものだと思っていた。しかし今回の震災を経験することによって、自分も語る側に回る番であると感じた。

(6) 西宮の場合

女性は高校の教師をしており、地震発生時は一人で寝ていた。そのため布団の中でハンガーにかけていた服やお琴が倒れてきた。幸い重いものは動いていなかったため、命は助かった。その後、実家がすぐ近くにあるので、ひとまず帰った。道中の景色は特に変わったことは無く、気になることはなかった。

実家で朝食を食べて出勤すると電車は動いていたが、途中までしか走っていなかったため、そこからは自転車で乗って学校を目指した。学校に着くとすぐに近隣の住民のために水とラジオを門の前に用意した。学校を職員で手分けして確認していたところ、体育館が浸水してしまい渡り廊下も地震で離れてしまっていた。そのため住民を呼ぶことは出来ないと判断した。その後は生徒の安否確認を電話で行っていた。女性は担任をしていなかったため、生徒が今どんな生活をしているのかを調べる作業に取り組んでいた。その結果、生徒、教師合わせて数名が亡くなってしまったことが分かり、避難出来てもブルーシートの家で過ごしている生徒が居ることが分かった。

毎日の生活が非常に苦しい状況で水が無いと毎日給水車で水を貰い、大阪までカップを買いに行くこともあった。このとき大阪では普段通りの生活をしており、自然と涙が出てきた。また時期が出願の時期だったが、他の学校は状況を把握していないため、理解してもらえずにやっとの想いで期間を延長してもらうことが出来た。

学校での作業がとても辛かったが、辞めるという選択肢は無かった。その理由は忙しい中でそのような考えを持つ余裕が無かったのもあるが、1番は生徒がどんな状況であろうと登校しホームルームだけでも出席する中で大人が辞めることなど出来ないという気持ちがあったからである。また忙しい中でもコーヒーを飲む機会を作ることが出来た。そのコーヒーは大変美味しく感じた。そんな経験から非常時でもコーヒーをの

んびり飲んだり、避難所内で衣類を選んだりするようなことは、人間の生活の中で大事にしないといけないと感じた。

復興が進み、ハード面は以前より良いものへと変化していったが、自分の心の中とのギャップは残ったままであった。それは震災を知っている人とその他の人で伝え方が変わってくるものである。

3 被害と記憶の関係

これまで多くの方のお話を聞き、それぞれ違う地域に住み、被害の大きさももちろん同じではなかった。そこで私が感じたのが被害の大きさが震災の記憶の濃さと関係しているということである。被害が大きかった方は生活を立て直すための苦労をされているのでその細かい記憶まで覚えていることが多かった。逆に被害はあったものの、それほど生活に影響の無かった方の場合、記憶はもちろんあるが細かい部分は忘れてしまっていることもあった。またこの先の災害に対しての備蓄等の意識というものは、当時の記憶の有無に限らず、薄れているように思える。

これらのようなことから災害等の風化というものは、経験していても少なからず起きてしまうものだと感じた。さらに経験していない方にとっては具体的な災害の詳細や被害を調べるか、お話を聞くということをしなければ、記憶に残るものはないため風化も早い段階で起きてしまうと分かった。

4 感想

両親が阪神・淡路大震災を経験しておらず、その代わりに様々な方にお話を聞くことが出来て大変意味のある経験をする事が出来た。それは様々な地域、年齢等によって同じ災害でも被害の大きさ、当時の周りの風景や揺れの恐怖の感じ方さえも違い、どれも当時まだ生まれていない私としては興味深いものばかりであったからである。

私がこの経験をして1番に語り継ぎたいことはお話を聞いている中でずっと感じていたものでそれは人々の災害に対する意識やその風化についてである。阪神・淡路大震災が起こる以前は多くの方が「神戸には地震は来ない」という言葉を口にしていた。この言葉を信じて、この頃はまだ耐震工事や非常時のための備蓄というものは一般的ではなかった。今回お話を聞いた方々の中にも震災以前は耐震工事という言葉は聞いたことが無かったという方や備蓄というものは無いため、たまたまあった缶詰を食べたあるいは少し遠くに出かけて買いに行くという方がいた。

現在は多くの防災グッズが発売され、備蓄をするという考えが一般的に知られるようになった。しかしそれはあくまで知らただけであり、実際に備蓄をしている方はまだまだ少ないのが現状である。この事態が起こる原因の一つとして私は風化があると考えている。風化が進むと災害の悲惨さを忘れ、いつしか危機感のようなものが薄れていくようになる。それによって防災グッズを買うのも家具の固定を行うのもまたいつかという気持ちで先送りにしてしまうのである。

このように語り継ぐことが十分に出来ず、全員がまたいつかを繰り返すことはこの先の経験していない世代にとっては、非常に危険なことである。なぜならこれから大人になっていく人々がこれまでの災害を知らず、またいつかが一般的になってしまい、語り継ぐという行為自体が失われる可能性があるためである。

今回のこの卒業研究の授業を通して今後は、阪神・淡路大震災はもちろんのこと東日本大震災平成28年熊本地震にも目を向けて、経験していない分その被害や被災者の声を聴くようにする。そしてどの災害であっても風化が起きないように聞いた話、実際の経験を語り継ぐようにする。具体的には今回の熊本へ向けたボランティア活動のように現地の状況を肌で感じ、テレビや新聞では取り上げないような被災者の苦しみや意志というものに耳を傾けるような取り組みを定期的に様々な方々と続けていく。そしてその経験をまずは身近な家族や友人と共有する。その後、地域の方にも共有し、全体で災害についての意識を高める。これにより多くの方が災害を忘れることなく風化を起さず次世代へと繋げていけると思う。

語り継ぐ

加賀谷 あかり

1 はじめに

私は1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災から3年後に産まれたため、震災を体験していない。

当時の姿は映像や画像、または学校で習ったことしか知らない。

しかし、私たちが語り継いでいかなければ、阪神・淡路大震災の面影はなかったことのように忘れ去られてしまう。そこで私は父の話を聞くことにした。父はあまり覚えていないそうだが一生懸命思い出して当時のことを教えてくれた。下記は父目線で書いている。

2 父が体験した話

(1) 震災当日

当時、私は、明石市魚住町の明姫幹線沿いの5階建てマンションに住んでいた。早朝まだ寝ていた時、突如大きな振動で目が覚め立上ると、ものすごい横揺れが始まり、その場に立ちすくんだ状態で、数秒間身動きできず、爆弾でも落ちて戦争でも始まったのかと思ったほど、普段の地震とあまりにも違っていたので、しばらく呆然とした。家の中は食器棚が倒れ食器が散らばり、仏壇が倒れたが、幸い怪我はなかった。

その後、外の様子を見ようと窓から回りを見渡したが、何事も無かったかのように、静かでしたので、とりあえず、外に出てみようと思い、エレベーターで1階に下り駐車場に出てみたが、マンションの入居者は誰も出てこず、あまりにも静かなので、自分だけがだげさに思ったのかと、不思議な感じだった。

それから家に戻り、テレビを付けて地震の被害が、阪神地区、淡路地区の被害が大きい事にびっくりし、親戚にすぐ連絡し、無事の確認をした後、社員にも連絡取り、身体や家の無事を確認し、今やっている二見方面の仕事は行くように手配し、神戸方面の仕事はとりあえず中止にした。

しかし、テレビを見ていると神戸方面の火事による被害が、どんどん進行している様子が映され、これから先いったいどうなるのか、不安が募るばかりだった。

それから数日後、神戸の小学校に避難している、従妹の家族とその友達家族、犬2匹を私の家と事務所に避難先として、仮設住宅ができるまで迎えた。元々家もそんなに広くなかったので、布団を敷くと足の踏み場もないほど、一時期大家族になり、にぎやかだった。

3 父の話を聞いて

私は家族に阪神・淡路大震災があった日のことを初めて聞く機会となった。当時、まだ父が一人暮らしをしていることも初めて知った。この語り継ぐというものがなければ父が話してくれることはなかったと思う。

4 過去

阪神・淡路大震災を知ったのは、家族に聞いたのではなく、毎年1月に、小学校の道徳で経験された方の文を読んで知ったと思う。その道徳で使っていた教材には、ヘリから撮影した神戸の街が燃えている写真や、今にも落ちそうなバスなど沢山の被災写真がのっていた。にもかかわらず「怖い」とおもわなかったあの頃が不思議だ。それはいつも地震の時には家族がいて両親が咄嗟に部屋に来てくださったり、食器などおちたことがないからだと思う。家族が震災の話をすることもなく、地震の備えもしていないから安心していたのだと思う。大地震を体験したことのないわたしにとって「怖い」という言葉には差があると思った。大震災を経験した人の怖いと、当時小学校6年であった東日本大震災の津波の映像をみて「もし自分の街がこんな飲み込まれたら怖い」とはおもった「怖い」のレベルはすごく差がある。結局、人は体験やきっかけがなければ防災にかかわることは難しいと思う。私の過去が他人事だったように...

5 環境防災科

私は中学3年生の夏の終わりに、推薦で受検したいとしか思っていなかった。決めるのが遅かったせいで、舞子高校の普通科のオープンキャンパスは行けたが、環境防災科のオープンキャンパスは行けていな

い。環境防災科の情報は部活動でお世話になった2歳年上の先輩に環境防災科のことについて事細かく教えてもらった。

将来就きたい仕事が防災関連でなくても、「市民のリーダーになる人を育てている」というのをホームページで見て、「防災にいろいろな関わりかたがあるんや」と思った。

防災の知識がないのに阪神・淡路大震災の情報さえ危うかった。

この環境防災科に入って自分の思っていたボランティアや支援の仕方を覆されることがあった。例えば、地元の祭りのボランティアなどに参加させて頂くときに先輩から「自分たちも楽しんでください。」という言葉があった。

私はボランティアとは人のために何かをすることなのにそんな自分たちが楽しんでもいいのかなという思いがあったけれど、「自分たちも楽しまないと、お客さんも楽しんでもくれない」という言葉をいただきました。

また、被災地に千羽鶴を送っても迷惑なんだということをこの環境防災科で学んだ。置く場所がないという現実を専門分野で勉強しないとわからないことがある。という違う視点から物事を考えられるようになった。

6 現在

私は環境防災科に入ったのがきっかけで防災にかかわるようになった。環境防災科に入らなければ地震や防災のことについて勉強したり、ボランティアに参加したり、毎年行われている追悼式に足を運ぶことはなかったと思う。

高校1年生の1月、初めて環境防災科の生徒と追悼式にいかせていただいたけれど、中央区東遊園地に向かっている人たちを見て、自分の儚さと無力さに泣きそうになった。それは私だけでなく、一緒に行っていた西尾さんも同じだった。「将来どんな道にすすんでも、防災と直接関わることもなくとも、この日だけでも阪神・淡路大震災を忘れないでおこう」と思った。

また、高校1年生の時は阪神・淡路大震災から20年だったためすごく多くの方が来られたそう。初めて足を運んだため、毎年このくらいの人 coming いるものだと思っていた。だけど、2年の時に足を運んだ時少なく思えた。私はこのことに少し違和感を覚えたが、それは風化ではないのだと思った。きっと「20年から行こう」という人もいただろう。被災者からしたら「節目だけきて…」という方もいるかもしれない。だけど、私は阪神淡路大震災を思い出すことが大切だと思う。

どんな形であれ風化をさせないことが大切だ。

私は、岡山県出身の21歳の先輩に阪神・淡路大震災のことを話していたら、「そんな地震あったん？しらんわ〜」と言われてすごくショックだった。当時私も生まれていなかったけれど、全国の人が知っていることだと思っていたし、小学校で阪神・淡路大震災を知ったように、同じように語り継がれているものだと思っていた。忘れてはいけないと思ったと同時に、知っていることが当たり前ではないのだと実感した。もっと全国に防災教育を入れるべきだと思う。いずれくる南海トラフでまた同じ繰り返しがないように…。この町でこんなことがあって今があることを知ってほしいと思った。

7 将来の夢

私の将来の夢はパティシエだ。パティシエは間接的に人に喜びを与えたり、笑顔にできる仕事だ。私の目標は、パティシエになって自分の店を持つこと。私は小さいころからお菓子が大好きで、なんとなくケーキ屋さんになりたいと思っていた。友達にお菓子をあげておいしいと言ってもらえたりして、笑顔になってくれるのが好きだった。

パティシエの道にすすみたいとおもったきっかけは、中学2年生の頃にトライやるウィークで地元のケーキ屋さんに行かせていただいてからだ。一週間行かせてもらって毎日沢山のケーキを作り上げているのがすごかった。自分もいつか作り上げて沢山の人の笑顔になってもらいたいと思うようになった。

一見、防災と関わりがないけれど、きっと世の中には沢山人のためにになる仕事ばかりがある。喜ばせる仕事も笑顔になってもらえる仕事も数えきれないほどあるだろう。その中で自分の大好きなお菓子と人を喜ばせることができるパティシエの道にすすむことに決めた。

8 パティシエと防災

私は、災害が起きた時に被災地にいる人たちに笑顔になってもらいたいと思い、被災地でカフェ屋台をすること。被災地にもって行けるお菓子は何かと考えたときに、アレルギーや、生ものだから腐りやすい、オーブンを使われないといった沢山の問題が伴う。被災地でお菓子を作るとなったら、作る場所や、作る機械など、材料がないのに反って迷惑にしかならない。

それならば、焼いたクッキー、マドレーヌなど生ものを焼いていて、日持ちするお菓子を被災地に作って届けたいと思う。また卵アレルギー牛乳アレルギー、を持っている人もいると思う。洋菓子が皆好きというわけではないという人もいると思う。卵や牛乳を使わないお菓子、お年寄りが食べやすい和菓子なども色々な場合を考えてつくってもっていききたいと思う。

避難していても不安や見知らぬ人との生活でかなりのストレスが掛かっていると思う。避難生活の中で少しでも癒せる場所を作りたいと思いカフェ屋台を提案した。カフェっていったら大人向けで静かな雰囲気があるけれど、子供たちが立ち寄りにくいと思うから、配布方式の方が喜ぶだろうと思い、カフェ屋台にした。カフェ屋台はお菓子だけでなく、ドリンクも提供したい。あったかいお茶を飲みたい人にはガスコンロでお湯を沸かすなどして暖かいお茶を提供したい。

また、避難所生活を送っている間に、誕生日が来る人だっている。そういった人たちにバースデケーキを贈りたいけど、それは作る場所もないし生ものだから作って持って行ったら腐ってしまうから、無理がある。なので、焼いたお菓子で作った誕生日用のマフィンなどをデコレーションして誕生日の人に贈りたい。

栄養学、食品衛生を中心に学んでいく。専門知識を生かし避難所にいる方々の健康と安全を守って、被災者の方々に笑顔届けたい。

私は大きな災害がおきて避難生活をしたことがないから、被災者がほしいもの、求めているものなどテレビやSNSなどでしか見たことがないからそれはごく一部であってほかにも求めているものを知りたい。

私は自宅で作ったお菓子を現地で配ってボランティアをしているのをインターネットで見たことがある。被災者が「お菓子ほしい」という声を聞いたことはないけれど、求めている人もいるのだとわかった。一見かけ離れているパティシエと防災だけれど、パティシエとしてできることもあるということを広げていきたい。

そして、自然災害の怖さ、備えを伝えていきたい。

私は人の笑顔を見るのが好きだ。たまにお菓子を作り「おいしい」と言ってくれる姿を見るのが好きだ。パティシエは間接的に人を笑顔にすること、喜ばせることができる職業だと思っている。自分にできることは人を笑顔にさせることだと思い、お客さんに笑顔になってもらうだけでなく、パティシエとして働いている人たちにも笑顔届けられる行動をしたい。

まとめ

卒業研究をすることによって父がどのように過ごしていたのかを知ることができた。

あまり昔の話をする人ではないから、「思い出されへん」といいながらも、少ししか文章的にはないけれど、あの日、1995年1月17日の動きや親戚の行動を知れてよかった。そんなに被害を受けていないから語り継ぐことはないと思われがちだけれど、話を聞く側としては新たな発見がある。それが今後、震災だけでなく必要になってくると思う。

この3年間の中でボランティアをさせていただいたのは、阪神淡路大震災や東日本大震災が関わったボランティアよりも、どちらかというと、祭りや、募金活動など、自分の身近なボランティアしかしてこなかった。

それは、被災地に行って自分に何ができるのだろうかと考えたときに何も思いつかなかった。先輩が被災者に「あなたに何ができるの？」と言われたときに「私にはなにもできません。ただこうやってお話を聞くことはできます」と答えられたと聞きすごいと思った。

もしその質問をされたときに私はきっと咄嗟にこたえることはできなかったと思う。

東北の訪問は1年生の時から参加したかった。きっとテレビで見ている映像と実際に目で見るのとでは全然ちがうことを目の当たりにするのが自分の中で怖かったのだと思う。けれど、こんな体験を出来るのはこの環境防災科にいるからこそできることで三年の夏に絶対に行く決めた。

高校生活最後の夏、初めて東北訪問をさせて頂いた。

これも沢山の人の支援のおかげで訪問することができた。学校や家で何度も動画や画像を見ていたけど、実際に見ると面影がなく、「ここに津波がきたん？」という不思議な感覚だった。それは訪れた場所全てがそうだった。

しかし、大川小学校を訪れた時に、佐藤さんが当時何があったのかを説明してくれた。佐藤さんはこの約5年間沢山の人の支援のおかげで訪問することができた。学校や家で何度も動画や画像を見ていたけど、実際に見ると面影がなく、「ここに津波がきたん？」という不思議な感覚だった。それは訪れた場所全てがそうだった。

私は、当時の話をその場所で聞くことは必要だと感じたし、いろんな立場の人から話を聞くことが大切だと思った。

なにか被災地のためにしたいと思うなら、まずは自分の目で現地を見ることだと今回の訪問で実感した。

語り継ぐ

勝谷 勇介

1 はじめに

1995年1月17日5時46分に発生した兵庫県南部地震では6434名の尊い命が失われた。

昨年は、阪神・淡路大震災から20年の節目ということで、毎年行われているメモリアルイベントには大勢の人たちが参加していた。だが、今年はそうではなかった。阪神・淡路大震災から21年目を迎えた今年は、昨年の節目の年よりもメディアの報道や、集まる人たちが明らかに少なくなっていた。

私は人が沢山亡くなるほどの大きな災害は経験したことがない。だが、今年の1月17日に初めて、風化しつつある現実を目の当たりにした。私たちは、6000名を超える死者を出した災害で何を得たのだろうか？災害を経験していない私には何ができるのだろうか？と考えたところ、話を聞いてそれを次の世代に風化させないように語り継ぎ、今後来ると言われている大地震で、同じ被害を出さないように対策をすることだと考えついた。

私の両親は当時、千葉県に住んでおり、阪神・淡路大震災の記憶はほとんどないようだ。

そこで、兵庫県立舞子高等学校に現在勤務している8人の先生方から、当時の様子などを聞かせていただいた。そのことについて、これからを担っていく私たち世代や未来の世代のために語り継いでいこうと思う。

2 8人の先生方の当時

A先生（女性）

神戸市の西神中央駅付近のマンションに夫と2人暮らし。

兵庫県立須磨友が丘高校に勤務していた。

電気・ガス・水道等のライフラインは3日以内に復旧。

マンションへの被害も比較的少なく、高校の生徒も教員も亡くなった人はいなかった。

B先生（男性）

西明石付近に新築を買い、妻と子供（3歳）の3人暮らし。

兵庫県立高塚高校に勤務しており、震災で2名の生徒が亡くなった。

ライフラインは3日程度で復旧。

C先生（男性）

西神ニュータウンに両親、兄2人、C先生（5歳）、妹の計6人で暮らしていた。

家の被害はほとんどなく、ライフラインは3日以内に復旧

D先生（女性）

西宮のアパートに1人暮らし。

芦屋市の〇〇高校に勤務しており、震災によって数名の生徒が亡くなった。

ガス・水道は2月22日以降に復旧、電気は比較的早く復旧した。

E先生（女性）

兵庫県垂水区に両親と姉2人と暮らしていた。E先生は学生。

ガス・水道は復旧するのに時間がかかり、電気はすぐに復旧した。

F先生（男性）

三木市に両親と妹2人と暮らしていた。F先生は高校2年生。

水は止まらず、電気が2日間ほどで復旧した。

G先生（女性）

東京の大学に通う学生で1人暮らしをしていた。

実家が長田区にあり、家は全壊した。身内に死者はでなかった。

H先生（女性）

朝霧駅付近のマンションに旦那と2人暮らし。

神戸高校に勤務しており、生徒2名、教員1名が亡くなった。

水は1週間程度止まり、ガスは2月以降に復旧した。

3 それぞれの震災メモリー（1995年1月17日午前5時46分）

（1）揺れと行動

いつもと変わらない毎日が繰り返されようとしていた1月17日。

時計が朝の5時46分をさして暫くした後、「ゴオォー」という聞いたことのない音とともに食器棚からお皿の震える音が響いた。地震が起きる少し前に目覚めた先生もいた。初めは地震だと分らず、さらに夢だと思い揺れが収まった後もしばらく目を閉じていた先生もいた。神戸に地震が来るという概念がなかった先生は、地震だと気づくまでに少し時間がかかった。

寝室ではタンスが大きく揺れ、テレビが頭上ギリギリのところに落ちてきた。本棚から本がすべて落ち、家の中が洗濯機状態だった。

地震の避難訓練を行っておらず、机の下に隠れるなどの行動はできなかった。頭を抱えてその場にしゃがみ込むことしかできなかった。

当時5歳だったC先生は「お父さんが暴れたのかと思った」と話してくれた。揺れが収まった後、ラジオでは「大きな地震です。〇〇で死者が4名確認されています」と放送され、比較的揺れの小さかった地域に住んでいたA先生は、「人が亡くなるほどの地震だったのか」と思ったそうだ。

建物被害の少なかった地域に住んでいた先生方は、いつも通り高校に出勤した。その際街並みはいつもと変わらない様子だったという。学校では電話による生徒の安否確認、連絡の取れない生徒へは自宅訪問を行った。中には、電気が止まったため車を置いているゲートが開かず、電車も動かず3日ほど学校に出勤できない先生もいた。

長田区の火災をテレビで見たA先生は「同じ神戸でもこんなに違いがあるのか」と思ったそうだ。実際、大阪との被害の差に驚いた先生もいた。

（2）消えない記憶と想い

「震災のことは忘れたくても忘れることはできない。橋を渡るときなど思い出してしまう時がある。」私はこの言葉が一番重く感じた。2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）の被災地訪問に参加したとき被災者の方から同じ言葉を聞いた。揺れが怖いという先生はほかにも数名いた。

学区が広い高校では、生徒の被害に差があり、死体を運ぶ手伝いをした生徒もいたという。その生徒の人たちは何を思ったのだろうか？

「地震は人を成長させる。死体を運んだ生徒の顔つきは震災前と後とではだいぶ変わっていた。」とB先生は話してくれた。私も地震は人を成長させると思うが、それだけではないということは忘れてはいけない。少しの揺れでも恐怖を感じる人もいるということだ。

地震によりG先生の実家は全壊した。両親がPTSD（心的外傷後ストレス障害）になっているかもしれないことを気にして、当時の様子などを聞くことは震災後しばらく控えていたそうだ。仮に、亡くなった方がいたならば一生思い出したくない記憶になっていたかもしれない。現に、阪神・淡路大震災で家族を失い絶望的になった被災者もいたそうだ。

私は生徒を数名亡くしたD先生に「震災後、教師を辞めたいと思ったことはないのですか？」と問いかけた。D先生は「確かにとてもつらかったけど、大人が引くのは考えられなかった。」と答えてくれた。

E先生は「被害の少なかった私たちも暗く過ぎさないといけないの？」と思ったそうだ。

震災をどう思うのか、その後どのような使命を背負って生きていくのか、人それぞれであることを改めて実感した。

（3）これだけは知っていてほしい

「お風呂に入れない、学校に行けない、友達に会えず安否がわからない、当たり前だったことが当たり前ではなくなった」E先生はこのように話してくれた。今の社会では、通信機器があり、毎日のように友達と会い、不自由なく生活しているのが当たり前になっている。地震が起こり、全てが無くなった生活を当たり前だと思っている人は限りなくゼロに近いだろう。

今ある現実とは当たり前ではないのだ。明日の今頃、いつも通りに過ごせているとは限らない。いつ何が、どこで起こるかわからないということをしっかり覚えていてほしい。「当たり前を当たり前だと思わないこと。」多くの先生方はこのことを強く語ってくれた。私たちはそのことをしっかり理解したうえで生き

ていかなければいけない。

(4) 備え

阪神・淡路大震災以降、食料・水の備蓄をしている先生方が非常に多かった。災害時に役に立った道具は、カセットコンロや缶詰、スリッパだそうだ。普段目につくところに防災のグッズや、非常用持ち出し袋を置いておくことで、当たり前の日常に防災を無意識に絡めることが可能なのではないだろうか？

4 語り継ぐとは何なのか？

今回、8人の先生方にお話を聞かせていただき、まとめた内容を綴っていった。

私は書いている時に「本当にこんなことを書いて、語り継ぐことはできるのか？」と疑問に思い、書く手を止めてしまった。そもそも本当の語り継ぐとはどういうことなのか？私は冒頭で語り継ぐとは、風化させないようにして、今後来ると言われている大地震で、同じ被害を出さないように対策をすることと書いている。

だが、それが正しいのかはわからない。本当は語り継いでほしくない被災者もいるのではないだろうか？私は少しの罪悪感を覚えた。だが、書き続けることにした。

私が書き綴った内容を読むだけで終わってほしくない。読んで知った内容を次の人に伝えてほしい。それは、友達に自慢する形で話してもいい。家族に真剣に訴えるようにして話してくれてもいい。何かの集まりで会話の1つにしてくれてもいい。周りの人に話すことが何よりも大切なのである。それは結果的に、自分たちの命を守ることにつながる。

私は一人一人に命の大切さを知ってほしい。災害が襲っても生きてほしい。生き残る知恵を共有してほしい。

5 私は日本を変える

私の夢は日本を変えることだ。具体的には日本の防災の在り方を変えたい。阪神・淡路大震災や東日本大震災では家屋の倒壊や、津波など以外にも大勢の方が亡くなったのは知っているだろうか？災害によって地域のコミュニティーが崩壊し、高齢者の方が孤独死したり、放射線の問題により差別され自殺に追い込まれてしまった方がいるということだ。

私は、このような死をなくすと共に、全ての人が災害によって亡くなることのない防災を進めていきたいと考えている。つまり、「災害による死者をゼロにする」ということだ。この夢はとても大きく、不可能に近いかもしれない。しかし、私は挑戦できるときに挑戦しておきたいと思っている。

石巻市立大川小学校をご存知だろうか。児童と生徒が津波によって大勢亡くなった小学校である。高校1年の夏に東日本大震災被災地支援ボランティアに参加し、大川小学校を見学に行った。

私は、津波に襲われた後の大川小学校を見た瞬間に衝撃が走った。今でもその時の記憶を鮮明に覚えている。小学校の渡り廊下はねじり曲がり、体育館は半分津波に持っていかれ、天井は剥がれ落ち、3階建ての校舎の上まで瓦礫が乗っていた。「ここで流され亡くなった生徒たちは、それぞれどんな夢があったのだろうか？一度も夢に挑戦することができなかったんじゃないか？」こう考えると、なにも挑戦せずに諦めてばかりいた自分に嫌気がさした。夢に挑戦するチャンスがあるのにそれを無駄にしていた自分に呆れた。

そして、それから2年近く経った今、大きな夢を見つけた。99%不可能な夢でも1%でも可能性があるのなら諦めずに、夢を叶えるどころか見つけることすらできずに亡くなってしまった人たちの分まで最後まで追いかけていこうと思うようになった。

今はまだ日本を変えるどころか、身近な人を変えることすらできない。そんな自分であっても、私は日本を変えたい。誰にも負けない強い意志をもって夢を追いかけていきたい。

先生方から聞かせていただいた中で、「長田区は戦争した後のようだった」「避難所が野戦病院のようだった」という言葉があった。おそらく、長田区をテレビでみて戦時中の日本を思い出した方も大勢いらっしゃるだろう。すべての人が災害に対して正面からぶつかり合い、災害で悲しむ人のいない日本を作りたい。

6 未来の災害

「30年以内に南海トラフ巨大地震が発生するかもしれない」この言葉を聞いたことはあるだろう。だが、実際は南海トラフ巨大地震が発生して終わりではない。どこで地震が起きるかわからない日本で「ここは大

丈夫」と言える場所はない。南海トラフ巨大地震よりも懸念されている地震もあることを忘れてはいけない。

これから、災害の時代を迎える日本は地震だけでなく、台風・火山噴火なども視野に入れて防災を進めていかなくてはならない。もしかしたら、50年後60年後も災害が発生しないかもしれない。人間はしばらくの間危険がなければ、危機感を忘れてしまうということが分かっている。

今、備えることは未来の世代を守ることに繋がると考えている。一人一人が責任をもって、今度は自分の番だと自覚して、今と未来を守っていく防災を心がけていくことが必要なのではないだろうか？

7 いつまでも語り継ごう・・・

阪神・淡路大震災や東日本大震災、熊本地震それ以前に起きた関東大震災、新潟県中越地震などを私はいつまでも忘れない。私は、いつまでも語り継いでいこうと思う。日本はどんな災害が来ても立ち直れるということ。協力することの大切さを。

いつも災害は突然訪れる。大切な命を当然のように奪っていく。街を破壊していく。人々の人生を狂わせていく。その後は何事もなかったかのように静かになる。残るのは壊されてグチャグチャになった街、人々の泣き声。人の死体。災害を体験して初めて防災の大切さに気付く人が大半だろう。語り継ぐことは災害に対する盾になる。

私が初めて目にした災害は東日本大震災だった。すべてを飲み込んでいく津波の存在を怖いと感じた。テレビ越しでもその恐ろしさは伝わってきた。見たこと、聞いたことなんでも構わない。災害によって得た情報、感情はすべて盾になる。次の防災への備えに繋がる。

私は、災害による死者がゼロになるその日まで語り継いでいこうと思う。失われた尊い命の意味を無駄にしないために。夢を実現させるために。人を守るために。

8 最後に

私は、防災を学び、広めることが嫌だった。災害を学ぶことが嫌だった。2011年3月11日までは・・・

自分が備えなくても誰かが助けてくれる。そもそも、地震なんて来ないと思っていた。しかし、あの日の津波を見て分かった。災害時は誰も助けてくれないと。それ以来、自分の身は自分で守らないといけないという自覚が芽生え、防災に興味を持った。

舞子高校環境防災科に入学し、様々なボランティアに参加してきた。その中で、高齢者の方たちが阪神・淡路大震災当時のことや、東日本大震災に対する気持ちや思いつく支援の仕方を話してくれた。それにより、被災者との接し方や心のケアの仕方を学んだ。

これからは、色々な方と接することができる年齢である私たちが、幅広い方の意見を聞き、行動を起こしていくことが必要になってくると思う。阪神・淡路大震災がボランティア元年と呼ばれるように、災害によって、人々の防災への意識がとて高くなった。その際に得た生活の立て直しの知識や、周りの人のまとめ方など、語り継がなければならない情報がまだまだたくさんあるように感じる。さらに、それらの情報は混乱している被災者の心の安心作りにもなる。

これからは、世代を超えた情報交換を中心に行い、まずは迅速な災害対応ができる社会づくりを目指すことが最良だと思う。それを当たり前のようにできるようになれば、災害による死者をゼロにできる可能性が見えてくるだろう。自分で、見つけた夢は自分で初めの一步を踏み出したい。

ここに、8名の先生方のお話を語り継ぐ。そして、自分の手で夢を実現させたい。

家族の阪神・淡路大震災を語り継ぐ

小西 こころ

はじめに

震災から22年になる。これだけの時間が経った今でも震災当時の状況を明確に覚えている。私は母、父、祖母から聞いた阪神・淡路大震災を語り継ぐ。母は、父と西明石のハイツで2人暮らし、祖母は、西区で祖父と一軒家で暮らしていた。

1 阪神・淡路大震災

(1) 母の阪神・淡路大震災

当時母は、西明石のハイツに一人でいた。父は、当直で病院に泊まっていた。5時46分地震が発生。母はそのとき、寝ていたので、夢と現実が混ざり、意識朦朧でとても気分が悪くなった。「怪獣が来た」と本当に思った。驚きですぐには動けなかった。布団のすぐ横に食器棚を置いていた。食器棚は天井とぶつかり合って、すごい音がする。天井が破れないか心配だった。揺れが収まった。天井ぎりぎりに食器棚を置いていたため、食器棚は倒れなかった。天井は大きな穴が開いていた。もう少し、揺れが続いていたら、食器棚は倒れていただろう。そうすれば、母は助かっていた。母が死んでいたかもしれないと考えるだけで怖くなる。食器棚からは食器が出て部屋中に飛んでいた。食器棚の横にあった、冷蔵庫からも卵が出てきていた。揺れが収まるまで布団にもぐっていた母は布団から出ると布団の上で、割れた卵でいっぱいになっていた。家の中はいろんなもので散らかっていた。当時のテレビはアナログテレビですごく重くて大きいものだった。このテレビもキッチンまで動いていた。このテレビが自分の上に落ちてこなくてよかったと心の底から思った。少し落ち着いて、窓から外を見た。東の空がすごく赤かった。そのときは、まだ火事だとは思っていなかった。

(2) 地震後の生活

地震が起こって少し経つと、父方の親や、親戚の人が母の家に集まってきた。母の家は電気や水が使えていた。父方の祖父母の家は、ドアがゆがんでなかなか外に出られなかった。ほかにも集まってきた親戚の家にはそれぞれの被災状況があった。遠い親戚で母はあまり会ったことはないが、夫婦で亡くなられた親戚の人もいた。自分の身近の人が被害にあって命をなくされた方がいるということを絶対に忘れてはいけない。地震直後は自分の家のことで精いっぱいだった。親戚(約10人)がハイツの中で暮らす。狭く、窮屈だったが、今までこんなにそれぞれと話せる機会はなかった、その上、協力し合って生活するのは、母にとっては楽しかった。母の住むハイツの前にはスーパーがあったので、すぐに買い物にも行けて食料や生活に困ることはなかった。親戚の中で一軒家に住んでいるのが3家族いた。そのうち2家族は家の一部が崩れていたり、変形したりしていた。半壊にも入らなかったため、今もこのまま生活をしている。現在私は、2世帯住宅で祖父母と一緒に暮らしている。祖父母の家に移り住んだため壁には現在も震災時のヒビの跡が残っている。

(3) 父の阪神・淡路大震災

父は職場の市民病院で当直だったとき地震が発生した、5時46分はベッドで寝ていた。地震発生時、ベッドの上でいたため揺れで飛び跳ねていた。起きると薬を並べていた棚と入れ物が倒れており、部屋のいたるものが散らかっていた。病院内にいたことで患者さんのことや病院のことで仕事が多くあり、すぐに家に帰ることができなかった。父は17日の夜遅くに家に帰ることができた。

(4) 祖母の阪神・淡路大震災

祖母は祖父と一緒に住んでいた。なぜかわからないが、午前5時40分に風呂の湯沸かしタイマーがセットしてあった。風呂が沸いた音が鳴り、目が覚めた。まずストーブを点け、風呂場に向かった。2人で「どうしたのかな」と言いながら、リビングへ戻ってきたとき、地震が発生した。祖父はすぐにストーブを消した。急いで消したのでガスのにおいが部屋中に回っていた。火事になりそうな勢いで臭かったので、こわいこわいと思いながら机の脚を持ち、地震に耐えた。揺れが収まり、外に出ようとした。だが、ドアが歪んでいて全く動かなかった。力づくで外に出て、車を出し、急いで母のハイツへと向かった。

（５）私の阪神・淡路大震災

私は阪神・淡路大震災から３年後に生まれた。町を見てもきれいだし、災害が起きたとは思えなかった。父、母からは阪神淡路大震災の時の話を一度も聞いたことがなく、小学校１年生のときに小学校で行われた阪神・淡路大震災の犠牲者を追悼する会「つどいの会」で阪神・淡路大震災を知った。小学校の体育館で「１・１７」と並べられたろうそくに火を移した。阪神・淡路大震災はテレビの中の世界のことで信じられなかった。小学校高学年で人と防災未来センターに行った。ここで見た写真や物に衝撃を受けたが、今も心に残るのが「１・１７シアター」だった。７分間の映像で地震発生の瞬間を体感できる装置で暗い中、急に揺れが始まり、いろいろなものが壊れる音が頭に響く。映像を見ながら、ショックで倒れてしまう子や、泣いてしまう子が多かった。私もほとんど目をつむっていた。すごく長い時間を感じた。あの時感じた怖さはこれから先も忘れない。高校に入り、阪神・淡路大震災の話を聞く機会が増えた。１年生の校外学習で野島断層に行ったとき、語り部さんの話を聞いて心に刺さった。あまりに悲しくて、勝手に涙がどんどん出てくる。初めて人の話に心が動かされた。リアリティーがすごく、すぐにイメージをしてしまった。多くの人に聞いてほしい。災害の恐ろしさを感じてほしい。

（６）ルミナリエ

ルミナリエの意味を知ったのは中学２年生だった。ルミナリエは小さなころから毎年行っており、クリスマスのお祭りだと思っていた。ルミナリエの始まりが阪神・淡路大震災と知ったとき、驚いた。阪神・淡路大震災の行事は暗い中でろうそくを灯し、スライド写真、動画を見たりすることだと思っていたから。違う形で風化を防ぎ、後世へつなげていっていることにすごくいいことだと思った。ルミナリエは毎年、母と行く。昨年のルミナリエは基金が減ってきており、これから続けられるかわからないと聞いていてショックを受けた。私たちにできることは、募金をすることだと思う。ルミナリエは、震災を考えるきっかけともなり、幅広い世代に見てもらえる。そして、神戸の名物の一つだ。昨年、ルミナリエを見に行ったときはゴール地点である東遊園地から点灯式を見た。点灯式が始まる前、私の隣に座ったおじいさんとおばあさんがいた。徳島からルミナリエを見るだけのために来た。駅の広告で見つけて、車で神戸まで来ていた。時間、場所が細かく書いておらず、行き当たりばったりで来た。予想以上の人の多さに驚いたが、多かったおかげで場所もすぐわかった。ご夫婦は「本当に来てよかった。ありがとう。」と言って帰った。私を含めて、神戸の人、兵庫県内の人、他県の人、多くの人が１年に１度のルミナリエを楽しみにしていると思う。神戸にとってルミナリエは本当に必要だ。この先もルミナリエを続けていかなければいけない。

（７）家族の阪神・淡路大震災を聞いて

今まで阪神・淡路大震災について家族から話を聞いたことがなく、体験していないと思っていたが、いざ聞いてみると次々と阪神・淡路大震災の話が出てきて驚いた。母はもう少し時間が長ければ死んでいたかもしれない。これを聞いて本当に死ななくて、よかったと思った。いつも笑顔で話しかけてくれるこの母がこんなに怖い思いをしていたのだと驚きで何も言葉が出なかった。阪神・淡路大震災では、母のように「あと５秒続いていればどうなっていたか。」「あと１０センチ左だったら死んでいた」というような助かった人と、「もう５秒早ければ」と、亡くなった方もいる。数分の出来事に多くの人の人生が変わってしまったことが不思議。災害後は悪いことだけが起こるのではないというのを改めて分かった。阪神・淡路大震災がなければ、今のような親戚どうしの仲の良さはなかったかもしれない。人に対するやさしさや、思いやりもなかったかもしれない。そう思えば、災害を乗り越えることで新しいことに気づき、より良い町・家族になれると思う。私が聞いた３人でもみんな違うことだったように、阪神・淡路大震災を経験した人、一人ひとりにそれぞれの物語がある。これから少しでも多くの人話を聞いていきたいと思っている。

２ 平成28年(2016年)熊本地震

（１） ４月14日前震・４月16日本震

熊本での地震発生を風呂上りにテレビで見た。大分に祖母がいたので母は、急いで電話を掛けた。すぐには繋がらなかったが朝、祖母の方から電話がかかってきた。すごく揺れているが家は大丈夫ということだった。続く余震で、感覚が鈍くなり揺れていない時も揺れていると感じるようになっていた。

（２） 熊本の方との出会い

地震発生から４日後に母が務めるホテル内のエステに熊本からの方が来た。この方は、被害の大きかった益城町の隣の町に住んでいた。家は潰れて避難所で暮らしていたが食べ物全然まわってこず、祖母の

体が悪いというので、乗継を重ねて、弟さんがいる神戸まで来た。

その方が来てすぐは、熊本の方とは気づかず普段通りに接客をしていた。お店のすぐ隣に線路がある。電車が通るとき、すごく大きな音がする。熊本の方は電車の音にとってもびくびくしていた。母が、「大丈夫ですよ」と声をかけると、その方は「熊本から避難してきたのです。」と言った。それからその人は、現地の避難所でのこと生活のことについて話をしてくれた。その方が話してくれたことは、聞いていてとても苦しくなった。母は、自分が阪神・淡路大震災で体験したことと重ねあわせて自然と涙が出てきた。その方もすごく泣いていた。

(3) 思ったこと

熊本の方の話を聞いて母の震災・災害についての思いは変わった。今まで母は自分から震災の話をしたり、災害・防災のことについても話をしたりはしなかった。それはなぜかわからないが、母の中で何か閉ざしていたものがあったのだと思う。母が自分から話をしてきたことに対し、驚いたが、それ以上にとてうれしかった。阪神・淡路大震災で被災し、その時のつらかったことなどを閉ざしている人は母以外にたくさんいると思う。母はこれまでそうだったが、違うところで被災された方の話を聞き、変わった。震災の体験談を聞くことは、震災を経験していない人の方が多い。たぶん。震災を体験した人たち、親世代の人たちも聞いてもらうべきだと思う。震災を経験していない人と、経験した人とは、震災の体験談を聞いて思うことが全然違うと思うからだ。親子で語り部さんの話を聞きに行く行事や機会があればいいなと思う。

3 東日本大震災

(1) 東日本大震災発生

私は小学6年生で学校にいるとき東日本大震災は発生した。教室で授業を受けていたとき、廊下にいた先生が慌ただしく走り回っていたのを覚えている。教室にあった、行内放送用のテレビで急いで放送された。茶色く、何もかもがぐしゃぐしゃになった街を見た。津波後の映像だった。このころは津波ということをよく知らず、人ごとにしていた部分があった。

(2) 中学校

中学校では、1・17の「つどいの日」という行事があり、この日は防災訓練、防災教育をする一日だった。私が覚えている防災教育の内容としては、非常用持ち出し袋の中身の確認や地震が起きた時の行動、家族の電話番号の確認だ。東日本大震災前は地震の話のみしていたが、東日本震災後は津波の勉強もするようになった。

(3) 高校

授業をはじめ、いろんな場で東日本大震災の話やビデオをみてきた。2年の夏休みに東北訪問へ行かせていただいた。東北訪問に参加してから、感情が豊かになった気がする。初めて見る仮設住宅、町の様子に思うことがいっぱいあった。大川小学校で見たもの、感じたことは、うまく言葉に表すことができないから現地で見てほしい。

4 ネパール地震

(1) ネパール地震発生

学校にいるとき、ネパールで地震が発生した。授業合間の休み時間にニュースで見た。ネパール地震が発生したとき、ネパール訪問の希望を出した後だったため、どうなるのだろうという思いもあったが、今何をしなくてはいけないのかを考えた。募金活動に参加することがあったが、ネパールは現在どうなっているのかというのが知りたかったため、JICAで行われた～ネパールの今を知る～という報告会に参加した。青年海外協力隊やボランティアで地震発生時ネパールにいた人の発表だった。震度以上に大きな被害があり、驚いた。報告会に参加し、現状を知って予想以上の被害の大きさにネパールに行くのが怖かった。

(2) ネパール訪問

夏休みではなくなったが、12月にネパールへ行くことができた。ネパールでは衝撃を受けることばかりだった。ネパールの子供たちはとても明るく、逆に自分たちが元気をもらえた。今のネパールにとっても子供たちの存在はとても大きなものだと感じた。地震によって崩壊した建物はいろいろな壊れ方、

種類があったが、粉々の大きい砂山のようになっているところもあった。日本の家の壊れ方とは全く違っていた。ネパールの家は壊れると隙間がなくなる。そのため逃げ出すこともできなくなり、助けることも難しくなる。「昼間に地震が起こったため家にいた人が少なく、まだ被害はマシな方。夜に起こっていたらもっと被害が大きかった。」この言葉が心に刺さり、とても悲しかった。自分たちにできる支援をこれからも続けていく。

5 環境防災科

(1) 環境防災科に入ったきっかけ

きっかけは2つある。1つ目はボランティア活動が好きだったから。中学生で、できるボランティア活動はほとんどが町の祭りの手伝いだった。高校でも、「ボランティア活動を続けたい」という思いが強く、環境防災科に行きたいと思うようになった。2つ目は、「家族を守りたい」と思ったから。このときは災害について何も知らず、災害についての知識を増やしたいということもあった。失わなくていい命を落としたくない。この思いが強かった。

(2) これから

私が住んでいる地域は、ほかの地区に比べて圧倒的に高齢者が多い。木造の瓦の家がほとんどで、災害時大きな被害が出るかもしれない。そのうえ、私たちの住むところは、川より下にある。津波が来たとき川から逆流し、町が沈んでしまうかもしれない。同じ地域に住む人たちは災害をどのように思っているのかを知りたい。地域の防災行事(消火器の使い方、防災教育)は、公民館やグラウンドで行われるが、景品、おやつが出る。景品、おやつが出るから参加しているのかなとずっと思っていたが、防災行事後に話をすることを目的にして、来ている人が多くいたことに最近気づき、いいことだと思った。地域の防災行事の日が地域の高齢者にとって、コミュニケーションをとれる1日になっていた。朝は防災活動に参加し、昼から公園でお話をする。このコミュニケーションは災害時に役立つだろう。これからは、私も積極的に防災活動に参加していこうと思う。

6 感想

今回話を聞いて、みんなの笑顔の過去にはつらい出来事があったことを知った。つらい話を続けて聞くのは気が重くなっていった。だが、話している方はもっとつらいのだと思った。つらい思いをさせてまで聞いたことをここで終わらせることは最悪なことだと思うから伝えていく、「語り継ぐ」を読んでもくださる方や、次の世代、将来私に家族ができたときに話をしようと思う。いつかは災害を体験していない世代が中心になって、伝えていかないといけない。私たちが伝えていくことで次の世代に残し、受け継いでいてもらいたい。いつ災害が来るかわからないから、今を楽しみたい。家族、友達との時間を大切にする。今は、一生懸命、今一緒にいる家族を守る方法を考えていく。

語り継ぐ

酒井 彩花

1 阪神・淡路大震災

午前5時46分、淡路島を震源地とし震度7の地震が神戸を襲った。死者6434名を出した大きな被害となった。

2 両親の話を聞いて

(1) 父

父は当時東灘区で一人暮らしをしていた。家の下敷きになって自分で這い上がってきたそうだ。ということは東灘区での被害は大きかったと考えられる。

(2) 母

当時、母は垂水で家族と一緒に住んでいた。二階で寝ていた母は地震が起こる直前にゴゴゴゴオ〜と地鳴りが聞こえて、この音に目が覚めた。「最初は家に車でも突っ込んだのかと思った」と言っていた。目が覚めた時には大きな揺れが家を襲い母の頭の上にあった額が枕元に落ちていたそうだ。地鳴りに目が覚めて布団から起き上がっていたため母には怪我はなかった。食器棚の中身は全て床に落ちていたらしい。垂水はそこまで被害がなかった。

(3) 長田

母は長田が焼け野原になっていると聞いたらしい。長田で被災した方は名谷に引っ越してきた。

3 東日本大震災

(1) 3月11日

午後2時46分、太平洋三陸沖を震源として発生した。マグニチュード9.0三陸沖を震源として発生した大規模な地震は関東地域まで被害が及んだ。

(2) 午後2時46分

地震発生前に私は自分の好きなドラマがあったため学校が終わったらすぐに家に帰ってそのドラマを観ていた。そろそろ終盤というときにいきなりニュースが変わった。「お知らせします。先ほど東北・関東地域で大きな揺れが観測されました」と。ドラマに夢中になっていた私は、その知らせを聞いても何もわかっていなくてただ「チャンネルが変わってしまったのかな」と思いさっきまでやっていたチャンネルを探した。けれど見つからなかった。おかしいなと思い番組表を見てみるとニュースとなっていた。その時は腹が立った。何日もニュースばかりでつまらなくてテレビを観なくなった。それから東北大震災から一年が経ったとき津波の映像が流された。「なにこれ、こんなことが去年あったん？」と思った。私は地震発生時のニュースやそれからの東北の地震に関するテレビを観ていなかったから一年前に起きた地震はこんなにも大きな被害が出ていたのかとその時知った。

(3) 津波

宮古港に午後3時1分、地震が起きたから15分後に1m24cmの引き波が観測し、第一波の到達時刻と特定された。授業で、津波が町を襲う瞬間をとらえた映像を見たことがある。映像では津波が迫ってくるスピードがのろくみえた。私たちが映像で見た町と被災者の目に入ってきた町の悲劇はきっと違うように見えたに違いない。防災って簡単に見えるけど、難しいものなんだ、と思った。

(4) 思ったこと

津波がやって来ると逃げる人もいるし高台までたどり着けなかった人もいた。3月11日、地震が発生した時どこを震源に起きたのかわからなかったのだろうか。うまく情報が届いてなかったのか。後から津波がやってきた地域を見ると海まで平坦な地形だった。こういう地域に住む人は地震のあとには津波が来るということを知っていてほしい。

4 ネパール地震

(1) 4月25日

午前11時56分、ネパールの首都カトマンズから北西80キロメートル付近を震源とするマグニチュード7.8の地震が起こった7600人を超える死者が出るなど甚大な被害がでた。

(2) 脆弱

古く脆弱な構造の家屋に多くの人が住んでおり（レンガ造り）、がれきに埋もれた生存者を救出していた。

(3) 思ったこと

こんなこと言っているのかわからないが環境防災科にいたときに海外の地震について学べてよかった。海外での地震被害と日本での地震被害は違っているところがあった。2015年に起きたネパールでの地震は古く脆弱な家が多くあり、またレンガ造りだったために倒壊の被害が多かったということだ。これに対して日本はレンガ造りの家が少なく、いやあまり見かけないといっているだろう。どの家にも耐震工事をしたら簡単には潰れないだろう。今でもネパールでは、レンガ造りが多いため建築士などを派遣しネパールの人たちに地震に強い家がどういうものなのか、伝授したらいいと思う。建築物に対しての補強が分かったところでその資材はあるのか、輸入しなくてはいけないのか。ここのところも考えなくてはならないと思った。

5 平成28年度熊本地震

(1) 地震発生前の自分

地震発生前は、普段どおりに友達と遊んでいた。

(2) 4月14日 午後9時26分

丁度、家に帰ってきた時で最近入れた「Yahoo! 防災情報アプリ」から知らせが来た。「熊本で震度7を観測」。この情報はテレビよりも早かった。この知らせを見て「震度7って大きくない？」と私が言ったらリビングに居た父は私の発した言葉を聞いてスマートフォンを取り出した。その時、父の行動が慌たしくなった。

最初に思ったことは「こんな時間に地震が来るのか…。でもこの時間だからこそ大抵の家族は集まって居るところが多いから子供たちは大丈夫だろう」と思った。

(3) 4月16日 本震 情報

この時は外出していた。携帯に「熊本で震度5」と送られてきた。その時は「震度5か。」としか思えなかった。それは多分、震度5がくるまでに何度か地震が起きていたから「また地震か。」というような感じで捉えていた。そして家に帰ると母が「熊本で震度5やで！」と驚いて言ってきた。母が驚いていた理由は震度5が本震であるということだった。その時に初めて震度5が本震ということを知り、やはり外にいと詳しく情報は伝わってこないなと思った。母はテレビをつけていて家にいたから「本震」ということを知ることができた。

(4) テレビを見て

テレビを観ていて車での避難について心配していた。授業で「今回の熊本地震は新潟中越沖地震に似ている。」ということを知ってからニュースを見るときは車中避難をしている方に気にかけていた。記者が車中避難している方にお話を伺っている際に「エコノミークラス症候群に気をつけてください。」と言っているのを聞いたことがなかった。この時に思ったのが「記者が被災地に行くということ。」についてだ。

(5) 記者が被災地に行くということ

被災地に行って何か情報を得て国民に知らせるだけ、というのだけが目的ではなくて早く現場に行くのならば、車中避難している方に「エコノミークラス症候群には気をつけてください、エコノミークラス症候群というのは…」と話かけるべきだと思う。また記者は夜暗い外で避難している方に明々と照明を向けてインタビューをしていた。またそれも小さい子供を抱えている母親に。その母親も報道陣に対して不機嫌そうな顔をしていた。今何が起きているのか国民も知りたいだろう。けれども熊本では地震がまだ起きている状態である。その中で怯えながらいるというのに報道陣はそれでも被災者にマイクを向ける。この行動はどうだろうか。現場に行く記者というのは、被災者に対する配慮も必要だし防災の知識も持つて行くべきだと思う。

（6）地震情報

私が小学6年の時に東北で地震が起きた時も観ていたテレビがいきなり、ほぼ全部のテレビ局が東北で起きた地震に関する報道を流していた。その時は前にも話したように「なんで全部ニュースにするんよ！」って思っていたけれど今になっては、現地は今いったいどうなっているのだろうと情報がほしくなった。これも環境防災科に入って常に防災と向き合っているから災害に対して敏感になったのだなと思った。

6 鳥取地震

（1）地震が発生したとき

それは、10月21日、五時間目の古典の時だった。私は眠いなとか思いながら授業を聞いていた。いつもの日常だった。そして聞き覚えのない音が誰かの携帯から鳴った。「えっ？なに？」と思った瞬間、自分の座っている椅子が揺れ始めた。「地震や！」と思った私は机に潜ろうか、と考えた。しかし、「いや、すぐに揺れは収まる。」と思ってそのまま椅子に座っていた。けれど私の思っていたよりも揺れが止まらなかった。そのとき、クラスの誰かが「もぐろ！」と呼びかけ私と授業を受けていた子たちはその声で机の下に潜った。椅子に座っているより床に近いほうが「揺れてる。」って思えた。あとから地震が起きた時の行動を振り返ってみた。さしぼりに感じた地震だったために行動が遅かった。やはり揺れた瞬間は「大丈夫、すぐ収まる。」と思ってしまった。環境防災科の授業で災害が起きたあと、「大丈夫。」って思ってしまうことがある。というのを学習していた。まさにこれだな、と思った。授業だけだと、「地震が起きてもすぐ行動できるだろう、今まで防災の勉強はしてきたし。」って思ってしまうところがある。このことから授業ではわかって学習しているつもりでも実際に起きた時、行動できない、と思った。

過去の経験があるからこそ、11月22日に起きた福島県沖地震で東日本大震災を経験があったために津波の警報が発令された途端に多くの人が高台へ避難することができた。

7 これからの災害

（1）過去の災害から

30年以内に来るだろうと言われている「南海トラフ地震」。この地震が来ると言われていたときに「東北地方太平洋沖地震」が起きて「津波」が東北地方を襲った。東日本大震災が起こる前に私は母に自分の家には津波が来ないかしつこく聞いていた。自分自身でも海から自分の家まではどのくらい距離があるのだろうか、とか海から自分の家まで坂はどのくらいあるだろうか、など考えていることがあった。そうしていると東北に津波が押し寄せた。もしも地域の人が地震＝津波というのが咄嗟に判断できたらすぐに高台に上って多くの命が救われていたかもしれない。地域の人もしうだが情報を伝える側も直下型なのか、海溝型なのか分かっていれば早めに避難することができた。そして情報を得る技術にも目を向けるべきだ。甚大な被害だ→防災力が欠けていたのが悪い。そういうことではなくて日本中の問題点になるだろう。

8 環境防災科に入ったきっかけ

受験生となった中学3年のとき、4月の時点ではまだ行きたいと思えるような高校が見つかっていなかった。そんな私に父が「環境防災科という防災を学んでいる学校がある。」と教えてくれた。元々、防災には興味があったためこの学科を気にかけるようになった。夏になってオープンハイスクールが始まり環境防災科も含め4校ほど見学したが環境防災科が1番自分に合っているなと思った。環境防災科のオープンハイスクールに行って意味のある進学になりそうだ、と思ったからだ。私はただ普通に勉強ばかりする高校は嫌だと思っていた。環境防災科は将来、知識として学べることもあるだろうし防災を得て何も損することはないと思った。

9 環境防災科に入って

環境防災科ではただ「災害」というところだけではなく災害があつてからそのあとのこと、心理的なことも学ぶことができた。また自然災害だけでなく、人為的災害にも触れて学んだ。人為的災害の授業内容で一番印象深いのは「JR尼崎脱線事故」についての授業だ。環境防災科では結構、専門的に防災について学べたとおもう。ただ椅子に座って学ぶだけではなく実際に見学や体験をすることもできた。また、ボランテ

ィア活動にも参加することができた。環境防災科のオープンハイスクールでは部活に入ればボランティア活動に参加できないと言われていたがボランティア活動に参加できた。私はボランティア活動をして一番印象深かったのは「防災運動会」だ。これは海外の人と一緒に防災を学びながら体を動かすものだ。身近にあるもので作れる防災グッズをだれが一番早くそして、きれいに作れるかを競ったゲームをした。私は新聞スリッパというものを作った。ほかには豚汁を海外の人と食べて話したりした。このボランティアでは海外の方との交流の仕方や海外の防災はどのようなものなのか知ることができた。こうして学校での防災の授業やボランティアに参加して「防災」を学んだ私たちが過去の災害を風化させないために語り継いでいかなければならない。

祖母の被災体験から

坂恵 遼介

1 最初に

僕は阪神淡路大震災を経験していなかったので、阪神淡路大震災のことを語り継ぐなら、実際に経験した祖母がいいと思って話を聞きに行った。

当時、59歳だった祖母はピーコックというスーパーのパートで働きながら、母の姉と二人で南多聞台の5階建ての公団住宅の最上階に住んでいた。

2 震災の前夜から震災の直後

(1) 震災の前夜

祖母は震災の前夜ニュースを見ていて、そのニュースで大阪湾に震度1の地震が起きたというのを見た。大阪湾に地震なんて不思議だなあと思った。少し気になったが、明日は火曜日でパートのお仕事は休みだからゆっくり寝ようと思って寝たそう。

(2) 震災の朝

5時46分ドーンと下から突き上げるような音と同時にガーッと激しい横揺れに襲われた。そのとき、母の姉が「えらいことや！」と叫んだ。そのとき祖母も「わけわからん。どないなっとんや」と言ったのを覚えているらしい。そのとき、母の姉が、地震の揺れで立ってられない状況だったが、地面を這いつくばりながら手すりを使いながら何とかして玄関のドアを開けに行った。

揺れが収まって周りを見渡してみると悲惨な光景だった。台所はぐちゃぐちゃ、食器棚は倒れ、茶わんやコップが全部割れた。テレビは、窓のそばに置いていて、地震の揺れでテレビが窓にぶつかり窓は割れてそのまま外に投げ捨てられるかと思いきや跳ね返ってきたそう。祖母はテレビのそばに寝ていてかなり危ない位置だったが、偶然体のどこにも当たりはしなかった。そしてタンスだ。タンスは倒れなかった。グーッと位置が移動していただけだった。なぜかという地震の揺れはタンスに対して前後の揺れではなく左右の揺れだったので大丈夫だったそう。

母の姉と一部屋ずつ声をかけに行き生存を確認しに行った。そのときほかのお宅のドアは全部開かなかった。地震の揺れでドア付近がゆがんでしまい、ドアが固まってしまったからだ。だから、ドアをバンバンと叩いて声をかけていった。幸い誰も死亡者はおらず、外にでてその公団住宅の広場でその日一日を過ごしたそう。

(3) 電話

震災直後、京都に住んでいる祖母の弟から電話が来てその一瞬だけつながった。

「姉さん大丈夫か？テレビで三宮が大変なことになったけど姉さんとはどうなんや？」

祖母が、大丈夫やと言って電話を切ったそう。そのあと電話はつながらなくなった。

3 次の日からのこと

(1) 祖母のこと

次の日余震に耐えながら、家の掃除をしに来た。飛び散ったガラスや食器を片づけているとき祖母が食器の破片を踏んで5cmぐらい足を切った。血が止まらなかった。病院に行こうということになり、病院に行ったが診察を受けずに帰った。なぜなら、そこには自分よりもっとひどいけがをしている人がたくさんいて、このぐらいの傷で医者の手を煩わせてはいけないと思ったからだ。祖母は人に気を使う性格をしているので余計に悪いなと思ったに違いない。その傷は1か月で治ったがその傷跡は今も残っている。

祖母と母の姉は西舞子小学校で1週間避難生活を送った。昼間は自分の家において掃除や片づけをして、夜になり、寝るときだけ避難所に行くという生活だったそう。真冬の1月だから夜寝るときは本当に寒かったそう。皆毛布を家から持参していたので、祖母と母の姉も家から毛布を持ってきた。それでも寒さがひどくなかなか寝付けなかった。それに気づいた小学校の先生が2枚だけ毛布が残っていたので1枚もらったそう。その毛布は備蓄している黄土色の毛布ではなくて他府県から寄付していただいた毛布だ。現在のように大量に備蓄をしているところはどこにもなかった。だから配られるものはすべて寄付かボランティア

のものだった。避難所では、基本静かな様子でワイワイした雰囲気もなかった。パニックもなく、皆布団で陣取りをしていた。体育で使うマットを敷布団の代わりにしている人もいた。祖母らは段ボールを敷布団の代わりにして寝たそうだ。そこでは、24時間テレビがついていた。それはいち早く情報をキャッチするためだ。でも正直テレビは消してほしかった。テレビがついているとストレスがたまっていくからだ。避難所には水がなかった。明石は水が通っているという情報があったので明石まで石油を入れるタンクをもって水をいれにいった。交通手段も特になかったので徒歩で行った。なぜその明石に水が通っているという情報が耳に入ったのかというと、避難所で会話をしている人たちの声が聞こえてきて、またその情報を隣の人に伝えることによって、その情報はうわさとなり、体育館にいる人たちのほとんどが共通理解していた。ということは体育館にいる人たちが皆その水道に向かうことになり、行列を並ばなくてはいけないので、噂が耳に入ったらすぐに行動に移したそうだ。運動場では体育館に入れなかった人たちが車中泊をしていた。聞かなかったかもしれないがそのときエコノミー症候群はなかった。道が瓦礫などで通れずボランティアに来る人は遠回りをしながら避難所まで来た。ボランティアは来てくれたが炊き出しはなかった。今問題となっている熊本地震ではボランティアがものすごく活躍しているけど、当時、あまりボランティアは来ていなかった。マスコミもほとんど来なかったそうだ。自衛隊、警察は今みたいに活動を活発にしていなかった。消防だけが救出活動や消火活動夜の見回りをしていた。

祖母は近所のスーパーでパートをしていた。震災が起きてからはほぼ毎日スーパーの片づけをしに行っていた。そこでは、イオン水をためているタンクがあって毎日パンパンにあったのでそれを分けてもらい持って帰っていたそうだ。スーパーにはお茶や水、ジュースなどがありそれもらってきたそうだ。そしてガスが通るまでは、電気釜やホットプレートでスーパーで買ってご飯を食べた。

一週間がたって片づけが大体終わってスーパーが落ち着き始めたころに、ラーメンや、缶詰、水、お茶、お米などを安い値段で売り始めた。一週間がたつまでは店も片付いていないし、どれを売りに出すかも定まっていない状態だったので商品を売れなかった。でも新しい商品は入ってこなかった。なぜなら交通手段がないからだ。でも20日ぐらいたちようやく給水車が水を持ってきてくれた。

洗濯はどうしたかという夜中1、2時誰もいない時間帯に行った。なぜなら昼間は皆が水を欲していて、飲む水もどうしようかといった状態だったからだ。

次に風呂の問題だ。風呂には震災が起きてからあまり行けていなかった。もちろん近くに風呂場があるわけではなかったので、髪も傷んでいった。そこで祖母の明石にいる友達が駆け付けてくれて明石に温泉があることを知らせてくれてそしてお風呂マップというものを作ってくれた。そこには5件ぐらい温泉が載っていた。それのおかげで3日に1回バスに乗って行列並んで温泉に入りに行った。温泉に入るととてもリラックスできてストレスがすっととれた。明石にしか行かなかったのには理由があって、というより行けなかったのだ。東方面はJRが止まっていて行くに行けなかったのだ。つまり交通手段がなかったからだ。

(2) 長田の火事で

長田の火事でたくさんの方が亡くなったことはテレビを見て知った。亡くなった人は多くが圧死だった。火事を止めようと消防士が駆け付けてきたけど水が出なくて、最初は海から水を引いて消火しようとしたけどホースの距離が足りず届かなかった。助けられる命を助けられなくて消防士さんたちは悔やんでも悔やみきれなかったというのを後日テレビで見た。

その長田の火事ででた灰が西舞子まで降ってきた。黒い煙が覆いかぶさるような感じだった。車の窓を指でなぞると指が黒くなるくらいだ。その灰がどれほどの規模の火災かを物語っている。

(3) 祖母の弟との連絡

テレビを見て電話をかけてくれた祖母の弟との連絡は最初の一回だけでそれからは当分連絡が取れない状態だった。公衆電話に10円玉をたくさん持っていき行列を並んだけれどつながらず、市外に行きたいと伝えたかったがそれができなかった。

弟は何度もコンタクトを取ろうとして、車で行こうとしたけど道がふさがっていたりして来られなかった。そしてやっと電話がつながって弟が「なにか送ろうか」と言い祖母が「大丈夫」という声が聞けて弟はとても安心したそうだ。

(4) 現在のこと

祖母は今普通に生活しているが、トラウマが残っていて震度1でもわかるそうだ。そのたび記憶を思い出して、怖い思いをするそうだ。

4 感想

(1) 現状

まず率直に思ったのは本当にすごいなと思った。祖母は毎日なにか行動をしていつも自分の家の片づけや、スーパーの掃除をしていたけど、もし自分が祖母の立場で震災を経験していたとしたら自分も同じように行動できるかと言われたらあまり自信がない。自分の気持ちが整理できず、ぼーっとしてしまう気がする。

(2) 地域住民や交友関係の大切さ

祖母の話でも出てくるように、地域住民の方や交友関係などがとても重要となってくる。

まず、公団住宅で揺れのあと安否確認をして回ったこと。これは日ごろからあいさつなどを交わして顔見知りだったからこそとった行動だと思う。最近隣の家の人の顔も知らないということが多々ある。その場合、顔も知らないということは他人だ。自分が大変な時に他人を助けようとする確率は少ない。これは非常に危険なことであり、助ける命も助からなくなってしまう可能性がある。だから地域住民とのかかわりは大切だ。

次に交友関係だ。祖母は明石に住んでいた友にお風呂マップを作ってもらえたおかげで避難生活中もお風呂に入ることができた。決して浅い関係ではなく、困ったときに必ず助けてくれる強い絆を作ることが大切だ。

(3) 必ず起こる南海トラフ巨大地震に対して

これから30年以内に必ず起こるとされている南海トラフ巨大地震に対して僕たちはどのような行動をとるべきなのだろうか。まずしてはいけないことを挙げてみる。まず一つ目は、何もしないことである。環境防災科にいて災害についてよく勉強している私たちが何も行動せずただただ南海トラフ巨大地震を待つだけなど絶対にしてはいけないことだと思う。勉強したことを生かすことで人の命が救われたかもしれないのなら私たちにはその命を救おうとする義務がある。次にしてはいけないこと、それは間違った情報を相手に伝えることである。自分が勉強不足のためにあいまいなところがあり自分のなかで整理がつかず最終的に想像で相手に話してしまうことは最悪である。もしあいまいな部分があるならしっかり勉強しなおして間違っていない情報を相手に伝えるべきだ。そして具体的に何をしなければいけないか、このいつどこに大地震が起こるかわからない時代に対策をすることは必須である。まずは南海トラフというものがどのようなものをできるだけたくさんの人に知ってもらうことから始めないといけない。南海トラフに対して多くの人は名前を聞いただけ、大地震が起こるらしい、など大体の大まかなことは知っている。そこで環境防災科の出番だ。皆ある程度知っているの、そこに説明を加えていくだけでいいのでおそらくあまり難しくはないので多くの人に教えることができる。なぜ簡単かと考えるかという、何も知らない赤ちゃんに言葉を教えるのは難しいが、高校生に漢字を教えることはそれに比べれば格段に簡単になることと一緒にすることだと思う。

次にやらなければいけないことはその教えた情報を実行させることだ。詳しく知ったら対策法も思いつく。例えば、家具を固定することや、非常持ち出し袋などを用意することだ。その自分にできることをやり完璧に準備をする。「備えあれば患いなし」という言葉があるように準備をしておくことはそれだけ大切なことだ。なかでも私が思う一番やっておかなくてはならないことは、避難する場所を決めておくことだ。私の家族は近くの小学校に避難すると決めている。なぜこれがそこまで重要かというと、もし、震災が本当に発生した時に家族がバラバラに逃げたとしたら、私の家族は心配して探しに戻る。それは非常に危険なことだ。てんでんばらばらという言葉もあるが、なるべく一緒にの場所に避難した方がよいと思う。

(4) 自分が大人になった時

私たちが大人になって、災害と向き合っていくときに環境防災科で勉強したことだけを頭にいれて対策するのは少し間違っている。なぜなら時代が流れるにつれて、技術や考え方が必ず進歩するからだ。だからそれらをチェックすることが大切なことであり家族を助けることで欠かせないことだと思う。

次に大切なことは、大人になったときにその職業をどう生かすかだ。環境防災科の生徒がそれぞれどんな職業に就くかはわからない。だがそこで大切なことは防災から離れない。言い方を変えれば防災から逃げないことだ。環境防災科を卒業してみんな進む進路は違うが防災とかかわっていかなくてはならない義務がある。そうしなければ、南海トラフ巨大地震が来た時にもしも後が残るからだ。だから環境防災科の生徒が防災とかかわっていくという義務は、もし災害が来た時のために事前にできる心のケアでもある。

最後に大切なことはやはり家族をなんとしても救うということである。事前準備をしても予想外のことが起こる可能性がある。いままでこういった状況の時にこう対応するなど型にはまっていたものがはまら

なくなる状況が必ずあると思う。そういったときにパニックになって放心状態になるのではなく、無理やり型にはめなくてもいいから助け出すというのが最も重要だ。例えば自分の家が崩れた時に壁に家族が挟まってしまったとき、型にはまった行動をするならば、ジャッキを持ってきて壁を持ち上げる方法があるが、ジャッキを持ってくる時間やそんな余裕は正直言ってない。こういったケースで型にはまっていない行動は近くにある大きな石と木材を使ってこの原理で壁を持ち上げる。つまり、災害時に型にはまった行動、型にはまっていない行動どちらをするにしても臨機応変に行動することが一番大切だ。

（５）今からできること

今からできることは大人になったときに災害時におどおどせず堂々と冷静に判断して行動ができるようになるための準備期間だと思う。だから、そのために一生懸命に勉強して、イメージトレーニングが絶対に大事になってくる。おとなになって自分の子供たちや家族、地域に住んでいる人々を助けることができるようにいまから頑張っていきたい。そしてこの祖母の被災体験を自分が聞いて終わるのではなくて子供ができたとしたらその子たちにも語り継ぎたいと思っている。最後にこれを読んでもらった方にもまた誰かに語り継いでほしい。そうすることによって人が救われるかもしれないからだ。

阪神・淡路大震災を語り継ぐ

坂田 有里亜

1 はじめに

阪神・淡路大震災とは、1995年（平成7年）兵庫県南部地震による大規模地震災害である。

1995年1月17日

5時46分に発生、マグニチュード7.3

死者6434名、行方不明者2名、負傷者4万人以上。

住宅半壊20万以上、住宅全半焼7000以上にのぼる被害をだした。

戦後最大の都市型災害となった。

阪神・淡路大震災から21年。

震災を経験していない私が、母の話を語り継ぐ。

2 実際に阪神・淡路大震災を経験した母の話

当時、母は父と結婚して加古川から神戸にでてきて垂水区の一軒家で二人暮らしていた。

（1）1月17日午前5時46分に忘れられない地震がおこった。

その日は、仕事が休みだったので前日の深夜まで映画を見ていたら深夜にもかかわらず、犬の鳴き声がうるさく何度か窓をあけて外を何度か見た覚えがある。寝ていたとき、突然大きな騒音と揺れを、感じ目をさました。まだ夜が明けきらない早朝だった。幸い、寝室は家具の引き出しが開く程度の被害で済んだが、台所、リビングに行ってみると電子レンジは床に転がり、食器棚のとびらは開き、壊れている食器も多くあった。

“だけどこの時点では、あんなに大きな被害がでているとは思ってもいなかった。”

（2）ライフライン

すぐに、ライフラインの確認を行った。水がでることを確認し、お風呂の浴槽に水をためた。しばらくすると、水も止まってしまい飲み水の確保をすることができなかった。もちろん、ガスや電気も止まっていた。すべてのライフラインが止まってしまったと思った。

“だけどこの時点でも、しばらくすれば復旧するだろう。くらいに思っていた。”

（3）ラジオのニュース

ラジオをつけニュースを聞き唖然となった。長田区の火災、壊れた家の下敷きになり助けをまっている人がいること、何もかもが衝撃だった。初めてのことで、本当に今起こっていることなのだろうかと、疑問に感じるほどのことだった。それと同時に、恐怖がこみ上げてきた。

（4）職場

当時も今務めている耳鼻咽喉科で看護師として働いていた。しばらくしてから、職場がどうなっているのか気になりだした。同僚に電話をしてみたが、つながらない。当時は、携帯電話の普及率も低く、今のようにはラインやメールで安否確認をすることもできなかった。電話がつながるのを待つのみだった。職場が家から近かったので、行ってみることにした。やはり自宅とおなじでライフラインは全てとまっていた。

次に、患者さんのことが気になった。でも、このままでは衛生的にもさまざまな問題があると思い、いつでも診察ができるようにするために片付けを行い休診の張り紙をして家に帰った。何もできない自分が、情けなくなった。

（5）避難

自宅の倒壊はまぬがれたので、学校等への避難はしなかった。だが、まだ余震は続いていた。そんな中、繋がりにくい状況だったのに両親や友人が何度も電話をかけてくれた。本当に感謝でいっぱいだった。

（6）地震発生から数日

地震発生の次の日から、水の心配、食料の心配、お風呂の心配、さまざまなことが待ちわびていた。近くの小学校で水が出ると聞き何時間も近くの小学校で水を待っていたこともあった。冬とはいえ、お風呂にも入りたく、何時間待っても人数制限があり無理だったため加古川の実家に夫とお風呂に入らせてもらいに行ったりもした。久しぶりのお風呂はすごく気持ちよかった。今までどれだけ便利ななかで生活をしていたた

んだらうと、あたりまえに思っていたことを、ありがたいと感じるきっかけになった。また、全国からたくさんのボランティアの人が来てくれた。その人たちから、勇気をもらい立ち直る励みにもなった。

(7) 阪神・淡路大震災を振り返り

自分よりも、被害にあい、大切な家族を亡くされた方も多く自然災害とはいえ防ぐことができなかったことはとても悔しいし、悲しいことだ。神戸には、地震が来ない。と私も含め多くの人がおもっていたこと、知識がなかったことが、この被害を招いたと思っている。阪神・淡路大震災をきっかけに、神戸では、色々なことが変わった。私たちの世代ではあまり学ばなかった自然災害のことを小学校や中学校、高校で自分の娘が、学んでいるのをみて阪神・淡路大震災は教訓として受け継がれているように感じた。風化を防ぎ、同じことが起こっても同じ被害がでることがないようになればと思っている。

3 母の話を聞き思ったこと

地震が発生した初めのころは、そんなに大きな被害がでていたと思わなかった。とか、しばらくすれば復旧するだろう。くらいに思っていたと聞いて私は少し驚いた。幸い、私の母が住んでいた垂水区は被害も少なかったが、神戸に住んでいる多くの（母も含めた）人が、まず神戸に地震はこないだろうと、考えていたからなのではないかと思った。もし、垂水区でも大きな被害がでていたら、地震についてあまり知識のなかった母は助かっていたのだろうか？と考えると不安に感じた。もし、母か父のどちらかでも亡くなっていたら、私はまず生まれていない。誰かの死は、その周りの人やさまざまな人の運命を変えてしまう。だから、防災において正しい知識があるか、ないかでは災害に生き残るうえでとても大切になってくる。私は、母と違い実際に自分が大きな地震を体験したことはないが震度3などの揺れにも恐怖を感じたりする。1度大きな地震が神戸を襲ったからといってもう2度と来ないというわけでは決してない。環境防災科で学んでいることを母に伝え、非常用持ち出し袋の用意をする、寝室に倒れてきそうなものを置かないといった備えを行うことが“もしも”のときに自分の命、そして家族の命を守ることになると思う。防災について母は、実際に阪神・淡路大震災を経験している分、前向きである。私達が、普段の生活で当たり前に使っているガスや、電気、水道などのライフラインが突然使えなくなったり、水をくむのに何時間もならんだり、お風呂に何日も入れなかったりといった話は、授業でさまざまな外部講師の方がお話してくれたので知っていたけど、それを私の母が体験していて聞く機会はなかったので今回の「語り継ぐ」を書くにあたって母から聞いたことはとてもいい機会になったと感じた。また、ボランティアについて母が立ち直る励みにもなったと話しているのを聞いてさまざまな人の助けが心の支援にもなると改めて感じた。災害が起こると、日本全国で募金活動が行われたり、現地でボランティア活動が行われたりとみんなが力をあわせる。それだけでも被災者のためになる。そして私も被災者の力になれるようにボランティア活動を行いたいと思った。

4 卒業してから

私は、将来看護師になりたいと考えている。卒業後は大学で、4年間看護学部で学び正看護師になるのが目標である。また、看護師になったら30年以内にほとんどの確率で起こるといわれている南海トラフ地震で、高校で培った防災の知識と大学で勉強した看護の知識の両方をつかって地域に貢献したいと考えている。これは、私が看護師になりたいと改めて思った「熊本ボランティア」がきっかけである。防災の事を学びわたし達よりたくさんの知識をもっている環境防災科の先生達なのに、ボランティアセンターから振り当てられた仕事は私たちと同じでトイレ掃除などの単純なものが多かった。このことから、ふだんから防災について学んでいても資格がなければ災害時に生かすことができないように感じたのだ。トイレ掃除が悪いとか言っているわけではないが、心のケアや車中泊の危険性なども学んでいるため、その知識をいかせたのではないのか？と思った。しかし看護師の資格があると、資格を記載することで(ボランティアセンターで)避難所でも災害時にできることが掃除だけでなく衛生面の事など、さまざまな方向に広がると思う。防災で学んだことも生かした呼びかけなどを行えるようになりたい。

また、日ごろの生活の中でもたくさんの人と関わりをもって、地域との交流を深めて災害に強い街づくりをしたいと思う。そして、最初にも述べたように環境防災科で学んだ防災についての知識と、プラスαで自分の決めた進路で培ったことを活かして市民のリーダーになれるように頑張りたい。

5 阪神・淡路大震災を風化させないために

阪神・淡路大震災から、今年で22年目を迎えようとしている。震災を経験していない世代が増えていくなかで、風化しないためにどうやって語り継いでいかなければならないのか。母は、家族や友人を失くさなかったが、阪神・淡路大震災によって自分の大切な人を、失くし思い出すこともつらい人は少なくないだろう。今回の「語り継ぐ」を書くにあたって先生が「真剣に聞いたら真剣に答えてくれるはず」といていた。聞く側の姿勢が大切だと感じた。話すことで心のケアにもつながる。語ってもらうことで経験していない私も知ることができた。母から私に、そして私から子供にとつなげていくことで阪神・淡路大震災をいつまでも教訓として“わすれない”ことになると思った。そして、神戸だけでなく日本中の人にもっと実際の出来事を伝えて防災の意識を持ってもらわないといけないと感じる。先日起こった2016年(平成28年)熊本地震でも最初はメディアも多くとりあげていたが、どんどん報道が減っている。そういったことで、世間の関心は薄れて風化につながると私は思う。阪神・淡路大震災の事も、1月17日が近づいてきたらニュースなどで見かけるがそれ以外は、ほとんど報道されていない。ニュースや、新聞でも年々、阪神・淡路大震災の1月17日が近づいてきたときの報道も減っている。これが風化なのではと不安を感じる。私たちは、良くも悪くもメディアの影響を1番うけている。だから、もっと災害についての報道を増やすことで風化は防げるのではないかと思う。

経験を語り継いでいく必要がある。一人でも多くの人々の命が助かる未来のために。

神戸に住んでいる、わたし達は阪神・淡路大震災を忘れてはいけない。

忘れてはいけない

阪本 溪童

1 はじめに

1995年1月17日に阪神・淡路大震災が発生した。この震災によって多くの尊い命が奪われ、多くの人の日常も奪われた。

現在17歳である私は、当然のことであるが経験していない。そのため、当時の状況は残されたデータや映像、写真、被災された方の体験談でしか知らない。しかし、震災を体験していないからといって阪神・淡路大震災を忘れてはいけない。私たちの次の世代へと語り継いでいかななくてはならないのだ。そのために、母と父が体験したことを綴っていこうと思う。

2 母の話

(1) 地震発生の前日

母は地震発生の前の日である、1月16日は普段となんら変わらない生活を送った。朝5時に起床し、父の弁当を作り始める。それが終われば掃除洗濯を始め6時にになれば寝ている父を起こす。そして仕事に行く父を見送った後、自分も仕事場へと向かったのだった。

「本当に普段と変わらない朝で、前兆としてよく耳にする動物の騒がしさなども一切感じなかった。」と後に母は語る。唯一普段と違うこと、といえば揚げ物嫌いな母が夕食のために調理をしたということだった。翌日の17日が一生忘れられない日になろうとは、思いもしなかったようである。

(2) 地震発生

1月17日の朝も普段と変わらない朝だった。いつものように5時に起床しゆっくりと父の弁当の準備を始めた。

5時46分兵庫県南部地震が発生した。突然の縦揺れが卵焼きを調理中の母を襲う。地震に遭遇した母は自分でも意外なほど冷静だったようで、すぐにコンロのスイッチをオフにし、近くで焚いていた石油ストーブも消した。母はその後、台所で頭を守るようにうずくまって揺れが収まるのを待った。すると寝室で寝ていた父が飛び起きてきて「ケガしてないか」と叫んだ。母が頷いたのを確認した父は、うずくまる母を庇うように身を寄せた。父と母は身を寄せ合いながら揺れが治まるのをひたすら待った。後のデータで見れば、揺れた時間は数十秒という短い時間であったが、体感ではそれ以上に長く感じたそう。

揺れている間、母は家具が倒れていくのを見るたびに「うわー」と言った。まず、はじめに倒れてきたのは食器だった。食器棚自体は倒れなかったが、揺れによって戸が開き、お気に入りの食器たちが次々と無惨な姿へと変わっていった。食器が割れていくのを見てみると、何かが落下し液状のモノが漏れ出ている音が聞こえた。油である。前日に揚げ物をした残り油が、容器ごとコンロから落ちたのである。母はこの時の体験を「前日に揚げ物をした自分を心底恨んだ」と語った。その後も揺れが続き、冷蔵庫が傾くなど多くの被害が出たが、両親は共にケガ一つせずに済んだ。

(3) 揺れがおさまってから

揺れが治まった後、父と母は一旦外に出ようと試みたが、割れた窓ガラスの破片が散乱していたため出ることができなかった。当時両親が住んでいたのは4階建ての団地だった。さらに、その4階に住んでいたためバルコニーから飛び降りることもできないでいた。そのとき外では、同じ団地の住民が集まり互いの無事を確認していたようで、降りてこない両親を心配した隣人がすぐに助けに向かっていたのだ。その後隣人によって両親は助け出され、とにかく素足は危険ということで靴を取ってもらい、両親は外にでたのだった。

少し落ち着いた母はすぐに自分の家族と連絡を取った。回線は繋がりにくかったが、運よく繋がったため、安否確認はスムーズにできたのだった。母の親戚の多くは鷹取に住んでいたが、被害が大きかった地区には住んでいなかったため、被害は家の半壊にも至らなかった。しかし余震による建物の倒壊が心配されたため、避難所に避難をすることになっていた。母はこれを聞いて心底ほっとした。

当時母の住んでいた場所は舞子高校の近くにある団地だった。皆が知っているように、このあたりの地区は被害がとてもしなかった。そのようなこともあり、父と母は話し合いの末、避難所に避難せずに自宅で待機することにしたのだった。

(4) 余震が続く中で

本震が去り安否確認ができた父と母は、地震により無惨な光景となった部屋の片づけを開始した。地震が発生してから3時間ほどたった午前9時頃のことである。もちろん電気、ガス、水道のライフラインは全て止まっていた。当時から両親は残り湯洗濯をしていたため生活用水の心配はなかった。飲料水も普段からケース単位で購入、食料もそれなりにあったため、5日間程度なら生活できる量だった。地震発生直後、両親が心配だったのはガスが止まってしまったことだった。キャンプ道具のガスコンロはあったが燃料には限りがある。それに加えガス復旧のめどが立っていなかったのだ。しかし、地震発生直後のため殆どのお店が営業を停止し、必要なものの調達ができないなかで、備蓄があるというのは精神的な助けになったのだった。

両親がまず始めたのは床掃除だった。揺れによって食器棚から落ちた食器は全て割れていた。おおよそ所持していた食器の6割が割れていた。その他には、花を生けていたガラス瓶や、陶器製の家具も固定していなかったため床に落下し、割れて散らばっていたのだった。しばらく床の掃除をしていると、母は石油ストーブの燃料を入れるタンクが、カーテンの近くで転がっているのを発見した。激しい縦揺れによってタンクが、ストッパーを突き破り飛んで行ったのだ。「石油が漏れてなかったら良いな…」そう思ってタンクを拾い上げてみると、近くににあったカーテンが焦げていたのだ。母はその時初めて、災害に見舞われたという実感が湧いたのだ。「地震は確かに怖かったが両親は共に無傷だった。さらに親戚も皆ケガが無かったため、どこか樂觀視している自分がいた。」と母は語った。結局、地震が発生した17日は家の清掃に全てを費やしたのだった。清掃中にも余震は頻繁に発生した。最初は少しの揺れでも母は恐怖を覚えたが、12時を回ったころにそのあまりにも多すぎる頻度によって、余震に対して慣れてしまったそうだ。

3 父の話

(1) 地震発生前後

私の父の職業は公務員だ。ごみステーションに置かれたごみを、収集車で集め町を清潔に保つという作業を担当している。阪神・淡路大震災発生時、父が配属されていた事業所は被害の中心地にあった。父は、阪神・淡路大震災が発生する前、いつも通り午前6時に起こしてくれるように母に頼み、寝床についたのだった。

地震が発生した1月17日は前述したように家の掃除に費やした父だったが、2日後の19日には仕事場へと復帰した。当時父が配属していた事業所には、100数人余りが在籍していたが、地震発生から数日で復帰できた人数は20人ほどしかいなかった。父はすぐに街の清掃活動に取り組んだ。普段と変わらない街のゴミを収集するという仕事内容だった。しかしいつもと違うのは、そのゴミが家庭から出されるゴミではなく、建物の瓦礫ということだった。

父はその光景を今でも鮮明に覚えているという。普段ゴミを取りに回っていた住宅街が火災により無くなっていたのだ。残っているのは電柱のみで、いつもなら住宅に阻まれて見えない何キロも先にある風景が、ぼんやりと見えるのだった。事業所から少し離れたところにある住宅地一体は焼け野原となり、その姿は映画で見る戦後の街並みにそっくりだったのだ。父は、その光景に驚きながらもとにかく仕事に没頭した。半壊した家の前に置かれた小さなゴミ、道路に落ちている瓦などのごみ収集車に積めるものは何でも積んだ。積みきれない大きな瓦礫は自衛隊が処理をしていたようだ。

積まれた瓦礫は西区伊川谷町の布施畑環境センターまで運び、埋め立てられた。父の仕事場から布施畑環境センターまでは通常は1時間程度だったが、瓦礫やゴミを捨てる車で道は込み合い片道だけで2～3時間もの時間を要したのだった。その後、これでは仕事にならないという声があがり、被害が大きかった地区には瓦礫の中継所が設置され仕事はスムーズに動くようになった。

(2) 東京からの応援

地震発生から1週間後に、父が所属する事業所に東京の清掃局から20人程度で構成された第1次応援部隊が派遣された。瓦礫の集積場への中継地点は作られたが、それでも道の混雑はあったため何度も往復することができず、一日で回収できる瓦礫やゴミには限界があった。このような時期に東京からの応援部隊が来たことは、神戸の復興への大きな要因の一つとなったのだった。

彼らは、地震発生後に応援部隊として被災地に行くことに自分から名乗りをあげた人の集まりだったため、意欲というものが全然違ったそうだ。「第一部隊の方々は食事、寝床も全て自分たち用意していて驚いた。応援として来てくれた親切な彼らに、お礼の言葉だけで何もしてあげられなかったのを後悔している。」と父は

語った。その後、父の事業所には東京からの応援部隊がさらに2度訪れ、朝から晩まで瓦礫やゴミの回収に尽力してくれたのだった。

4 両親の話を聞いて

私は父と母の体験を、こんなにも詳しく聞いたのは初めてのことであった。母方の親戚に幸いにもケガをした人がいなかったが、母の実家が鷹取駅の周辺だったため、何となく震災時のことを聞くのを躊躇っていた。しかし、母は特に渋ることなく当時の様子を詳細に語ってくれたのだった。母は普段からよく笑う人だったが、震災時の話をするときはいつになく真剣な目をしていたのが印象的だった。それは父にも言えたことで、両親ともに真剣な目と表情だった。私はこのとき、震災は震災から21年たった現在でも経験した人の中で色あせることなく、存在しつづけていることを改めて認識した。それと同時に、今まで自分は阪神・淡路大震災というものをどこか第三者的な目で見ていたと痛感した。

これまで、何度も語り部さんのお話を聞き、当時の写真や資料を見てきた。そのときは決して、自分とは無関係、という意識で見ていたつもりはなかった。しかし、両親の話は自分の中でこれまでにないくらい響いたのだ。このとき、以前外部講師の方がおっしゃった「我がごと意識を持って」という言葉の意味を、私は始めて知ったのだ。自分でも気付けていなかったが、私は「我がごと意識」を持ったつもりでいたのだ。このことを環境防災科の最後の年に気付いたことに恥じる思いもあった。だが、気付けて良かったという思いのほうが大きかった。もし気付かずにこのまま環境防災科を卒業していたら、私は知識のみを高らかに語る空っぽの人間のままだったのだ。両親に話を聞いたのは、今年の3月のことだった。それから学年が上がり防災の授業が本格的に始まったが以前とは違うことを実感できた。言葉にするのが難しいのだが、防災への取り組みや見方が変わったのだ。これらのことを気付かせてくれた環境防災科と両親には感謝の気持ちしかない。

両親の話を聞いて最も印象的だったこと。それは父の話にでてきた東京都清掃局からの応援部隊についてだ。震災などの災害時大きな問題となる町の瓦礫処理。自衛隊を中心に行っているがなかなか思うように進まないというのがどの時代にも言えることだ。そんな中で外部からの支援というのは、被災者であり働く人々にはどれほど心強かっただろうか。第一陣は完全な有志だったそうだ。別に無理をして余震が続く危険な被災地に来なくても誰も責めはしない、にも関わらず20人もの人々が自ら来てくれていたことに、生まれている時代は違っていても1人の神戸市民として素直に嬉しかった。「父の話」のところで書いてはいないが、東京都の清掃局以外にも様々な清掃企業や政府の組織が応援にきてくれていた。それらの中でもとりわけ早く応援に来てくれていた団体の殆どが政府の組織だった。企業である以上善意だけでは被災地の応援はいけない、どうしても利益が絡んでくるからだ。こんなとき行政が清掃局の運営をしていればすぐに動くことができる。防災面を考えると民間企業への委託も、もう少し考えるべきなのでは、という考えも持つようになった。両親との対話で得たことは必ず自分にとってプラスになる。ここで得たことを新たな防災の取り組みに活かして行きたいと思う。

5 私の夢

私の夢は看護師になることだ。きっかけは高校1年生の冬に母が重い病気になったことだ。治療が上手くいき、すっかり元気になった母だが、病気が見つかったときは見ていられないほど落ち込んでいた。そんな母を元気づけたのが担当の看護師の方だった。憔悴しきっている母を、身体的、精神的にも支える看護師の方を見て私は、看護師の道を志すようになったのだ。

環境防災科の三年間で学んだこと、父が携わった避難所の運営状態を聞いて私は、避難所の運営に手助けをしたいと思っている。特に衛生面を改善したいのだ。様々な書籍、授業、体験談を聞いていく内に全ての避難所の衛生状態は良いとは言えないものばかりだということを気づいた。衛生状態が悪いと、精神的ストレスが溜まっていき、脳梗塞、持病の悪化など関連死が非常に増えてしまう。衛生環境の劣化によるストレス障害の例ではないが、関連死が目立った代表的な災害は新潟中越地震だ。新潟中越地震では、車中泊によるエコノミークラス症候群が多発し、関連死が直接死を上回るということがあった。しかし、看護師や保健師の資格をもった者が避難所の運営に携わると衛生状態は劇的に変わるのだ。素人が間違った運営をすると良くないことが起きてしまうのだ。そのため、私は保健師の資格も取得し、衛生環境の保持増進にも携わっていきたい。

私は「直接死」というものには、どうしても防ぐことができないケースがあると思っている。あくまで個人的な意見だ。どうしても助けようのない命がある。だからといって何もしないという選択肢は絶対にあってはならない。しかし、「関連死」はどうだろうか。関連死は専門的な知識を持つものが、迅速な対応をし、啓発活動を行えば救える命はたくさんある。「助かる命が失われる」私はこの現状をなくすことに尽力していきたい。

しかし、私一人では限界がある。環境防災科では、多くの防災の知識と共に、コミュニティや共助の大切さを学んだ。現状、被災地に行って支援を行う「災害支援ナース」は人手不足で悩まされている。先日発生した平成28年熊本地震にも、災害支援ナースは支援のため現地へ向ったが、人手が足りず、避難所運営は素人が行っているため衛生状態の悪化を辿る一方だ。災害支援ナースは、現役で働いている看護師のたった2パーセントしかいないため、人手が足りていないというのは当然のことだ。私は災害支援ナースになり、将来大きな災害が日本を襲った際は、少しでも被災地の復旧・復興の力になりたい。そのために今出来ることを精一杯取り組み、環境防災科でしか体験できないことを大切にしていこうと思う。

6 語り継ぐ

語り継ぐという言葉は環境防災科に入ってすぐ耳にした。その後も外部講師の方の授業、語り部の方や災害と人間、社会環境と防災という授業で頻繁に耳にした。今思うと全てはこの「語り継ぐ」執筆につながっていたようにも思える。語り継ぎたいことは防災を学び、広めていく上で必ず必要なモノだ。講師の方は皆それぞれが語り継ぎたいことを持っていたからあのような素晴らしい授業ができるのだとさえ思う。自分は何を語り継ぎたいのか。入学当初から言われ続けたが、答えが見つかったのはつい最近のことだ。

私が語り継ぎたいこと、それは「阪神・淡路大震災で関わった人に何があって、何をしたのか」だ。これは自分でも非常に抽象的な答えだと思う。何と一口に言っても幅広い。発生直後のことなのか、少し落ち着いて復興へのためにしたことなのか。私は自分が見て、聞いて感じたこと全てを語り継ぎたい。何度も言うように、これまで様々なことを学んだ。阪神・淡路大震災で大切な人を失った苦しみ、被災したからこそ気付いた人の優しさ、被災者の力になろうと奮闘した人の思い。書き表せないほどのモノが「様々なこと」に詰まっている。そのような、人の思いが積みかさなかったモノに語り継がないものがあるのだろうか。

私は当時の出来事が忘れられるのが一番怖い。つまり風化だ。語り継いでいくことの意味は、風化を防ぐことにあると思う。日本は災害大国と呼ばれ、自然災害とは切っても切り離せない関係なのだ。日本で生きていく限り、必ず何らかの自然災害を目にするはずだ。そして、風化を防ぐことは社会の防災力を上げることにつながる。過去の悲惨さを知ることができれば、災害への心構えのようなもので、災害に見舞われたときになんらかの対処ができる。だからこそ、語り継ぐことは大切なのだ。

私は1年生の頃から、環境防災科の授業でならったことを両親に伝えるようにしている。伝え始めた頃は、伝えることに意味は持たず、初めて聞く知識ばかりだから誰かに教えたい。という思いだった。しかし、2年生のときにとある防災の先生からこんな言葉を聞かされた。「授業内容をなぜ伝えるのか、理解してなくても良い。とにかく伝えなさい。いずれ伝えることの意味がわかるから。」私は今までしてきたことに意味はないと思っていたが、先生の言葉で伝えることの意味を探ようになった。そして、防災を学んでいく上で、伝えることの意味を知り、どれほど大切なことなのかを理解した。そこからは、自分が大切だと思った知識は強調して伝えるようになった。

しかし、どれほど伝えてもなかなか思うように防災の知識を覚えてくれない。両親は21年前に阪神・淡路大震災を経験しているにも関わらず、興味や関心はほんの少ししかない。1年生の頃から防災について伝え続け、やっと災害用伝言ダイヤルの活用、非常用持ち出し袋の備蓄をしてくれるようになった。本当は、新潟中越地震では直接死より関連死の方が多かったことや、トイレの重要性という専門的なことを知って欲しい。被災者ですらこの程度だ。では、災害を経験したことが無く、興味も無い世代に過去のことを覚えてもらうのは、どれほど難しいだろうか。過去のことを伝えるのは、知識を身につければ簡単だ。だが、語り継がせるのは本当に難しい。過去のことを如何に今の出来事と受け止めさせ、語り継いで行くのか。自分の持てる知識を活用し、有効な手段を見つけていきたい。また、今大きな目標を見つけて語り継ぎたいことが決まっても、これからの人生を歩んでいく過程で語り継ぎたいことは変わってくるかもしれない。そのときは自分に正直になり、また一から防災を学んで行きたい。自分が社会の防災力を向上させる要因となれるよう、一生防災と関わるという意識をもち、精進していきたい。

母から聞いたこと

庄司 優果

1 はじめに

阪神・淡路大震災は1995年1月17日午前5時46分に起きた、最大震度7の大きな地震だ。中でも、神戸市長田区は大火災に見舞われ広い範囲が焼けてしまった。地震による死者は6434名までにのぼり、たくさんの人が避難所生活を余儀なくされた。

阪神・淡路大震災発生時、母は当時3歳の兄と垂水区にある、私の祖父母の家にはいたそうだった。もちろん私は生まれていない。母が当時の話をしてくれることは何度かあったが、今回のように詳しく聞いたことは一度もなかった。話を聞くことにより環境防災科で学んだこと、感じたことを今後活かしていきたいと強く思い、私たちが語り継ぐことで一人でも多くの人たちに、いつどこで何が起こるかわからないということを強く意識し、生きていかなければならないと感じてほしい。

2 阪神・淡路大震災発生

(1) 地震発生

母は浅い眠りの中で、下から強くドンと突き上げられるような、今までに感じたことのない異常な感覚で目が覚めた。何が起きたのかはわからなかったが、咄嗟に兄の上に覆いかぶさり「大丈夫、お母さんがいるから」と何度も言った。兄も何が起こったのか全くわからなかったが、母の様子がいつもと違うことに驚いていたようだ。どの位布団の中にいたのかわからないほど、長く感じたそうだった。地震だと気付くまでにどれほど時間がかかったのか覚えていない。

1階で寝ている祖父母の事が気になったが、縦揺れと横揺れの大きな揺れが続いていたのでしばらく動くことができなかった。下から「大丈夫か」という祖父母の声が聞こえたので、無事であることが確認でき、大きく深呼吸をしたことを鮮明に覚えている。揺れが収まり母は兄を背負い2階から1階に降りた。1階は2階ほど揺れなかったようだ。祖父母も驚いていたけれど、幸いタンスが倒れたり、食器が割れたりすることはなく、台所もあまり被害はなかった。明け方だが冬なので外はまだ暗く、外の様子はわからなかった。近所の人たちが外に出て話をしていたので、祖父母もその輪の中に入り「みんな大丈夫、けがしてない?」「タンスが倒れたけど大丈夫やで」「食器が割れたけど、大丈夫や」など話をしていた。

近所にもけがをした人はおらず、見える限りでは家が壊れている様子もなかった。

まだ電気、ガス、水道を使うことができていたので、ほかのところで、あんなに大変なことになっているとは思わなかった。

(2) 母の一日

ニュースを見ていたが、情報はあまり得られなかった。電話にかかわる仕事をしていた母は、しばらくして、仕事に行かなければという気持ちが働き通常通り仕事に行く準備を始めていた。通常より忙しくなることは予想できたので休むことは考えなかったようだ。いつも何が起ころうと動じることのない、冷静な母らしいと思った。母の住んでいた地域は地震による被害は比較的少なく、家にいる時はあまり実感がわかなかった。

バス停に向かうと、信号が止まりバスも走っていなかった。母は垂水駅近くの職場まで30分ほどかけて歩いて行った。歩いていると、道路が陥没しているところや隆起しているところ、亀裂が入っているところがあり、その亀裂から煙が出ているところもあったそうだった。そんな様子を目の当たりにし、大変なことが起きていると恐怖を感じた。

職場に着くといつもの時間にもかかわらず、数人しか来ていなかった。いろいろな所から仕事に来ているので、今朝の地震で少し遅れてくるのかなという程度にしか思っていなかった。キャビネットから書類、文具用品、備品などが出てしまい散乱していた。キャビネット自体が倒れているものもあったのでまず片づけから始めた。

来た時からついていたテレビを見ると神戸上空からの映像が映し出されていた。今まで見たことのない火災の様子、倒壊した家屋、泣き叫ぶ人たちの様子。延々と恐ろしい映像が流れている。本当に神戸の街なのかと、信じられなかったようだ。

ニュースは気になるが、仕事を始めなければならない。席に着いたとたんお客様からの電話。鳴り止むことは一切なかった。電話を終えたと思ったらまた電話がかかってくる。その繰り返した。「子供に電話をかけているが繋がらない」「両親の家に電話をかけているが出ない」「呼び出し音は聞こえるが、本当に相手に聞こえているのか」など不安な声ばかりだった。

電話をかければ話しかできる。もし話すことができなくても、留守番電話に録音すれば折り返し連絡があるというのが当たり前なので、本当につながっているのか、相手には聞こえているのかなんて疑ったことがなかった。

しかし、阪神・淡路大震災の時はそうではなかった。家族、知り合いの安否を確認できないもどかしさが怒りとなり、その声、言葉はとても重く悲しいものだった。母は「お役に立てず申し訳ございません」という言葉しか言えなかった。仕事をしている間にもまた大きな地震が起こり、兄、祖父母に何かあったらどうしよう、会えなくなったらどうしようとずっと考え、不安だったせいか、1日がとても長く感じた。その日は夜遅くまで仕事に追われたが、また徒歩で帰宅した。

(3) 街の様子

家でニュースを見ていると、地震発生の数日前、買い物のため降りた阪急三宮駅が今にも崩れそうだ。鉄道高架部分は落ち、線路はまるで針金のように曲がりめくれ上がっていた。橋桁が完全に落ちてしまい、傾いてしまった阪神高速道路から今にも落ちそうになっている大型バス、その下につぶれてしまった多くの車があった。倒壊した家、倒れている電柱、夢ではない。現実に起こっていることだ。

倒壊したビル、今にも倒れそうなビル、散乱した書類、人があふれ活気に満ちていたセンター街は見るも無残な姿になっていた。崩れそうな雑居ビルを通り抜けると生田神社がある。ところがあの大きな拝殿は押しつぶされ地面に直接屋根が乗っているように見える。時間が過ぎ入ってくる被害の状況は目を覆いたくなるものばかりだ。

また、近くの長田区が大きな炎に包まれ、黒い煙がもくもくと立ち上り大変なことになっていた。とんでもない状況で、これからどうなるのだろうと考えると怖くなり不安になった。燃え続ける炎は夜になっても消えることはなかった。燃え続ける家をじっと見つめ、「子供が中にまだいる。さっきまで声が聞こえたけど、今は聞こえへん」そう今にも泣きそうな顔で、つぶやいていた。胸が痛む。

ただ、祖父母の家も周りもあまり被害がなく不自由ながらも生活ができていたので避難所へ行くことはなかった。

家が崩壊し、1階で寝ていた人が下敷きになり亡くなった。家族がみつからない、隣で寝ていた大切な人の上にタンスが倒れて亡くなったなどのニュースを見ると、さすがの母も不安と恐怖に押しつぶされそうになったそうだ。被害は大きくなるばかりで、避難所で生活をする人も増えてきた。ニュースを見ていると、避難所で家族が亡くなり泣いている方の様子が映っていた。天災は誰かのせいでないことはわかっているが、「私のせいで最愛の人が亡くなった」と言っている人や、思った人が受けた心の傷のことと思うと涙が止まらなかった。

ニュースから流れる映像を見て、言葉が出なかった。想像をはるかに超えた状況だった。

公園や学校のグラウンドでパジャマに上着を着ている人、毛布を頭からかぶっている人たちが、言葉もなく立ち竦んでいた。倒壊により家を無くした人、危険だから帰ることができない人、様々な人たちが避難所での生活を余儀なくされている。十分な食べ物、飲み物も無く、ゆっくり休むこともできない。これからどうなるのだろうという不安、再び地震が起きたらどうしようという恐怖、赤ちゃんが泣き叫ぶ声、全く知らない人たちとの生活、積りに積もっていくストレス、マイナス要素しかない避難所生活だ。

3 あれから21年

1月17日、阪神・淡路大震災から21年。「あの時の揺れの感覚は残っていない。」「ニュースから流れていた神戸の街の映像を忘れることはなく、今でも鮮明に頭に残っている。」母は、現在も神戸に住み、毎日大阪まで電車で通勤しているが、電車で通る神戸の町並みは美しくなり、すべてが元通りになっているように見える。また、買い物によく行く三ノ宮も地震の傷跡は残っているようには見えない。ただ、目に見えない傷は生涯消えることはないと思う。今でも、阪神・淡路大震災で大切な人を亡くされた方の心の傷が完全に治ったとは思えない。阪神・淡路大震災が発生してから21年たった今でも毎年1月17日になると朝早くから電車に乗り小さい子供から、お年寄りの方まで三ノ宮の東遊園地に向かう「阪神・淡路大震災1.17のつどい」

で追悼が行われるからだ。竹灯籠の前では涙を流しながら手を合わせている人がテレビに映る。

今までもこれからも阪神・淡路大震災が起きたこと、たくさんの方々が亡くなり、傷ついたこと、そして防災の大切さを忘れず、日々過ごしていきたい。

4 思うこと

私は、母から阪神・淡路大震災の時の様子をここまで詳しく聞いたことはなかった。地震が起きた時すぐに子供を守ろうという姿勢は今でも変わっておらず、小さな揺れでも必ず私のもとへ駆けつけてくれる。母は小さいころから強い人であり動揺したりすることはないが、さすがの母も阪神・淡路大震災の揺れは驚いたと聞き相当揺れたのだと再確認した。また、母の暮らしていた垂水区でも大きな揺れを感じたということは、ほかの地域では想像をはるかに超える揺れを感じただろうと思った。

阪神・淡路大震災で大きなけがもなく無事でいてくれたことに、心から良かったと思う。あの時、母にもしものことがあったら、私が産まれてくることはなかった。つくづく命の大切さを思い知らされる。

学校の授業で地震や津波の話の中で、最愛の妻と娘を亡くした方の話や、目の前で旦那さんが津波に飲み込まれていったという話を聞いた時は必ず、いつ何が起こるのかわからない、当たり前だと思っていることが当たり前ではないということを強く感じる。

朝、いつも通り「行ってらっしゃい」「行ってきます」を交わし、また夜、「おかえり」「ただいま」と交わすそれが当たり前だと思っても、実際その当たり前だと思っていたことが、できなくなってしまった人がいる。

喧嘩をしてしまい、怒って出て行った息子の後ろ姿が最後に見た息子の姿。後悔という言葉ではまとめることができないだろう。「あの時、私が言い返すことなく息子の言葉を真に受けなければ息子は死なずに済んだかもしれない」「喧嘩はしたけれど笑顔で行ってらっしゃいと言えたならば・・・」

災害を体験した人の中には、「あの人が亡くなったのは私のせいだ。」と自分を責め、災害発生前と同じ生活リズムをとれなくなってしまう人がいる。また、自ら命を絶ってしまう人もいる。災害発生から何日たっても、夢にでてきて眠れない人もいる。小さな物音にも敏感に反応してしまう。そのため、神経がほぐれることがなく、ストレスによる病気にかかってしまう。

災害による直接的な大きな被害を受けてない人も含み、たくさんの人に影響が出る。

避難所生活を送る人たちにもさまざまな影響が出る。避難所ではたくさんの人が狭い空間で生活することになる。大きく分けてみても、赤ちゃん、幼児、小学生、中学生、高校生、大学生、普段は働いている人、高齢者。広い年齢層の人が同じ空間で生活するのだとわかる。

赤ちゃんの中には慣れない環境で避難所に響き渡るような大きな声で泣いてしまう子もいるし、泣くことなくおとなしい子もいる。赤ちゃんが泣くということは仕方がないと思っても、ストレスがたまり大きな声を上げてしまう人がいると思う。その大きな声に対し必死に謝るのは母親や父親、新たにストレスが溜まってしまう人がどんどん増えていく。避難所ではこのようにストレスの連鎖が続いていく。それも仕方がないのだ。赤ちゃんが泣いたりするように、大人にも大きなストレスがたまると違いない。

何らかの障害を持っている人もいる。生活には全く支障のない人もいれば、誰かの援助がないと生活できない人もいる。何かの理由で家からずっと出ることができなかった人もいるかもしれない。外に出ることに不安を感じていた人が、いきなり避難所での生活を虐げられるというのはストレス以外の何物でもなく、さらに大きな不安にもつながるだろう。

災害発生により受けたショックにより何10年たってもびくびくしながら生きている人がいるということ。を授業で何度も学んだ。このような不安やストレスを排除するためには、避難所生活を少しでも快適にするためには、どうすればよいのか。避難所内での感染症などの病気の流行を食い止めるための清掃や除菌は、誰がどのようにどの時間帯に行うのかなどを考えていかなければならない。

5 したいこと

私は一生、音楽を続けたいと思っている。歌を続けていく中でたくさんの人に阪神・淡路大震災、東日本大震災、平成28年（2016年）熊本地震、その他の災害や事故があったことを伝え、風化させないための活動をしたい。そこで、私は毎年神戸で開催されている「COMIN' KOBE（カミング神戸）」に出演することを目標としている。

カミング神戸は、中学3年生のときに阪神・淡路大震災を経験した、松原裕さんという方が「神戸からありがとうを伝えよう」「震災を風化させずに伝えよう」「若い世代に音楽を通じて震災を考えるきっかけを作ってもらおう」という気持ちを持ち、始めた日本最大級の無料チャリティーフェスで毎年神戸のバンドを中心に100組以上のアーティストが出演している。

阪神・淡路大震災を風化させず語り継ぎ神戸からの恩返しとして被災地支援を行い、神戸の魅力を伝える事を最大のテーマとしている。また、減災・防災・そして震災からひとりでも多くの方に“気付き”の“きっかけ”を作るということをもうひとつのテーマとして開催している。

カミコベと略され、神戸市以外からもたくさんのお客さんが来る。昨年のCOMIN' KOBEは4万人を動員し、神戸の町おこしにもなり、さらに阪神・淡路大震災の風化を防ぐことに大きくつながっている。

お客さんは、震災を経験したことのない私たちのような若い人も多いので風化を防ぐためにとても効果的だと思う。

また、このフェスには私が尊敬している「踊ってばかりの国」というバンドも出演している。尊敬しているアーティストと同じステージに立ちたいという思いと、神戸で阪神・淡路大震災をきっかけに始まったフェスに出演し、自分も震災の風化を防ぐための力になりたいという気持ちが合わさり、もっと頑張ろうと思える。

カミング神戸だけではなく全国各地でライブを行い、少しでも多くの人に防災を広めたい。

6 歌

“愛しみ”

僕らは明日みんながばらばらになるなんて考えもしない
僕らは明日大切な人と二度と会えなくなるなんて考えもしない
あの人だって昨日までそんなこと考えなかっただろう
ちっぽけなことではなして ちっぽけなことで人を傷つける
今地球上で何人もの人が涙を流しているだろう
その人のところに涙をふきに行きあげてあげるなんて
僕には到底出来っこないから 僕も涙を流す
僕らは明日大切な人と二度と会えなくなるなんて考えもしない
僕らは思いがけない出来事に巻き込まれるなんて考えもしない

“17”

君の声を拾うことは 海からの風を今はどう感じる
いつもの校庭 いつもの教室
何も変わらず終わるはずだった
何を残して 何を奪う
悲しみを笑顔が包むときは来るのだろうか
声が聞こえない姿も見えない
だけど大きな爪痕と足跡
声は届かない けど笑ってる
笑顔は悲しみを包もうとしてる

これは、私が作った曲の歌詞だ。この曲を通してたくさんの人に、当たり前がある日突然途切れてしまうこともあるということを知ってほしい。そのために私は一生音楽を続けたい。

7 最後に

阪神・淡路大震災は私たち一人ひとりが防災・危機管理の意識をしっかり持つことの大切さを教えてくれた。天災を私たち人間の力で止めることはできないけれど、被害を最小限にすることはできるはずだ。そのためにもこの災害を、後世に語り継ぐことが大切だ。防災教育の重要性をたくさんの人に伝え、これからいろんなところで環境防災科で学んだことを活かしたい。

阪神・淡路大震災を知らない僕に出来ること

高木 真

1 あの時と今

(1) 僕と父

僕はあまり家族と話さない。話す話題がなく、話をしたいと思わないからだ。その考え方は僕の家族にも共通している。僕の家族は互いに互いを嫌っている、理由は大体分かっているつもりだ。みんな自己中心的な考え方をしていて協調性がない、幼い頃から家族と真面目な話をしたことがなく、なにげない日常の会話すらあまりしたことがなかった。ほかの家族を見たことがない僕にとって家族とはどういうものか理解しがたい。

映画やドラマでは家族は愛があふれていると訴えかけてくる、逆に愛がなければ暴力的な行動をとり、犯罪に走る描写が多い。僕の家ではそこまで極端ではないがどこか他人に冷たかった。だからこそたまに家族で話す時間が嫌いではなかった、だが会話をしてもすぐに自己中心的になり協調性を持たなくなって喧嘩になる。会話をすることがストレスにつながる、それが普通だと思っている。その上一度機嫌を損ねたらすぐに違うところに逃げたりするのですごく後味が悪い。そのような環境で育ってきたので僕は人と話すときはいつも距離をとるようにしている。特に父と話すときは要注意だ。

父は家では寡黙で真面目な話ならしっかり応えてくれるがなにげない会話（父が考えるしょうもない話）を僕が切り出すとよく怒られた、幼稚園の頃だとなにげない会話を話そうとすることに精いっぱいだったが、そんな子供の無邪気さを父は好きではなかったようだ。

そんな経験もあり僕は人と積極的に会話をするのを避けるようになった。真面目な話は僕が中学3年生の進路を考えるとときぐらいしかした覚えがない。自分のことは自分で考える。それが父から僕に向けた親らしい言葉だった。周りから「なんて無責任な」という声をあびたが、別に僕は父の考え方が嫌ではなかった。自分の道は自分で決める。父は昔からその意識が強く、好きなことに向かって全力で取り組んでいた。そのおかげで国鉄に父は就職した。そのような経験もあり、僕にも好きに生きてほしいという考え方になった。自分のやりたいことや望んでいることを好きな風にやらしてくれた。しかし、常識に反する行動や礼儀が正しくないときは冷たく突き放された。そのおかげで他人を思いやる心を持ち、なにがよくてなにが悪いのかの判断ができるようになった。さらに、自分の事は自分でするという自立心を育んでくれた。だから僕は父に感謝をしている。他人であり一番近い存在、それが僕と父の関係だ。そんな父に阪神・淡路大震災当時の話を聞くのは正直抵抗がある。

(2) あの時の父 その後の対応

1995年1月17日午前5時46分。当時は今と同じ神戸市垂水区に住んでいた。僕の家族はそこで阪神・淡路大震災を経験した。「神戸に地震は来ない」当時はこの考え方が世間に浸透しており僕の父も例外ではなかった。僕の家は5人家族で父、母、6歳上の姉、2歳上の姉、そして僕だ。当然今から21年前には僕は生れておらず、2歳上の姉も生まれていない。

地震が発生した時刻は早朝でありみんなまだ寝ていた。父は揺れた瞬間に僕の6歳上の姉を守るように覆いかぶさりじっと揺れが収まるのを待っていた。揺れている時間はとても長く、何が起きているのか分らなかった。父は揺れたときに不思議な現象を目撃したといった。家の天井にあるごく普通の蛍光灯。それが揺れと同時に紫色に光ったというのだ。なぜ紫色に光ったのかは確認する手段もなく今でも原因は不明であると父はいった。

僕はそれを聞いたとき耳を疑ったが、これが被災者の実際の声だと考えると、改めて阪神・淡路大震災の恐ろしさを感じた。そして、揺れが収まり家の中を見ていると食器が周囲に散乱しておりタンスは倒れ家の中は荒れに荒れた。特に危険だったものはピアノだった。幸いピアノがある部屋では誰も寝ておらず最悪の事態は回避された。家の中の状況を知ろうとしたが、電気がつかなかったので懐中電灯を使用した。父は当時から防災意識や防犯意識が高かった。特に防犯に対する意識が高く家から出るときは必ず鍵をかけることや、護身用に木刀を所持しておくなど様々な防犯対策を施していた。父曰く、自然災害よりも事故や犯罪などの日常災害のほうが恐ろしいと言っていた。それは今も昔も変わらない。

垂水区は震源とは距離があり被害は比較的少ないが建物の多くが一部損壊などの被害を受け、ほとんどの

家にひびが入っていた。僕の家も例外ではなくひびが入り安全とは言い難い状況だった。父曰く次に垂水区に兵庫県南部地震クラスの巨大地震が襲うと、間違いなく多くの家が半壊もしくは全壊するだろうと言っていた。僕もその意見には賛成だ、ご近所の家の外装にところどころひびが目立つ家が多いからだ。

その後父は普段通り会社に出勤した。父は当時から神戸市役所に勤務しており垂水区から中央区まで毎日通勤していた。東に進むにつれだんだんと町の様子がおかしくなり始めたことに焦りを感じ始めた。父の出勤先である神戸市役所は建物の6階部分がまるまるなくなっていることに驚愕した。まさか神戸がここまで被害を受けるとは思っていなかったからだ。これでもかというぐらい壊れた家を見て父が何を感じたのか分らないが、それでも現状に絶望することはなく普段通りの生活をするのが大事だと考え、普段通りの仕事をした。

次に地震が来たら今の家では耐えることは出来ないと判断した父は、すぐに家を建て直すことを決めた。当時の家は瓦があり普通のコンクリートの家が多かったがそれでも被害はあったのでさらに強い家を建てることを決めた。そして出来上がった建物が、現在僕が住んでいる家だ。震度7の地震にも耐えることができ、外壁はプレハブで出来ているので、火にも強い家を作り上げた。さらには、内装にも気を使っている。火災は放火でない限り内部から発生する。そのときに引火性の高いカーテンや内壁に引火すると被害は拡大するという。そこで父は、燃えにくいカーテンを設置し、内壁も燃えない素材にしている。そこに火災報知機を設置することで寝ている時でも危険を察知出来る。その火災報知機は少しの煙でも作動するので、夕飯で焼き料理を作るときはすぐに誤作動してしまう。だが、そのおかげで非常時でも問題なく作動するから安心だと父は言っていた。

(3) 今の父 防災の捉え方は人によってさまざま

今の父は神戸に巨大な地震が来ることはないと考えている。そう考えたほうが楽に生きることができるから。いつ来るかもわからない災害のことを考えたところでどうすることもできない。そう今も考えている。その考え方は家族にも影響を与えている。普段災害のことに関して全く会話をしない僕の家族は他地域で災害が発生した時も「私達には何もできない」「自分が被害にあっているわけじゃないのにいちいちかまってられん」といつていた。僕にはこの家族の反応が普通の反応だと感じた。僕もその家族のなかで育ったからだ。しかし、父はそこまで冷たい考えの人ではない。現在もユニセフとWWF（世界自然保護基金）の会員であり、年間1万円ほどの募金活動を行っている。このことを知ったのは僕が小学校3年生ぐらいのことだ。正直驚いた。かなり冷たい人だと思っていたのに実は多くの人の命や自然環境の保護を間接的にやっている。家の耐震化と耐熱化の件もあり、僕の父に対する認識が間違っていたのではないかと思うように最近なってきた。これらの父の活動は立派な防災活動である。

ユニセフへの募金で、世界の脆弱な地域の何の罪の無い子供たちを少しでも支援をすることで確実に感染症による病気や餓死による被害を減らすことが出来る。ウイルスによる感染症も立派な災害であるし、紛争によって住む場所を失った子供たちに食料を与えることによって免疫力の向上や健康な肉体を作り出すことにより自然災害による被害確実に軽減される。ワクチンの投与によって更なる被害の軽減が可能になる。

WWFへの募金によって自然環境の保全により自然災害発生時のリスクの軽減ができる。さらに絶滅危惧種の保護にもWWFは力を入れている。生物が絶滅すると必ずその地域になんらかの変化が現れる、食物連鎖への影響がもっとも大きいと個人的に考えている。

このように父は見えないところで間接的に防災活動を行っていた。残念ながらそのことに気付いたのは高校生活3年目だった。僕は物事の一面しか見ようとせず、一度見ただけですべて理解していた気になっていた。一見家族を突き放すような父の行動や言葉にも実は裏があるかもしれない。しかし、もしかしたらただのストレス発散かもしれない。僕はいつも後者の考え方で父を見ていたかもしれない。これからはもう少し会話をする機会を増やしてみよう。

話を戻すと、父が防災に興味を持たないのは事実、その影響を受け僕の家族もまた防災に興味が無いのも事実。ならばなぜ父はユニセフやWWFの会員になり、家の建て替えを行ったのか。家の建て替えについてはとても合理的だ。財産、命を守るためには家が強くなってはならない。震災当時、嫌というほど壊れた家を父は見た。そこで父がなにを感じたかは分からないが、きっとやりきれない思いだっただろう。そこでせめて自分の家族だけでも守ろうと思い家の建て替えを行った。口では「家にひびが入ったから」といつていたが、父の真意は分からない。家を強化すれば人的被害を最小限に抑えられる。父は「家を強くしていれば誰も被害にあわない」といつていた。それには僕も賛成だ。世界中に住むすべての人が災害に強い家を建て

たら誰も傷つかない。だがそのようなことは不可能だ。日本のような先進国でさえまだまだ国民全員が裕福というわけではない。だから災害による被害者が出る。父は自分の家族を守るための努力と家族以外の人を守ろうと努力している。そこにはすこしあこがれる。

父は最近仕事で、市内のある学校の敷地内にネットを張る作業を行っていた。犯罪者から子供たちを守るためだ。近年携帯電話の普及によって誰でも簡単にインターネットを利用出来る。もちろん便利な代物だが一方で、どこの誰が見ているかわからない時代になった。それを利用した犯罪が盛んになり、子供の安全を守ることが最優先になる。そのために張ったネットだが父や僕には少し違和感を覚えた。阪神・淡路大震災から地域コミュニティが大切だと言われながら、コミュニティの弱体化が市民によって行われている気がした。このままでは次大きな災害が発生すれば間違いなく神戸は大打撃を受けるだろうと思っている。

2 はじめて父と真剣な話をして

(1) 広い視野

僕は閉鎖的で物事を一つの面でしか物事を捉えようとししない人間だ。その分今までたくさんの人に迷惑をかけてきた。いまさら謝ったところで何も変わることは無い。しかし、そんな僕でも変わることが出来るかも知れないと思うことが最近多い。父に震災当時の記憶を初めて語ってもらって自分の中で整理をするうちに、父の取った一つの行動にも様々な考え方を持つようになった。これが広い視野というものだ。だが、それだけでは物事の真意はつかむことは出来ない。なぜなら、いくら僕が様々な考え方を持ったとしてもそれは所詮僕の中で作り出しているものであり、どうしても認識に相違点が出来てしまう。だが、それでも僕は考え続けることが大切だと学んだ。考え続け、様々な考え方を持つことこそ防災だけでなく幅広い分野で必要だと感じた。つまり、広い視野とは幅広い思考のことであり、幅広い思考を行うためには様々な経験を積むことが必要だ。

(2) 日常にありがとう

僕が今あたりまえのように呼吸が出来ること、朝起きたら誰かにおはようといってもらえること、母にお弁当を作ってもらえることが本当はなによりも大切なことであり、ありがたいことに気がついた。阪神・淡路大震災当時は水も電気もガスも止まり、本当に苦労したと母がいていた。僕は正直それらのライフラインが止まることが想像できない。そして、ライフラインが止まった後の環境でどう生きていく、あるいは対応していくか分からないからだ。「百聞は一見にしかず」とはまさに災害そのものを指している気がする。

近年迫りくる巨大災害に対してよく想定外という言葉が用いられる。つまり、どんな災害でどんな被害が出るかは一度起こらないと分からないということだ。実際に災害による被害者は過去のどの時代を見ても0人ということにはなかった。もしも自然災害が発生することがなくなったとしても、交通事故や犯罪はゼロにすることは出来ない。つまり災害をなくすということは人が人である限り不可能なことだ。

話を戻すと、僕が日常を何の不自由なく過ごせているのは、ここが日本であること、家計がある程度裕福であること、そして両親が阪神・淡路大震災の被害をある程度受けなかったことが大きな理由だ。これら三つの要素の一つでもかけていたら僕はどうなっていたか僕にも分からない。だからこそ、あらためて日常に感謝の気持ちをこめて、ありがとう。

(3) 防災と減災をもう一度考える

防災とは災害を防ぐこと、減災とは災害による被害を減らすこと。これは一年生のときに習ったことだがそもそも災害とは自然現象や人為的原因（事故や事件）によって、人間の社会生活や人命に受ける被害のことを指す。だが僕は災害と聞くと台風や地震といった自然災害を想像する。環境防災科の生徒としてあるまじき行為だと個人的に考えている。災害を一つの考え方で縛りつけており、日常生活で起こりうる事故や事件を災害と認識していない。心の中で事件や事故が起こることは無いと考えているからだ。こういうのを平和ボケというのだろうか。それでもいいというわけではないが、戦争が無い代わりに、人間に本来備わっている危機意識が少しずつ失われてゆくということに不安を感じる。そもそも防災は人が人である限り不可能だ。人間は失敗をする生き物だから事故や事件は防ぐことが出来ない。さらに、自然現象は必ず発生する。確かに災害をゼロにすることが出来ればすごいことだと思うがそこにも必ず問題が発生する。例えば、災害による被害がなくなることで人々の防災意識がなくなる。それは、私達の次の世代にも受け継がれるだろう。しかし、次の世代には次の世代なりの問題がある。よって、災害による被害は永遠になくならない。つまり防災で災害をゼロにするということは人類のもつ理想のゴールである。

それに対して減災とは何か。当然災害による被害を減らすことだが、その裏で犠牲はつき物という考え方がある。僕はその犠牲が人をより強く、たくましく、賢くするものだと考えている。人類の歴史を見れば分かるように、国や社会を形成するには多くの犠牲が伴う。先人達が汗を流し働き、知恵を絞ってより優れた社会を築き、血を流して戦ったおかげで僕たちが今生きていられる。僕たちはもっと祖先に感謝をするべきであり、これからの時代を生き抜くために多くの犠牲を払い前に進まなくてはならない。だからこそ減災こそが人類最大の使命だと考えている。減災で減らすことの出来なかった被害を次にくるときは防ぐようにする。そうしていくことで減災は防災へとつながっていく。そのためにも考えることを放棄してはいけない。僕たち若い世代が考えることを放棄したり、災害の教訓を生かさなかったら、ご先祖様に合わせる顔が無い。

災害を防ぐ防災、災害の被害を減らす減災。どちらも、これからの世界で生きるために必要な考え方だ。今僕たちに大切なことは経験することだ。様々な経験を通して大人になり、つらいことでも乗り越えることの出来る人間になる必要がある。そうして初めて防災、減災に向き合えると思う。

(4) 自助の大切さ

これからの世界は今までと違った災害対策が必要になる。地球温暖化によって引き起こされる異常気象、貧困地域での人口増加。日本国内では地方の過疎化、都市の高齢化、人口は減少し続けている。そんな厳しい条件のなかで僕たちは新しい時代を進まなくてはならない。

自助と共助、大切なほうはどちらか考えてみたことがなかった。どちらも大切だという考え方が道徳的には正しいのではないかと思う。だが、僕は自助のほうが大切だと思う。自分が怪我をすれば共助は出来なくなり、逆に周りの人に迷惑をかけることになる。その分人員を救助に費やすことが出来なくなる、そうすれば、助けられる命も助けられなくなり被害は拡大してしまう。すぐれた集団は個人の能力が高く、団結力が高い。つまり、一人一人が自助を十分に行えば人的被害は格段に下がるということだ。

(5) これからの日本で起こりうる問題

少子高齢化が進むこの日本の都市部が同時に数か所で発生すれば、外国の支援がなければすぐに壊滅するのではないかと心配だ。ただでさえ福祉施設に働き手がおらず、年金の負担額が増え逆に高齢者は年金をもらえる額が減っているというのに、そこに日本での都市の壊滅が加われば、本当にまずい事態になる。

高齢者は災害時に一人で生き残るには厳しい。しかし若者は減り続けている。では誰が高齢者のケアや救助をするのか考えてみた。今の僕には何も思い浮かばない。もちろん若者が働く量を増やせばいいことだが、働く場所がなく、働きたいのに働けない、働いても給料が安いなどといった問題が発生する。経済がうまく回ればすべての問題は解決されるとよく耳にする。しかし、経済はうまく回る気配がない。だからこそ僕たち若い世代がコツコツ努力をするしかない。自分の正しいと思ったことに全力で頑張ることが出来ればきっと日本は素晴らしい国になると思う。

そこで大切なことが過去の教訓を語り継ぐこと。これはすべての道に通じていると感じている。だからこそ僕たちは過去の教訓を真剣に受け止め、社会と向き合っていかなければならない。これからも様々な経験を積み、よりよい社会を作っていきたい。

震災と私

宝田 奈々美

はじめに

私は阪神・淡路大震災の3年後に生まれた。阪神・淡路大震災当時、兵庫区に住んでいた私の母、長田区に住んでいた私の父、そして親戚から聞いた話を書こうと思う。

1 震災の朝

(1) 午前5時46分

阪神・淡路大震災が起こる前日の夜、1月16日の出来事だ。テレビを見ていると、地震速報のテロップが流れた。神戸だけに出る地震速報は珍しかったが、大きな揺れは感じなかったので特に気にはしていなかった。今思い出すと、あの地震はそのあとに待っている大地震の前兆だったのではないだろうか。

そして、1月17日午前5時46分、突然強い揺れを感じた。揺れがおさまると、「大丈夫か!」と祖父(母方の)声が聞こえた。祖父は地震が発生した際、すぐに当時0歳だった私のいとこの上に覆いかぶさった。外が明るくなり、少し落ち着いてから分かったことだが、当時祖父が寝ていた場所には重くて大きなタンスが倒れてきていた。もし、あの時いそこを守るために移動していなかったら・・・と考えると今でも恐ろしい。幸いにも家にいた母、母の姉、母の姉の子ども(私のいとこ)、祖父は大きなけがもなく無事だった。直感的に、「このままでは家が崩れる、逃げなくては。」という思いになった。「お母さんは?」という母の言葉でそこにいた全員が不安に襲われた。祖母は早朝からヤクルト配達の仕事をしていたため、地震発生時家にはいなかったのである。テレビはひっくり返り、食器は全滅だった。食器やガラスが割れた音は聞こえていたが、早朝あたりは暗く、電気は「バチッ」という音と共に消えた。周りがほとんど見えない状態で玄関に懐中電灯を取りに行った。

(2) 地震発生数分後

祖母を探すため、散らばった食器やガラスの破片を避けながら家の外へ出た。一步外に出ると、昨日まで生活していた町とは思えないような光景が広がっていた。斜め前にあった家の煙突は崩れ、神社の鳥居までもがボロボロだった。多くの建物はつぶれ、あらゆるところで火災が発生していた。家の周りの地面は隆起し、近くのマンションの3階部分つぶれていた。少し向こうの商店街が燃えているのが分かった。後から分かったことだが、そこは最も被害が大きかったと言われている御蔵菅原商店街だった。「大丈夫か!」と近所にひたすら呼びかけた。祖母を探しに行こうとしたその時、向こうの方から自転車を押しながら帰ってくる祖母の姿が見え、家族全員の無事を確認することができた。当時ヤクルト配達に行っていた祖母は、外で地震の揺れを感じた。自転車で乗っていると揺れを感じ、とっさに自転車から降り、四つん這いの態勢になった。だんだん揺れは強くなり、地面は波打っていたため、膝を何度も地面にぶつけ、あざだらけになった。

当時長田区に住んでいた父の家は小さな川沿いにある。以前1度崩れたことがあり、連絡の取れなかった母は本当に父が無事なのかと心配だった。父は母と親戚を心配し、すぐに車で兵庫区へ向かった。家に着いたときは、すでに母と親戚は避難所となっていた高校に避難していた。それを知らなかった父は、全員家具の下敷きになっているのではないかと思ったが、玄関が閉まっていたため、偶然開いていたベランダからなんとか家に入った。家の中は、ガラスで足を怪我した母が動き回っていたため、家具も布団も血だらけだった。結局母と親戚には会えず、父は近くの病院まで走った。しかし、そこにもおらず、もう1度家に戻ったときに偶然再会することができた。

2 車中泊

いつ崩れるか分からない家で寝ることが怖く、家の周りでは火災が発生していたため、避難所となっていた高校へ車で行った。しかし、避難所はすでに避難してきた人でいっぱいだった。当時0歳だった私のいとこがいたこともあり、避難所へは入らず、近くに車を止め、車中泊をしながら過ごした。きちんと水分を取り、昼は家の様子を見て片付けをするために体を動かしていたため、エコノミー症候群には誰一人ならなかった。

3 救援物資

(1) 水

水を確保するため、毎日給水車でできる行列に並んだ。しかし、水を入れるポリタンクを少量しか持っていなかったため、水を入れる容器が必要となった。もちろん水やお茶はとっくに売り切れていた。ミルクを作るために何としても水が必要だった。近くの一見きれいな湧き水を沸かしてミルクを作り飲ませていたが、途中でその水には少し塩分が含まれていることが判明した。なおさら水が必要になったため、近くのスーパーで2Lペットボトルのジュースを何本も買い、中身は全て溝に捨てた。「今考えるともったいないと思うけど、ジュースはいらなかった。生きていくためには水が必要。水を確保することで精一杯だった。」

(2) オムツ

日が経つにつれ、水や食べ物といった救援物資は届くようになった。しかし、ベビー用品が届くことはほとんどなかった。家にあったオムツが底をつこうとしていたので、父が車で大阪まで買いに行った。行きは通ることができた道が、帰りには全く通ることができなくなっていたこともたくさんあった。兵庫区から長田区に帰るだけでもかなりの時間がかかることが分かったため、次からは狭い道でも通ることができるバイクを利用した。

(3) お風呂

私の父の実家は、大きな揺れを受けたが、ライフラインの復旧は兵庫区よりも早かった。母の家族と親戚は、父の実家までお風呂に入りに行った。お互いの無事を喜び、協力し合った。今でも、当時0歳だったいとこのことをよく覚えている。他にも、岡山に住んでいた親戚が、必要な物資を兵庫区まで持ってきてくれた。そして2日間何とかして岡山に行き、お風呂に入った。そのとき、余震と悪い空気をなるべく吸わないように、小さかった甥は岡山に残った。

(4) 仕事

少し落ち着くと、仕事に戻らなければならなくなった。しかし、電車やバスは全く動いていなかったため、元町まで歩いて通勤した。他の職場の人と同じ状況で、スーツではなく、両手が使えるようにリュックにジーンズ、スニーカーといった動きやすい服装で通勤していた。

4 震災後

(1) 震災後の暮らし

父も母も「被災者」という結果を受け、新しい家に優先的に入居することができた。現在でも、母方の祖父母と親戚は兵庫区、父方の祖父母は長田区に住んでいる。私の母と父は、新しい入居先を探し、今私が住んでいる学園都市を見つけ、入居した。その時は空気が良い、明るいという理由で学園都市を選んだが、後々、阪神・淡路大震災で揺れは感じたが、あまり被害はなかったところ、ということを知った。

あのとき両親が学園都市を選んでくれてよかったと心の底から思う。なにか有名なものがあるわけでも、目立つものがあるわけでもない。むしろ、一見何もないように見える。しかし、人の温かさは他の地域にも負けていないと思う。毎月1回、各家族の代表が集まり、家の周りの清掃をしている。それだけではなく、普段から近所の人とあいさつや雑談を交わしている。これからもこの繋がりは続いて行ってほしい。

阪神・淡路大震災から3年後に私は生まれた。私が5、6歳の時の長田区には、まだ修理中の建物がいくつかあった。私の記憶にも、「なんであの建物ずっと工事してるん？」と祖父母の家に行く途車の中で聞いたことを覚えている。その時、私が祖父母の家に行く際には必ず通る道にある建物が大きな被害を受けたことを初めて知った。幼かった私には衝撃的だったのだろう。阪神・淡路大震災の話聞く中でもよく覚えていることの1つである。

(2) 両親と阪神・淡路大震災

私の両親は、特に被害の大きかった長田区、兵庫区で被災している。震災から21年が経った今、阪神・淡路大震災で被災した地域の現状がメディアで報道されることはめったにない。しかし、毎年1月17日が近付くと、どのテレビ局も阪神・淡路大震災を振り返ることが多くなる。その時に使われる映像が私の両親がよく知っている長田区の映像である。阪神・淡路大震災の映像が流れると、私の両親は黙ったままその映像を見続ける。その時私は、「どれだけ話を聞いても、被災した人にしか分からないこと、忘れることができないことは多くあるのだろう。」といつも思う。思い出だけでも辛いことだってあるのではないだろうか。しかし、私の両親や親戚は、震災のことについて私や妹が聞くとしっかり教えてくれ、真剣に話をしてくれ

る。そこで聞いた話をしっかりとここに残し、伝えたいと思った。被災した人から実際に話を聞くと、もっと知りたいという思いが強くなった。全員が同じように災害や防災について興味を持つことはかなり難しいだろう。しかし、1人でも多くの人に知ってもらいたいことはたくさんある。どうすれば自分なりに知識や経験を広められるか、ということは私自身のこれからの課題でもあり、世界中の課題でもある。

5 私と阪神・淡路大震災

私は、小学校1年生の道德の授業で初めて阪神・淡路大震災のことを知った。映像の中に見覚えのある長田の町が映り、知っている建物が壊れ、あらゆる場所で火災が発生している状況を見たときの衝撃は今でも忘れられない。日本でこんなに大きな災害が起こったことは信じられなかった、むしろ信じたくなかった。私が阪神・淡路大震災が本当に身近で起こり、家族や親戚に被害を及ぼしたものだとは認識できたのは、6年生になってからである。私が小学6年生のとき、東日本大震災が発生した。いつもと同じように家に帰り、当時小学2年生だった妹と再放送のドラマを見ていた。すると画面が急に切り替わり、ニュースキャスターの慌てた声と津波の映像が放送され始めた。その映像がどんなものだったか、どこの県だったかといったニュースの内容は全く覚えていない。ただ怖いという思いだけが自分の中にあった。母が仕事から帰宅した時もまだ、私と妹が2人で茫然としながらテレビを見ていたという。東日本大震災が起こった後、やっと阪神・淡路大震災が身近で起きた災害だ、自分にもいつ襲ってくるかわからないと思うことができるようになった。そして、災害が怖い、家族とバラバラのときだったらどうしよう、という思いを持った。そして、災害についてもっと知りたい、知っておくことで出来る対策や、家族や友達を守る方法があるのではないかとよく考えるようになった。

6 環境防災科

東日本大震災のニュースや阪神・淡路大震災のことを知るようになると、知りたいという気持ちだけではなく、今まで以上に恐怖を感じるようになった。そして、被災地のために何かできることはないのかと思うようになった。そんなとき、テレビで環境防災科の先輩方が被災地を訪問し、ボランティア活動をしている様子を見た。これが私と環境防災科との出会いである。この学校なら、災害のことを勉強して、ボランティア活動もできる、やりたいことができる場所なのではないかと感じた。昔から知っている人が環境防災科に通っていたので、被災地のこと、ボランティア活動の話をたくさん聞いた。最初は普通科ではない所に行くことを心配していた両親も、私の今やりたいことを理解してくれ、応援してくれるようになった。入学当初は、「災害のことを勉強することで、災害に対しての怖さが少しは無くなるのではないか。」と思っていた。しかし、災害について学べば学ぶほど、たくさんの人に災害や防災について広めたい、という思い以上に「災害が怖い。」と感じるようになった。これは高校1年生の時より、高校3年生になった今のほうが強く感じている。勉強したのに怖いと思うようになってるのはおかしい、と何度も思ったが、たくさんの事を知るからこそ怖いと思うのであり、それは自分自身の災害への思いが強くなったということではないか、と考えられるようになった。災害に大きな恐怖を感じている今でも、少しは災害と向き合うことができるようになったと思う。

環境防災科に入学したことは、私にとって良い選択だったと言える。災害や防災の勉強したことを生かし、災害時だけではなく普段から、誰かのためにできることを探せる人になり、防災を広げていきたい。環境防災科で得たことは防災についてだけではない。先輩や後輩との繋がり、そして何より、3年間共に過ごした仲間がいる。いつも明るく個性が豊かなクラスだ。一人一人の個性が豊かなため、一見バラバラに見えがちだが、やるときはやる、周りを見てみんなのことを思いやることのできる最高の仲間だ。この繋がりは一生続いてほしい、いや、続けていこうと思う。

7 将来の夢

環境防災科に入り、たくさんの経験をする中で夢が見つかった。授業の中で災害時の子どもの様子を知り、子どもと関わり守る仕事に就きたいと思った。地域の夏祭りをはじめとしたボランティア活動を通じて、企画から取り組むことにやりがいを感じるようになった。その2つから、子どもと関わり、子どもたちのために企画を考える児童館の先生になることが私の夢だ。以前、私たちが小学校へ出前授業に行き、災害や防災について授業をさせてもらう機会があった。小学生は、私が思っていた以上に災害のことを知り、新

しく知ることを楽しみ、興味を持ってくれた。災害のことを説明していると、「それこの前授業でやったから知ってる！」と言ってくれたり、クイズを出したときには、「もう1問やって！」と、積極的に授業に参加してくれたことがとても嬉しかった。そして、「災害時にこの子どもたちは自分を守ることができるのか。知らないのであれば、少しでも防災について知ってほしい、知ってもらえる機会を作りたい。」と思った。それから、子どもに防災を広げたいという思いが強くなった。

私は、児童館の企画の中に、災害や防災について楽しみながら学ぶ企画を取り入れ、何よりも災害が身近なものであり、備えが必要だということを少しずつでも広められる存在になりたい。そして子どもたちが学んだことを家に持ち帰り、「今日はこんなことをした！こんなことが必要だって！」と親や周りの人に話すことで、「自分の子どもがこう言っているから備えておかなければ。」と大人の意識も高めることができる。これが子どもたちにもできる防災を広げる活動である。その手助けをすること、今までたくさんの方々から聞かせていただいた話を、次の年代に伝えていくことが私にとっての『語り継ぐ』である。

8 阪神・淡路大震災のことを聞いて

今回、改めて阪神・淡路大震災のことについて聞き、両親や親戚がどんな生活を送っていたのかを知ることができた。今までも震災当時のことを聞く機会があったが、給水車まで毎日何度も水を汲みに行くのが日課になっていたことや、地震発生時に祖父が0歳だった私のいところを守ったこと、その行動が祖父自身を守ったこと、周りのマンションの3階部分は潰れていたけれど、母が住んでいた建物の3階は奇跡的に無事だったこと等、初めて聞く話もたくさんあった。「支援物資が届くようになって、ミルクやおむつといったベビー用品はなかなか届かなかった。」という話を聞いたとき、0歳で被災した私のいところは覚えていないだろうが、毎日を生きることと精一杯だっただろう。

私の両親や親戚は、怪我もほとんどせず、全員が助かった。しかし、話を聞いていると、生きていることが奇跡的だと何度も実感した。そして何よりも驚いたことが、阪神・淡路大震災がきっかけで今住んでいる学園都市に引っ越してきたことだ。ここを選んでいなかったら、友達にも近所の人にも出会えていないかもしれないと思うと、今生きていることに感謝しようという思いが強くなった。

今回聞かせてもらった話は、自分の中だけで隠し持ってしまうのはとてももったいない。自分が聞いた話を伝え、他の人が聞いた話も聞いてみたい。そして、次は私が語る番になり、この話を伝え続けたいと思う。

震災の重さ

武中 大空

1 話すきっかけ

私は、この「語り継ぐ」を書く上で何人かの震災経験者に話をうかがった。父に話を聞いた後の事だった。もう時間も時間なので寝ようと思い、自分の部屋に入り少しテレビをつけてみた時だった。テレビのアナウンサーが「地震です。地震です。」ハッキリとした口調で喋っていた。4月16日1時25分のことだった。次の日の朝、起床しリビングに向かうと父親が「昨日、夜中に地震があったみたいだね」その後、朝食を食べながら父は、「阪神・淡路大震災」について話してくれた。

「あの日の前日は、やけに夕日が赤かった。カラスや猫も騒がしく、その日にとっても小さな揺れが来たのを憶えている。」父の話は、いつもこの言葉が最初だ。

まだ薄暗く、外も静かな時だった。眠っていると大きな揺れと音に目を覚ました。「地震だ」すぐに布団を被り揺れが治まるのを待った。10分以上揺れていた気がしたらしい。揺れが治まるとすぐにヤカンに水を溜め、玄関のドアを開けに行ったそう。地震が起きてしばらくの間、情報を得る方法が無くどこが安全か分からずいたそう。そんな時に電話が鳴った、友人からだ。「もしもし?」「大変や!阪神高速倒れてる!」その言葉に耳を窺った。その時、地震の大きさを理解したそう。それと同時に親族の身の安全に不安を抱いた。その足で父は、私の祖父、祖母の場所へと急いだ。車は無理だろうと思い、いつも車で通っている道を徒歩で行く事にした。歩き始め、街の様子に目を窺った。マンションは倒れ、家も壊れている物もあれば、なんとか原型を保っている物もある。これは家と言えるのだろうか、そんなものもあった。父は祖父祖母の元へ急いだ。

目的地が近づくと家を探した。何度も同じ道をとおりやっと思つて見つけた。1階が2階に押しつぶされる形でペシヤンコになっていたそう。そのためすぐに見つけることができず近くに植わっていた木で確認したそう。家に駆けより2階の窓から中を覗いた。誰もいない。すぐに近くにいたおばあさんが声をかけてきた。「あんた、原田さんの息子か?」「はい、そうです。」「お父さん、むこうで人掘ってるよ!」その言葉に力が抜けた。見に行くと近所の男たちが協力して、ガレキの中から人を救おうとしている。その中に祖父はいた。父はこのような光景を色々な場所で何度も見たそう。そしてもう1つよく見たものがある。それはその場に立ちすくむ女性だ。地震が起きてしばらくの間は、どこの女性もほとんど魂が抜けているようにぼーっとし、「もうあかん・・・」と呟いていたそう。父は言った。「こういう災害とか、あり得ない場面に出会った時、どうしても女性は考えるのが止まってしまうんやな」父曰くだが、女性は考えて動く派、男性は考えずに動く派らしい。女性は発生当時ほとんどの女性は言い方が悪いかもしれないが役にたらず、発生後しばらくしてから、炊き出しや避難所運営などで大活躍だったそう。

ひとまず、祖父と祖母の安全を確認した父は、その足で大阪方面へと向かった。その途中、あの光景を見た。阪神高速が横たわっているではないか、太い鉄筋コンクリートの柱も無理矢理折られたかのようになっており、とても信じがたい光景だったそう。その光景を後にして大阪に住む友人の元へと急いだ。大阪に着き友人と合流すると、買えるだけ水と食料を買い込みトラックの荷台に詰め込んだ。トラックに乗り、神戸に急いだ。いつもの道は使えなかった。ガレキが邪魔をしていたり、道路にひびが入っていたりでなかなか思うように進めない。結局いつもの3倍近くの時間をかけ帰ってきた。すぐに近所の避難所に届け自分もひとまず休むつもりだった。しかし、避難所についても一向に寝むれない。地震発生から4日目の話だった。気づけばあの日から一睡もとっていない、父は気が立っていると寝むれない人なのでそれが原因だと話してくれた。自分の中の「緊急モード」が切れていない。そんな感じだったそう。

その後、全国からボランティアや支援物資が届き始め避難所は人員不足が続いたそう。支援物資が届いてもそれを仕分ける人が足りなかったのだ。最初は皆、感謝の気持ちで一杯だった。しかし次第に苛立ちを覚える人も出てきたそう。

全国から届いた支援物資の入ったダンボールの中には何が入っているか分からず、何から開ければいいのか分からなかったそう。そのため腐りやすいものなども入っていることがあり、物資を無駄にしてしまったこともある。時には、汚れきった服、どう考えてもゴミにしか見えないものまで入っていた。これが支援物資なのだろうか、被災者の中にはボランティアを嫌う人も増えていた。

2 ボランティアの意味

日本では長い間「ボランティア」は、特別な訓練を受けた人、経験を積んだ人が行うものというイメージが強かった。しかし、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災をきっかけに、それまでボランティアに参加してきた人々と異なる多くの人々が災害ボランティアに参加した、この年を「ボランティア元年」と呼ぶ。

私たち環境防災科も阪神・淡路大震災がきっかけで設立された。この災害後、よくテレビや新聞で災害が起こる度に「ボランティア」についても良く取り上げられるようになった。「ボランティア」と聞くと正しい事、人のためなど良心的な考えがよく出てくると思う。しかし、ボランティアの後、被災者全員がそのようなイメージを持っているのだろうか。その答えは恐らく、いや間違いなく「いいえ」だ。人がたくさんいればそれだけ個性がでてくる、それは、被災者も支援者も同じだと思う。つまり避ける事も出来ない、絶対にぶつかる壁だ。被災者は災害によって多くの傷を負う。精神的にも弱り正常時と同じ考えができるとは限らない。だからこそ支援者が相手を思いやり、その相手にあった対応をしなければならないのだと考えている。

だが、阪神・淡路大震災もそうだったが「遊び半分」で被災地に行っている人がいるそうだ。

東日本大震災の時も泣いている女の子の動画をSNSに投稿し、不謹慎だと叩かれている人もいた。そんなものがボランティアと呼べるのだろうか、これはただの冷やかしのしか見えない。だからこそボランティアに行く人にはそれなりの覚悟と準備をしてもらいたい。本気でボランティアをしている人に対しても失礼だ。何より被災者に対しても申し訳ない。同じボランティア経験者としては少し悲しい気もする。

舞子高校では、ボランティア活動も積極的に行っている。環境防災科に入りたいと願ったのもそれが理由の1つだ。1年生の間は休日の殆どをボランティア活動に利用していた。2年生になってもそれは変わらなかった。しかし、あるボランティア中に地域のご老人に言われたことがある。「自己満足になっていないか？」その言葉に私は考えさせられた。確かに自己満足になっていた場所があるかもしれない。そう考えた私はしばらくの間ボランティアを離れることにした。すると見えてくるものがあつた。ボランティアをしている人の中に、自己満足、調子に乗っている人、自分に酔っている人、そんな人がたく気を使わなければならない」という事に。ボランティアは相手にだけ気を使わなければならないというイメージがあると思う。しかし、それは違う。ボランティアは相手の迷惑になってはいけない。自分の事は自分で行い、その上で相手のサポートをしなければならない。つまり、自分の事も管理できない人間がボランティアなどしても迷惑だということだ。これからボランティアをする人は気を付けてほしい。ボランティアに対する意識を。そして環境防災科の人々には「天狗」にならずにいてほしいと思う。

3 「熊本地震」と「阪神・淡路大震災」

熊本地震が起きてしばらくすると、テレビで被災地に向かう人々が映し出されていた。バスの中にぎゅうぎゅう詰めになりながら被災地に到着した。バスの中には、大学生くらいの人々が乗っており避難所の駐車場に到着した。避難している人が不思議そうにバスを見ている。すぐに大学生が下りてきて、支援物資の荷物おろしを始めた。被災者1人1人に話しかけ様々な話をしている。そのテレビを見て父は「神戸の地震の時とは全然違うなあ」と呟いていた。今と昔ではボランティアも変化している。より受け入れやすいように、より身近になっており、そのため支援も受けやすい形になっていると思う。熊本では2次災害の心配もある。土砂崩れ、感染症の流行、災害関連死の増加など、まだまだたくさんの危険が潜んでいる。その危険に対してどのように支援していくのかも我々の課題となるのではないかと思う。

今も問題となっている、「エコノミークラス症候群」これは災害関連死の中で最も多い、避難所の居心地が悪く、自分の車の中で避難生活をしている人になるというのを聞いたことがある。

もともとは、飛行機の狭い座席に長時間座っていた乗客が、飛行機から降りた直後に倒れる病気でロングフライト血栓症またはエコノミークラス症候群ともいう。足の静脈に血の塊ができ、その血栓が肺に詰まって呼吸困難や心肺停止を招く肺塞栓症を起こす。飛行中の航空機内は湿度が20パーセント程度まで低くなり、体の水分が失われやすい。また、0.8圧程度までしかならず、1500メートル級の山にいるのと同じ状態だ。これらの条件から血液の流れが悪くなり、足にできた血栓が、着陸後に動き出した途端に血流に乗って肺に入り、肺の血管をふさいでしまうことから発症する。肺の血管を塞いでしまうと、呼吸困難などの危険性もあり、最悪死に至ることもあるそうだ。この災害関連死は今までの災害の後にも度々ニュースなどでも取り上げられてきた。この問題はなぜ打開策ができないのか、私はこの熊本地震の関連死の話題を聞くたび疑問に

思っていた。この課題をボランティアの力で何かできることはないのだろうか。今現在、このエコノミークラス症候群を発症しないためには足の運動、マッサージやこまめな水分補給が必要とされている。しかし、避難所の高齢者の方々は水分を取ることを嫌がる。その理由は「トイレ」だ。避難所のトイレは汚く衛生状態も悪いと言えるだろう。高齢者はトイレに行くことを嫌がる。そのため自然と水分をとらなくなってしまうのだ。しかし、私は今回熊本の被災地ボランティアに行った時にとても驚いた、トイレが綺麗だったのだ。現地ボランティアの方々がしっかりと掃除してくれていることが分かった。このようにボランティアの形も変化している。今の被災地に要な形に変化している、いつかはボランティアが災害時、なくてはならない存在になるのではないかと私は思う。皆さんにも積極的にボランティアに参加してほしい。

しかし参加することにあたって様々な注意がある。ボランティアは、自立の手伝いをすると言うことを、ボランティアをしていると人は優越感が出てきて何でも仕事をしてしまうことがある。それによって被災者は何もしなくなってしまう。そんな状態になった時、自分自身が帰った時、ボランティアがいなくなった時に被災者は自ら復興への道を進むことができるのだろうか。きっとできないだろう、だから私たちボランティアはあくまでもお手伝いなのだと思ふ。

今書いたように、ボランティアは被災地や対象者によって様々な形を変えている。だがしかし、根本的な所は変わっていない。それがボランティアだと私は考える。

4 感想

今回、「語り継ぐ」を書いていて思ったことは知らない事ばかりだなと感じました。下調べをしていたり父の体験談を聞いたりしていると新しい知識や着目点を発見することができました。この3年間の高校生活で普通の高校生よりは防災に関する知識はあると思っていた。人よりは上だ、と天狗になっていたのかもしれない。文章を書くにつれて自分の無力さをひしひしと感じた。きっとこの「語り継ぐ」を書かなければ気付くこともできなかったのではないだろうか。今まで何人もの外部講師のお話を聞き、たくさんのレポートを書いてきたが、この「語り継ぐ」は外部講師がいない。そのため自分の考えを、思いを書き自分で作るものだ。環境防災科の卒業生が作り上げてきた「語り継ぐ」は卒業生それぞれの想いで作られている、その想いの1つとなることができたのなら嬉しい。そしてもう1つ思ったことがある。後輩のことだ、今の2年1年生は私たちとは少し違うことを学んでいると思う。基本は変わらないとは思いますが、何より熊本地震、最近では鳥取地震までもがおこっている。外部講師や被災地訪問、様々な経験ができていると思う。先生がよく言っていた「去年よりもさらにレベルアップしている」と、このように私たちは次の代、後輩のいい見本にならなくてはならない。卒業しても後輩のいい見本となれたらいいなと語り継ぐを書いていて思った。これからもたくさん勉強していきたい。

黒い影

巽 真美

1 はじめに

私は、阪神・淡路大震災の時生まれていないため地震の体験を語り継ぐことは出来ない。震災を風化させてしまわないために実際に被災した母、祖母の話を語り継ごうと思う。

2 震災以前

当時、母と祖母は現在住んでいる垂水区舞子坂に住んでいた。母は神戸市役所開発局の1号館22階に勤務していた。祖母は神戸市婦人大学、老人体育大学に在学していた。祖母は健康のためにと舞子墓園の広場で毎朝行われるラジオ体操に行っていた。

3 1月17日

(1) 5時46分

祖母は朝起きてラジオ体操に行く準備をしていた。その時に地震が発生し急いで部屋の窓を開けた。婦人大学に通っていた祖母は「非常口」についての論文を書いていたから窓を開けたそうだった。地震発生時、明石海峡大橋が倒れたのかと思った。海を見ると普段とは違う様子だった。その後も余震が続いた。余震があるたびに開けていた窓が閉じたり開いたりを繰り返した。階段付近まで行き、2階にいる母に「動いたらあかんで」と叫んだ。

母は寝ていた。地震発生直後に揺れと同時に目が覚めた。ベッドの下から突き上げられるような感覚だった。怖くて布団の中に潜りこんだ。明石海峡大橋が倒れたのか、飛行機が墜落したのかと思った。明石海峡大橋が倒れたと考えた理由はその時明石海峡大橋の補修工事が行われていたからだ。しかし、余震が続くにつれこれは地震だ！と気が付いた。地震の揺れで部屋のシャンデリアがものすごい勢いで落ちた。母も「動いたらあかんで」と大声で叫んだ。その後も横揺れが続いた。長い間揺れていると感じて怖かった。

(2) 揺れがおさまった後

揺れが一旦おさまった後、母は祖母が心配で1階へ降りた。階段にはたくさんのガラスが散らばっていた。母はガラスを踏んでしまい数か所切ってしまった。痛かったが祖母が心配で無我夢中で1階に降りた。1階に降りると祖母はリビングのドアを開けようとしていた。リビングのドアを開けようとするが開かなかった。祖母は母と協力してリビングのドアを開けた。部屋の中を見るとグランドピアノが端から端へと移動していた。その光景に驚いた。

外を見ると海が黒く、渦を巻いていたそうだった。また、たくさんの家が倒壊していた。近隣住民は電気がつかないことに気づいた。それを聞いた地域の人々は車に移動し大音量でラジオを流した。母と祖母は外に出るのが怖くて出ることが出来なかった。地震発生から1、2時間してガラスの破片などの片付けを始めた。片付けをしていると東から燃えカスが飛んできた。母と祖母はこんな日に何を燃やしているのだろうかと思っていた。3時間後に電気が復旧し急いでテレビをつけた。神戸市役所本庁2号館の倒壊、生田神社本殿の倒壊、三ノ宮のビルの倒壊、新開地付近のビル倒壊、阪神高速の倒壊、水道管破裂、道路のひび割れ、新長田から鷹取が燃えているニュースが流れていた。祖母と母はこれを見て驚いた。開いた口が塞がらなかったそうだった。燃えカスの正体は新長田から鷹取にかけての大火事での燃えカスだった。想像を絶するような光景だった。

テレビを見て退職して2年経つ新長田の幼稚園の子どもたちが心配だった。電車も使えない、道路もひび割れており車での移動も不可能だった。そこで母は自宅から自転車で勤務先の神戸市役所、新長田の子どもたちの安否確認に向かった。神戸市役所に行く途中で新長田に寄った。新長田の避難所に行き子どもたちの安否の確認をしたのちに自宅へ帰った。

4 その後

1月17日、18日の晩はカレーとおでんを食べた。地震の次の日の1月18日は祖母の誕生日だった。家でカレーとおでんを食べて誕生日を過ごした。16日の晩に作っていたそうだった。そのおかげで食料に困ることはなか

った。飲料水もやかんに入れていたり、ペットボトルに入れていたりしていたので困らなかった。しかし、日が経つにつれて飲料水が減っていった。自宅の隣は神戸市の配水場があった。母は必ずここには給水車が来ると考えて待っていた。すると、19日に給水車が来て飲み水を配っていたそうだ。母と祖母は飲料水ももらい近くの避難所である星陵台中学校に避難した。地震3日後にようやく避難所に避難した。避難所に行くとき近隣住民がたくさん避難していた。近隣住民によると、地震により家が倒壊して住める状態ではなかったからすぐに避難したということだった。母と祖母は近所の方が避難所に避難しているということを知らなかったのでもとても心配していた。

避難所生活はとてもきつかった。ご飯はない。食料は各自で確保。床にはなににも敷かれていない。毛布もない。中央区などには食料が届けられていたそうだが、母と祖母は避難している星陵台中学校にはなににも届けられなかった。一旦家に戻り毛布、食料などを取りに帰った。

我が家も2階が7センチ傾くなどの被害が出た。震災後、神戸市の職員により建築診断をしてもらった。自宅は全壊という診断が出たそうだ。舞子地域は盛り土の上に家が建っているというところもたくさんあった。自宅から見るとブルーシートをかけている家がたくさんあった。それから母と祖母は避難所生活をした。母は避難所から仕事に行き、祖母は昼間自宅に帰ることがあったが夜は避難所で生活した。

神戸市役所の職員は24時間体制で家へ帰れず、泊まり込む人も多くいたそうだ。役所の職員の中にも家が被災している人も多くいたがみんな避難所へ交代で緊急の応援に行ったりしていた。母は1週間後に勤務先の神戸市役所に出勤した。22階の部屋が職場になっていた。驚くことに北側にあった冷蔵庫が南側へと20メートル以上移動していた。また、棚が倒れていたり書類が散らばったりしていた。神戸市役所では地震に対する対策が行われていた。ポートアイランドでは自動車の通行が禁止になったりした。

地震から約1ヵ月が経とうとしていたが避難所生活は続いた。水道は1月末に復旧した。水道が出ない間近隣住民は私の家の隣にある神戸市の配水場に近隣住民たちは毎日水を貰いにきていたらしい。水をもらうために長い列をつくっていたという。隣の住民は何度も水をもらい洗濯していたらしい。また、私の母は隣の住民にきゅうりを持って行ってあげたこともあった。ガスがなかなか復旧せず電磁調理器を使って料理をしていた。2月10日は母の誕生日だった。職場の上司が避難所にケーキを持ってきてくれ祝ってくれたそうだ。避難所にいた人も祝ってくれたらしい。近隣住民たちは仮設住宅に入った。母と祖母は約1ヵ月避難所で生活し、自宅に戻ってきた。壊れたところは直し住めるようにはなった。地震から3年間住んでいた。しかし、2階が7センチ傾いていること、地震後家が沈んできたことにより自宅の立て直しをした。平成10年6月に解体して建て直した。

地震の後トイレが使えなくなった。自宅には庭があったため「肥料にもなる、近隣の人が周りにいないからいいだろう」と祖母が言いそこで小便をしていたらしい。大便是トイレにためていたらしい。地震後一番困ったのはトイレの問題だったらしい。

5 教訓

母が語った教訓は車のガソリンは無くなる前に入れるということだ。地震発生の時車のガソリンは少なかった。16日の晩に入れる予定をしていたが、「明日入れたらいいか」と思い16日にガソリンは入れなかった。しかし、17日に地震が発生した。ガソリンを入れるのに長い列に並び1時間以上待った。やっと順番がきた。しかし、ガソリン満タンは入れさせてくれず、一人30リットルくらいしか入れてもらえなかった。このようなことがあり、地震以降車のガソリンは無くなる前に入れようと思ったらしい。

祖母が語った教訓は手持ちのお金が少なくなったら銀行に引き出しに行くということだ。地震の時、祖母はある銀行にお金を引き出しに行った。しかし、その銀行の貸金庫が壊れており引き出すことが出来なかった。祖母が取引していた銀行は2ヵ月間、お金の出し入れが出来ない状態だった。お金を引き出すときには大阪まで行き引き出ししていた。このようなことがあり、手持ちのお金が少なくなったら銀行で引き出しに行くこと、預金通帳などの大切なものは貸金庫に預けないようにすること、銀行はなるべく近いところの銀行を利用するようになったらしい。

6 感想

(1) きっかけ

母や祖母から阪神・淡路大震災について聞いたのはこれが初めてではなかった。だから、落ち着いて聞

くことができた。私が初めて母と祖母から阪神・淡路大震災のことについて聞いたのは幼稚園のときだ。

「この日はね、大きな地震があったんだよ。たくさんの人が亡くなっちゃったんだよ。」と母が言った。幼稚園の先生も1月17日になると阪神・淡路大震災の話をしていたのを今でもよく覚えている。そのときは地震がどういうものなのかあまり理解していなかったが、聞いていて怖いと感じた。小学校に入学し1月17日がやってくると学校で阪神・淡路大震災の時のビデオを見たり体験した人のお話を聞いたりした。毎年ビデオを見ていくうちに少しずつ阪神・淡路大震災について興味を持ち始めるようになった。

私は、小学1年生から舞子の子ども会に入会した。子ども会では北淡震災記念館の見学、キャンプなどたくさんの経験をした。学年は違うが子ども会で友達になり、たくさんの人と関わりも持つことができた。小学4年生から垂水区子ども会連合会サブリーダーに登録することができる。サブリーダーとはリーダーを育成するために勉強会に参加したり、野外活動に参加したりする。私の母は小学生の頃からサブリーダーに入り、たくさんの活動をしてきた。それは今でも継続している。今では垂水区子ども会連合会の理事、舞子の子ども会の会長などをしているということもあり、私は幼稚園の頃からサブリーダーの卵として活動してきた。母は今までの業績が認められ垂水区から表彰、神戸市長からの表彰など数多く表彰されている。私も小学校の時垂水区子ども会連合会表彰状、中学校では感謝状をいただいた。

私はそんな母を小さい頃からいつも隣で見えていつしか母を超えるような頼られる人になりたいと思い始めた。

このサブリーダーで私はある人と出会った。それが環境防災科の先輩だ。N先輩は舞子の子ども会にも所属し、サブリーダーでも一緒に活動していた。N先輩が高校受験を終え、久しぶりにサブリーダーの活動に顔を出した。「舞子高校の環境防災科に合格した」と言った。私は、それを聞いたとき何を勉強するところなのだろうと思い、聞いてみた。「災害の勉強をしたり防災の勉強をしたり色々なことを勉強して地域のリーダーになるんだよ」と言った。その瞬間私の中で何かが揺らいだ気がした。今まで行ってきたボランティア活動、子ども会での活動での経験を活かして地域のリーダーとして活躍したい。誰かのためになりたいと思い、舞子高校環境防災科に入学した。

(2) これからの災害に向けて

最近世界各国で地震、水害などの大きな災害が発生している。阪神・淡路大震災を経験された方の割合は約45%となっている。震災を経験していない市民の割合は年々増加しており、震災から26年の2021年には市民の半数が震災を経験していないということが考えられる。神戸市では小中学生向けの教材として震災当時の体験を家族から聞き取れるワークブック形式の教材を作成するなど、若い世代へ記憶を伝える試みをしている。このように後世に語り継いでいくというのは大切な。

今後起こるとされている南海トラフ地震。静岡県や高知県は津波の想定が30mを超えるという想定がされている。また広範囲で震度6以上の揺れが発生するおそれがある。これ以上東日本大震災のような被害をだしてはいけない。災害を人間の手で止めるということは出来ないが、災害での被害を減らすことは今からでも出来る。また、過去の震災の教訓から学ぶことも出来る。次の災害に備えるために地域が一致団結して防災・減災に取り組むべきだ。県をあげて防災・減災に取り組んでいるところはあるがそれだけではいけない。県がたくさんの取り組みをしても市民の防災意識がない限り災害を防ぐことはできない。まずは市民の防災意識を高めることだ。地域で防災会議、避難訓練をしたら防災意識は高まるはずだ。いや、そうではない。防災会議、避難訓練を行うのはよいことだが参加する人が少なければ意味がない。自治会長だけが参加するのも意味がないと思う。自治会長が防災訓練や避難訓練に参加して地域の方にしっかり伝えることは出来ないだろう。やはり、全員が参加しなければならないと思う。

私が住んでいる舞子地域は高齢者が多いため地震が起こったときは大変だと思う。少しでも、死傷者が出ないように地域の防災意識を高めなければいけない。そのためには自分が発信者になり防災について伝えなければいけないと思う。たとえば、地域で行われる防災会議に出席することだ。これから起こるとされている南海トラフ地震の対策について話し合う会議だ。しかし、地域の住民の出席率はかなり低い。その原因は、舞子地域には坂道が多いからだ。高齢者の方は会議に出席するために急な坂道を下り、終わるとまた坂道を上らなければいけない。防災会議に参加出来ない高齢者のためには分かりやすい防災に関するパンフレットを配布する必要がある。防災に少しでも知識がある私が直接語り合うことが大切だ。日頃から地域行事において地域の方々と一緒にコミュニケーションをとり、災害時には地域で何が出来るのかを地域の防災会議などで話し合う必要がある。

また、ご近所同士のコミュニケーションも重要だ。私が所属している子ども会では防災教育を取り入れた。堅苦しい話だと子どもたちも興味を示さないで、楽しんで防災について学ぶことができるゲーム、実際に北淡震災記念館へ見学に行ったりした。子ども会では今まで防災教育を取り入れていなかった。防災教育を取り入れようと言ったのは私だ。理事に防災教育を取り入れたいと言うと快く受け入れてくれた。垂水区子ども会連合会では小学生高学年向けに講義をした。まずは私自身が所属している子ども会から防災・減災について伝えていきたい。

これからの災害に対応していくためには過去にあった災害を調べる必要がある。また、経験した方から震災時の話を聞く必要がある。しかし、阪神・淡路大震災の未経験者の割合が4割を超えるなど震災への市民の意識の低下が危惧されている。震災の記憶の風化を防ぐためにこれから私たちが経験や教訓を語り継いでいかなければならない。私は環境防災科学んだことを活かし、たくさんの人に語り継いでいきたい。また、これからも防災・減災について学びたくさんの人に発信していきたい。

(3) 将来の夢と防災

環境防災科学当初の夢は、子供たちに防災の大切さ、震災のことを語り継いでいきたいと思っていた。その夢は変わらないだろうと思っていた。しかし、夢は大きく変わった。いつしか客室乗務員（CA）やグランドスタッフのような航空関係の仕事に就きたいと思った。私は小さい頃から飛行機を利用した旅行が多く空港に行く機会が増え、また海外旅行で外国人の方々ともコミュニケーションをとることも多くなった。空港を利用していくうちに客室乗務員（CA）やグランドスタッフに興味を持ち始めた。実は客室乗務員

（CA）、グランドスタッフのように空港で働きたいというのは小さいときからの夢だった。しかし、何かあったときに正確な判断が出来るか、誘導できるか、外国人の方に英語が伝わらなかったらということを考えていくうちに「私には無理だろう」と諦めてしまい、その夢から離れた。その夢ともう一度向き合おうと思った理由は2つある。

1つ目は、1年生の時にネパール研修に行ったことだ。ネパールの町の建物は日本より丈夫に造られておらず、非常に脆弱だった。また、子どもたちは防災教育を学校でしているが親は防災に関してほとんど知らない状態だった。外国人の方に防災を伝えるためには英語が必要だと改めて感じた。しっかりと英語で日本の防災について伝えることが出来なかった自分に無力さも感じた。

2つ目は、2年生のある授業がきっかけだ。その授業はActive防災ⅠでのJICAの方々との交流だ。日本人だけでなく外国人の方にも防災の大切さを知ってもらいたい。地震を知らない国の方々にも知ってもらいたいと強く思った。それから英語を使う仕事に就きたいと思い始めた。

航空業界の仕事は女子学生の就職人気として知られている。しかし、華やかな職業に見える客室乗務員（CA）やグランドスタッフは非常に大変な仕事である。客室乗務員（CA）は「機内管理」「保安全管理」が主な業務だ。グランドスタッフは「搭乗手続き」「搭乗案内」が主な業務だ。自衛隊、消防、警察のように災害が起こると現地に行き活動することが出来ない。客室乗務員（CA）、グランドスタッフ業務内容からも一見防災との直接的な関わりはないと思う。災害時に空港が避難所として利用したり、各国からの支援物資が来たりしたときには必ず空港は使うと思う。その時は、少しでも自分が出来ることを探して行動したい。空港を避難所に扱う場合避難者の心のケアもしっかり行わなければならないと思う。お客様を置いて我先と逃げ出さず、正しい案内、誘導が出来る空港スタッフになりたい。災害で激変した環境に対して逃げることなく正面から向き合う力、臨機応変に対応できる力が大切だと思う。もし、私が航空業界に入ったら相手のことをしっかり考えることが出来るようになり、どんな時でも臨機応変に対応できる人になりたい。後世に伝えていくためには震災を体験された方のお話を語り継いでいかなければならない。これからもたくさんのお話を聞いてたくさん知識を増やしてそれを発信していきたい。自分がどれだけ防災について語れるかで今後の取り組みが多くの人に広がっていき、自分が防災について正確な知識があれば、伝える人にも正確に伝えることが出来ると思う。空港利用客だけではなく、自分の地域の方々や次の若い世代に防災・減災の大切さを広げていきたい。

災害

谷 壮志

1 はじめに

私の親は加古川市に住んでいた。加古川市の被害は大きくなく、ものに困ることはなかったと聞く。

2 震災の前日

私の母は薬局で働いていた。その時に、「よくネズミ取りが売れた。」と言っていた。周りの市内にいた小動物が加古川に事前に逃げてきたように感じる。それなら、彼らを基準にすることで被害を小さくすることもできるだろう。つまり大きな被害を出した地域には小動物はいないということがいえる。地震波を感じ取りやすいのだとか。

3 震災当日

(1) 母は…

やはり何が起きたのかよくわからなかったらしい。大きな事故が起きたように感じ、目が覚めたとか。結果は見ればわかることだが、両親ともにほぼ無傷だった。要因の一つとしては、我が家はとても小さく、家具もほとんどなかったこともあって被害はとても小さかった。たとえば、台所も狭かったため冷蔵庫がほとんど動かなかった。とっさの逃げ道も家具が少ないために、確保しやすかった。

家からでて現状確認をした。直後の加古川市を見て、この地震で被害が一番大きかったのはここだろうと思ったらしい。それも仕方のないことだと言えよう。家こそは無事だが周りではそれなりの被害を被ったのだから。

(2) 父は…

通常通り会社に向かった。母は仕事にならないはずだといったのだが聞く耳持たず、家を出た。初めて体験した自然災害に恐れ、不安だったのだろう。しかし、数時間たってすぐに帰ってきた。仕事にならなかったのだ。父らしいといえばそうだが、少し考えるべきだとも思った。

(3) 祖母は…

この時はまだ、祖母は大阪に住んでいた。大阪から加古川へ来るのに使っていた高速道路が崩れた。下道を使ってわざわざ会いに来てもらえたらしい。神戸の被害があまりにも大きかったために「神戸から加古川へ行くよりも、大阪から加古川への方が楽だっただろう。」と語った。

4 それから

家が無事だったため、避難所にはいかず、物資ももらわなかったという。それどころかその一か月後に新婚旅行に行っている。周りはいいいようには見なかつただろう。母の言い分としては、「今行かなかつたらもう行けないだろうから行きたい。」というものだった。

5 震災を知る友人たちの体験

(1) Sさんの話

そのころまだ小さく、大阪に住んでいたのだが神戸方面の空が赤く染まっていくのを見たそう。そのころはいつも青い空が変色していることにただただ恐怖を感じ、後々になり二次災害、火災などもおき多大な被害を出したことを知った。と話していた。

(2) Rさんの話

彼もまた幼く、尿意で目覚めトイレから帰ってきて布団に入った直後に揺れた。と話し始めた。彼はその時の揺れをこう表現した。鈍い音が来てドンと突き上げた。20年経ってもなおちょっとした地震でも体がこわばるらしい。

彼の近くの会社が、寮を避難所として開放したためそこに避難し、そののちに親戚の部屋を借りて家の修理が完了するまで過ごしたらしい。

(3) Aさんの話

この人は地震当時関東在住の学生だったらしく、明け方につけばなしにしていたテレビから緊急ニュースが流れ、道路に倒壊したビルの映像が流れて驚いたそうだ。

彼はそのあとこう続けた。

関東在住のため、町の復旧がある程度ひと段落したと思われる頃には、テレビはごく普通の番組が、時間通りに流れるようになっていた。テレビでの報道が減ってしまうと、追悼番組などの特番以外では思い出さなくなってしまうような気がする。

自分が気ままな学生だったことや、身内に被災者が居なかったせいもあると思うが、現地と首都圏ではずっと温度差があったように思われる。

数十年後、首都圏・東北が、熊本・大分が同じ思いをするのだろう、と話した。

6 被害の拡大理由

多くのことが考えることができた。早朝で火を使っていたこと、首相が自衛隊への支持を出さずにいたため救援に時間がかかったこと、クラッシュ症候群という症状が多く出たことだ。

7 驚いたこと

高速道路の倒壊のことだ。阪神・淡路大震災の写真と聞かれたら、ほとんどの人が想像するだろう。その高速道路が、実は手抜き工事で出来上がっていたことを聞いたときは驚いた。利益のためか、時間短縮のためかは知らないが、命を軽んじた考え方だ。

8 ふまえて

(1) 人

私たちには何ができるだろうか。我々は非常に恵まれた環境に生きている。金銭的にもそうだが、毎日災害を考えることのできる学校はそうないだろう。そのような環境にいるからこそすべきことが多くあるはずだ。たとえば忘れないことだ。Aさんが話された通り意識していないといつか忘れてしまう。人は忘れてしまう生き物だ。だが、忘れないよう努力することもできる。温度の差はほかにも聞く。それは仕方がないと割り切ることもできなくはない。何をしたって心のどこかでは他人ごとと思えてしまうのだ。特に私は、大切な人も身近な人も亡くしたことがないのだ。温もりをなくしていく人に何もしてあげることができない悔しさも、大きな災害に無力さを感じることもまだ私は体験していないからだ。確かにもし私とその状況になったら、と考えることができる。しかし、なったらとなるは別物だ。常に自分の思い通りに事が進むとは限らない。

考えていると、今生きているのか確認しないと気が収まらなくなる。当たり前ではない、何とかできる範疇を超えてくることもある。どう防ぐかを考えるのはよくないと最近よく思う。自然を制御しようとした結果、多くの屍ができた。ある校長は、人はほかの動物より優れた特質がある、と。計画することだそう。私はそうは思わない。ほかのどうぶつは言葉を発することができない、この考えも違うだろう。私はどの動物よりも高い能力は、傲慢さだといえる。自らも動物の部類に入っているが、他の動物と区別し、首輪をつける。自らが他の動物より優れていると思い込んだ挙句、自然も植物も我々の住みやすいように生きやすいように改良しようとした結果がこれだ。増え続ける人口、減っていく土地。だからこそ海が埋めたてられ、山が削られ、木が減った。人は今祖先がまいた種を刈り取っていると考えることができる。災害に脆弱な土地を作り、そこに住む。それで災害で、大きな被害が出れば、あれが元から悪かった、いつかこうなるだろうと思っていた、などという輩が出てくる。

今から何かをして変えるにも規模が大きく、資金的にも時間的にも難しい話だ。ある人は言った。自分はいつかだれも死なない防災を作りたいと。私は死んでしまうのは仕方がないことだと考えていた。だから私は彼の発言を否定した。夢物語だと。しかしどうだろう。もし本当に可能だというのなら。彼は具体的なプランはまだ考えていないのだろう。それでもその考えはほとんどの人が考え付くことができない。たいていの人は考えてもあまりの無謀さにあきらめてしまうことだろう。ましてや人前で堂々と言える人なんてまずいないだろう。否定されるから。現実味がないから。人を助ける人たちのモットーはできるだけ多くの人を助けることという人が多いだろう。だがそれもいくつかの命を犠牲にすることも計算のうちに入ってい

る。それはすこし悲しい話だ。誰かを助けるということは誰かを助けないということだとよく言われる。すべての命を救えた時、人はまた傲慢になってしまうかもしれない。私はあまり見たくないがそれでもすべての命が救われるということはとても素晴らしい考えだとおもう。私はそれを提案した彼の作る世界を見てみたいと思った。一人一人の意識の改善もすべきだろうし、その土地その土地の脆弱なところを補うことも必要だ。これからがとても楽しみに思えた。

(2) 私にできること

今、私にできることは何か。まずは学習することだ。私には圧倒的に知識が足りない。学習し、自らの生きる糧とすることが大事だ。無責任な大丈夫も、頑張れもいい声掛けではないと聞く。そこに私は「わかります。」も入れたいと思っている。「何がわかるというのか、何もわからないくせに」と、いら立ちを大きくさせてしまいかねない。よくドラマなどで聞く言葉だが、聞くたびに簡単に人の気持ちがわかってすごいですね、と思う。

9 まとめ

前に何度か震災について聞いたことがあったが、「加古川は、あまり大きな被害ではなかった」としか聞いていなかった。しかし今回、とても多くのことを聞き、知ることができた。初めての災害に対してどうすべきか考えあぐねていたり、不安をどのようにして軽減させたりするのかなど知らないことがたくさんあり、だれもが経験不足だったようだ。普段と同じようにしよう、誰かに頼ろう。と、一人一人が最善を尽くそうとした。

私は、環境防災科にきて多くの被災者の話を聞いてきた。彼らはたいがい、あの体験が心に重くのしかかっているようで、地震が起きればどこであろうと他人事のように感じるができない。という人がほとんどだ。しかし別府町民は、まだ災害に弱い上に疎い。防災訓練の参加率がとても低い。私の母と兄は、東北で起きた津波を見て「四国と淡路島があるから津波なんて来ない。」と言っていた。常に想定内という保証がなければ、想定外の地震が起きる確証もない。もしかしたら四国と淡路島を超えてくるかもしれない。南海トラフ地震の影響により瀬戸内海近辺で、地震が起こるかもしれない。この地がもっと災害に強い街になるにはまず考え方から改めるべきだということが分かった。もう一度いう。人間が他の生き物とどこが違うのか。人間が、他の種族よりも優れている特質は何か。それは、傲慢さだ。自分の方が上だと思い、差別し争う。もともと人間が地球を乗りこなしたいという願望を抱いた故に温暖化、災害に脆弱な土地ができたのだ。進化論が事実なら、なぜ人間は進化を止めて人でなく、地球を我々の生きやすいように作り変えようとしたのか。人間は学習しない。同じことを繰り返し失敗する。絶対に忘れないといってもいつかは忘れる。では傲慢で忘れやすい我々はどうすべきか。忘れないために、真剣に取り組み、周りを理解し受け入れる必要がある。忘れないためには毎週それについて、考える時間を作ることだ。一年に一回では、「ああ、そういえば」という風になる。それではよくないからだ。しかし「継続なんてできる自信ない。」という人も少なくないはずだ。テレビで頻繁に放送される場所はないだろう。そういう人にはあるAMラジオを聴くことと、書物を読むことをお勧めする。そのラジオでは「今日の防災メモ」というコーナーがあり、ほぼ毎日震災に触れているからだ。本は時間が空いたとき・寝る前・朝起きて・といったように合間に読むことができる。日常生活には関係ないから読まないというわけにはいかない。なぜなら生活するうえでの重要書物そのものなのだから。起きて、祈って、食べて、祈って、寝る。真剣に考えるためには、まず前提を覆す必要がある。生きていて当然だ。という考えでなく、今生きていることに感謝することだ。

10 私の夢

私は消防士になりたいと努力をしている。私は、人を支えることのできる消防士になりたい。それは人の話を黙って聞き、否定しない。話もうまくないといけない。人を笑顔にするためにも安心してもらうためにも必要だ。力だけが、学力だけが必要な職業ではない。その職業に私は向いていないと思うほど、足りていないものが多い。それでも私はこの職業につきたい。そのために私はさらに努力する。

僕の知らない震災

田野 伶弥

1 はじめに

今回の文章を書くにあたって、両親と久しぶりにゆっくりと話す機会となったのだが、僕の知らない阪神・淡路大震災の一面を見ることができ、貴重な時間を過ごすことができた。

2 阪神・淡路大震災について

僕の聞いた当時の阪神・淡路大震災について綴る前に簡単ではあるが阪神・淡路大震災の概要について振り返りたいと思う。

まず発生日時は1995年（平成7年）1月17日の午前5時46分で、震源は淡路島北部沖の明石海峡、震度7で地震の規模を表すマグニチュードは内陸型地震最大の7.3であった。

死者は6,434名で負傷者は43,792名と当時は戦後最大の被害者を出した大災害で、当時の社会に大きな影響を与えた。

3 父の体験

（1）災害の朝

阪神・淡路大震災が発生する前日にお酒を飲んで帰ってきていたため揺れが始まった時には誰かが起こしに来たのだと勘違いしていたようで、ただただ長い時間体が揺すられていた感覚がしていたという。

その後朝になって仕事に行かなければならないという時に友人から「おい大変なことになったぞ。」という連絡が入ったそうだが父は朝で忙しかったので「悪ふざけとかはいらんから、今忙しいから後にしてくれ。」と言ったものの友人の声が真剣だったためテレビ番組を見た（このときから普通に電気は使えていた）そうなのだが、その時目に飛び込んできたのは倒れた名神高速道路や燃え盛る長田の町でありにも唐突なことだったので数秒固まってしまったらしいのだが、すぐに我に返りすぐに友人の安否を確認した。

（2）復旧の早かったもの

父の住む地域ではライフラインの復旧がとても速かったそうだ。

電気は地震が起きた日の朝から使うことができ、復旧が遅かったガスや水道も数日でいつも道理使えるようになったので、まだ結婚していなかった母も何度かお風呂を借りに来ていたそうだ。

ライフラインの復旧が早かったことで余裕が生まれたので、自分たちのことだけではなく友人のサポートをすることができたと語ってくれた。

また道路も大きく壊れているところもなく車での移動もスムーズに行えた。

（3）父が行ったこと

ライフラインが復旧したことで、余裕が生まれた父はまず自分の友人の安否を確認してまわったそうだ。

幸いにも友人の中に亡くなった人はいなかったらしく、みんな無事に避難所に避難していた。

当時の父は集められるだけ集めることができた毛布を友人の避難していた避難所まで持って行ったそうだが、そこに避難していた人たち全員分はなかったのも、こっそりと友人にだけ毛布を渡したそうだ。

また水道の水が止まっていた数日間の間、父は伊川谷にあった生コンクリート業者の方が使用していた井戸水を1日中何度も車を使ってもらいに行き、地域の人達に配って回ったという。

（4）三宮を見たとき

当時父が勤めていた会社は三宮にあったらしく、地震が起こった後に会社に向かったそうなのだが、ビルは倒れ街の到る所からガスのにおいがして悲惨な状態だったと語ってくれた。

また災害が起きた街を見ておこうと思い、六甲山に上ったそうなのだが、街のあちらこちらから赤くごうごうと燃える炎や倒れたビルや黒い煙を目の当たりにしたそうだ。このときのことを語りながら父は「戦争ってものを実際に体験したわけじゃないけどな、あの時の三宮はほんまに戦場みたいやったな。」と言零していた。

僕は父の零したこの一言が忘れられないのだ。うまく表現できないことがとても悔しいことなのだが当時

の災害に遭った人たちからすれば自分の住んでいた街が大きく変わってしまったことに対する絶望感や寂しさが父の一言に感じる事ができたからだ。

4 母の体験

(1) 5時46分

まだ結婚をしていなかった母は、自分の実家で寝ていると突然下から大きく突き上げられるような衝撃が来たかと思うと激しい揺れに襲われた。

数秒たって下の階にいる祖父母と叔父の安全を確認しに向かうと食器棚は倒れ、壁にかけた時計は落ちていてとても悲惨な状態だった。

ライフラインはすべて止まっていて、当時使われていたPHS機も使えずに何も情報がないまま一夜を過ごしたようだ。

まだ暗かったので落ちた食器や割れたガラスに気を付けながらろうそくを見つけ火を灯し、今自分たちに何が起きているのかわからないまま不安だけが募っていった。

とにかく早く朝になってほしかったといていた。

(2) 燃える長田を見て

ライフラインの1つである電気の復旧はとても速かったらしくお昼にはTVでニュースを見ていたようだ。

TVをつけて一番に目に飛び込んだのは倒れた名神高速道路で、はじめは映画を見ているような感覚だったらしいが次の場面で映し出された燃える長田のまちを見て恐怖心を持った。

母の実家周辺は大きな火事もなく家も崩れずに済んだので被害は小さかったのだが、自分たちのいる場所とは違う場所での惨状を見て心が苦しくなったようだ。

ただ一つ幸いだったのが親戚のほとんどが近所に住んでいたから火事による安否の心配はなく心労は少しだけ和らいだという。

(3) 食料と水の確保

電気の復旧が早かったため、家にあったホットプレートを使って料理を作ることができたが、何日分もの食料のストックがなかったため近所にあるスーパーマーケットへ買い物に向かったそうだが、母たちが着いたころにはすでに大行列ができており店に入ったころにはほとんどの食糧が売れてしまい、ごくわずかなものしか買うことができなかったようだ。

地震のあった日の翌日に広島に住む祖父の兄弟から大きな段ボールが届いた。

中には缶詰や食材、飲料水やポリタンクが入っていて食料の心配はこのとき無くなり食事ができることに感謝したのは久しぶりだったといていた。

しかし食材を手に入れるよりも大変だったことがあった。それは水を手に入れることだ。

水の給水場は母のうちから長く急な坂道を登って行かないといけなないので、自家用車を使って給水に行こうとしたが車を入れている車庫のシャッターが開かず、結局は外に出してあった自転車を使って給水しに行ったようだ。

ポリタンクいっぱいに入れた水を入れてそれを帰るとなるとかなりの重労働で、1つ持つだけでもしんどいのになそれを2、3つも持って帰らないといけなくなるととてもしんどかったようだ。

5 まとめ

(1) 父と母の被害の差についての考察

今回の話を両親から聞いて、二人の体験したことは全く違うのだと感じた。

母の実家と父の実家は距離としては約10km離れているか離れていないかというところなのに大きく異なっているところがある、それはライフラインの復旧の早さだ。

母の実家の方では、電気の復旧はとても速かったのだが、ガスや水道の復旧に1か月はかかったようだ。また、僕がこの環境防災科で学んだことの中でもライフラインのことを学んだが、ガスや水道が1週間以内にましてや数日で復旧したというのは聞いたことがなかったのだが、現に父の実家でそれは起こった。

父になぜそんなに復旧が早かったのかを尋ねても具体的な原因はわからなかった。

しかし、僕は1つの可能性に行き当たった。それは新幹線だ。

僕の家近くの地下の深くには新幹線が通っていて、それによる補強によって地面が安定し揺れにくくなったことによって、水道管、ガス管の破損を防げた、もしくは最小限に抑えることができたのではないかと考えている。

だが、阪神・淡路大震災でライフラインの復旧が早かったとはいえ次に起こる災害では復旧が早いとは限らないので、今余裕のあるうちから備えを充実させることが必要だ。

またライフラインだけではなく食料や水の貯蔵も十分にしておく必要がある。

もしも、今南海トラフ地震が起こったならば日本のほとんどすべての機能が停止してしまうだろう。そうなったら支援物資がすぐに来ることは期待できない。

自分の命を守ってもその後の生活のことを考えていなければ、せっかく助かった命を亡くしてしまう可能性だって考えられるのだ。そんなことがないように日頃からの備えはしっかりと行いたい。

(2) 平成28年熊本地震について

今年の4月14日に発生した熊本地震は防災を学び始めてから初めて国内で起こった大きな地震だった。

地震発生時、僕は友人とSNSを通じて通話をしていた。

すると友人が「熊本県で大きな地震があったらしい。」と教えてくれたので、すぐにインターネットを使って情報を集めた。

発生時間や震源地、震度や揺れの規模を示すマグニチュード、また津波の危険性の有無もすぐに分かったが、火災が起こっているのか、避難者は何人くらいなのかという情報がなかなか更新されなかった。

今では当たり前のように使っていて便利なインターネットだが、いざという時には情報が少なく、自分の住んでいる地域に大きな地震などが起こった時には使用できないことからラジオを常に準備しておくことの大切さを身に染みて感じた。

この地震で災害のことを学んできた中ではじめて「前震」という言葉を耳にした。

また今回の地震では余震の回数が多く、震源地がどんどん東にずれていっていることから南海トラフ地震が近々起こる可能性も考えられた。

防災や災害のことについて学んでいるからこそ今回の地震で災害に対する恐怖心、また自分の住んでいる地域に対する危機感を覚えました。

地震発生から約1か月、朝のテレビ番組などで熊本地震についての情報を目にする機会がグッと減ったように感じるが、まだまだ余震は続いているし避難者も大勢いるのだ。

災害が風化させないような活動をしていきたい。

(3) 同世代から見た阪神・淡路大震災

今回両親という阪神・淡路大震災を直に体験した世代からの話を聞いたのだが、両親のインタビューと並行して僕の中学校の頃の友人に「阪神・淡路大震災について正直どう思っているか」という質問を試みた。

この質問をしたときはみんなから「興味がない。」や「よくわからない。」という回答が出てくると予想していたが、結果は意外にも予想と反していて、僕が質問をした友人たちのほとんどは自分なりに阪神・淡路大震災やそのほかの災害について関心があったのだ。

また彼らの質問の回答には「熊本地震があったから災害について考える機会になった。」と言っていた子たちがとても多かった。

さらにこれはごく数人だったのだが「今後語り継いでいけるようにしたい」と言っていた子もいたのだが、僕はこれを聞いてとてもうれしく思った。

中学校からこの環境防災科に入学するときも友人には「防災や災害の勉強ってなんのためにするの。」と何度も聞かれたので、みんな防災や災害について興味がないのだとその時から思い込んでしまっていました。しかし、僕の知らないところで、確かに防災の意識が少しではあるけれど芽生え始めてきているのだ。

ただ一つ問題がある。それは「災害について興味はあるがよくわからない」ということだ。

災害について興味があると言ってくれた友人にはもう一つ別で「日頃から災害時のために何か備えをしているか。」という質問を試みたところみんな「準備していない。」と答えた。次に「何を備えておけばいいか。」と聞くと「水や食料と懐中電灯くらいしか知らない。」と答える子が多かった。

ただ知らないことは悪いことではない。僕も今でこそ日頃からどんなものを何日間備えておかなければならないかというのを学んだからわかっているけれど1年生の初期では友人と同じ回答をしていたはずだ。次

は僕たちの世代が同世代の人はもちろん次の世代や前の世代にもいろいろな情報を伝える必要があるということを感じた。

しかし、今回質問した全員が災害に興味があると答えてくれたわけではなかったが、これはこれである意味正しいと思うのだ。

僕もこの環境防災科に入っていなければ災害のことなど何の関心も示していなかったと思うからだ。しかし災害は突然僕たちを襲ってくる、その時に知識がなければ死んでしまうかもしれないのだ。

「防災や備えは大切だよ。」と言っても「まあ、大丈夫や。」と軽くあしらわれてしまうのだ。人に何かを伝えて、その輪を広めていくことの難しさを初めて実感することができた。

今回の質問をしたことで「ちょっと災害のことについて考えてみる。」と言ってくれる人がとても多くて防災のことについて学んでいて初めてひとの考えを動かすことができたのだ。

これからは友人たちとお互いに災害に対する考えや備えについての工夫について情報をシェアできるようにして地域の防災力を高められるようにしたい。

(4) これからやっていきたいこと

先ほども言ったが、僕は災害を忘れないようにしたい。

平成28年熊本地震の発生から約1か月が過ぎた今では、朝に行われているテレビのニュース番組などでは、地震のことについて取り上げている番組を見ることがとても少なくなった。

先の熊本地震だけではなく東日本大震災もまだ復興は終わっていないのに全くメディアでは取り扱われていない。

これでは災害を経験した世代が居なくなったときには風化を待つだけになってしまうのではないのかと思う。

僕たちよりも若い世代に災害の怖さや防災の大切さを教える必要があるのだ。

災害が風化してしまえば変な言い方になってしまいますが先人の犠牲が無駄になってしまい、また同じ失敗を繰り返してしまうことになってしまう。

人は失敗して成長していく生き物だ。風化とはその失敗を忘れ去ってしまうことだと僕は考えているのだ。2度も同じ失敗することはないようにしないといけないのだ。

(5) 将来の夢

僕は将来消防士になりたいと思っている。

夢である消防士になるためには勉強や体力、筋力だけではなく人としての成長が必要不可欠だと思うのだ。なぜかというとう人間的に幼い状態だと周囲を見る視野は狭く、その時本当に自分がしなくてはいけないことがわからず、自分自身や周りの人たちも危険に晒しかねないからだ。

また、消防士になるだけではなくこの環境防災科で学んだ数多くの防災の知識を一人でも多くの人に広めて防災意識向上につなげたいと思っている。

人として幼いままだとこちらがいくら災害に備えることの大切さや過去の災害のことについて話しても重要性はあまり伝わらないと思う。

いくら自分だけが情報を持っていたとしても周りに伝えることができなくては、結局それは宝の持ち腐れになってしまい、周りの人を助ける仕事になって就けるはずがないし人を助けることもできない。しかし、僕はやはり人の命を守りたい。知らなかったから、準備をしていなかったからという理由で亡くなる人を一人でも減らしたいのだ。

今の僕にはそんな夢すら持つことすらも贅沢なのかもしれないが、人が成長していくには目標がないと成長などできないと思う。僕の夢は消防士になって、直接命を守るだけではなく間接的に災害から人々の命を守れるようになりたい。この目標を達成するには決して楽な道などないが逃げずに前だけを向いて頑張っていきたいと思う。

(6) 感想

今回阪神・淡路大震災のことについて本当に多くの人の協力をもらって話を聞くことができた。

学校の授業では聞けないような被災した時の話は初めて知ることがとても多かったのだが、その分疑問点も数多く出てきた。

幸いなことに僕の両親はどちらも地震の被害が少ない地域に住んでいたのも、避難所に行くことはなかったのだ。災害後避難所はどうなっていたのか、父方の実家の近くに建てられていた仮設住宅の雰囲気な

どをもっと多くの災害を体験した大人の方々に聞いてみたいと思った。

今回の話だけで僕の知らない阪神・淡路大震災が数多く見る事ができた。きっとまだまだ僕の知らないことが出てくると思う。僕がいるこの環境防災科ができるきっかけとなった災害について深く知っていきたいと感じた。

姫路から見た阪神・淡路大震災

民谷 美友斗

1 阪神・淡路大震災の概要

(1) 発生日時と震度

1995年1月17日午前5時46分最大震度7、地震の規模を表すマグニチュードは7.3

(2) 死者

6434人 死者の多くが、建物や家具の下敷きによる圧死

2 震災当時の母の話

母は当時夢前町という姫路市の北部の街（震災当時は夢前町。姫路市とは別の市町村）に住んでいた。発災時は寝ていた。地震で目を覚ましテレビをつけても震災を知らせる報道は無くもう一度寝たそう。

この時の揺れは、ものが動くような揺れではなかった。

朝、テレビをつけて倒れた阪神高速の映像やビルが倒れている映像を見て初めて神戸の被害を知る。

母は、映像で見る限りでしか覚えていないそう。

当時、舞子に親戚がおり母方の祖父は家の片付けをしに向かったそう。

そのときのことを、何もかもが、ひっくり返っていたと母に伝えたという。

3 震災当時の父の話

震災当時は、姫路市大津区に住んでいた。

地震の揺れは、夢前と違いものが揺れるような揺れだったそう。

揺れているとき、父は「揺れている！もうどうにでもなれ！」と眠気が勝って何もしなかったそう。

そしていつも通り会社に出勤し、その現場（東芝の工場）の事務所で神戸の映像を見たという。

その映像を見たとき、父は「特撮の映像か？」「どここれ？」というような現実とは思えなかった。

父は、当時少林寺拳法をやっていた。その少林寺拳法の網干道院にボランティア募集があり、父は2回被災地でボランティア活動を行った。

1回目は、被災地に送られてきた支援物資の搬送のボランティアだった。

会社のトラックを借りて、父を含む3人で神戸へ向かった。

そのときに見た神戸の様子を父はこう語った。

そこら中がつぶれまわっており、家の基礎だけだったりガレキだらけだったりと場所によって状況が違っていた。すごい状況だったと語る。そのときは、仕事の都合で1日しか活動できなかったそう。

3、4か所の保管所からの物資の収集だけで1日かかったという。

2回目は、子供たちのケアと炊き出し支援である。

避難所である小学校に行き、ブースを作って子供たちと一緒に遊んだという。

その頃は、すでに被災地も落ち着いており被災者の方々は小学校の近くの公園でテントを張って生活していた。しかし親が片付けに追われるなどして満足に遊んでももらえていない子供たちがたくさんいたそう。そんな子供たちの遊び相手になってあげる。つまり学童のようなものだ。そして子供らしさを取り戻してもらうのが目的だったそう。父は、近所に住んでいる子供たちと同じように接したという。

遊んでいる時の子供たちの様子が、楽しそうだったとうれしそうに語ってくれた。

父は、このボランティア以来仕事の都合で時間がなく、行けなかったと悔しそうに語った。

しかし、父はそのあと、「自立しだすころだったから、ある程度控えた。」と付け加えた。

ボランティアがすべてやってしまうのは、被災者の自立の妨げになる。だからある程度の支援をするのが大事だと父は言った。

父は、災害ボランティアの話の最後に、自分がボランティアに行った時に大事にしていたことを教えてくれた。

- ・どんな依頼が来ても対応する。

こういう支援がしたいではなく、被災者からのニーズに対応する。

- ・途中で支援を離脱するのを考え、過剰な支援にならないようにする。
被災者の自立を妨げないよう、支援の程度などを考えながら支援にあたる。
支援をしすぎると、過剰な支援を求めてくる。
例えば炊き出し。
最初は、おにぎりやパンの配布を喜んでもらうが、支援しすぎると「またパンか」といった被災者から不平が出てくる。また、支援する側にも変化が訪れる。
被災者からたくさん感謝されることで、私は神だというような昂揚感に浸ってしまう。
- ・自分を犠牲にしたボランティアはしてはいけない。
父は、2回目の支援ボランティア以来仕事の都合で支援に行けなかった。
助けたいという気持ちはあったが、仕事を放り出して被災地に行けない。
自己犠牲のボランティアはしてはいけないということだ。
このことは、環境防災科のボランティアの時によく和田先生がおっしゃっている。
ボランティアを理由に勉強を適当にして、欠点をとったり、部活動の練習をおろそかにしたり、自分がやらなくてはならないことを適当にしてボランティアに参加してはいけない。
まさにこのことと同じだと思った。
最後に父は後悔したような口調であることを教えてくれた。
月に一度少林寺拳法の講習会での同期が当時淡路に住んでいた。連絡先を知らなかったため、震災以降連絡が取れていないという。どうなったか、心配だと語ってくれた。

4 話を聞いた感想やまとめ

- 今回初めて震災当時の話を聞いて、いろんな発見があった。
- まず、最初に思ったのが同じ姫路市でも揺れ方が違うのだなと思った。
- 父の住んでいた、姫路市大津区では、物が動くほど揺れた。
- しかし、母の住んでいた夢前町では、揺れたがものが動くほどの揺れではなかった。
- また、白浜区では壁が崩れるといった被害があったと教えてくれた。
- このように、同じ姫路市でも北部と南部また、東部とで被害の大きさや揺れ方に違いがあった。
- また、これも驚きだったのが、17日の朝にはいつも通り皆が出勤していたと聞き神戸と姫路とでこんなにも差があるのかと驚いた。このことが市民の防災意識低下につながっているのかなと感じた。
- 志望理由を持つきっかけとなった市民の防災意識の低下。
- 今回父や母の話を聞いて低下の理由が少し分かった気がする。
- 神戸が大きな被害を受けているとき、姫路市ではほぼいつも通りの日常だった。このことから、地震が来ても大丈夫という意識を生むのかもしれない。
- 父が災害ボランティアに行っていたことで様々なことを教えてもらえてよかった。
- 今回の機会初めて震災時災害ボランティアに行っていたことを知った。
- 今度熊本に被災地にボランティアで向かうが今回教えてもらったことを生かしたいと思う。
- 全て自分たちでやってはいけないというのは大事だと思った。
- あくまでも、自立支援。過度なボランティアは被災者の妨げになる。
- そして、話の中に出てきた3つのポイント
- ・どんな依頼が来ても対応できるようにする
 - ・途中で支援を離脱するのを見極める。過剰な支援にならない
 - ・自分を犠牲にしたボランティアをしてはいけない
- このことを考えながら、支援ボランティアをしたいと思う。
- 特に2つ目が難しいと思う。張り切りすぎて、被災者の方がやるべきこともしてしまっってはいけない。
- しっかり考えながら行動しなくてはならない。
- また3つ目のポイントも大事にしたい。体調が万全でないのに、活動をしてはいけない。しっかり体調管理をしたうえで熊本での活動に当たりたい。無理をして自分が倒れて逆に被災地に迷惑をかけてはぜったいに駄目である。
- このことは、ボランティアは自己完結ということにもつながるだろう。けっしてボランティアに行った

のに被災地に迷惑をかけてはならないのだ。でも、もっとも大切なのは、被災者のニーズにこたえることだ。しっかりとそのニーズにこたえられるように臨機応変な活動に努めたい。

5 私が環境防災科を目指した理由

私が環境防災科を目指した理由は、この環境防災科で防災について学び、卒業後私の故郷である姫路市で防災を広め、市民の方々の防災意識を高めたいと思ったからである。

私の住む姫路市では、阪神・淡路大震災発生時震度4で被害はほぼ出なかった。そのためか、私の周りの人は防災意識が神戸の人に比べても低い。

今後30年以内に発生するといわれる南海トラフ巨大地震のことも、淡路島や四国があるから津波なんか来ないといっている人もいた。その時このままじゃだめだと思った。

このまま防災意識が低く、何の備えもしていない状態で南海トラフ巨大地震が発生したらたくさんの悲しみや後悔が生まれる。そんなつらい思いをしてもらいたくない。そんな思いをする人を一人でも多く減らしたい。そう思うようになった。

環境防災科の存在を知ったのは、24時間テレビで放送された特集だ。

当時中学1年生だった私は防災を学ぶ学科があるのだ。こんな学科で勉強できたら良いなと思った。

母に、「この高校に行きたい」というと「神戸やから受験できない」と言われ断念した。

しかし、中学3年の時にオープンハイスクールの案内があり喜んでそれに参加した。

そこで受けた授業は、Active防災Ⅰという科目で、内容はおもかげ復元士の話だった。

この授業がとても心に残った。またActive防災では心のケアについて学べると知り、心のケアについて学びたい。このことを生かして将来消防士になったときに人の命だけでなく心も救いたいと思い目指した。

6 私の夢

私の夢は高校入学当時と変わらず消防士になることだ。

中でも、消防音楽隊を目指している。消防士として人を助けるのはもちろん音楽隊員になり、音楽を通して防火・防災の大切さを市民の方々に広めたいと思っている。

消防音楽隊とは、消防職員から構成され市が行う行事などで演奏を行い、市民に防火・防災の大切さを伝えるほか消防業務の広報活動などを行う部隊である。

兵庫県内には、地元姫路をはじめ、神戸、西宮の3市の消防本部に設置されている。

現職の消防職員から構成されるためまずは、消防士にならなくてはならない。

消防音楽隊を目指している理由は、自分の好きな吹奏楽を通して防災を広めたいと思ったからである。私は現在、吹奏楽部に所属している。聴いている人を笑顔にできる演奏を目指し日々練習に励んでいる。

吹奏楽を始めたきっかけは、避難所で慰問演奏をする音楽隊の特集をテレビで観た時である。

それは東日本大震災から数か月経った日のニュースの特集だった。

避難所となった体育館で演奏する東北方面陸上自衛隊の音楽隊が特集されていた。

音楽隊の演奏を聴く被災者の方々の姿がとても心に残っている。

演奏を聴いている被災者の方々は楽しそうに、時には涙しながら演奏を聴いていた。

その時、自分も吹奏楽をしたい。演奏を聴いている人を笑顔にできるような心に響く演奏をしたいと思った。そうして高校から吹奏楽を始めたのだった。

高校2年の時、神戸市消防音楽隊で活躍している環境防災科の先輩にお話を伺う機会があった。

いろいろと消防音楽隊について教えていただいた。また消防学校体験入校の際には、パート練習室や合奏室などを見せていただいた。消防音楽隊の存在は知っていたがますます興味を持つようになった。

そして、自分から消防音楽隊について調べるようになった。

調べていると姫路市消防音楽隊が小学生とその保護者を対象にコンサートと避難訓練をミックスしたイベントや神戸市消防音楽隊が震災を知らない世代である小中学生を対象に学校で「♥命のコンサート」という命の大切さや震災の記憶を伝えるコンサートを行っていることを知り、自分が高校時代頑張ってきた吹奏楽と3年間学んだ防災の知識を生かしたいと思い、消防音楽隊を目指すようになった。

私は消防音楽隊員になり、市民や子供たちに防災の大切さや命の尊さについて音楽を通して広めていきたいと思っている。特に子供たちに命の大切さ、尊さを伝えたい。

理由は、高校1年の時に祖父を、高校2年の時に祖母を相次いで亡くしたからだ。

私は、いつも優しい祖父や祖母が大好きだった。その二人を亡くし、たくさんの辛い思いや、「もっとありがとうと伝えたかった。」「もっとたくさん会って話をしたかった。」という後悔で悩んだ。学校にいる時も悲しさのあまり泣いてしまった時もあった。

そんなつらい思いをしたからこそ、命の大切さや尊さを伝えたい。私のように大切な人を亡くして辛い思いをする人を少しでも減らしたいのである。大切な日と過ごす時間を大切にしてほしい。

また、自分や相手が悲しまないために、自分の命をどう守るのかも考えてほしいのである。

もう1つ私は消防士になってしたいことがある。

それは、緊急消防援助隊として大規模災害が発生した被災地に出動し消防活動を行いたいということだ。

緊急消防援助隊とは、大規模災害発生時被災地からの要請を受け、都道府県の枠を超え被災地に出動し救助や、消火、救急など各種消防活動にあたる応援部隊の事である。

神戸市消防局の場合、消防音楽隊は大規模災害発生時特別消防隊として特殊車両を使用して、消防活動にあたる。特別消防隊は緊急消防援助隊兵庫県大隊神戸市隊の後方支援部隊として出動することもある。また、姫路市消防局では消防音楽隊は消火・救助・救急・予防などの消防業務に携わりながらの兼務体制である。また指揮、消火、救助など多数の部隊が緊急消防援助隊兵庫県大隊に登録されており大規模災害発生時緊急消防援助隊兵庫県大隊姫路市隊として姫路市から被災地へ出動する。

毎年のように、各地で大規模な災害が発生しており緊急消防援助隊も出動する機会が増えている。

大規模災害発生時、たくさんの命を救いたい。

この様に、私は普段消防業務に携わりながら、消防音楽隊として市民に防災広報を行い、大規模災害発生時緊急消防援助隊兵庫県大隊の登録部隊として被災地で消防活動したい。

消防士である以上、人命救助の最前線に立ち、様々な人の命を救いたい。

祖父母を亡くした時、私は日に日に弱っていく二人のために何もしてあげることができなかった。

そのことで、今でもすごく後悔している。

もう二度と、何も助けられず、ただ見ているだけの後悔はしたくない。人の命を救う職業に就きたいと思った。そのとき、祖母の救急搬送時にお世話になった、救急隊員の姿を思い出した。

自分も、あの時の救急隊員のように人命救助に携わりたい。

祖父母と同じように、苦しんでいる人や助けを求めている人を一人でも多く救いたいと思った。

私たちが平和に暮らしている今も、火災や交通事故、急病など様々な災害や病気によって、命の危機にさらされている人がどこかにいる。その現場に行き、命を救いたい。また、日々起こる災害だけでなく、大規模災害発生時でも市民の命を助けたい。

環境防災科で様々な災害の話や災害で亡くなられた方の遺族の方の話を聞き、災害によって、大切な人を失う辛さ、救うことのできなかった悔しさを知った。

その教訓を生かし、日々訓練に勤しみながら、将来起こる大規模災害発生時一人でも多くの人々を救いたいのである。また、大切な人を亡くして辛い思いをする人を、一人でも多く減らしたい。

“経験していないからこそ語り継ぐ”

中村 磨奈

今から21年前。1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災発生。
神戸の姿は一瞬にして変わってしまった。実際に経験していない私は、実際に経験した父に話を聞いた。

1 父の話

当時25歳だった父は神戸市西区にある建設会社に勤め、その会社の寮で生活していた。母とは交際していたが、結婚はまだしていなかった。

(1) 震災直後

1月16日、父は母が一人暮らししている垂水区にある家に泊まっていた。次の日の17日午前5時46分、“この世の終わり”と思うような縦揺れで目が覚めた。父はとっさに横で寝ている母に覆いかぶさった。その後も揺れは続き、倒れてきたタンスを父は片手で支えたという。

揺れが収まり少し落ち着いた父は「会社に行かなくては」と外に出た。外にでると道路から煙が出ており、ガス管が破裂していた。信号も止まっており不安な中、父は無我夢中で車に乗り会社へと向かった。

(2) 緊急出動

父が無事に会社に着いたのは7時頃だった。そのときには、すでに数名の社員が到着しており無事を確認しあった。その後、要請を受けた会社の社長の判断により、緊急出動することが決まった。その場にいた社員約10人が緊急の横断幕や回転灯を付けた4台の車に分かれて乗り、山麓バイパスを通り、東灘へと向かった。その途中、板宿のあたりが炎上しており渋滞が起きていたが、白バイが先導してくれた。

午前11時ごろ父らは東灘に到着した。到着した直後から、パニックになっている人々に神戸市職員と間違えられ「お前らはなにしとんじゃ!」とたくさんの文句を言われた。建物は倒れており、阪神電車の線路は潰れていた。何をしたらいいかもわからず、勝手に触れない状況だったという。実際、父の目の前に倒れていた建物の下から足が2本見えていたが何もすることができなかったという。

(3) 復旧活動

震災発生後1カ月ほど父は災害復旧に従事していた。高速道路や、家やビルが倒れ一番のライフラインである道路が寸断されていたため、ひたすらガレキの撤去作業を行った。しかし、ガレキを撤去する重機を運んでくるにも、通れる道が限られていたため1日かけての仕事であった。また、撤去したガレキを運ぶにも、運ぶ道路が寸断されており1日1回、多くても2回程しか運ぶことができなかった。そのためガレキは減るどころか増える一方であった。

ガレキの撤去作業に加え、水道管が破裂して水が使えない地域へ給水車で飲み水を届けに行ったり、食料の配達も行った、食料の配達では、特に弁当の配達をした。暑い日もあり、運ぶまでに時間がかかるため、腐りそうになった時もあった。活動するにも、交通誘導員の人数も全然足りなかったため、交通整理も行いながら作業を進めた。しかし、みんながパニックになっており、“自分が自分が”になってしまい、仕切る人がいなかったせいで思うように進まなかったのが現実だったという。

その時は、一般的なサラリーマンの8時～5時の8時間労働ではなく時間無制限で活動していた。日が落ち、暗くなって時計を見ると早や22時。「今日はこれぐらいで帰らせてもらうか」と言い現場を後にする。そこから帰るのに2時間かかるため、家に着くのが0時。次の日も7時前には出勤するため、睡眠時間は十分ではなかった。しかし寝れるところがあるだけ良かった。家が潰れたり、火事で燃えてしまった人たちは寝る場所が無いので野宿するしかなかった。その中でも1番辛かったのは、家族を亡くしてしまった人達だった。その人たちの姿を忘れることは一生ないだろうと父は話してくれた。

父らのように現場で作業している人も大変だったが、復興計画を立てそれを準備する人たちもノイローゼになるぐらい頭をフル回転させ頑張っていた。そうやって頑張っている人が大半だったが、中には「はよせんかい! 何もたまたしとんや」と何の考えもなしに怒鳴ってくる人もいた。

国道2号線は、阪神高速道路が倒れたため復旧までにかかなり時間がかかったが、その他の道路は震災当日に比べると1ヶ月後には、それなりに道路らしくなっていたように思う。しかし、いつまでたっても渋滞が解消することはなかった。

トイレの水を流す污水管も破損したため、仮設のトイレがあちこちに置かれた。震災当日、トイレに行き最後の水を使ってしまったことを、震災から21年経ち妻となった母に今でも言われている。しかし、母が言ってくれるおかげで震災を忘れることはないだろうと最後に話してくれた。

2 ボランティア活動

私は環境防災科に入学したことをきっかけに色々なボランティア活動に参加させていただいた。春祭りや地域の夏祭り、防災訓練のお手伝い。地域の祭りのお手伝いが直接防災に繋がるわけではないが、地域コミュニティ作成に少しでも役立っていたら嬉しい。また、地域でのボランティアだけでなく、防災ジュニアリーダー育成合宿や募金活動にも参加させていただいた。高校2年の8月には、丹波地方で起きた土砂災害の泥かきボランティア、高校3年の6月には、熊本地震被災地支援ボランティアにも行かせていただいた。この他にもたくさんのボランティア活動に参加させていただき、たくさんの人と話をする機会があった。

その中でも、私の心にずっと残っている言葉がある。それは、NPO団体で学生スタッフとして子供たちと一緒に防災・減災に関するワークショップをしているときに高知県のある小学生が言っていた、「僕が住んでるところは南海トラフ地震が起こったらすぐ津波が来るから危ないねん。やから僕が率先避難者になるねん！」という言葉だ。東日本大震災以来、率先避難者という言葉は使われるようになった。自分が住んでいる地域のことを知り、自主的に防災に取り組んでいる小学生の姿を見て、私も負けていられないと思ったと同時に防災について知りたいと思っている子供たちのお手伝いをしたいと思った。これから先もどんな形であれ、防災教育に関わっていきたいと思っている。

ボランティア活動をさせていただく中で私は、人と人との繋がり的重要性を学んだ。地域の夏祭りではその地域に住んでいる小学生や中学生、おじいちゃんやおばあちゃんとたくさん喋ったりすることによって仲良くなることができた。防災ジュニアリーダー育成合宿や、ぼうさい甲子園では同じ防災を勉強している同世代の子にもたくさん出会った。兵庫県内だけでなく東北地方の子たちとも仲良くなった。実際に東日本大震災を経験している子がほとんどで当時の話もたくさん聞いた。これからもこの繋がりを大切にしていきたい。

3 将来の夢と防災

私の将来の夢は栄養士になることだ。栄養士は簡単に言うと“食のスペシャリスト”である。小さいころから食生活や料理をすることが好きだったことが食の道を選んだことに大きく影響している。栄養士には、病院で働く栄養士や給食会社で働く栄養士、幼稚園で働く栄養士、スポーツ栄養士や自衛隊の栄養士など様々な種類がある。その中でも私はスポーツ栄養士になりたいと思っている。スポーツ栄養士とは名前のごとくスポーツに深く関わる栄養士の事だ。スポーツ栄養士の主な仕事はスポーツ選手を食事の面からサポートすることである。調理技術や栄養学だけでなく、幅広い実践的な知識と技術が必要となる。また、選手の個性の把握や、運動心理学、カウンセリングの技術も必要となる。つまり、栄養士としての知識に加え、スポーツ栄養の知識も持っている。そのことによって、食に直接関わる現場だけでなく、リハビリの現場でも活躍することが出来る。

災害時、避難所では老若男女同じ食事が配られる。そうなるとうちでも食事の量が足りなかったり、栄養のバランスが悪くなってしまう栄養障害が起こる。栄養障害になってしまうと、専門知識を持った栄養士による栄養指導が必要となる。また、普段リハビリを受けている人が満足にリハビリを受けることが出来なかったり、食事療法が必要な人が食事療法を受けることが出来ないという問題も起こる。これもまた、専門知識がないと対応や行動ができない。栄養の面でもリハビリの面でも、より高度なサポートをするためにスポーツ栄養の知識が必要となる。

環境防災科を卒業したからといって全員が防災に直接関わる仕事に就く訳ではない。実際に私も直接防災に関わる仕事に就こうとは思っていない。しかし、私は自分次第で防災に関わることができると思っている。例えば自分の住んでいる地域のイベントや防災訓練に参加することで地域コミュニティの強化に繋がる。接客業であれば話題として防災を伝えることができる。このように自分の意識次第で防災に関わったり、伝えたりすることは出来るのである。私は日常的に防災に関わり続けようと考えている。そして、災害が起きた時には環境防災科の3年間で勉強したことを職業の両方を生かし、率先して活動できる人でありたい。

4 話を聞いて

今回、この“語り継ぐ”を書くにあたって初めて親に当時のことを聞いた。幸い身内が全員無事だったこともあってか、震災当時のリアルな話は聞いたことがなかった。父が地震発生後すぐに会社に向かったこと、その後すぐ緊急出動したこと、現場で復旧活動を行っていたこと…。話を聞いていると驚きの連続だった。話を聞いて、災害をもっと身近に感じるようになった。目の前に足が見えていたり、助けを求めているのに何もできない自分がすごく悔しかったと話してくれたときの父は今までに見たことのないぐらい真剣な表情だった。私のために思い出したくないことを思い出し、話してくれた父に感謝している。

私が環境防災科に入学してから、我が家の防災意識はガラッと変わった。私が入学するまでは、「もうあんな地震起きてほしくない」と話していた母が、私が入学し学校で勉強したことを家で話すようになった今では近いうちに起こるとされている南海トラフ巨大地震に関するニュースを見たり、食料を備蓄したりしている。子供に防災教育をすると家で子供が話し、親にも防災が伝わると習ったのを自分自身がすごく実感している。

5 私にできること

環境防災科の入試の時の面接で「震災を風化させないために、あなたには何ができますか？」と聞かれたのを今でも覚えている。あの時なんと答えたのかは緊張していて覚えていないが、環境防災科で約2年半勉強してきた今でも自分にすごく大きなことができるとは思っていない。

防災に関わり始めてすぐの高校1年の時に、「震災を経験していないあんたらに何が語り継げるねん」と言われたことがある。そのとき私は「たしかにそうだな。実際に経験していない自分が語り継いでいいのかな…」と思った。その後もその言葉が気にかかり続けていた。しかし、環境防災科の卒業生の先輩にこの話をしたとき、「実際に経験していない世代やからこそ語り継ぐことに意味があるねんで」と言っていた。この言葉を聞いてすごく楽になった。募金活動で街頭に立たせていただいた時や、春祭りのボランティア活動など実際に阪神・淡路大震災を経験した人たちと話をする機会がたくさんあった。話をしていると「若い子たちがこうやって風化させないように頑張ってくれているのが嬉しい」と言ってくれたおばあちゃんがいた。その時私は、これが正解なんだと思った。私にできることは経験した人の話を聞いたり災害について学び、風化させないために自分より若い世代に伝えていくことだと思う。

“経験していないから語り継げない”ではなく、“経験していないからこそ語り継ぐ”。

「私にできること」

新山 琴音

1 はじめに

震災が起きた21年前、両親はまだ結婚しておらず、別々に生活していた。父母、それぞれに聞いた阪神・淡路大震災、また今年90歳になる曾祖母から聞いた阪神・淡路大震災を私は語り継ぎたいと思う。

2 母の体験

(1) 午前5時46分

母はいつもと違って、少し早く目が覚めた。母の部屋は2階にあった。すると、ピカッと稲妻の光のように光ったと思った瞬間ゴゴゴゴという地鳴りがして、ドンッと突き上げられ、とても激しい揺れを感じた。当時の母はまだ結婚をしておらず実家暮らしで、両親、妹、祖母、犬のロンと暮らしていた。母は隣の部屋にいる妹に「なにこれ・・・大丈夫？」などと声をかけた。妹も無事で、2人で一緒に布団をかぶって揺れがおさまるのを待った。当時飼っていた犬は吠えるのをやめなかった。揺れがおさまると母の父（祖父）が「おまえら大丈夫か」と2階に走ってきた。そして落ち着いて自分たちがいる隣を見ると本棚がひっくり返り、本やガラスが散らばっていた。「もしあの時起きていなかったら本棚の下敷きになって命を落としていたかもしれない・・・」と母は言った。家族全員無事でけがもなかったが、家の中はひっくり返り、壁には亀裂がはいっていた。そのような状況の中、揺れで少し開いていた玄関の扉から犬のロンは外に出て行ってしまった。急いで追いかけたがその時は見当たらなかった。母たちは余震が続いていたため、家の中は危険と感じて外に出た。ガスの匂いがして、空気も悪く、まだ薄暗くとても寒かったという。母が当時住んでいた神戸市垂水区は被害が軽い方だった。建物の壁にひびが入ってはいたが、倒壊した家は少なかった。周りの家からも次々と人が出てきてみんな混乱しており、「これなに・・・」「何があったんや、信じられへん」などとポツリとつぶやいていたようだ。みんなで集まって家の被害のことを報告したりしていると余震がきて、気持ちが落ち着く暇もなく過ごした。少し日が昇ってから母と母の父（祖父）は車に乗ってロン（犬）を探しに行った。あらゆるところに母の父（祖父）の洗濯する前のTシャツをちぎって置いて行った。垂水の健康公園の山のところに着き、須磨や長田方面を見ると空までもが赤く、母たちは言葉を無くした。「これからどうなるんやろう」ととても不安に思ったようだ。

(2) 懐中電灯1本で生活した夜

1日目の夜、ライフラインはすべて止まっていた。幸いお風呂の浴槽に前日沸かした水があったので、トイレの水はそれを使ったようだ。お風呂に入れず、夜は1本の懐中電灯の光だけで過ごした。夜は暗くてとても寒く、家族みんなで肩を寄せ合って寝ていた。しかし、余震のたびに目が覚め、家のミシミシという音にビクビクと脅えながら過ごしたようだ。余震は続いていて熟睡することもできず、水や食料も十分になかった。また、ロンはまだ帰ってこない。母たちは心も体も休まる時間がなく限界を迎えていた。

(3) 地震から5日後

5日後親戚の家から一本の連絡が入った。「お風呂沸かすから入りにおいで」と。親戚の家は現在の福田小学校前にあった。被災はしていたが、母の家同様、壁に亀裂が入り、食器棚が倒れたぐらいの被害だった。しかし、家の庭には井戸があり、またプロパンガスだったため、電気以外のライフラインは何とか補えていた。母達は車に乗って親戚の家に行った。その途中、全壊している家や、スーパーやコンビニの前できた長蛇の列をただただボーッと眺めていたようだ。親戚の家でお風呂に入らせてもらい、とても心身の疲れが安らいだようだ。また、「従妹にもあえて、ガスを使って温かいものを作ってもらって、とても安心した。それから地震の時のこと、今の状態を語り合った」と母は言っていた。そんな中、入れ代わり立ち代わりで親戚の家のご近所さんがお風呂を借りに来ていた。その後母の祖母（曾祖母）の家や、母の叔母の家の様子を見に行き無事を確認して家に帰った。家に着くと、お隣さんが家の前で待っていた。「やっと帰ってきた。ロンが帰って来てたよ。今うちの家にいるから待って」といい、しばらくしてロンを連れてきてくれた。母たちは涙を流しあったようだ。ロンはとても疲れていて、ドロドロだったので、貴重なきれいな水でタオルを濡らしきれいに拭いてあげた。ロンは母の父（祖父）のちぎったTシャツをくわえていたが、それを離し、安心したようにすり寄ってきた。「人間も大変やったけど、野良猫とかも見ててかわいそうな

ほど痩せていたり、足をけがしてたりかわいそうやった。でも余裕がなくて助けてあげることではできなかった。」と母は言った。この話を聞いて人間だけでなく、動物にとっても阪神・淡路大震災は大きな被害をもたらしたのだと感じた。

3 父の話

(1) 父の行動

私の父は震災当時明石市港町に住んでいた。午前5時46分、父は熟睡していた。すると今まで経験したことのない地鳴りがして、驚いて目を開けた。するとその瞬間ドンッというとても大きく大きな音と同時に激しい縦揺れが起きた。ここは危ないと感じ立とうとしたが、立つことができなかった。すると部屋に置いてあった本棚が倒れてきて頭を激しく打ち、顔の上にはたくさんの本が降ってきた。揺れが落ち着き、自分の部屋から避難しようとして、部屋に散らばったガラスで足を怪我をした。慌てて家の外に出ると、近所の家から人が道路へと集まっていた。そしてとてもガス臭かった。屋根瓦があらこちらに落ちていた。隣の家との間にあるブロック塀が倒れていた。少し気持ちが落ち着いて、薄暗く寒い中、家族と手分けをして片づけを行った。父はまだ若く、力もあったので力仕事を行った。また、近所の子の家の瓦の落ちた屋根にブルーシートを張って回った。とにかく必死だった。みんなに余裕がなく、身近な所から解決していくしかなかった。日が昇って少し明るくなり、だいぶ気持ちが落ち着き、当時付き合っていた私の母に連絡しようと思って、家の電話を手に取ったが電気が止まってしまったため、つながらない。この時代、今のように携帯電話が普及していたわけでない。しばらく連絡が取れなくて、不安で仕方なかったと父は言っていた。気持ちは落ち着かないが、仕事に行かなければと思い、車に乗って会社に向かった。道路は亀裂が入り、信号は機能しておらず、同じように仕事場へと向かう車で渋滞していた。朝8時ぐらいに出発したが、普段なら40分ほどで着いていたが、会社に着くとお昼だった。須磨や長田に近づくにつれて空が赤く、周りの建物も被害が大きかった。車に乗っていたが、ガスの臭いや木が燃えている臭いがし、体で感じる温度もとても暑かった。会社につき、みんなの安否確認を行ったが、ほとんどの人に連絡がつかなかった。父の仕事は土木業なので、震災前には下水工事の仕事を行っていたが、現場の被害状況もすぐには分からなかった。

(2) 復旧

父の働いていた会社に災害復旧の話が入ってきたのは震災から1週間ほどたった日だった。当時行っていた下水の工事は一旦中断し、中央区から東灘にかけて雨水幹線の工事を行うことになった。雨水幹線に瓦礫が崩れ落ちて閉塞してしまっていた。そのため、雨水がたまり、二次災害を起こす危険性があるため、いち早く撤去作業をしなければならなかった。父たちは素早く行動したが、現場に行くまでの道のりの多くが通行止めされていたため、現場に着くまでに半日もかかった。自衛隊の車も多く、災害復旧応援作業の札を付けていないと道を通れなかった。初めは交通制限されている道も通れていたが、日に日に規制が厳しくなり、現場にたどり着くことがなにより大変だったそうだ。現場についても、大きな重機を持ってくるのができないため、瓦礫を1つ1つ手作業で取り除かなければならなかった。

また現場に辿り着くまでに見た光景はショックだったと言っていた。鷹取や須磨は燃え続けており、東灘では「〇〇さんが見つかりません」の立札があらこちらにたっていた。そして、ほとんどの家がつぶれていた。仕事場も近く、よく来て見慣れていた景色が一気になくなり心の中にぽっくりと穴があいて何も考えられなかった。ただただ瓦礫を少しでも早く取り除かなければと必死だったそうだ。

震災から半年がたち、ごみの問題、瓦礫をどこに集めるのかという問題が浮き上がってきた。それまでのごみの処分場では神戸市中から運ばれてきた瓦礫でいっぱいになり、臨時の焼却炉が作られた。燃えないゴミ、瓦礫は埋め立てられた。新長田や東灘では再開発の話が持ち上がった。父は新長田にある公園の防火水槽を作った。新しいまちづくりはこの地域だけで、ほかの地域は道路の復旧、現状復旧が行われた。父はいろいろと復旧工事にかかわってきたそうだ。

その後、仮設住宅も出来はじめ、父は西神の竹の台にある仮設住宅の草刈を3年間行っていた。

4 私の思い

(1) 両親の話を聞いて

両親から阪神・淡路大震災の時の話を聞かせてもらい「初めてこんなに深くじっくりと話を聞かせて

もらった」と感じた。環境防災科に入って、災害や防災のことについて家族と話す機会は増えたが、阪神・淡路大震災のことは不思議とあまり話題にならなかった。私が「阪神・淡路大震災の時のことについて話聞きたいんですけど・・・」というとき母は「私らが住んでいたのは垂水やし、長田とかほど被害大きくなかったしなあ。話せること少ないで。もう21年もたってるし記憶も薄れてきているからなあ。」と言って話してくれた。母の話を聞いて、当時の事を語る機会が今まであまりなかったのかもしれない、振り返る機会がなかったのだと思った。建物被害などに大きい、小さいはあるかもしれないが、被害を受けたことには変わらない。そして、避難所に避難していなくても、ライフラインが止まったり、余震が続く毎日に心が休まる時間がなかったりと、つらく、大変な思いをしたことには変わらない。そしてその記憶は消えていない。私たちが真剣に向き合っている姿を見せることまた、話す機会を作っていく事が大切だと思った。私たちよりも若い世代に伝えていくばかりが「語り継ぐ」ではないのだと両親に話を聞かせてもらって感じた。語り継いでもらって私たちができることを考え行動に移す事が大事なのだと思う。父は「防災と言っても、全てに対応するのは不可能。事前に準備していても足りない。いつどこでどんな災害が起こるか分からへん。だからこそ、その場でどう行動できるのかが大事や。いかに身の回りの物を工夫して使えるか工夫や発想が大事やと思う。」と話してくれた。この話を聞いて、生活と密着した防災を行うことがとても大事なのだと思った。「防災」と改めて考えがちなが、意識しなくてもできる習慣にしていける事が大切だ。習慣ができるまでは時間がかかる。そして継続するためには努力が必要かもしれない。私も習慣を作るのは大変だと平日頃感じている。「やってみよう」「やらない」と思ってもそこに目的や、目標がない限りなかなか長続きはしない。防災を意識して行うのではなく、習慣として意識しなくても行える力をつけるためには、希望や夢をもって頑張ることが大切だと思う。そして、生きたい、だから防災をすることが大切なのだと感じる事が大切だと感じた。また、普段からいろいろな物を使ってみたり、チャレンジしてみることで、工夫や発想力を広げていけるのではないかと思う。

（2）曾祖母の話を聞いて

私には今年90歳になる曾祖母がいる。曾祖母に阪神・淡路大震災の時のことを聞いた。しかし、あの揺れはすごかった。怖かった。とそれだけで終わってしまった。そして、昔の生活の様子や自分のことなど昔の事を話し始めた。聞いていると、トイレの後は葉っぱを手で濡らせておしりを拭いたことや、ご飯を満足には食べられなかったこと、戦争のこと、自分の仕事の事など今の生活との大きな違いにとっても驚いた。そして「おばあちゃんにとって、震災はそれほど大きな出来事ではなかったのかもしれない」と感じた。昔はトイレトーパーなどなく、毎日ごはんを食べられることが当たり前ではない。みんなが工夫して生活してきたのだと感じた。今の時代は、とても便利なものが多い。そしてそれを私たちは少しでも楽をしようとして使用する。また、そんな毎日が当たり前だと思ってしまっている。それがいけないのだと思った。それが大きな災害へとつながっている、それが建物や心身のダメージを大きくしているのだと思った。震災の事だけでなく、昔の生活や生活の工夫などを知って、できるだけ便利なものに頼らない生活をするように心掛けることも防災の1つだと感じた。

5 環境防災科生徒になって

（1）今の私にできること

私1人にできることはちっぽけだ。でも防災はそんな小さなことの積み重ねで出来上がっているのだと思う。「環境防災科だから防災のことはよく知っている」そう世間の人たちは思っているだろう。でも私たちは普通の高校生で、普通科とは少し違った科目で勉強しているが、難しいことを勉強しているわけではない。誰もが生き抜くために、自分を守り、人を守るための当り前の事を行っている。私がこの学科を志望した理由は直接的には防災には関係ない。中学生のときの私が特別に防災に興味があったわけではない。リーダーシップをとることや、人前に立って話すことが苦手だった私は、環境防災科の説明会の時に、この学科の先輩が話す姿をみて「私もあんな風になりたい」また、「ボランティア活動してみたい」と思ったのがきっかけだ。災害や防災のことを何も知らなかった2年前。でも毎日のように災害や防災にかかわる授業を受けていくうちに、さまざまな感情や思いを持つようになった。また、授業やボランティア活動などを通して2年前と今の自分では大きく変わったと思う。具体的にはまず、行動的になった。昔は「やってみたくて、でもちょっと恥ずかしい」と思う気持ちがあり、勇気を出して一歩を踏み出せなかったが、

今は「やってみなくてはわからない。チャレンジしてみよう」と思って何でもチャレンジできるようになった。また、地震などの災害が発生した際、テレビなどでの緊急地震速報が鳴ると、素早く気づけるようになった。そして、出かけたときなど「今ここで地震おこったらどうしたらいいか」「もし津波来たらどこに逃げたらいいのだろう。」「非常口はどこにあるのだろう」と考えるようになった。このように気づけるようになったのも、防災に毎日のようにかかわって危機感を持てるようになったからだと思う。

(2) ボランティア活動を通して

私は2年生の7月から災害メモリアルアクションKOBÉというボランティアに参加している。去年は阪神淡路大震災を体験された方からお話を伺い、グループごとに違ったアウトプット方法で阪神淡路大震災を語り継いでいくということを行った。私たちの班はインプット方法として、垂水駅前で街中ヒアリングを行った。その時に「今、ご家庭では何か防災を行われていますか?」と聞いた。すると、防災といわれても何をしたらいいのかわからない、少し面倒やな、しないといけないとは思いますが今すぐ必要としていることではないから後回しにしてしまう、今からしてなくても何とかできるだろうなどと思う人も多いことがわかった。「防災」と聞くと、堅苦しいイメージや難しいなど感じるのかもしれない。そのようなイメージを変えていく事ができるのが私たちではないかと思う。何か特別なものをを用意する必要はなく、お風呂の湯船の水を流さず置いておくことや、部屋の片づけを行っておくこと、地域の方とのコミュニケーションをとることなども防災になる。わざわざ非常食を用意する必要はない。普段から使う食材をストックしていればいい。また、今の生活にどんな工夫をしたらいいのか一緒に考えて、防災を楽しみながら行える工夫を考えていきたい。このように多くの人が簡単な防災から楽しみながら行い、つねに危機感をもてるように伝え方を工夫することが大切だと思った。それが私にできることだと思う。

6 夢と防災

私の将来の夢は幼稚園教諭になることだ。幼稚園教諭という職業は防災とは切っても切り離せない。幼稚園でおこる災害は自然災害だけでなく、交通事故や火事、遊具からの幼児の転落など、予期せぬ災害や事故が起りやすいと思う。それに対応できる力をつけることが大切だと思う。また、幼児に対して防災教育をおこなっていく事も大切だ。そんな時に実際体験していない災害について語るのは難しいだろうと思う。体験された方からお話を伺い、それをそのまま伝えるだけでは幼児には伝わらず、心を動かせない。私にできる語り継ぐためにできることは、知ったこと、感じた事を伝えることも大切だが、防災や災害について知ってもらい、考えるきっかけを作り心を動かすことだと考えている。将来は幼稚園教諭となって、子どもの生活に少しづつ防災要素をとり入れていけたらいいと思う。また、そのために、ほかの先生方と一緒に遊びに防災を取り入れたゲームやパズルなど手作りの教材を考え、作っていききたいと思う。そして、こどもに希望や夢を与え続けることができ、一人ひとりに向き合って、子どもにとって居心地がよく、毎日行きたいと思ってもらえる幼稚園づくりをしていきたい。夢に少しでも近づけるように今やるべきこと、できることを精一杯頑張りたい。また、これからも1人でも多くの笑顔が輝き続けるように防災に関わり続けていきたい。

自分に照らし合わせて考えてみる

面尾 玲音

1 阪神淡路大震災

(1) 概要

発生日時 : 1995年 1月17日 5時46分52秒
震源地 : 淡路島北部(北緯34度36分、東経135度02分)
震源の深さ : 16km
地震の規模 : マグニチュード7

“人的被害”

死者数 : 6,434名
行方不明 : 3名
負傷者(重症、軽傷合わせ) : 43,792名

“住家被害”

全壊 : 104,906棟 (186,175世帯)
半壊 : 144,274棟 (274,181世帯)
一部破壊 : 390,506棟

“ライフラインへの被害”

水道断水 : 約130万戸
ガス供給停止 : 約86万戸
停電 : 約260万戸
電話不通 : 30万回線超
(全てピーク時)

(2) 当時の様子

—母の体験—

21年前の1月17日。当時母は、高校2年生だった。垂水区に住んでいた。

前日の1月16日は何かの代休で学校は休みで、ごく普通に友達といつも通り遊んでいた。

阪神淡路大震災が起きた当日。大きな揺れで起きる。母親が自分のそばへとっさに引っ張りよせてくれた直後、枕元にガラスの人形ケースが落下した。アップライトピアノはかなり移動し、外階段も離れてしまっていたそうだ。

(3) 揺れの後

電気やガス、水道などのライフライン等は復旧にかなりの時間がかかった。余震も多く、屋内に居るのが怖く、1日だけ高丸小学校のグラウンドで車中泊をした。

近所のコンビニエンスストアではほとんどの食料がすでに売り切れていた。外はガスのにおいがあちこちから漂い、鳴りやまないサイレンの音とヘリコプターの音。火事などの煙が原因とみられる灰色をした雨も見た。

1週間以上お風呂に入れなかった。そして、東垂水の友達と母の人生における2回目の銭湯。そのときは地震に対する不安や怖いという感情はなく、何なら修学旅行のように少し楽しいに近い気分だった。地震発生から少し経ち、久しぶりの高校登校日、JRが須磨終点で、通っている高校のある和田岬まで須磨から仕方なく歩いた。在校生ほとんどが学校を欠席していた。通っていた高校も長い期間、避難所として使用されていた。

今の様にインターネットも普及してないので、TVやラジオ新聞紙のみが情報源だった。

母は、自分が守られる立場から、親になり、子どもを守る側になったということで地震などの自然災害に対する怖さというものがより一層増した、と言っている。

2 私の夢

(1) ダンス

私は幼少期から色々な夢を持っており、高校に入学してからも夢が定まっていなかった。だが、今はしっかりと1つの目標がある。

それは、ダンス関係の仕事に就くことだ。小さい子どもにダンスを教えるダンスのインストラクターや、ダンス仲間とコンテストなどに出場するようなコンテストチームを組むなど、ダンスと言ってもひとくくりにせず様々な視点から多種多様な「ダンス」というものに触れ続けていける。1つにこだわらず、色々な「ダンス」の世界に触れて、これからの生涯を生きていきたいと思っている。

まず、私自身がダンスと出会ったのは小学校5年生の時だ。その頃友達周りで流行っていて、何の気なしに体験にいったら自分の中で何かはまったと直感で思った。約8年間続けていたピアノを辞め、ダンスを習うことにした。そんな始まりから今年でダンス歴が7年目になった。この7年の間、初級クラスから中級クラスに上がるため必死で練習してダンスと向き合い続けてきた。色んなジャンルのダンスを習い、色んなダンスのコンテストやショーなどを観に、足を運んだりもした。そんな中でも様々な人と出会い、別れを経た。私の、誰とでも分け隔てなく接する事ができるという長所がよく活かされた。

小学生の時からずっと一緒に頑張ってきた幼馴染は全員辞めた。とても心細かったが、ダンスを習ったことによって出会えた大切な仲間が私にはたくさんいる。良い刺激をたくさん私にくれる良いライバルであり、良い仲間だ。だから今現在もこうしてダンスを続けられている。そして高校卒業後は、ストリートダンス専攻の専門学校へ通うことが決まった。これでまた1つ、夢へと近づいた。

(2) ダンスと防災

私はなぜ環境防災科に入ったか。最初はとても不透明な理由だった。けれど環境防災科について知るたびに防災の勉強に興味をわき、人と違うことがしたいという性格もあって入学を決めた。

高校1年、2年、と防災や自然災害、さまざまな職業の方とお話する機会がたくさんあり、何よりも環境防災科を卒業した先輩方や在学中の後輩と繋がる事ができる。という特徴が、より一層自分の世界を広げられる事がきっかけにもなったと思う。

その中で、私の夢である「ダンス」の世界と、「防災」をどういった風に繋がられる事が出来るか。全く関係がなく、程遠い位置にあるようだがダンスと防災は様々な面から関連付けることができる。

例えば、災害時、屋内である避難所に避難するのが怖くて学校のグラウンドに車を止め、車中泊している方たちによくみられる「エコノミークラス症候群」。これは震災関連死の1つで、2004年10月23日に発生した新潟中越地震や、2016年4月16日に発生した熊本地震で浮き彫りになった症状だ。

これまで健康だった人が突然死することがあるこの病気は、長時間同じ体勢でいると足の血液の循環が悪くなり、静脈の中に血の塊（静脈血栓）というものができ、歩行などをきっかけに足の血管から離れ、血液の流れに乗って肺に到着し、肺の動脈を閉塞してしまうというものだ。災害時は、避難所以外にもこういった問題があるのだ。

災害の被害から免れ助かった命をこのような形で亡くしてしまうというのは本当にあってはならないことで、1人でも多くの命を守りたいと強く思うようになったのも、災害の怖さなどを環境防災科で学び、今まで以上に知る事が出来たからだ。

そこで考えたのが、避難所でのダンス教室だ。主に、車中泊している方々に向けて行う活動とし、声をかけて外へ出てきてもらい、みんなで楽しく、簡単な足のステップや手の動き、体一部だけでなく全体を動かせるようなダンスを作り、教えることで血液の循環を良くし、静脈血栓をできないようにするのが可能だと考えた。車中泊の人だけに限らず、避難所生活している方々にもできるように活動し、ご年配の方でもできるように椅子に座ったままできるようなダンスや、小さい子どもでも簡単に踊れるダンス。体を思い切り大きく動かすことで、日々のストレス解消や、運動不足の解消につなげられると思った。そのほかにも、防災にダンスを織り交ぜたものを作り、楽しく防災を知れて、かつ、災害時に役立つようなものを作り、広げていきたいと考えている。

(3) 私の今後

環境防災科に入り、ある程度の知識を付け、学び、実際に自分の目や耳や心で様々な情報を吸収していくうえで、今の自分で伸ばせる力は何か、と考えたところ一番身近なダンスと防災だった。

防災の勉強に3年間を費やしてきたように、専門学校もたった2年という短い間だが、ダンスの事をしっか

り勉強し学校で勉強していこうと思う。環境防災科に入ったおかげで、自然災害や災害時の対応、災害後の対応などと色々な視点から考えることができるようになった。なので、私は高校卒業後、ダンスの専門学校に通うことを決めた。高校3年間で学んだものはこれっきりで関わりを絶つ、ということではなく、進路先の友達にも伝えていこうと決めているし、ぶれないようにしっかり志を持ち続けようと考えている。

だが、まだ私は個人単位で動く力は全然と言っていいほどない。災害時にダンス教室を開きたいと言ったが、自分からアクションを起こすような事は難しい。もしこういった活動が本格的に取り入れられるようになれば、私は率先して参加させていただきたいと思う。はじめは他人の力を借りてしまうかもしれない。けれど、いずれかは自分だけでも動くことができるようになりたいと考えているし、こういった活動が可能になれば、ダンスを広めることもでき、なおかつ防災の知識も伝えることができるはずだ。

被災地に行って活動することだけが目的ではない。被災地先での1人1人との出会いを大切にしていきたいとも思っている。帰ってきてからも出会った人達と関わり続けたいとも思う。被災地先の活動以外にも、小学校や中学校などにダンスの出前授業という形でダンスと防災両方を伝える活動も視野に入りたい。そのような活動を行うことによって、ダンスの楽しさを知ってもらえてダンスを習おうと思ってくれる子ができるかもしれないし、防災の方に興味を持ち、防災関係の道に進みたいと思う子がいるかもしれない。ダンスと防災、双方が持つ力の「可能性」というものは計り知れないと思った。私はそんな風に思えるダンスと防災が学べて、沢山のいい仲間に出会えた環境防災科に入って、本当に心からよかったと思っている。どちらをとっても、私は誇りに思う。言葉以外に自分の事を表現できるダンスと、人によって伝え方の異なる防災。これらはどちらでもいえることだ。そういう面ではやはり、ダンスと防災は繋げることが可能だったのだ。

私はこれからも今以上に自分の世界をさらに広げ、沢山のひとと出会い、別れ、自分の力になるようにこれからもがんばっていきたい。

当時の話を受けて

西村 映輝

1 はじめに

阪神・淡路大震災は1995年1月17日に発生した。自分は17歳なのでまだ生まれておらず、震災を体験したわけでもない。あの日神戸を中心に起こった大震災は決して忘れることはできない、あのときの教訓はずっと語り継いでいかなければならない。そのため、当時兵庫県西宮市に住んでいた母の話を語り継いでいきたいと思う。

2 母から聞いたこと

(1) 地震発生前

母は、前日の深夜まで試験の勉強をしていた。その日はかなりの時間机に向かって勉強していたはずだったが、疲れがこなかった。3連休が終わろうとしており次の日は平日だったため勉強も大切だったが、眠りについた。もう17日に変わった午前2時頃だった。

(2) 午前5時46分

睡眠時間は3時間半程度とあまり長くはなかったが、地面が割れるような音を聞いて目が覚めた。下から何かが喚いている声で体に響いてくるようだった。その音と同時に大きなトラックか飛行機が自分の家に突っ込んできたと思うほど大きな揺れが家を襲った。始めは地震と分からず、何が起きているのか理解できないうでいた。下から突き上げるような揺れとともに母は布団から軽々と飛ばされるような形で宙に浮いた。身の危険を感じ、布団を被りとっさに部屋の何かに必死にしがみついた。だが、部屋にあったものは踊るように動き、かなり不安定な状態だった。部屋にある棚やタンスが倒れかかったのを見たのと同時に「これで死ぬのかもしれない」と悟った。2つ、3つものタンスが自分目がけて倒れてきたが、頭をかすめたものの下敷きになることはなかった。地震の揺れで普段置かれている場所から数cm動いていたことが生死を分けた。不幸中の幸いだった。しかし、タンスは壁にもたれる形で倒れてきたために八方ふさがりになり50cmほどのスペースしか残されていなかった。身動きもとれないまま救助を待つしかなかった。1月の午前5時46分はまだ夜の真ただ中な状態で、揺れはおさまったものの状況が把握できないでいた。家族の助けにより狭い空間から抜け出すことができ、自分に何が起きているのかを知ることになった。よく生きていたと今でも思うほどだった。

(3) 地震直後

家族の安否が確認されて、まず懐中電灯を探し、真っ暗の家のなかを照らすと置いてあった場所に家具がなく、テレビは棚の上から落ち、壁から反対の方向に転がっていて、冷蔵庫も倒れていた。人の力では動く気配のないものが、簡単に動き、地震の大きさを物語っていた。食器も多くの数が割れ、使い物にならなかった。それを見て「これは自分の家ではない、どこか違う場所に連れてこられた」ように感じた。辛うじて家自体は崩れることなく、形を留めていたが、あまり新しい家ではなかったので崩れてもおかしくはなかった。使えそうなものを懐中電灯の明かりを頼りに探し、倒れているタンスの中から引っ張り出した。地震と無縁だと思われた兵庫、神戸の街に突如襲ってきた地震だったために人生で避難生活を経験することはないと思っていた。しかし実際に体験してみると、とんでもない苦悩に襲われた。家の中はものが散乱している状況な上に非常用持ち出し袋は用意していなかった。水、食料ともに不足だということは目に見えていた。自分の近くの小学校が避難所になっていることは知っていたので、そこに行くことにして家を出た。地震の影響で道原形をとどめていない場所も点在していたが、何とか避難所に辿り着くことができた。小学校の体育館の中を見てみるとかなりの人でごった返していた。家が倒壊して仕方なく避難した人も多かった。老若男女問わず、顔を見たことがある人、ない人が混ざりあい言葉に表せられないような感じだった。自分たちのスペースを確保したが、後から後から続々と人は増えていった。場所の広さとして家族4人分に対してはかなり少なく、朝も昼も食べ物も飲み物もなかった。この地域一帯でライフラインが止まり、情報も何一つ入ってこない。夜が近づいていくにつれて不安が募るばかりだった。避難所にいても、余震は続き体育館は少し揺れていた。そのたびに本震の様子が脳裏に浮かび、離れなかった。余震によって恐怖と感じている人もいた。やっと夜になり食料が届いた。「1人おにぎり1個」で小さなおにぎりが配られた。避難所の人

数分は確保されていたが冷たい何も包まれていないおにぎり。それでもとてもありがたかった。

(4) 電気のない夜

阪神・淡路大震災が発生したのは1月17日。かなり寒い時期だった。電気もない体育館は寒さとの戦いだった。毛布はあったが、1枚だけで温くなるわけではなかった。段ボールも無く、仕切りも疎らでプライバシーもなかった。人の隣に人がひしめき合っていた。そんななか電気のない体育館に200人以上の人が避難してきていた。不安と周りの環境の変化で夜、寝ることは容易ではなかった。誰かが立ち歩くと周りの人は気づき、人の声は小さくても響いてくる。すべてが筒抜けのようだと感じた。こんな状況をすぐに慣れるという方が難しい。それは多くの人が同じように感じ、寝つけていなかった。知らない人と同じ場所で布団も暖房もない中で過ごした記憶は今でも忘れることができない。

(5) 次の日

恐怖の1日から一夜が明けた。自分の家ではないうえに余震が続き、寝られるものではなかった。朝早くから子供の泣き声が響き、多くの人が目を覚ます。電気も通っていないので午前6時では真っ暗な状態であった。「江戸時代の人々はこのような生活をしていたのか」とどうでもいいことを思った。指定避難所であったために避難物資は徐々に届いてきた。朝食はパン1個とバナナ1本。まだ食料があるだけよかった。朝から周辺では行方不明者の搜索が始まり、近くでは土砂崩れが発生し、恐怖と隣り合わせだった。ライフラインは止まっていたが、給水車もいち早く到着し、途端に長蛇の列ができていった。しかし、水をもらうことができて水道が止まっているためトイレを流すことができないでいた。仮設トイレは何個かあったが並ぶことがとても退屈で、避難所にいる人は水を飲むことを躊躇した。電気はその日に復旧したために明かりは灯った。電気の大切さと重要さが身に染みた。避難所においても何もすることがなかった。運動したくてもできず、1日同じ場所にいるだけ。そんな日々には子供たちはかなり退屈な顔を浮かべていた。普段なら友達と遊んでいるはずなのに大人の顔を見て様子を伺いながらじっとしていた。「本当は遊びたいだろうに。」と考えた。大人も子供も体を動かすことはめっきり減ってしまった。時間が過ぎるのはいつもより遅く感じた。お昼にはお弁当が配られたが、数が乏しく2人に1つだった。それを家族で割って食べた。夕方になってもお風呂に入ることができず、日常の生活に戻りたいと強く思った。この生活がいつまで続くのかと先が長く感じた。夜には温かいおにぎりとおペットボトルのお茶が1本。やっと、食べ物が喉を通った気分になった。しかし、寝ることはできなかった。

(6) 1週間

避難生活も1週間も経ち、やっと避難所生活にも落ち着きが見え出した。どこでどれほどの被害が発生しているのかの情報も手に入るようになっていた。一日中テレビでNHKが流れ、死者・行方不明者の名前が絶えることがなかった。全国から避難物資も届き、1日1日何とか過ごすことができた。お風呂も少し入れるようになり、少し安心した。震災当時から考えればとても改善された気がした。しかし、一向に避難所で生活している人の数が減ってはいかなかった。段ボールなどの仕切りにできるものもなく、プライベート空間は確保されず初めと同じような状況が続いていた。箱詰め状態のまま、また時日が過ぎていった。小学校の体育館は避難所と化しているので「いつ学校の再開ができるのだろう」と少し考えてみたりもした。電車も全面的に運転見合わせていて当分、子供は学校に行くことが出来ないだろうと思った。1週間ぶりに家の整理のために戻ってみると、今思えば当たり前のことだが家を飛び出してきた頃と何も変わることはなかった。普段の家に戻っておいてほしかった思いもほんの少しあった。家にあったほとんどのものが倒れ、潰れていた。片づけを始めようと足場確保にガラスやお皿の破片を地道に取り除いていった。そして倒れてきたタンスを立て直し、必要なものを改めて取り出した。服、布団など持って行けるものは持っていくことにした。しかし、避難所は自分だけの場所ではないので「ここにあるものを避難所に持っていくことは難しい」と叶わなかったものも多くあった。このまま家に戻って住むことはできないと感じたが、それは現実になってしまった。

3 仮設住宅の辛さ

避難所生活が安定し、行政も本格的に動けるようになってきた頃に仮設住宅の情報がだんだんと飛び交い始めた。やっと避難所生活から逃れられる、そう思っていた。しかし、そんなに容易ではなかった。確かに近くでは仮設住宅が多く、多くの場所で作られていた。家に辛うじて戻れる人は家の整理をしてまた住み直していたが、家が半壊だったために仮設住宅の生活を余儀なくされた。しかし、避難所には多くの人、家族がいる

中で全員が仮設住宅に入れるわけではない。まずは抽選が行われ、そこから選ばれていくのだ。建設された数は多くなかったが何とか仮設住宅に入ることができた。しかし、ここからが苦戦の連続だった。仮設住宅は文字の通り仮で建てられた家となっている。隣の声が筒抜けの状態は日常茶飯事だった。話し声はもちろん、テレビの音も響く。夜になるとお互い気を付けていても今何をしているのかが手に取るようにわかった。周りに住んでいる人はこれまで近所に住んでいた人ではなく、知っている人はかなり少なかった。そして、地震が発生したのは冬の1月だったが、時を見てみれば春の4月。これから暑くなっていくことが何よりも大変だった。どれだけ窓を開けていても風の流れは悪く、部屋の中はかなりの温度で保たれていた。とても住宅と呼べるものではなかった。4人に対して部屋は狭く、部屋も3部屋しかなかった。この生活が1年ほど続いた。いつここから出られるかも分からないなかで不安が付きまとい、実際に住んでいた家と比べると環境がかなり違っていた。それでも普通の生活に戻すための兆しは少しずつあった。鉄道が再開し、学校が始まり、倒壊した建物の撤去など震災が起こったという爪痕が消えていった。

4 母の話を聞いて

この阪神・淡路大震災を実際には体験することがなかったが、体験談を聞き、当時の状況は計り知れないほどの規模の災害だということが感じられた。当時の様子を自分の身内から聞く機会もあまりなく、初めて知ることもありあった。阪神・淡路大震災の話を聞きたいと伝えたところ快く話してくれた。普段から会話の多い家庭だが、いつもと少し違う時間が流れていたような雰囲気だった。「忘れたくても忘れない日」と小声で言われたことは一番印象的で、この機会がなかったらこれから話すことはなかっただろうと言われた。当時、神戸よりも東京の直下型地震が懸念されていた。しかし、発生したのは兵庫県南部地震。多くの人が神戸に地震は起きないと信じていた。神戸に地震が起きることはないと思われていたなかで、最大震度7の地震が発生したことは人々に大きな被害を生み出したきっかけとなったといえるだろう。そのため、災害の備えなどは全くと言っていいほど手薄になっていた。地震がどのようなものかとわからないなか、実際に揺れが発生する前に聞いた地面が割れている音を今でも鮮明に覚えていることを聞くと、耳から離れることの無い、忘れられないものだと思った。あと数cmで生死を分けた部分もあり、もしかすると自分は这个世界に生まれていなかったのではないかと感じた。当時の避難生活はかなり過酷で、行き当たりばったりの状況で一日一日過ぎしていくことは先が見えずいつこの生活から抜け出すことができるのかわからなかった。今は復興により、地震の傷跡は姿を消しつつあるが毎日当たり前のように学校に行き、勉強し、ご飯を食べ、自分の布団で寝る。このたわいもない生活も一瞬にして打ち碎かれることはいつでも起こることだと感じた。地震大国日本において、災害とは切っても切れない縁であり、どこで甚大な被害が発生してもおかしくない状況だと普段から念頭におかなければならないと思った。自分自身が被災者の立場になるのかはわからない。そのためにも備えておくことが必要となってくる。自分を助けるのは自分だということを再確認していきたい。次の日が平然とやってくることはない、当たり前のことこそ当たり前と思わないように過ごしていこうと思った。

阪神・淡路大震災を経験している私の家族だが、防災についての知識は皆無に近い状態だった。環境防災科に入学して少し防災のことについて考え、情報を共有することも増えた。家族が防災に興味を持ってきてくれているように思う。そのことがとても嬉しい。これから未来の災害に備えて、家族でもっと考えていきたい。

5 これからの災害

阪神・淡路大震災、東日本大震災などの震災を学び、次に起こると考えられている地震として南海トラフ巨大地震が挙げられる。30年以内に70%という高い数値が出ており、海溝型地震のために揺れのほかに津波を伴う。揺れの大きさも然る事ながら津波の大きさは最大30mと予想されている。それが20分以内に襲ってくる場所があるため、早めの避難が必須である。そのような地震がいつ起きてもおかしくない。それが明日なのか、1年後なのか、これを読んでいる時なのかもしれない。巨大な地震が発生するならば、被害を最小限に食い止めるために家の中の整理や転倒防止などできることをしておくことが必要になってくる。これは地震に限ったことではない。台風や大雨などの災害でも備えの必要性は大幅には変わらない。できることは少なからずあるはずなので、細かなことでもやってみることがつながっていくと思う。予測をしても突然災害が起こり、被害が甚大になることは稀ではない。災害が起こった時こそ助け合っていくことが大切

だと考える。災害の規模はこれから多くなり、局地的ではなく広範囲に伴って被害が発生する可能性がある。1人でも現地に関心を持ち、「なにかしよう」という気持ちが小さなことでもつながっていく。少しでも多くの人が動いてもらえたら嬉しい。自分も同じように自ら行動できるようになりたい。

6 将来の夢

私の夢は消防官だ。なりたと思ったきっかけは当時2歳でバスから見た救急車を見て初めて「ピカピカ」言葉を発したことだった。それから毎日のように消防署に通った。それも影響して幼稚園の頃には消防の仕事のいろいろと教えてもらった。毎日のように消防署に行っていたためにだんだんと消防という道に魅かれていった。テレビや授業で阪神・淡路大震災や火事の映像や写真を見て、こんな被害の大きい場所で仕事するのだと目に焼き付くように見ていた。阪神・淡路大震災の映像で家は地震の揺れで倒壊し、火が街を焼きつくし、水を待っても消火活動ができていない消防士の無力さを1月に時々目にしていた。また、小学校6年の時に発生した東日本大震災では多くの命が津波によって亡くなり、自分に何ができるのだろうかと思った。環境防災科で災害や防災の知識をもっと身につけて、将来の夢である消防士になりたいという思いに対して向き合いたかった。消防学校に体験入校させていただいたときにかなり大変な思いをした。自分の力のなさを感じた。幼い頃から教えてもらっていたことはほんの一握りだったと思った。それでも幼い頃から抱いてきた思いを変えなくなかった。しかし、今の自分はまだまだ未熟者だろう。環境防災科に入学してから3年間で少しは身についたことはある。これから大学でも防災を学び、高校で学んだことを大学でより深く、新たな1歩としてより多様な分野から災害、防災について学んでいきたい。地震などの災害が発生すると人間は無力と化し、助けを必要とする人が大勢出てくると思う。微力ながら消防という立場で人の役に立ち、1人でも多くの命が失われないようにしていきたい。しかし、公助の力にも限界は存在する。自分の命は自分で助ける「自助」を多くの人に意識してもらいたい。実際に阪神・淡路大震災では自助による生存、共助による救助が多数を占める。災害はいつ、どこで自分に降りかかってくるかはわからないので自分にできる最善なことは妥協せずに行っていく。

子供たちにも地震の怖さや消火器の使い方を教えて実際にできるようにしていき、幅広い年齢に対して防災教育を行えるようにしていきたい。伝えていくことも大切だが、救助を必要としている人に対して向かっていくことはこの職の必要とされていることだと思う。砦として必要としている人に対して自分たちの職務を全うする。まずは自分の仕事をしっかりとこなしていくことを重要視し、活躍していきたい。多くの命を救う、目の前のことに取り組むことも大切だが、漠然とした目標でこ一番での活躍ができるようにしていきたい。そのためにも周りからの信頼、信用は欠かせないものだと思う。自分が掲げる思いをどう表現していくか、周りとの共立とともにできることにおいて前向きに取り組むことで自分のやっていくことが一歩ずつ進んでいく。また、職に就いてから学ぶことは多くあるだろう。

だが、基礎を作っている上に応用というように学んできたことに上乗せしていくことでより詳しく知り、学ぶことができいくと思う。自分たちのやることは限られているなかで最大限のことをするために予防から現場の活動までやること、なすことすべてやっていく精神で望んでいきたい。自分の地域に戻り貢献していき、これまでに多くのことを教え、伝えてきてもらったことに対して恩返しの形で自分よりも年齢の若いこれからの世代に伝えていけるようになりたい。

憧れから歩んできた道をこれからも進んでいきたい。

7 語り継ぐ

今回の語り継ぐはもっと多くの方に読んでもらいたい。阪神・淡路大震災から20年以上が経ち、毎年1月17日に当時の様子がニュースで流れる程度となり報道はめっきりと減ってしまった。風化ということはかなり懸念されている。被害にあった地域の人には忘れなくても、ほかに目を向けてみるとかなり温度差があるのは否めない。実際に自分の家族から話を聞き、実際に被害の大きさ、人々の様子が強く感じられた。初めて知ること多々あった。家が倒壊し、街が火の海となり、友人が亡くなっていったことなど21年前の1月17日の様子が自分のことのように思い浮かんだ。私のように阪神・淡路大震災以降に生まれた人は自分の家族に1回でも当時の様子を聞いてもらいたい。自分の街がどのような被害にあい、今では考えられないことも多々あることだろう。そのなかでこれからの災害に対して関心を持ち、自分で考えて備えをしてもらいたい。日本で生活していくのにあたって災害の多いこととは縁を切ることはできない。そのためこれを読んだ

ことを機に何か行動してもらいたい。非常持ち出し袋を作っておく、家族と話し合う、防災について調べてみるなどできることはさまざまだと思う。そして自分の聞いた話を少しでも多くの人に知って、伝えてってもらいたい。

自分ができることを見つけてもらう足がかりにしてもらいたい。

1 阪神・淡路大震災

1995年1月17日、午前5時46分淡路島北部沖の明石海峡を震源として、マグニチュード7.3の兵庫県南部地震が発生した。死者6434名を出した大規模震災である。震災から21年たった今、阪神・淡路大震災を経験した人のほとんどがこの震災について忘れかけていると思われる。実際、最近起こった平成28年（2016年）熊本地震で取り上げられていたニュースでも、阪神・淡路大震災を経験しているにも関わらず、「阪神・淡路大震災を経験していたが、すっかり忘れていた、これからは地震の対策をしていきたい。」という人がいた。あの大規模な震災を受けたにも関わらず、記憶が浅いという人がいるのに私はひどく驚いた。したがって、私は阪神・淡路大震災を風化させないためにも、環境防災科として学んできたことをこの場で活かし、私の親族から聞いた阪神・淡路大震災を語り継いでいきたいと思う。

2 震災当時の記憶

（1）テレビから見た神戸

震災当時、母は兵庫県の北の方、父は大阪の東の方に住んでいて揺れは感じていたそうだがたいした地震ではないと感じた寝ていた。翌朝、学校に行くために普段通りに顔を洗い、コーヒーを飲みつつテレビをつけた。そこでまず目に入ったものが、何もかもが壊れたものだった。最初は何が起きたかわからずチャンネルをいろいろ変えてテレビをみると、昨日起こった地震によるものだとやっと気づけた。父と母が住んでいる地域では、本が少し倒れただけで何も起きていないだろうと思っていたものが実は、こんなにも大きな被害が出ているとは知らずとても焦ったと父も母も言っている。

また長田の街では、とてつもない火事が起こっていた。あたり一面が火の海で、「これが火事なのか？」と言葉にし、（消防士は何をやっているんだ！）と心で感じていた。

次の火さらに報道は増える。報道陣に投げかけられる、「間っとなる場合か！とっとなるんやったら少しは手伝わんかい！人助けせんかい！」という被災地の人の言葉。それをみた父は被災地がいかに大変で過酷なものか、そして改めて今回の地震の規模の大きさを認識した時だったという。

（2）交通網の遮断

阪神・淡路大震災発生当日、大きな震災が来ているとわかっていても学校や、仕事には向かわなければならぬ。父は明石に行こうとしていた。母は地元で働いていたので特に交通で不便なことはなかった。だが父は、阪神・淡路大震災当日学校に行けなかったという。なぜなら、電車やバス等の交通網がぐちゃぐちゃにされていて、まともに動くことができなかったからだ。当時の父は携帯こそ持っていたけれど電話はつながらない、友達や学校にも電話をすることができない状況だったので歩いて学校に行くしかなかった。そして、学校についたときに見た光景とはいつもと違う光景だった。いつもとは違う光景、いつもなら歩いている道に木や瓦礫がたくさんあった。周りの家がたくさん崩れていた。学校の先生にだけ挨拶をしてその時は授業を受けずに帰ってきたと父はいう。もちろん帰るときも途中までは歩きで帰らなければならない。その時も悲惨な光景がずっと目に焼き続けていたという。

（3）ライフラインの断絶

私の母の家は、料理を提供しているお店だ。電気や水、ガスといったライフラインに関わってくるものは非常に大切であり、それがなければ仕事ができずお金を稼ぐことができない。阪神・淡路大震災が起きるその前の日も夜遅く23時ごろまで営業をしていた。「1週間分の仕込みができるものをして明日は定休日だからゆっくり休もう」と母の母（私の叔母にあたる人物だ）に言われ午前3時ぐらいまで仕込みを手伝っていた。

午前5時46分阪神・淡路大震災が起きた。揺れは神戸の街に比べたらとても優しいものだったが、揺れは確かに感じていた。母は、寝ていたけれど飛び起きたという。何事かと周りを見渡した。周りには、普段置いていたものが色々な場所に散らばり、まったくもって違う光景でその一瞬は夢だと感じた。体感で10分頃、叔母が母の安否確認にきた。「大丈夫か！？結構揺れ大きかったけどなんもなかったか？！」母はただ「うん…」と応えることしかできなかった。なぜなら、母を見に来た叔母の姿は、普段とは異なる姿でとて

も痛々しかったという。幸い命にかかわるような傷ではなかったのが良かった。その晩は眠ることができなかった。大きな被害はなく家が崩れているところもなかったのでゆっくり眠ることはできただろう。だが、眠ることはできなかった。母はその晩ずっと叔母の隣にいたという。

日が昇ってきた頃、家の片づけがひと段落ついた。少し落ち着こうと叔母が言い、家族でお茶を飲むことにした。そこで異変が起こった。水・ガス・電気の「ライフライン」が止まっていたのだ。少し休憩するつもりが、新たな異常事態に頭が痛くなってきた。ふと、脳裏をよぎった、(これまで受けていた注文はどうしよう…、今日の分は昨日仕入れしていたけれど…。料理屋にとってとても危うい状況にたたされた)。母は言う。一軒一軒の戸をたたき、事情を説明して回った。その時までには焦っていて周りの状況がつかめていなかったらしくお客さんに言われて始めて気がついたことがある。「うちも電気も水もガスも止まってんねんさかい！しゃーないやないかい！謝りに来てくれておおきになあ」。その時母は人の優しさを体験したと言っていた。人の温かさを体験したと言っていた。母の料理屋は地域とのつながりがとても強くいろんな人と仲が良かったので気楽にこのような申し出ができたと言っていた。ライフラインが止まって、とても大変な状況に陥ってしまった母の実家だが、地域の人の優しさと温かさのおかげで何とか乗り切ることができたという。

(4) 感謝からのボランティア、興味からのボランティア

阪神・淡路大震災が起きてから少したった日、母は叔母にある提案をしていた。「私たちがピンチの時助けてくれたんは地域みんなやから、ライフラインが回復した今、料理屋さんとしてできることをしたい！地域みんなに少しでもええから炊き出しやってみたい！」。母は家がライフラインの断絶で何もできなかったときに人の優しさや温かさにもふれることができて、とても安心し心が安らいだと語った。だから、母自身が何かを自分でもできるボランティアをしたいと思った。そして、叔母からのお許しが出た時には大きな鍋で炊き出しの準備をおこなった。母の家の厨房で作っているだけなので広範囲には配ることができなかったが、周り近所の仲がいい人や、店に来てくれたお客さんに炊き出しを配っていった。みんな笑顔で「ありがとう、とっても助かるよ」と言ってくれたことが今でも頭に残っていて心の底から「うれしい・この前の恩を返すことができた！」と思うことができたと言う。

一方父の住んでいる地域では、特に壊れている家や傷ついている人、地震の影響で生活に困っているという人は見ることはなかった。テレビでのニュース報道や新聞でみたことが、阪神・淡路大震災という震災の規模の大きさを認識した材料だと言っていた。また、新聞やニュースをみていると、自分にも何かできないのかという気持ちがわいてきた。ただ、父自身には何もできないことがないということがわかっていた。だから、始めに募金を行った。自分から活動することではなく、募金をしている人に託すことだ。それは、駅の前で声をかけている父より少し若い人たちだった。「阪神・淡路大震災の募金お願いします！」はつきりとは覚えていないが、このような言葉をずっと皆に投げかけていた。父はボランティアこそしたいと思っていたが、なかなか手を伸ばすことができずにいた。いざ、何かをしてみようや何かを手伝ってみようとなると勇気が必要だ、と父は言う。当時の父には勇気が少し足りなかった。次の日、また同じ集団を見つけた。同じ言葉を投げかけているその人たちに父は心を打たれた。「阪神・淡路大震災で被害を受けた子供たちのために募金をよろしくお願いします！」なんと立派な人たちだ。父は自分より年下の人たちがこんなにも一生懸命になっているのに自分がおどおどしていたのが恥ずかしいと言っていた。父が周りを見ると大勢の人が募金をしていることに気が付いた。「自分だけではないんだ、みんな神戸のことを助けたいんだ。」と言う。このくらいしか入れることができないけど神戸に持って行ってほしい、と当時の父は思う。そして、被災地の現状を何度もテレビで見ていると、これだけでいいのかと思うときもあった。だが、その少しのお金で助かる被災地もあるかもしれない。私自身は深くそう思い、とても立派だと思った。

(5) 復興していく街、復興できない人の心

震災から1年たつと街の復旧作業は復興作業へと移行していた。初めのころは順調にはいかず、なんだか停滞することもあったらしい。けれど、着実に『街は』復興への道をたどっていた。なぜなら、行政は先に街の復興に目を向けて住民の声をあまり聴かずに政策を推し進めていったからだ。街の復興を住民の意見と合わせようと思えば確かに大変だと思うが、そこに重点的に目を向けてばかりいるのではなく、もっと心のケアができるような環境づくりをするような方にもお金を向けてほしいと母は言う。母の周りにも、大きな心の傷を負った人はたくさんいる。地震が怖くて夜が眠れない人や、意識が覚醒してしまって不眠症を患った人もいる。当時の母の前では、そんなそぶりを一度も見せなかったというが、裏ではとても辛くて苦しい

日々が続いていた。と母は叔母から聞かされていた。当時は行政がしっかりしないから、こんなに大きな傷をもったまま生活をしないで済む現状が続いているんだとずっと母は思っていた。けれど、今になって思うとすべて行政が悪いんじゃないと母は言っている。確かに何かを対策してくれて、お金を心のケアをするような政策に回してくれていたならば、スムーズにケアができてもっと多くの人が助かっていたと思うが、それだけでは結局全員の心のケアをするのは難しいと思ったという。行政も完璧じゃない、必ず欠点もある、だからこそ行政とそこの地域住民が手を取り合って心のケアをすることが大切だと気付いたという。母は、この話をしている時に気づいて、とても後悔していた。自分にもできることはまだまだあったのに、すべてを出し切っていなかった。そしてこういつてくれた。「人間は助け合って生きていく生き物やで。一人で生きていていると思っている人も、絶対に誰かとつながっているし、心の中では誰かと一緒に行きたいと思ってる。完璧な人もこの世の中にはほとんど存在なんかせん。人間は欠点だらけやから震災の時はなおさら協力せなあかん。」このようなことを昔から母が思っていたらもっと多くの人を助けることができたのではないかと後悔をしていた。そしてこれからは、この思いのもと多くの人を助けることができるような存在になりたいという。

3 震災から21年の今

(1) 被災者の心と記憶

阪神・淡路大震災から21年たった今、人々の記憶や心には、大きく分かれて二つに分かれているだろう。阪神・淡路大震災を恐怖し覚えているか、もう忘れてしまっているか。なぜこのようなことを思ったのかというと、今回取材した父と母も軽くではあるが、阪神・淡路大震災の被災者であるのにも関わらず、あまり覚えていないというのが現状だった。冒頭でも記したように、今年（2016年4月14日）に起こった熊本地震で起こったことについて神戸市民に取材をするニュース番組をみると、大抵の人が地震のことを忘れており、風化しているという事実だった。大きなことは覚えているが、小さなことまでは正確に覚えていない。それが現状であり事実だ。

また一方で、まだ大きな傷を抱えている人も大勢いる。阪神・淡路大震災のことを忘れられずに今も家族のことで悲しんでいる人、揺れの大きさに恐怖し、少しの揺れでも昔の阪神・淡路大震災のことを思い出してしまう人もいる。これは、行政が先に土地の整備を行う結果として心のケアを必要最低限でしか行わなかったということがあげられる。これは、もう次の地震では起こしてはいけないことだ。したがって、今起きている、平成28年（2016年）熊本地震ではこのような心のケアを後回しにして外見だけを治すだけではなく、内面も治すような教訓がつくられていったらいいと思う。

この2つの問題はとても大きな問題だと私は思う。記憶に残しすぎて、ずっと過去のことを見すぎてはいけない、だからといって前をみすぎて過去のことを忘れてはいけない。これら二つをバランスよく保っていきこれからの将来の防災につなげていけたらと思う。

(2) 人のやさしさ

普段生活していて感じることがあまり多くないのは、誰かに対して感謝の言葉を述べることや感謝されることだと思う。この2つは私自身、信頼関係ができている相手でないと思われてくるものではないと思っている。なぜなら、初対面の人に何か手伝うや、お礼をするという行為はあまりないと思うからだ。あったとしても最近は軽い会釈や軽い挨拶そして、落としたものを拾うだけで終わってしまい本当の感謝というレベルにまでは達していないだろう。全員が全員そうだとは言いきることはできないが、最近は思いやりというものが不足しがちに思えて仕方がない。だが、震災が起きてしまったときはどうだろうか。母は、人が変わったように優しくなったと話す。事実、いつも一人で何かやっていた人も、誰かがガレキに埋まっていたならば自分の身の安全を確保していればすぐに助けに入っていただろう。自分の身が危険にさらされるかもしれないというのにだ。避難所の配給では、みんなお腹がすいている、生活に困っている人が多い中、きちんと順番を守り、そして「先にどうぞ」と声をかける人もいる。また、ボランティアで被災地の現場に来る人は、初対面の人に対して献身的にそして思いやりをもって行動することだろう。

いつもならしないこと、信頼関係がないと感謝するのはほんの少しでも、そこが被災地という現場になればだれに対してもやさしさをふるまうことができ、そして心の底から感謝する人が増えると私は感じた。また、いつもは会釈するだけの関係でも心の底からあいさつをし、信頼関係を持つようになって被災者同士が心のケアをしていくような関係をもつこともできるのが人の優しさの一部なのではないかと思う。

人の心の内側は、優しさで満ち溢れていると母の話を聞いて私がとても強く感じたことだった。だから、常日頃からあまり人に興味を持たず、周りとの関係を断ってしまっている人は是非とも考え方を改めてほしい。中にはどうしようもない人もいるかもしれない。でもその人の心の内側にも、優しさがあるのだと思う。そうして、優しさから暖かく心地よい人間関係を作っていき、地震や津波などの自然災害、交通事故などの人為的災害を減災できるようなコミュニティーづくりを行ってほしいと思う。そして、阪神・淡路大震災では震災後の優しさは十分だったが、震災前からの優しさが足りていなかったのだと私は思った。

4 将来の夢と防災

私の将来の夢は、警察官になることだ。私は、この警察官という立場になればこの立場を有効活用しない手はないと思っている。だから、私が警察官になれば、多くの市民に防災の仕方を学んでもらえるようにしたいと考えている。

私が考えている防災の広げ方は、災害だけでなく身近なことからの災害を守っていき、地盤を固めてから+αとして災害について考えていくということを教えていきたい。なぜなら、私自身、確かにいろんな人を幅広く守っていききたいと思うが、実際に震災等の災害や人的災害が起こるとすぐに公助というわけにもいかないからだ。まずは自助をしっかりとできるように、基本的なことを（例えば信号を守るや、交通ルールを守る等）をしっかりとするようにしてもらい、当たり前のことは当たり前にする、そうして自分を守っていくことを身に着けて行ってほしいと思う。事故が少なくなると私が警察官として活動する時間や機会が減ってしまうのは確かにあると思っている。だが、阪神・淡路大震災で一番命が救われたのは自助だ。したがって、自分を守るような行動をしていてもらいたい。そうして、災害について目を向けてもらい、自分の家の耐震工事を親と相談する。家具の固定や、食料の備蓄、非常持ち出し袋というものの存在を教える。このように、一つ一つを丁寧に理解し、勉強しながら防災という面に向き合ってほしい。また、自分自身を守ることができるようになったら今度は周りにも目を向けてほしい。それは、警察官が小学校に行って交通について教えたり、たばこ等のことの講習会を開いたりするときに教えることだ。周りに赤信号でわたっている友達がいたらそれを注意する。なぜなら、急に車が出てきたらけがをしまったりする危険性があるからだ。また、未成年での喫煙や飲酒これは、その人の体を壊してしまう。だから、ちゃんと注意を促すようにしてほしいと私自身思っている。それでもダメなときは、公助の出番だ。私が警察になったら、とにかく自助は大切だ。という考え方を教えていき防災力を高め、広めていきたいと思う。

5 感想

今回、私は初めて親に真剣になって阪神・淡路大震災についての話を聞いた。環境防災科では、常に防災の授業をしているので、ある程度の知識としては頭の中に入っていたが、私の記憶にない新しいことばかりを聞かせてもらいとても勉強になり、そしてこれからの糧にできると思う。

私の将来の夢は、警察官になることだ。警察官という職業は、大きく防災に関わってくる。今までは、これまでに得た知識を使って町の防災をより深くして、新しい災害に備える行動をしようと思っていた。だが、今回得た知識はとても大きかった。まだまだ知らないこともたくさんあると感じた一面もあり、もっといろんなことを知っていききたいと思うキッカケともなった。自身の父や母に、阪神・淡路大震災の話を聞くキッカケなど今までありもしなかっただろう。それは、恥ずかしさや、気まずさ、いろいろな感情に押しとどめられて聞くことができなかったのか、単に興味がなかったからだ。私は語り継ぐを通して、環境防災科だけでなく、もっといろんな人が防災について興味を持ってもらい自身の父や母に経験した災害の話を聞いてみてほしいと思う。それは、結局のところ防災するために、新たな災害に対しての減災に目を向けるためだけの活動になるだろう。しかし、実際に話を聞くとそれだけでは終われない何とも言えない感情がわき出てくることがある。それは、聞いた人にしかわからないことであり、聞いていない人は一生かけてもわからないことだろう。だから、『興味』というキッカケを持ってほしいと私は思う。それが、将来の災害に対しての減災だけで終わるとしても、話一つで救われる命があるのかもしれないからだ。過去になにか大きな災害を受けた人をただの興味で聞くのはよくない。だが、熱心にそして、自分が本当に知りたいと思う興味ならば、聞くしかないだろう。それは、今の言葉で教訓という形で残っている。その教訓で命が助かるならば、自分自身の将来を守れる可能性があるならば、是非とも真剣に話を聞いてほしいと思う。親に聞くのが恥ずかしい人があるならば、震災が起きた場所に足を運んでほしい。最近、熊本で大きな地震があった。私

私たちはその被災地について勉強し、6月14日から現地入りする予定になっている。被災地を教材という点だけで考えてしまうのはよくない。ただ、被災地で一生懸命に動いているうちに、いつの間にか教材として自分の心の中に残っているのだ。だから、足を運ぶ時もただ単に教材としてみるのではなく、何かを感じ取ってほしいと思う。そうして、感じたことを自分の息子や、地域の人に『語り継ぐ』として、語り継いでほしいと思う。

1 概要

1995年（平成7年）1月17日 午前5時46分52秒 死者6434名 行方不明者3名、淡路島北部沖の明石海峡（深さ16km）を震源としたM7.3の非常に大きな地震、兵庫県南部地震が発生した。近畿圏の広域（兵庫県を中心に、大阪府、京都府）が大きな被害を受けた。特に震源地に近い神戸市市街地、兵庫区、長田区、須磨区の被害は甚大で、日本国内のみならず世界中に衝撃を与えた。戦後に発生した地震災害としては東日本大震災に次ぐ規模であり、戦後に発生した自然災害では犠牲者の数で伊勢湾台風を上回り、東日本大震災が発生するまでは戦後最悪の自然災害だった。

2 本文の構成

私は祖母から聞いた祖父の話と母の話の2つの話を聞いた。母には①震災前の備え、②地震直後の様子、困ったこと、大変だったこと、③震災から時間が経ってから困ったこと、大変だったこと④阪神淡路大震災で学んだこと、⑤今行っている災害対策、の5つを聞いて順番に書いていく。祖母から聞いた祖父の話は簡潔に書きたいと思う。そのあと、これを聞いて感想（感じたこと、学んだこと）を書き、最後に、環境防災科でいままでに習ったことと、それらを生かして将来どのようにしていきたいかを書く。

3 母の話

（1）震災前の備え

一切していない。なぜかというところまでかい地震がくるとは思っていなかったから。大きな地震は絶対に来ないと思っていたわけではないがまさかこれほど巨大な（死者が出るほどの）地震が来るとは微塵も思っていなかった。

（2）地震直後の様子、困ったこと、大変だったこと

外は雪が降っていた。地震発生でかなり揺れたようだ。とてもでかい揺れのせいで、はじめは何が起こっているのか全く分からなかった。母はかなり目が悪く、視界に入るものは全部ぼんやりとしか見えなかった。ぼんやりとしか見えていなかったためはじめはポルターガイスト（心霊現象）かなにかだと思った。なぜそのように思ったのかというと、目が悪いため視界すべてぼんやりとしている。そこに地震の揺れによる上下運動、さらには目の前のものの落下などによって目の前のものが宙に浮いて回っているように見えたから。その後、これが心霊現象じゃなく地震だと知るのに少し時間がかかった。これが地震だと認識したのは地震が起きて少しの間動かないようにして落ちてから起き上がり、母の母（私の祖母）と母の妹と話して「今のなに！？」「地震じゃないの！？」「え！？ 地震！？」というふうにして気が付いた。なぜ地震だったのだと気が付かなかったのかというと、この地震が起きるまではこれほどでかい地震を体験したことがなく、これほど巨大な地震の揺れがどのようなものか知らなかった。そのため巨大な地震の揺れは未知の領域で生きてきて一度も感じたことのない強烈なナニカだった。母の妹はベッドの前にタンスを置いていたらしく地震で倒れてきて下敷きになっただけ。しかし奇跡的にそのタンスは横に開く型のタンスで、倒れてくる直前にその扉が揺れによって開き、たまたま、空いた扉の中に入ることができ助かった。でもこれが普通のタンスでそのままの重さで倒れてきていたならどうなっていたのかは、わからなかったと言っていた。当時、母が住んでいた地域は非常に被害が少なく、家の倒壊などもなかったため、地震直後でも電気もついたし、ガスも使うことができた、さらに水道の水も出ていた。水が自分の街の上の地区から順番に止まっていくという情報を当時街の上の地区に住んでいた従姉妹から聞いて、慌てて、風呂場に水を大量に貯めた。これは正解だった。そのうち、自分の家の水も止まってしまったそうだが早めに従姉妹に知らせてもらっていたため、大量の水を確保することができた。テレビも当時、ケーブルテレビだったので地震が起きてすぐ、すなわち、朝イチにはついてたそうだが、そのうち1回消えてしまったそう。そこから1日くらいテレビは使えなかった。母は当時、大学生だったが、地下鉄も阪急も両方止まっていたため、大学には行くことができなかったそう。

（３）震災から時間が経ってから困ったこと、大変だったこと

一番大変だったのはやっぱり電車がなかなか復旧しなかったことだ。上でも書いたとおり、母は当時大学生で園田に行っていたので地下鉄と阪急電車を使っていたのだが、地下鉄は一応、電車は一部を除いて通っていた。一部というのも上沢駅は駅舎自体が完全につぶれてしまっていたため復旧には時間がかかっていた。その間は上沢駅には止まらずにスルーして営業を行っていた。阪急電車ではあまりはつきりとは覚えていないみたいだったがたぶん御影と岡本あたりの被害がひどく電車はなかなか復旧されなかった。代替バスが当時でていたそうでそれを使用して大学へ行こうとしたのだが、震災前と比べてかなり車の量が増えていて道路がとても込んでいた。なぜかと理由を聞くとまだ瓦礫やひび割れ、土壌沈下等により通ることのできない道路がたくさんあり、みんなが通ることのできる道路に自動的に集中してしまい、かなり込み合っていた。普段なら１時間30分でつくのに、3時間もかかっていた。電車が止まっていた影響で大学にいけず部活ができなかったため母校である明石城西高校に練習に行っていた。大阪のほうからの電車は繋がっていたため大阪に住んでいる同級生には「体も元気で家も全然つぶれてないのに何で部活にこないの？」と聞かれた。あとは、母には直接的にも間接的にも関係ないのだが、当時母の住んでいた地域は非常に被害が小さかったにもかかわらず、紙おむつとペットボトルの水はどこに行っても常に売り切れていた。母は以前、長田のほうに住んでいたため長田に友達がいた。その友達にペットボトルの水を大量に買い持って行ったそうだ。

（４）阪神淡路大震災で学んだこと

このあたりにもあれほど大きな規模の地震がくるのだと思った。やはり対策をしていなければ突然襲ってくる災害には対応できないため、普段から対策はしておくべきだと考えた。さらにはもっと水をためることができるようなものを用意しておくべきだと思った。なぜなら、意外と飲み水以外にも水を使う機会がたくさんあり、被害が大きいところでは深刻な水不足だったのでこれは用意しておくべきだと思った。それ以外には母の妹がタンスの下敷きになってしまいそうになっていたのも突っ張り棒などによる家具の固定は大切だと思った。食料、保存食の備蓄はあたりまえだが絶対に必要だと知ることができた。あと、サランラップはあったらとても便利でいい。なぜなら、水が出ない時は食器を洗うことができず不衛生になってしまいがちだ。そこで皿にサランラップをかけて料理等をおくことにより水を使わずに何度も食器を使うことができるのでとても便利でお手軽で役に立つそうだ。

（５）今行っている災害対策

以前、地震にあって瓦礫等の下敷きになってしまった場合、なかなか声が出ずに助けを呼ぶことができないと教えてもらったので常に身に着けているスマートフォンに小さい笛をつけている。あと、ダンボールに大量に水を用意している。サランラップも新品のまだあけられていないものが5つほどある。紙不足になってしまう可能性があるのも、大量のティッシュペーパーと大量のトイレトペーパーも用意している。重たい家具は全て固定している。どこででも寝ることができるように家族の人数分の寝袋を用意している。地震による停電で冷蔵庫が使えなくなっても大丈夫なように大量の保冷材を凍らしておいている。さらにはクーラーボックスも6つ置いている。災害用ライトつきラジオを2つ、普通の懐中電灯を2つ用意している。ろうそくを5本と大量のカイロなどこのような様々なものを用意している。

4 祖母から聞いた祖父の話

あの頃は、奈良まで仕事に行っていたので始発の地下鉄に乗って通勤していた。祖父が電車で寝ているとガタンと大きな音がした。目を覚ますと、電車が動いていなかった。そしたら車内放送で降りて下さいと言われて降りると上沢駅で、道路がとても大きく陥没していた。まだ暗かったのでわからなかったけれど明るくなるにつれて、まわりがメチャクチャ潰れているのがわかってきた。何がどうなったのかわからない状態だった。道もわからなくなっていた。一応須磨方面へ歩き始めたけれど家はどうなったのか心配だった。電話すると大丈夫だったから安心した。それから長い時間、乗せてくれるタクシーを捜し歩いた。須磨辺りで運良くタクシーに乗ることが出来て帰ってくることができた。どこか違う所へ来たのかと思うような景色だったそうだ。

5 母と祖母から聞いた祖父の話を聞いた感想（感じたこと、考えたこと）

改めて聞くととても貴重な話が聞けたと思っている。以前、環境防災科に入る前に1度だけ話を聞いたこと

があったが、そのときには防災の知識もなく細かい内容の認識もせずただ漠然と大変だったんだなと思っていただけだった。しかし環境防災科に入って2年以上たってこういう形で改めて話を聞くと環境防災科に入る前に聞いたときよりも感じる事が多く、同じ話ではないくらいの気持ちだ。防災についてたくさん学んできたから理解できる部分がとても多いと感じた。私の母が当時住んでいた家は山を削って平らにしたニュータウンだ。そこには現在も住んでいて、母に家のどのあたりでどのようなことが起きたのかをとて具体的に教えてもらうことができ、とてもリアルだった。当時からずっと住んでいる今の家があるところは山を削ったところだが、非常に地盤が丈夫だ。その結果、震災当時の被害は少なかったのだと思う。しかし、だからこその地域で防災に力を入れるべきだと思った。なぜなら100%の安全は絶対にはないからだ。もしかすると阪神淡路大震災の大きな揺れで地盤が弱っていたり亀裂が入っているという可能性もある。よって家族全員で防災をしていきたいと考えた。さらに同じ場所に住んでいるということはまた、同じような被害に見舞われる可能性がたかいということだ。そのようなときにどのような行動をとるべきなのか事前に家族で話し合っていたいと思う。さらに私は驚いたことがある。それは母の防災意識の高さである。私の母は基本的に面倒くさがりなので防災対策をしても少しだろうと勝手に思っていた。しかし実際は阪神淡路で学んだことをしっかりと実践に移し、しっかりとした対策をとっていた。さらに環境防災科でも出なかったサランラップによる衛生面の対策はすごくいい対策だと思った。祖母の話では上沢駅の周辺の悲惨さを聞くことができて勉強になった。

これらの話を通じて私が大切だと考えたのは災害が起こった後の交通の便の整理の大切さだ。瓦礫等道路がふさがれてしまうことによって救助も入れない、供給、物資の配給もできないと様々な問題が発生してしまう。そこで私が考えたのは災害時に絶対に通ることのできる道を確保しておくことだ。これは普段は使用されていないものでこのような災害やどうしても必要な時だけしか使われない重要な車しか交通を許可しない道をつくって災害時の混乱を回避できるようにすればよいと思った。

6 環境防災科でいままでに習ったこと

環境防災科に入って校外学習や外部講師の方のお話、特色の授業で阪神淡路大震災や東日本大震災などについて、これまで様々なことを学んできた。一年の時の災害と人間では、阪神淡路大震災をいろいろな角度から検証し、命の大切さ、人とのつながり、助け合いの重要性を考えた。たとえば、水道局、ガス会社、電気会社の人にお話を伺い、どのように復興していくのか、被害が大きくなった原因はなんなのか、どのようなことを学んだのか、いまだどのような対策をしているのかなど事細かくきくことができた。これらのライフライン関係の人以外にも消防士や自衛隊が被災地でどのようにボランティア、復興活動を行ったのか、何が大変だったのか、ほかにも大学の教授や防災の専門家の人による講義（どのような死因が多かったのか、その原因は何だ、など）も行われた。さらに講師の方を向かい入れるだけでなく、私たち自らが防災に関係のある場所（野島断層、人と防災未来センター、人と自然の博物館など）に行ったりもした。さらには消防学校体験入校ということでロープ結策や放水訓練等、様々なことを体験することができた。二年の時は環境と科学という授業で六甲山フィールドワークに行かしてもらった。ここでは六甲山にある様々な地層や岩の種類、その特徴等を細かく学ぶことができ、災害時にどのような問題が起こる課等を知ることができた。長田のまち歩きでは震災による火災で特に被害の大きかった地域を歩いて回り、どこが悪かったなどを案内していただいている先生方の話を聞いて理解し考えた。さらには災害時に公園が果たす様々な役割についても知ることができた。あと一年生の時に行った消防学校体験入校のさらに一歩進んだ上級編を行った。ここでは一年の時よりも厳しくさらに発展した技術を習った。最後には今まで行った全ての訓練の総復習として総合訓練を行った。その他にも1. 17震災メモリアル行事では外部講師の方をお招きして我々環境防災科の生徒が司会進行をするという、教えられる側ではなく、教える側に。伝えられる側ではなく、伝える側としてうまいことすすめていった。このように様々な方にお越しいただいたり、様々な場所に私たちで行ったりして多くの知識を身につけ防災について学んできた。

7 将来の夢と将来どのようにしていきたいか

私は将来、消防士になりたいと思っている。なぜなら私の母に消防士の友達がいて小さい時からよく消防車に乗せてもらったり、救急車に乗せてもらったりしていた。そのときから漠然と消防士になりたいと思うようになっていた。具体的に目指そうと思ったのは中学2年の冬、高校の進路選択に悩んでいるときに舞

子高校で消防学校の体験ができるということでこのとき具体的に消防士を目指すことにした。

そしていろいろ学ぶにつれてより一層、消防士になりたいという思いが強くなっていった。私は消防士になってやりたいことが3つあります。

1つ目はたくさん現場に出動して経験をより多く積みたいと思っている。なぜなら消火活動はとても危険な作業だがとてもカッコいいことだと思うからだ。それと、消防士という仕事はどのような部署で働くことになったとしても経験は役に立つと考えたからだ。私は高校を卒業してすぐに消防士になりたいと思っているので、そのぶん、長い間現場に立つ仕事が多いはずだ。大学卒業して入ってくる消防士には頭脳という武器ではかなわないが、経験という武器があるのでどこに配属されたとしても役に立つことができる人間になれると考える。

2つ目は特別高度救助隊に入って災害の現場にいち早く駆けつけて救助活動を行うことだ。私は特別高度救助隊でも特に神戸市消防局に設置されているスーパーイーグルこうべに所属したいと考えている。理由は2つある。1つ目の理由は困っている人の役に立ちたいということだ。災害などで身体的にも精神的にもダメージを受けてしまった被災者の希望の光、心の支えになりたいと考えたからだ。2つ目の理由は平成28年度（2016年）熊本地震がきっかけだ。私は環境防災科で学んでいて熊本のために何かできることはないのかと考えたとき自分の力でできることはごくわずかで、自分の無力さに腹が立っていた。しかし消防士になって特別高度救助隊に所属することができれば、すぐに現場に向かうことができ、熊本のためにできることが増えると考えた。さらにこの先必ず起きるといわれている大地震に対応するためにはこの特別高度救助隊が必要になってくると考える。よって私は特別高度救助隊になりたいと思っている。

3つ目は2つ目に特別高度救助隊の現場を離れたらやりたいと考えている。それは広報部に所属して、現場で働いて得た知識と今までに環境防災科でならったこと、災害の特徴や防災についての知識などを様々な人に伝えて多くの人の防災意識を高めるということだ。災害時に大切になってくるのは自助と共助だ。それらのレベルを上げるのに必要なのは1つではないが一番大切なのは自分たちの町や命は自分たちで守るという意識を持つことだと私は考える。そのためにはより詳しく災害や防災について知っておく必要がある。そのために広報部が地域の小学校や中学校、高校などに出向き知識を伝えなければならないと思う。このように防災の輪を若い世代から広げていかなければならないと考えている。そのためには1つ大きな壁にぶち当たってしまう。それは大人の昔からの積み上げである思い込みという愚か者だ。この愚か者は非常に厄介で子供たちにどれだけ防災の大切さを伝えてもこの愚か者がねじ伏せてしまう。そこでこの愚か者を取り除くために私は地域の人たち、主に子供のいる保護者向けの講義を行いたいと考えている。それを行うことによって町全体の防災力アップにつながり、結果、それが災害に強い街を作り出すと私は考える。このように私は防災について、防災とかわり続けより多くの人を助けられるように環境防災科で習ったことを生かして一生をかけて学び続けたいと思う。

二度と繰り返さないために

平佐 光

1 はじめに

平成7年1月17日午前5時46分、阪神地区と淡路島を襲った、阪神・淡路大震災が起こった。私はその当時生まれてすらいなかった。そのため、阪神・淡路大震災を経験していない。だから自分の被災体験を語ることはできない。阪神・淡路大震災を忘れないためにも、震災を知らない次の世代に語り継ぐことは大切である。以下の文は実際に阪神・淡路大震災を体験した母と父の体験談を記したものである。

2 震災前

母の東灘区本山にあるアパートに父が泊まりに来ていた。地震が起こると思っていなかったため何の準備もしていなかった。そして地震が発生した。

3 母の話

(1) 午前5時46分

いつも通り普通に寝ていたら、下から突き上げてくるような地震がいきなりおこった。部屋の中の家具が一斉に倒れた。倒れたタンスの引き出しがおでこに当たりけがをして血が出ていたけど、揺れている時間が長く早く外に逃げたいという思いが強く、けがをしていることに気づかなかった。

(2) 揺れの後

揺れが終わり外に出ると、ガスのにおいがすごくして、倒れている家がたくさんあった。寝ていた時の格好で何も持たずそのまま避難した。母の住んでいたアパートの前の民家がつぶれていて、その家の前に立っていた男の子は裸足で靴がほしいといわれたけど、まだ余震が続いていたため家に靴を取りに帰ることができなかった。今でも靴をあげられなかったことを後悔している。すぐに近くの小学校に避難したが母を含め周りの人たちは上着を着ていなかったため寒そうにしていた。倒れていた家が多かったため救助を待っている人がたくさんいた。

(3) 日が明けてから

一度家に戻り食料などの必要なものを取り出した。その時に電話が一瞬つながり母の実家に無事を伝える電話ができた。電話を掛けた後はつながらなくなった。携帯電話がなかったため公衆電話にすごい列ができていた。アパートの前に止めてあった父と母のバイクは壊れていなかったため母のアパートの近くに住んでいる、母の親戚の様子を見に行った。向かっている途中、病院がつぶれていて、それがすごく印象に残っている。親戚の家についたら、親戚は無事だった。無事が確認できたから、父の祖母の長田の家に向かった。長田の家に向かう途中の道のりは、道路はひび割れていて、さらに建物がいたところで倒れていた。長田に近くなればなるほどいろいろなところで火事が起きていて、母はその光景を見てショックが大きかったため、自然と涙が出ていた。長田につくと、父の祖母と叔母の家族が、避難している、父の祖母の家の近くの学校の体育館に行った。父の祖母は入れ歯を家で失くしたため何日間かは、食事に困ったそうだ。父の祖母の確認ができたから、父の家に向かった。父の家についたとき、父の家族と一緒に近くの小学校に避難した。小学校にはたくさんの人が避難してその中で夜を過ごしたそうだ」。避難所に避難していたのは1日目だけである。

(4) 2日目

2日目は父の家で暮らした。2日目は何もすることがなく、電気が復旧したので、テレビで震災についてのニュースを見て情報を得ていた。母の住んでいた東灘区は被害がひどかったのも、ある程度被害が大きいと思っていたがテレビを見て死者の数がだんだん増えていったので改めて被害の大きさを痛感したそうだ。生活していて困ったことはトイレで水が出ないことと、食べ物である。食べ物はレトルトのものを食べた。

(5) 3日目

3日目は母の実家と連絡をとれたため母は実家に帰ることになった。祖母は母の親戚に物を届けてから母を深江まで迎えに来た。母は父にバイクで深江まで送ってもらった。電車が通っていなかったのも、深江

から西宮まで歩いた。だんだん三重県に近くなるにつれて普段通りになっていった。

4 父の話

(1) 午前5時46分

普段通りに寝ていると突然、背中を突き上げるように「どーん」とした揺れがあった。そこから2～3秒ぐらい間があいてそのあとすぐに震度7の揺れがやってきた。

(2) 揺れの後

揺れが収まってからは、余震を警戒しながらすぐに外に出た。外に出てから母は家の近くの小学校に向かい、父はすぐに家の近所に住んでいる男の人たちと一緒に近くにあるお寺に救助に向かった。お寺で救助活動をしていると5、6歳ぐらいの2人兄弟がその子どもたちの、父親と母親の救助をしてほしいとお寺に頼みに来て、お寺に救助に来ていた大人5人と一緒に救助に向かった。その子どもたちの家に着いたら子どもたちと父を含めた大人は、子どもたちの父親と母親がどこにいるかわからないから、呼びかけをしたが返事がなかった。子どもたちは泣いていたようだ。子どもたちの家の通りほかのほとんどの家も1階部分がつぶれていたりして、その中から助けてほしいと救助を呼ぶ声があったから、そこに救助に来ていた父を含めた5、6人の大人は2人グループに分かれて、それぞれのグループが救助に向かった。1階がつぶれていて2階で寝ていた人は、外に出ることができないので、父はそういう人たちを外にでる手伝いをした。その中の一軒が、2階に寝たきりの老人がいて、震度7の揺れにびっくりして、今まで寝たきり状態だったのに、屋根の上に一人でのぼって助けを求めている。その老人を父は2人で下におろした。老人は下に降りてからは、今まで寝たきりだったのに、そこからは歩けるようになった。そこからは明るくなるまでは救助活動をして、ある程度時間がたったら避難場所に向かった。

(3) 日が明けてから

日が明けて避難所についてから少し時間がたつと、避難所に一人のスーツ姿をした男の人が来て、その人に父は携帯電話を借りて父の実家に安否確認をした。父の家族は全員無事だった。携帯電話を借りてから、少し時間がたったら母の家は崩れていなかったのもので母の家に向かった。家で必要なものを持ち出した。持ち出したあとは、その当時乗っていたバイクが乗れるかどうか確認して、乗れそうだったので東灘区から父の実家がある垂水区に向かった。垂水区に向かっている道中は大渋滞で、その中山手幹線道路を西に走行して父の祖母の確認のために、途中で長田の家に向かうことにした。山手幹線道路から三宮に抜けて大開通りに入ったときに、車が全く動かなくなっていた。そのときバイクだったから止まっている車の間をすり抜けながら走っていたら、突然道路が車3台分ぐらい陥没していた。父は突然道がなくなったので下に落ちかけたようだ。兵庫区から長田区に差し掛かったときにいたるところで火事が起こっていた。長田は火事が特にひどかったのもので、父は少し涙を流しながら父の祖母の家が火事になっていないかを、確認しに行った。父の祖母の家は火事が起こっていなかったのもでほっとしたようだ。父の祖母の家族は避難した後だったので、近くの小学校に安否確認をしに行った。父の祖母は入れ歯を家でなくしてしまい、何も食べ物を食べることができなかったそうだ。安否確認ができたので長田区から垂水区に向かった。垂水区につくと東灘区と長田区に比べると被害がまだましだった。しかし水道、電気、ガスのライフラインが止まっていたので父の実家に着いたらすぐに、父の家族と一緒に近くの小学校に避難した。

(4) 2日目

2日目になると電気が復旧したので父の実家に帰り片付けをして家で寝れるようにした。ある程度片付けができたならトイレの流す水がなかったので西区に水を汲みに行った。水を汲み終わって家に帰ってきたら、近所に住んでいた人におむつがほしいといわれ、近くにあるスーパーが開いていたのでそこに買いに行った。スーパーにはすごい行列ができていて買うのに苦労したようだ。その日の夜は余震がひどかったのもので車で寝た。

(5) 3日目とそれからの数日間

3日目には母の実家が三重県にあったのもので実家に帰ることになり母を深江までバイクで送った。そのあとは兵庫区にいるそのときしていたバイトの先輩を探しに向かった。バイトの先輩とは連絡が取れなかったのもので先輩の住んでいる近くの小学校を何件か見に行った。探しているときに父は間違えて遺体安置所に入ってしまった、あまりのショックから腰を抜かしてしまったようだ。そこにちょうど先輩が来て安全が確認できた。その後長田の父の祖母の家に、父の祖母の入れ歯を探しにいった。入れ歯を見つけることができた。父

の祖母は入れ歯が見つかったことによって、3日ぶりにご飯を食べることができたのでとても喜んでいて。

それからの数日間は母の親戚に物を持ってきてほしいと頼まれたので、2日に1回のペースで物を持って行った。また母のいとこが母の家はつぶれていなかったのそこで寝たいといいその人と一緒に家の片づけをした。家では油が散らばっていて片付けが大変だった。片付けが終わってからは父の家族のために水汲みなどを手伝った。

5 母と父の話を聞いて

(1) 母の話を聞いて

母の阪神・淡路大震災についての話を聞く機会が今までなかったので聞くことができてよかった。特に驚いたことは母が阪神・淡路大震災の被害の大きかった東灘区に住んでいたことだ。母の家の周りの家はほとんどがつぶれていたというのに、母の家はつぶれなかったというのは奇跡だと思った。話を聞いて印象に残っていることは、父の祖母が入れ歯をなくしてしまったことだ。普段の授業で支援物資について学んできたけど、入れ歯がなくて食べ物を食べることができなかったということを初めて知った。しかし避難所に入れ歯を支援物資として贈ることは難しいので、入れ歯がなくても食べ物が食べられるように、ゼリーになっているものを送るのがいいと思った。自分も支援物資を送る機会があったらそういうことを考えて送りたいなと思った。母は神戸で地震が起きるとは思っていなかったから、備えをしていなかったので地震が起きた時に驚いたといっていたので、いつ起こるかわからない南海トラフ地震に備えて、いつ起きても大丈夫なように家族でちゃんと話し合っ対策をしっかりしようと思った。

(2) 父の話を聞いて

父も母と一緒に阪神・淡路大震災についてあまり聞いたことがなかったので、とてもいい話を聞くことができた。特に印象に残っていることは、高速道路の道が途中で陥没してなくなっているのに、車が走っていたことだ。今までは高速道路の道が陥没していたということぐらいしか習わなかったけど、その陥没している道路の上を渋滞にはなっていたが、車が普通に通っていて、父はバイクを乗っていて、陥没している道路に落ちそうになったと言っていたのでとても危険なことだと思った。道路から落ちそうになっている人がいることから、陥没している部分の道路は別の場所の道路を使ってもらのがいいと思った。またもう一つ印象に残っていることがある。それは、垂水区はほかの地域に比べると、被害が小さいと言われているが、その中でスーパーが開いてあるところがあったという話を聞いてとても驚いた。阪神・淡路大震災についての話を聞いていて知らないことがいくつかあってそういったことを知ることができて良かった。貴重な話を聞くことができたので良い経験になった。

6 将来の夢と防災のかかわり

私の将来の夢は2つある。1つ目は地方上級公務員である。地方上級公務員と防災との関わりとして考えたことは、その働いている地域の人たちとかかわりを持つことが多いので、地域の人たちに防災について考えてもらい、その地域に防災を取り入れてもらうことである。理由は、自助・共助・公助の面で考えた時に、阪神・淡路大震災でわかったように、公助である消防の車両が道が狭くて通れなかったりして到着が遅れてしまい、ほとんど救助された人は自助・共助によって助けられたからだ。また地域の人たちと協力してハザードマップを作りたいと思う。ハザードマップを作ることによって、地域の人たちと話し合いができ防災について考えてもらうことができるからである。ハザードマップをどのようにして作るかというと、あらかじめ話し合う前にその街を歩いてどの道が危ないか、どの道が安全なのかを考えておく。考えた後にその地域の人たちと話し合いをする場を作り話し合っていく。その地域の人たちの意見も取り入れていき、そこに住んでいる人にしかわからない情報も取り入れていきたいなと思う。最後に話し合いで完成したハザードマップを、話し合いに参加していない人にも配り、共有をしてもらい役立ててほしいと思う。

2つ目は税理職員である。税理職員と防災との関わりとしては、お金を扱うことが多いと思うので、金の面で防災とかかわりを持ちたいと思う。災害が起きた時に小さな避難所にはお金がしっかりと支援されないということがあるので、すべての避難所に平等にお金を配りたいと思う。理由としては、避難所にちゃんとした支援がいきわたらなかつたら、そこに住んでいる被災者の人たちはただでさえ家がつぶれてしまったりして安心して生活ができていないのに、しっかりと支援をされていないということから、さらに不安になってしまうので、不安になることを少しでも減らしてほしいと思ったからである。また災害にあつてお

金について困っている人がいたら、お金について相談に乗りたいなと思う。理由は相談に乗ることによって、お金の面だけでも安心して暮らしてほしいと思ったからである。

7 環境防災科で学んだこと

環境防災科に入って校外学習や外部講師のお話などから阪神・淡路大震災や東日本大震災など様々なことを学んできた。学んできた中で大切だと思ったことは、備えの大切さである。いつ南海トラフ地震が起こるかわからない中で備えをしていたら助かる命も多くなると思う。備えの中で私が大切だと思うことは二つある。一つ目は家具の固定である。その理由は阪神・淡路大震災のときに多かった死因が圧死であった。木造建築の倒壊や、家具が倒れてその下敷きになってしまったからである。このことから、南海トラフ地震では同じ過ちを繰り返してはならないから、家具の固定が大切だと思った。二つ目は非常用持ち出し袋を作ることである。いつどんな自然災害が起こるかわからない中で非常用持ち出し袋があれば便利だからである。非常用持ち出し袋があれば最低3日間は使うことができるので避難所で少しでも安心して暮らすことができるからである。またスリッパなども入っているの、けがの防止にもつながる。

地域の人たちと関わりを持つことも大切だと思う。そう思った理由は、阪神・淡路大震災の時に自助・共助・公助があって、その中で一番多くの人が助けられたのが共助であったからである。地域の人たち同士でできることはいくつかある。1つ目は避難訓練である。家にいちばん近い避難所に、その地域の人たちで避難する時間帯やどのような災害などを話し合っ、その時間がきたら一番安全な道を通って避難し、避難した後に反省会をしたりすることが大切である。2つ目はハザードマップを作ることである。まず始めに家族で災害が起きた時にどこで避難所に避難するかを決めておくことが大切である。決めた後、地域の人たちで集まってその地域の地図を持ってきて、どこかの場所が危ないかなどを話し、地図を完成させていく。そしてその作った地図を災害が起こった時に活用して安全に早く避難することが大切である。3つ目はすれ違った時にあいさつをすることである。あいさつをすれば自分はここに住んでいるなど存在を知ってもらうことができる。またあいさつをすることによって小さな会話が生まれる。その会話から、相手がどういう人なのかを知ることができるので、その人とかかわりを持つこともできる。

環境防災科で学んだ中で一番印象に残っていることは、本物の地震の揺れを体験したことである。校外学習で行かせてもらった北淡震災記念館や、兵庫県広域防災センターと消防学校体験入校をさせてもらった時に体験した。揺れを体験している中で、南海トラフ地震を想定した揺れの種類があった。私は阪神・淡路大震災を経験していないので、今まで震度7の揺れがどれだけ揺れるのかわかっていなかった。実際体験したときはどのタイミングで揺れが来るかわかってい、机が固定されていて、手すりまでついていて、揺れ始めたら飛んでいきそうになったので、とても怖いものだった。阪神・淡路大震災は、朝方にほとんどの人が寝ている中で、起こったので、その中でいきなり震度7の揺れが起きたら、いくついろいろな対策をとっていたとしても行動に移すことができないと思った。いつ南海トラフ地震が起こるかわからない中で、阪神・淡路大震災の時のように、朝方に起きたらすぐ行動ができるように非常持ち出し袋を枕元に置いて寝たりなどの備えをしっかりとしたいと思った。また昼間に起こった場合は、家の中にいるときに起こったら揺れている間は身の安全を守り、揺れが終わると家で用意してある非常用持ち出し袋をもって家族で話し合っ決めた場所に逃げたいと思う。外にいるときに起こったら、その場所が海の近くだったら揺れが追われるまでは家の中にいるときと同じ動きをするが、揺れが終わったら、津波が来る可能性があるのですぐに津波が来ないような高いところに避難するのが大切だと思った。逆に海が近くない場合は揺れが終わるまでは今までの動きと一緒に、揺れが終わってからは、その場所に一番近い避難所に避難するのがいいと思うので、その避難所までの一番安全なルートを考えて避難している途中に、避難するのに困っている人がいたら助けたりしながら避難したいなと思う。

今までの授業や校外学習などを通して学んできたことを生かして、将来に役立てていきたいなと思う。また母と父から聞いた阪神・淡路大震災の話や、今まで防災について学んできたこと次の世代に語り継いでいきたいと思う。

『次の世代へ』

福永 誠拓

僕は、今18歳である。阪神・淡路大震災が起きた時は、まだ生まれていなかった。だから実際の揺れを経験していないし、震災当時の様子もみていない。いくら、被災された方から話を聞いても、当時のビデオを見ても、震災当時のことは、僕の想像でしかない。被災された方が、語り継ぐことと、僕が語り継ぐこととは言葉の説得力が違うかもしれない。だが、震災を受けていない世代が語り継がなければ、阪神・淡路大震災は風化してしまう。甚大な被害がでた、この震災を決して風化させてはいけないと思う。だから、僕は、両親から聞いたことを、後世に語り継ぎたいと思う。

1 僕が学んだ阪神・淡路大震災

僕は、消防士になりたいという思いから、消防体験や防災を学ぶことができる舞子高校環境防災科に入学した。

1年の時は、災害と人間という授業でたくさんの外部講師の話を聞いた。ライフライン（電気・水道・ガス・電話）や消防・警察・自衛隊などそれぞれ当時の様子や反省・改善を詳しく教えてもらった。来てくださる講師の方が口をそろえて言う言葉が、「神戸に大きな地震がくるとは思っていなかった」である。この言葉は地震に対する備えをしていないということや、心の油断を表していると思う。その二つのことが、大きな被害を出した原因だと僕は思った。

2年の時は、社会環境と防災という授業で当時被害がとて大きかった鷹取駅から長田駅の間を語り部さんから当時のことを聞きながら散策した。当時そこは火災がひどくほとんどが焼けていた。それから、道路幅の拡大や区画整理などで変わった場所なども見たが、少し狭そうなところもあった気がした。火災の延焼を止めた、駒ヶ林の三角公園にも行き、公園や木で延焼を防げることを知った。ほとんど焼けた町がここまでキレイに復興されていたことに、人間の力のすごさを実感した。当時のことを知るには、聞くだけではなく実際に行き、自分の目で見ることも大事だとこのまち歩きを通して感じた。このように、たくさんの方から学んできた。

2 父と母の体験

（1）震災直後

当時、父と母は2人で西明石の新築の3階建のマンションの1階に住んでいた。二人は寝室で寝ていた。そして、海の方から「ドーン！！」という音が聞こえ、すぐ激しい揺れに襲われた。初めは、地震だと理解できず、地震だと理解するのに時間がかかった。イメージとしては、怪獣に揺らされている感じや、進撃の巨人の巨人に揺らされているような感じだった。

（2）震災のあと

新築のマンションだったために、被害は少なかった。ひびが入ったのと、タイルがはがれたぐらいであった。家の中は、食器棚が倒れたくらいでライフラインに影響はなかったため、被害は神戸に比べると少なく済んだ。

揺れが収まると、父と母は、車で父方の祖父、祖母の住んでいる朝霧に向かった。祖父母の家は5階で、キッチンのレンジが玄関にとび、ガラスが割れ、グチャグチャになっていた。祖母は手をけがしていて、病院に連れて行った。父と母は、祖母が、けがで済んで安心した。

少し落ち着いてから、テレビをつけてみると、高速道路が倒れていたり、割れた地面の下にあるガス管からガスが漏れて火を噴いていたのを見た。そして、水不足だということ知った。父と母は、初めは水を買って持って行った。この時に、実際の神戸の状況を見た。テレビで見た、倒れた高速道路も、実際に見るとこんなものが倒れたのかと思うくらい大きく、とても大きい壁のようだった。古い家は基本的に1階部分がつぶれていたり、ほとんどの建物が倒壊やずれていることで、平衡感覚がなくなり、まっすぐの建物がどれかわからなくなるほどだった。

少しの間、水を持って行ったが、たくさんの人が買い求めたため、物が無くなった。父と母は、九州にいる母方の祖父母に水を送ってもらい、提供した。神戸は被害が大きく水が止まっていたため、自宅のお風呂

を、祖父母をはじめ、たくさんの人に貸していた。

（3）震災から感じたこと

- ・家族や親せきの元に向かう時の交通手段は、車よりも、自転車やバイクの方がよい。高速道路が渋滞するために、小回りの利く自転車・バイクのほうが早く着くことを学んだ。
- ・ストックの大切さ、特に水は生活にかかせないもので、災害が起きるとすぐになくなってしまうため、ストックをすることが大切。震災から間もないころは、水や食料を置いていたが、年月とともにうすれていったために、現在はおいていない。この話を機に、もう一度用意する。
- ・阪神・淡路大震災では、自分たちが被災して、余裕がなく学ぶことは少なかったが、東日本大震災では客観的にみていたため、学ぶことが多かった。いざ、地震がくると、冷静には行動できない
- ・阪神・淡路大震災は直下型の地震で、この時に初めて縦揺れがあることを知った。今まで、地震が来るのが「面白い」と思っていたことが、この震災で、恐ろしいものだと感じるようになった。少し揺れるだけでも、震災が頭に浮かび恐怖を感じる。
- ・職場がつぶれた人がいたり、家がつぶれた人もたくさんいたが、命があるだけで、幸せなことだと感じた。知り合いは、長田にいて火事がなければ助かっていたかもしれない。この知り合いのように、火事がなければ助かった命は増えていたかもしれない。でも、火事を防ぐのは難しいと、思った。料理をしているときに地震が来たら、ほとんどの確率で火事になるだろうし、地震が来た瞬間に消すことなど冷静さを欠いた人には難しいと思った。
- ・母の友人は、震災の年の6月に結婚式を挙げる予定だったが、交通手段などに困り予定が狂ってしまった。地震は、人々の生活などをすべて狂わせる。友人や知り合いや近所の人たちともバラバラになってしまったりする。
- ・地震は思い出も奪う。父と母は震災の前年の9月に結婚式を挙げていた。しかし、あくる年の1月に震災が起ころ、式に使ったホテルは潰れてしまった。このように、地震はたくさんの命・モノ・思い出を奪っていく。
- ・震災の衝撃が強すぎたために、家具転倒防止の道具が意味がないように思え、大きな家具は捨て、比較的小さめな家具を買った。

（4）僕に伝えたいこと

「将来は、安全な住まいに住んでほしい」と言われた。耐震がされていること、2階に寝ることなど防げることは、防いで、工夫できる限りはして、「命を落とさないでほしい」や「生きていることが当たり前じゃない」と言われた。この言葉は、僕の胸に深く響いた。

3 父と母の話を聞いて

（1）感想

父と母に、こんなにも真剣に震災のことを聞いたのは今回が初めてだった。ひとつ僕から質問をすると、震災を思い出したかのように、たくさんの話が返ってきた。父と母は被害が少なかったとはいえ、揺れ自身は大きかったため、その衝撃は強かったのだと思う。真剣な顔つきから、ものすごく父と母の気持ちが伝わってきた。この真剣な話を聞いていくつか思ったことがあった。

まず1つ目が、備えの大切さと、話を聞くことの意味だ。父と母は、震災後少しの間、非常持ち出し袋とまではいかないが、水の備えはしていた。だが、現在は水の備えすらなくなっている。このように、震災を受けた人たちでさえ少しずつ地震に対しての意識が薄れてきていると思う。備えをしなくなれば、阪神・淡路大震災の時と同じように大きな被害が出てしまうと思う。しかし、話をしているうちに、もう一度備えをすることになった。こういった話をすることで、薄れかけている意識を再び思い出すいい機会になった。

2つ目が、自分たちが被災した阪神・淡路大震災では学ぶことが少なかったということだ。今回聞いた話で一番印象に残った。なぜなら、いままで防災を教わってきて、災害を受けた人たちが一番学ぶことが多いと思っていたからだ。このことは、たくさんの外部講師の方々から話を聞いてきた中でも、母しか言わなかったことだったため、余計に印象的だった。母も、冷静でいられなかったために学ぶことが少なかったのだと思う。やはり、災害というものは、想像をはるかにこえるほどのものなのだと母の真剣な顔から読み取れた。だからこそ、備えは大切だと思う。これを機に、真剣に備えについて話し合えると思うので、家族全員で考えたいと思う。

3つ目が、お風呂を貸していたことだ。ボランティアをしていたことを僕は嬉しく思った。もし、今災害が起きれば僕自身ができることをしようと思う。そして、両親の助け合いの心を見習おうと思う。自分たちが助かってよかったという考えではなく、助け合いの心を持っている両親を僕は誇りに思う。

最後に、僕に伝えたいことを聞いた時は親に感謝の気持ちが込み上げてきた。「命を落とさないでほしい」といわれたときは、僕のことをほんとに思ってくれているということが伝わってきて胸が熱くなる想いだった。震災について聞いていたが、こんな言葉も言われ、家族の絆も深まったと思う。

初めにも言ったが、こんなにも真剣に父と母から震災について聞いたのは初めてだった。僕自身も聞いていると質問が止まらなくなり、こと細かく聞いた。そして、この話を聞いているうちに二人が話してくれた想いを語り継ぎたいと思うようになった。

(2) 夢につなげる

僕は、将来消防士になりたいと思っている。阪神・淡路大震災では、道幅が狭く道路がふさがり思うような活動ができなかったと聞いた。しかし、自助で助かる人が多く8割ほどいるのに対して、公助で助かる人は1割を切っている。このことを聞くとほとんどの人が、災害時は自助が大切で、公助では助からないと思う人がいると思う。だが、僕は、それは違うと思った。確かに、自助で助かる人が多いというデータは出ているが、公助でしか助けられない現場もあると思う。公助は、そのような現場には強いと僕は思った。自助がだめで、共助がだめな場合でも、公助の技術があれば、助けることができると思うので、公助も自助と同じくらい大事なことだ。そして、今災害が起きたとき、僕にできることは募金活動くらいしかない。確かに募金活動は必要不可欠なことだ。しかし僕は、遠まわしの支援だけしかできない自分に、どこか歯がゆさを感じた。それは、災害が起きれば、すぐに駆けつけ一人でも多くの人を助けたいという思いにつながり、将来は、人命救助ができる仕事に就きたいと思ったのがきっかけである。環境防災科に入学したことも、それが理由だ。消防体験をしたり、防災を学び将来に役立てようと思った。だが、消防体験で思っていたよりも、厳しい消防士を見て、なることをやめた。再びなりたいたと思ったのは、高2の冬である。厳しい部活動の練習があった。そこで、気持ちさえあれば、乗り越えられることを学んだ。厳しい消防士を見て、あきらめた僕は、気持ちがなかったことに気付いた。そして、改めて考えてみると、やっぱり人命救助がしたいと思った。もう一つ、環境防災科に入り、防災について専門的に学んできた。この学んだことは、できるだけの人に、伝えていく義務があると思う。ほんのわずかでも、防災に意識をしてもらえれば、いいと思う。

消防士になり、あいさつから地域の人とかかわりを持ち、防災訓練などに参加し少しずつ防災について伝え、災害に強い街づくりをしたいと思った。

この気持ちは、本気なので信じて、なるために努力しようと思う。

消防士といっても、仕事の種類はたくさんある。広報課で、防災活動をおこなうこともいいとは思ったが、僕は、少しでも多くの命を助けたいと思ったので、人命救助に力点を置いているレスキュー隊員になり最前線で人命救助を行いたいと思う。しかし、人命救助だけでなく、備えの大切さを学んでもらうために、地域の防災訓練などに参加し、地域の人と交流しながら、防災を広めていきたいと思っている。

父と母の話でもあったが、火事で知り合いを亡くしたと聞き、この気持ちはさらに強くなった。気持ちがあるからといって、100%救うことはできないので、今はまだ具体的に分からないけれど、対策を考えて、一人でも多くの命を救いたい。

父と母は、僕が消防士になることを賛成してくれ、応援してくれている。だから期待に応えて、消防士になりたい。

4 語り継ぐこと

今回、実際に伝えていく立場になり、語り継ぐことの難しさを実感したが、震災を経験していなくても語り継ぐことはできると思った。内容は、聞いた話になるが、僕たちの世代が、聞くだけで終わってしまうと、阪神・淡路大震災は風化してしまう。それだけは、必ず避けなければならない。なので、多くの若い世代に読んでもらい、少しでも多くの人に阪神・淡路大震災を知ってほしいと思う。そして、忘れないでほしいと思う。母のように、年月を重ねるにつれて、意識が薄れていく人がほかにもいると思う。そうすると、備えが手薄になり、またしても大きな被害につながる。災害をわすれるということ自体が社会の弱さだと思う。そう考えると、語り継ぐということはとても重要な役割を果たしていると思う。

5 これから…

今回聞いた話を、これからにつなげていきたいと思う。たとえば、母が言っていた、高い家具をできるだけひかえるとか、ストックをしておくことなどだ。将来、親元から離れたとき、最低この二つは徹底しようと思う。でも、この二つをしたからといって、災害には、安全とはいいきれないし、心に隙を作ると、阪神・淡路大震災の時と同じになると思います。阪神・淡路大震災の時も、備えをしていなかったわけではないと思う。しかし、心に隙や油断があったからこそ、大きな被害につながったと思う。備え+心構えがあつてこそ、真の備えだといえると僕は思う。被災していないひとに、どれほど伝えても、イメージでしかないため、心構えのほうは、隙ができると思う。その隙をどのようにすれば、埋まるのかを、これから、考えていきたい。そして、身の回りの人から、徹底していきたいと思う。

今、僕たちは、実際に被災した方々から話を聞くことができる。やっぱり、被災した方から聞く話と、語り継ぐ人から聞く話では、伝わり方が違うかもしれない。しかし、いつか、被災した人はいなくなってしまうから、この「語り継ぐ」を読んだり、語り部さんの話をきいたりすることで、雰囲気・イメージだけでも、阪神・淡路大震災を知ってもらいたい。そして、聞いたことで思ったことや聞いたことを僕たちのように、「次の世代」へと語り継いでほしい。

6 終わりに

この「語り継ぐ」を書くことで、深い話を聞くことができた。そして、環境防災科で学べることのありがたさを改めて実感した。これからも、防災について学び、災害の時にはリーダーとなり、率先してみんなを助けられるような人になりたいと思った。

僕たちのように、語り継ぎたい人と思う人が増えることを、願いたい。

井戸水に助けられた家族

藤田 瑞輝

1 はじめに

1995年1月17日、阪神・淡路大震災は起きた。私は8人兄弟なのだが、家族で震災を経験したのは父と母、そして当時4歳だった私の兄と、2歳と0歳だった2人の姉だけだ。その他私を含めた5人の兄弟は震災を知らない。私はこの環境防災科に入っているいろいろな災害について勉強してきた。もちろん阪神・淡路大震災についてもたくさんの方のお話を聞いて勉強した。しかし、震災当時自分の家族がどうだったのかという話はほとんど聞いてこなかった。今回私は震災当時の家族について母に話を聞いた。

2 震災の朝

(1) 午前5時46分

私の家族は当時、神戸市垂水区にある団地に住んでいた。あの日の朝、父は仕事で家にはおらず、母は私の兄と2人の姉と一緒に寝ていた。そこにあの地震が襲ってきた。母は懸命に兄と姉に布団とともに覆い被さり、地震がおさまるのをまった。下から何か迫ってくるような地響きが聞こえた。リビングからは食器棚が倒れ、ガラスが割れる音が聞こえてきた。

(2) 揺れの後

揺れが収まると母は父に電話をかけたが、なかなかつながらない。やっとながつたと思うと、「大丈夫か?」「うん」「あ、そう。じゃあ。」という会話しかできなかった。父はその日の夜まで帰って来なかった。当時、明石の魚の棚にある魚屋に勤めていた父は、あの日地震よりも早くに家をでて魚の配達に出かけていた。そして、仕事が終わる夕方まで帰って来なかった。

家の中は1つのコップを残してすべて割れてしまい、ガラスが散乱していた。さらに、倒れた食器棚がトイレへつながる通路をふさいでしまっていた。

3 避難

(1) 避難

家族は避難所に避難するのではなく、父の実家に避難した。父の実家は神戸市の最西部にある木造の家屋が並ぶ町にあるのだがそこは地盤が強く、屋根の瓦が数枚落ちるだけで済んだ。

団地には地震から2日ほどたってから様子を見に行っただけで、ライフラインがすべて復旧するまで戻ることができなかった。余震がまだまだ続いている中だったのでとても怖かったと母は話してくれた。震災時、非常用持ち出し袋は用意されていなかったが、家には食べ物たくさんあり、さらに実家には私の祖父が畑を持っていたので食料に関してはなにも困ることはなかった。さらに、水不足に悩むことはなかったという。それは、井戸水があったからだ。井戸水はトイレやお風呂に使える。近年、近所の家の中には井戸を埋めてしまうところがあるが、私の家では今でも井戸は残している。

私の母は、井戸でくんだ水やガスボンベなどを近所の人や、長田区、須磨区の人たちのところへ届けて回った。須磨区に住む母の友達は川の水を汲んで避難生活をしていたので、とても喜んでくれた。また、この水はお風呂に入れなかった人たちの助けにもなった。このことから母は普段の生活のありがたみを感じたと言っている。

地震が起きたその日の夕方にはTVで長田区が火の海になっている映像が流されていた。言葉にならないほどの思いが込み上げてきたという。

(2) 家族の周りの人たち

また、母はこんな話もしてくれた。長田区に住む父の友人の話だ。その方は在日中国人で日本人の恋人をもつ人だ。地震がおさまった直後、瓦礫の下敷きになった人を何人も助けた。しかし、ふと周りを見ると1人ひとり助けられているときりがないほどの人が瓦礫の下敷きになっていた。この方は、自分の彼女が急に心配になり、大阪へ向かえに行った。

さらに、こんな話もある。先ほど井戸水の話でも出てきた母の友達の話だ。彼女は私の姉と同年(当時0歳)の娘と旦那さんと一緒に暮らしていた。旦那さんは灘区に働きに行っていたが、地震がおさまってすぐ

に自転車で須磨区まで駆けつけたという。

私の母方の祖父の話も聞いた。当時、神戸市の市役所で働いていた祖父は地震直後に私の母の兄弟が住む家を一軒一軒自転車で回って安否確認を行った。その後、三ノ宮の市役所へ出勤した。そこから震災による被害の情報収集などの仕事を2・3日続けて行い、家には帰らなかった。市役所では食料の配給はあったものの全員分はなく、もらえていない人を見ると、なかなか口にすることはできなかった。

4 その後の家族

今、私たち家族は父の実家で暮らしている。地震でほとんど被害がなかったこの家はあれから耐震化や補強と言った地震に備えることが不十分のままになっている。次の地震が来たとき、潰れない保証などどこにもない。また、私の兄弟も大人になってきてバラバラで生活するようになってきた。地震が起きた時の連絡方法も必要になってくる。

5 感想

(1) 語り継ぐこと

今回両親に阪神・淡路大震災の話を聞くことが出来て本当によかったと思う。私たち震災を経験していない世代は自分から人に話を聞きに行かないと震災について知る機会が少ない。そうすると風化につながっていく。風化が進めば同じことを繰り返すことになってしまう。それを防ぐには語り継ぐことが1番大事なことだと私は思う。今回両親から聞いた話やこの環境防災科に入って聞いたたくさんの方のお話を次の世代に語り継いでゆくことは私たちの大切な使命である。

母の話の中にはとても重要なことがあった。それは、昔ながらのものを大切にしないといけないということだ。今の時代は電気やガスがないと動かないものばかりだ。震災時もそうだったが、電気が使えなくなると何もできなくなってしまう。そんな時に助けになるのが昔ながらの電気を使わず、人力で動くものだ。阪神・淡路大震災の時、私の家族は井戸水に助けられた。その井戸水は普段、鯉が泳いでいる池に注がれている。しかし、いざというときは他のことに使うことが出来る。これは、阪神・淡路大震災の教訓だ。新しくなにかを作るのではなく、昔ながらのものをつかい、応用していく。これが大事なことだと私は思う。

(2) これからの家族

これから私たち家族がしないといけないことは、まず地震に備えることだ。阪神・淡路大震災の時は家族に大きな被害はでなかったが、次はどうなるかわからない。少しでも被害を小さくするには備えないといけない。家を耐震化するには時間とお金がかかるが、非常用持ち出し袋を用意するのはたいして時間はかからないはずだ。さらに連絡の取り方を決めておくこと。災害用伝言板などを使うのも一つの手段だ。これから家族でしっかりと話し合っていきたい。

(3) 私の夢

私の夢は地域の人に信頼される消防士になることだ。阪神・淡路大震災の時、神戸市消防は想像以上の火災の数や水道管破裂のため十分な消火活動ができなかった。これを震災の教訓の一つとして神戸市消防はより災害に強い街づくりを目指した。神戸市は震災を経て強くなった。しかし、これで十分とは言えない。それは、いつどこで想像もしないような大きな災害が起きるか分からないからだ。災害は地震だけではない。津波や火事、大雨などたくさんある。私は消防士になり、自分が生まれ育ったこの神戸をより災害に強い街にしていきたい。二度と阪神・淡路大震災のように多くの命が一瞬で奪われ残された人が悲しまないですむように。

消防署には予防課という部署がある。私はこの部署に入りたいと思っている。消防士にはほかに消火活動や救助活動といった緊急時に起きてから、活動をする仕事もあるが私は、消防士が緊急時に仕事をしなくても多くの命が助かるようにする仕事のほうが重要ではないかと思う。それは、先ほどにもあったように、緊急時は何が起きるかわからない。想像以上のことが起きて対処しきれない可能性は十分にある。私は、想像以上のことが起きる前に対策をとっておくことが大切だと考える。そもそも、私がこの環境防災科で学んできた防災は、災害を防ぐためにあるのだから災害が起きてから行動を起こすのでは遅いのではないか。私は、高校に入ってからそう思うようになった。

そして、予防課なら私が思う防災を仕事にすることが出来る。予防課の仕事は主に、災害時の避難経路に避難を妨げるものはないかなどを見て回るパトロールや、防災について地域の人や小中学校に出向き講

義をすること。さらに、大型の施設に行き非常口をしっかりと設置しているか塞いでいるものはないかなどを見る仕事がある。私はこうした仕事をしながらも地域に方の声を聴き防災に強く、住民の誰もが暮らしやすい街をつくっていききたい。

さらには、消防署と学校、警察、自衛隊さらには地域の住民すべてが深くかかわり、災害時にすべての人が助け合える日本となれるように働きかけたいと思う。

今は一般の人よりもすこし防災を知っているただの高校生だが、消防士になることでたくさんの人と話ができ、防災が広めることができる。そして、世界に誇れる防災をつくりたい。それが、私の最終の夢である。

最後に、阪神・淡路大震災や東日本大震災、さらには熊本地震などから得た教訓はたくさんある。その教訓を活かすことが出来るかどうかは私たち若い世代が正面から災害と向き合い、備えることができるのかどうか、またどれだけの教訓を後世に語り継げるのかにかかっている。

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分兵庫県南部地震が起こった。その当時神戸市垂水区で生活をしていた父方の祖父、祖母に話を聞いた。家族構成は祖父、祖母、そして父、父の姉で当時父の姉は加古川方面に住んでおり、垂水区で被災したのは祖父、祖母、父だ。

2 別々で迎えた5時46分

当時、祖父は仕事に行く時間が早く、毎朝5時半ぐらいにトイレに行くのが習慣だった。1月17日の午前5時46分もトイレの中にいた。いきなりドーンと来て便器が跳ね上がった。すぐに地震だと気付いた祖父は揺れが収まるまでトイレの中でじっとしていた。

一方その頃、祖母は寝ていた。ドーンと来て目が覚めた。最初に突き上げるような感覚があり、その後横揺れが始まった。家じゅうがミシミシと音を立てて今にも崩れ落ちるのではないかと不安になった。恐ろしくて、布団を被って地震をやり過ごした。揺れが収まるまでの時間が本当に長く感じた。祖母はタンスの前で寝ていたが、揺れる方向がタンスの向きと反対だったので倒れずにすんだ。みずやからは食器が飛び出て、床に皿が散乱した。だがスリッパがあったので足を怪我せずにすんだ。また、ストーブをつけていたが、動いたら消えるという仕組みになっていた為、地震が起きて消えていたので火事にならずに済んだ。現代の物の技術に改めて感心した。父はその頃2階の部屋で熱を出して寝込んでいた。このように、その当時家にいた家族3人がバラバラの状態被災した。結局家は、半壊になった。家のかわらも歪んだ。そこから筋交いを入れたりして耐震構造にした。半壊で貰える給付金では全然足りなかった。今も家に行くと押入れなどが斜めになっていて、その隙間に定規を入れて隙間が出ないように工夫されてある。ただそれでも祖父母の家は他の地域と比べるとまだマシだった。祖父母の住んでいる垂水ではそれほど大きい被害は出なかった。阪神・淡路大震災前もまさか地震が神戸で、垂水で起こるとは思っていなかったようだ。自分の住んでいるところは安全だという勝手な思い込みで地震が起こるまでは生活をしていた。

3 空

地震が収まって少し経ってから外へ出た。近所の人が皆出てきていた。不幸中の幸いで、近所の人は全員助かった。また、半壊の家は少しだけあったが、全壊の家はなかった。上を見上げてみると、雨の降る前のような感じの空だった。すごく暗かった。なぜこんなに汚いのだろうと近くにあった車を触ってみると、それはただの汚れではなく、灰だった。そう、空がすごく暗いのも、車が灰まみれだったのも長田方面の火災の影響だった。元々長田に住んでいたことから祖母はすごく悲しくなったと同時に垂水に引っ越してきていてよかったと思った。祖母の友人では今も長田区を通ると辛いという人もいるという。

4 余震

余震が結構頻繁にあった。余震の度に祖母はおびえた。震度は小さくても怖い。本震の揺れを思い出してしまう。また、本震でミシミシと家の中が音を立てていたので余震の小さな揺れでも壊れてしまうかもしれないと思うとすごく怖かった。祖父は「大丈夫や」と言うが、どこからその根拠のない大丈夫が出てくるのかわからなかった。とにかく余震が嫌だった。今も地震が来て揺れたらドキドキする。この地震に対するトラウマは一生消えることがないと思う。阪神・淡路大震災の時のことを思い出してしまう。21年経った今でもあの時の揺れを思い出すと眠れなくなる。当時の他の記憶が段々薄れてきても、揺れた時のことは忘れることができない。生き地獄だった。余震だからといって決して慣れることはなかった。

5 通勤

祖父は当時大阪府の難波にあるビルメンテナンスの会社に勤めていた。通常、自宅からは自転車で垂水駅まで行き、そこからJRで大阪まで行き、そこから地下鉄難波まで行く。大体1時間半かかる。だが、地震が起きてそこから数日経って会社に行くときの通勤がすごく大変だった。まず、自宅から自転車で垂水駅

まで行ってそこからJRで神戸まで行って線路が壊れている為バスに乗って住吉まで行き、そこからJRに乗って大阪まで行った。通勤だけで4時間も掛かった。電車もバスも満員で、遅れが生じたりして行くだけでも疲れた。20日間この方法で通勤した。その後、少し休んだ後、地震から1か月と少しで会社に戻った。

6 支援と想い

祖父の勤めていた会社は震災の時によくしてくれた。会社のトラックにたくさんの物資を積んで、約11時間かけて大阪から垂水の自宅まで来てくれた。物資の中身はガスコンロ、ラーメン、水などたくさんの食べ物と普段使うものが入っていた。遠いのにわざわざ来てくれたというその気持ちが嬉しかった。人の温かみを感じた。また、人にしてもらったこの嬉しさをいつまでも覚えておきたいし、恩を返したいと思った。阪神・淡路大震災で人の優しさをすごく感じる事ができた。人ってこんなにも優しくなれるのかと感じた。

「会社に来れるようになるまでいくらでも休んでいいよ。」と言って下さった会社の人に頭が上がりなかった。たくさんの人の優しさ、気遣い、支援があったおかげで一刻も早い復旧を目指す事ができた。また、父には姉がおり、当時は結婚して加古川方面に住んでいた為、あまり被害にあわなかった。なので、水を汲む用のタンクを持ってきてくれた。すごく便利だった。水を汲む場所は比較的近い所にあった。近いと言っても坂が多く、水が出ている公園まで汲みにいくのにも一苦労だ。また、バケツで汲みにいくと帰るときにたくさんこぼしてしまう。だから、すごく助かった。水を汲むようなタンクを常備しておくのも大事だと痛感した。このように地震が起こってから気付くことが本当にたくさんあった。

7 困った事

この震災で1番困ったことはお風呂だ。無料で開放してくれているところもあったが大変混み合っていた。また、何日もお風呂に入っていないような人々が大勢おり、その後のお湯に入るのはあまり気持ちのよいものではなかった。だから、会社が持ってきてくれたガスコンロを使ってお湯をわかしてお風呂にした。しっかり体を洗うことはできなかった。だが、自宅でのお風呂は落ち着くし、遠慮もいらずすごくリラックスできた。たまに少し遠くの比較的空いているお風呂屋さんにも行った。親戚の人が車を運転することができたので非常に助かった。わざわざ少し遠いお風呂屋まで連れていってくれて本当に有難かった。ライフラインが閉ざされている中でガスコンロは本当に便利だった。石油ストーブも使うことができたので水を沸騰させた。お湯を作ることの難しさと有難みを感じた。また、普段どれだけ電化製品に頼ってお湯を作っているかを実感した。

8 風化

全国各地で地震が起こる度に準備しないといけないと思うがそのうちにとってしまう。ただ、阪神・淡路大震災を経験してから、必ず水とインスタントラーメンはストックしている。経験をしていても記憶が風化してしまう。ただ、怖かったことはいつまでも経っても忘れない。いや、忘れられない。阪神・淡路大震災の経験と最近起こった熊本の地震とも重ねあわせてしまうという。地震が起きて当分トラウマがあった。今でも消えない。だが、阪神・淡路大震災を経験していても当時の状況を今でも鮮明に覚えているわけではない。むしろ忘れてしまった事、振り返ろうとしても思い出せないことも多くある。経験者ですら忘れてしまう。最後に「先が見えへんのが1番辛いことやな」と阪神・淡路大震災を思い出すかのようにテレビの熊本地震の報道を観ながら祖母はそう言った。風化というのはさけられないことかもしれないが、少しの意識で変わる。地震の記憶を風化させないためには、震災を経験した人、経験していない人、どちらの意識も大切だ。経験していない人は話を聞いてまた次の世代へとつなげていく必要がある。

9 祖父母の話を聞いて

改めて今回阪神・淡路大震災の話を聞いた。今私が住んでいる隣に祖父母の家がある。阪神・淡路大震災では今私が住んでいるこの地域が、そして隣にある祖父母の家が半壊になったのだと考えるとすごく恐ろしく感じた。祖父母の家に行くといつも押入れの隙間などに定規が入っていて、それが当たり前のことだと認識していた為、今回初めて地震による影響だと知って驚いた。こんなに近くに住んでいるのに、震災の話を詳しく何時間にもわたって聞いたのは初めてだった。また、一つ印象に残ったことがある。それは、記憶は風化してしまうということだ。実際に経験している祖父母でも、当時のことをはっきり鮮明に

覚えている訳ではない。地震の揺れや、あの時感じた揺れの感覚や時間の感覚は絶対に忘れられないと思う。しかし、21年前の記憶のまま今を生きているわけではない。忘れてしまうことも多くある。だから伝えるということが本当に大切だと感じた。日本は地震大国で地震が来ることは避けられない。避けられないからこそ過去の震災を教訓にしていかなければならない。そういった意味でも震災の話を書くことで伝えるということが本当に大切だと思った。阪神・淡路大震災では多くの人が亡くなった。たまたま長田区から引っ越してきていて助かった祖父母。たまたまその日違う県に出掛けていて家は全壊になったが、命は無事だった祖母の親戚。生きるか死ぬかの壁はすぐ隣にある。この壁はどちらに倒れるか分からない。もし死の方に倒れかかってきた時、必要になるのが防災力だ。運がよくて生きる、では助かる人の数も少ない。運だけの問題にしてほしくないと思う。だから、たくさんの人に防災について興味を持ってもらいたいと思った。また、私自身もまだまだ防災の知識が足りない。たくさんの人に防災に興味を持ってもらう為にもまずは私がもっともっと防災を勉強していこうと強く思った。長田区の事を話すときの祖母はどこか懐かしげで、でも寂しいような、悲しいような目で語った。長田区から垂水区に引っ越してきたといっても長田区にはたくさん知り合いや友達がいると思う。無事かどうかというのがすごく不安だっただろうと思う。

10 祖父母の経験を踏まえて

今回、気にはなっていたけど、中々聞くことが出来なかった阪神・淡路大震災の話をじっくり聞くことができてよかった。戦争の体験談もそうであるが実際に経験した人が少なくなってくる。いかに多くの人が自分が経験したことを話すことができるのか。そして、聞くことができるのか。限りがあるとは思いつけど出来るだけ多くの声を聞いておきたいと思う。経験した人の分だけ感じ方もあると思う。私は戦争も、大きな地震も経験していない。だが、風化させてしまっただけから先また大きな災害が来た時に同じようになってしまう。経験した人の話から何か教訓を見つけ出すことができればいいと思う。私は、今回祖父母に聞いてなるほどと思うことや驚いたこと等がたくさんあった。祖父母の経験を踏まえてこれから防災をもっと学びたいと思う。人間には防災と離れられる時はないのだと思う。生きる為に必要な学習。常に新しい防災の方法がある。自分の命、大切な人の命を守るためには「火事場の馬鹿力」よりも「防災」の方が生かすことができる。

11 環境防災科に入って

環境防災科に入ったことで普通科ではできないようなことをたくさん経験した。その中で一番印象に残ったのが、ネパール訪問だった。ネパールは日本とは全然違う。治安があまり良くないことや、貧富の差が目に見えてわかった。普通に暮らすだけでも精一杯のこの国ではあまり防災が浸透していないのではないかと考えた。しかし実際に防災サミットに参加してみるとネパール人の意識の高さに驚いた。サミットではたくさんさんのネパール人がプレゼンテーションをしてくれた。誰も自分で考えてきたメモなんかは持っていないし、アドリブでも堂々としていた。メモを見て、何度も練習する日本とは違うと実感した。

私は日本人だ。ネパール語もわからないし、文化も詳しくは知らない。だからネパールに行くと社会的弱者になる。そんな社会的弱者である私にネパール人は親切にしてくれた。司会者がネパール語で話している事を隣で英語や身振りで教えてくれる。また、予告なしの避難訓練が行われた。急にサイレンが鳴った。何のサイレンかもわからない私に対してネパール人は椅子の下に潜って、頭を守りながら歩いて、とすぐに指示を出してくれた。避難をする時も間に挟んでくれた。サミットでは自分と同年代や年下の子が多かった。子どもからの防災教育は今後にずっと繋がっていくのだと思った。もし本当の地震だったとして、ネパール人の助けがなければ私は、どの行動も一歩遅れていたと思う。本当に有難かった。もし同じような訓練を防災教育が行き届いていない所で行ったとしたら、確実に皆、自分を守ることで手いっぱいになってしまうだろう。私が日本に帰ったら社会的弱者の立場の防災を考えようと強く思った。また、サイレンが鳴った時、予告なしだったのにも関わらず全員が瞬時に椅子の下に潜っていた。この意識の高さを日本に持って帰りたいと思った。

震災を経験したことを聞くのも大切だが、自分自身で防災を理解していくのも大切だと思った。たくさんさんの話を聞いて、たくさん行動をする。その経験こそが防災に繋がっていくのだと感じた。だからネパールに行ったことも、今回祖父母に話を聞いたことも、他にも今まで経験してきたことを自分なりに防災に

繋げていきたいと思う。

12 これから

これから先、自分なりに防災と関わっていききたいと思う。私は将来幼稚園教諭になりたいと考えている。幼稚園と防災は切っても切り離すことができないと思う。私が幼稚園教諭になったら以下の2つのことに着目して防災をしていきたい。まず1つ目に大切な事が先生達の防災である。

災害が起きてまず第一に、子どもを守らなければならない。その幼稚園の地域がどのような災害に脆弱であるか、また津波が来たらどのような経路でどこに逃げるか等、先生自身が知っておかなければならないことはたくさんある。災害が起きてから「どうしよう」では子どもを守る立場の先生として許されない。先生自身が焦ってしまうことによって子どもも不安になってしまう。素早く指示を出せるようにならなければならない。また、子どもが安心できるようにしなければならない。災害が起きて怖いのは子どもだけでなく先生自身もそうであると思う。だが、子ども達がいる以上子どもの安全確保に務めなければならない。その為にも先生が防災をしっかり学ぶことが大切である。東日本大震災で起こった大川小学校の悲劇のようにならない為にも先生の中での防災教育強化が必要だと思う。被害想定、ハザードマップ等想定にとらわれすぎるのもよくないが、ある程度想定しておいた方がよいと思う。また、子ども達に防災教育をする前に先生の防災を見直さなければならないと思う。私が幼稚園教諭になったら防災の面で他の先生を引っ張っていったらと思う。

次に大切なのが子どもへの防災教育だ。子どもに防災教育をすることでその子どもの家族に防災が広まる。また、園内にいる時に災害が起きても先生が守ることができる。だが、一人で家で留守番をしている時に災害に遭っても先生たちは助けることができない。ただ、日頃幼稚園で防災教育をしていればその時に覚えた知識で助けることができる。また将来的にも防災に関心があることで無知が故に亡くなる命を減らすことができる。幼稚園教諭が子どもに、子どもから家族に、家族から地域に、地域から日本に、日本から海外に広がる防災教育というのが私の理想である。理想を理想のままで終わらせない為にもこれから自分の進路としっかり向き合っていきたいと思う。私はこれまで子どもと関わるボランティア活動に積極的に参加してきた。そこで小さい子どもに防災に興味を持ってもらうということは非常に難しいことだと実感した。子どもにただ単に説明をするだけでは興味を持ってもらうことはできないし、印象にすら残らないと思う。どうすれば印象に残るか、興味を持ってもらえるか。子どもとボランティア活動を通して関わっていく内にわかったことがある。子どもは体を動かすことが好きである。そして何か物を作ることが好きだ。これらを防災教育に当てはめると、体を動かすのは防災ダッグ。また物を作るという点では新聞でスリッパを作ったり、キッチンペーパーでマスクを作る等がある。これらのことを工夫し、これからもっと効果的に子供どもに防災教育を行うことができる幼稚園教諭になりたいと思う。幼稚園教諭になることは簡単ではないと思うが、環境防災科に入って幼稚園教諭になって防災教育をしたいと思うようになったことでまた一段と難易度は上がると思うが、前向きに夢に向かって歩んでいきたい。

聞いてみた

望月 龍之介

1 阪神・淡路大震災の概要

発生年月日	平成7年1月17日 5時46分
震源地	淡路島北部
震源の深さ	16 km
死者	6434名
行方不明者	3人
負傷者	43792人
全壊	104906棟
半壊	144274棟
一部破損	390506棟
道路の亀裂等	7245か所
橋の倒壊等	330か所
堤防の亀裂等	774か所
がけ崩れ	347か所
ブロック塀倒壊等	2468か所
水道断水	約130万戸
ガス供給停止	約86万戸
停電	約260万戸
電話不通	30万回線超

(http://www.bousai.go.jp/kyoik/kyokun/hanshin__awaji/earthquake)

淡路島北部では、阪神・淡路大震災によって新たに生じたと思われる断層の露頭が認められた。淡路島から神戸、西宮にかけては無数の活断層が走っており、このうち、野島断層（淡路島北部）に新たな断層のずれが生じたことが確認された。

2 母の話

(1) 震災当日

地震が発生したとき、母は仕事が休みだったので、家にいた。母はななくさ学園という施設で働いていた。まず、母は家族の安全確認をした。祖父はすでに出勤していた。祖母の部屋には倒れるものがなかったが腰を抜かしていた。妹に布団を被せて落ちてくる物に備えた。大きな揺れがおさまってから妹と一緒にテレビをつけに行った。その時初めて現状を知ることができた。そのあとすぐに祖父から電話があった。その次に青森の曾祖父から電話があった。

15階に住んでいる友達に電話をした。そのあと、電話が使えなくなったので、公衆電話で職場の人に電話をして、職場の状況を確認した。

(2) 2日目

翌日、母は仕事が休みだったため、職場に持っていく食料を買い込んだ。その日の晩、祖父が帰宅後、車で職場まで送ってくれようとしたが、大渋滞で6時間かかっても着かず、引き返し、帰宅した。帰りは30分しかかからなかった。

(3) 3日目

翌日、母は仕事に通えないため朝早くから家を出て職場にその日から泊まり込んだ。他にも泊まり込んでいる人もいた。その中には、1歳の子供を田舎の親に預けて、仕事をしに来ている人もいた。

3 母の職場仲間の話

この話は、母から聞いた話だ。職場仲間の人はTさんという。Tさんは、地震が発生してすぐに原付バイクを購入した。そのバイクで状況を把握するために見回りに行った。救助している人たちがいて、亡くなっ

た人たちが瓦礫の中から運び出されていた。

しばらく見回った。戻ってきたら死体の扱いが行きの時に比べて乱雑になっていた。

4 弟の話

弟は当然のことだが震災当時まだ生まれていない。弟が阪神・淡路大震災のことを知ったのは、小学校の時の校外学習で人と未来防災センターに行ったのがきっかけだ。その時初めて、地震が怖いと知ったそう。しかし、備えようとは思わない。現実味がない、何とかなると思っているからだ。しかし、防災カバンや非常食の準備は必要であると思っている。ちなみに、弟はカンパンが大好きだそう。

いつ阪神・淡路大震災が起きたかわからない。弟の学校では黙祷の時にしか、阪神・淡路大震災の話が出てこないそう。

5 父の話

震災当日

父は西宮市にあるアパートの2階で一人暮らしをしていた。父は寝ていた。普段、目覚ましが鳴っても起きない父だが、体験したことのない揺れで目を覚ました。父が子供のときからの地震に対する教えは、地震のときに気をつけないといけないのは津波と火事であり、建物が倒壊するという考えはなかった。地震が起きたら家の中に入り、机の下で落ちてくるものに備えるという考え方であった。しかし、今まで体験したことのない揺れは、建物が倒壊してしまうかもしれないと思うほどの激しい揺れであったため激しい揺れの最中は立つことすらままならず、揺れが収まったときに思わず外に出た。

外に出た後に同じアパートに住む職場の同僚の無事を確認した後、父が勤めているななくさ学園という施設に出勤した。朝の6時過ぎぐらいだったので辺りは薄暗かった。出勤途中、信号は点いておらず、車もほとんど走っていないため、比較的スムーズに職場に着くことが出来た。

建物や道路にひびが入っていたが、建物等の倒壊はなく、施設の利用者にけが人はいなかった。父の職場では職員が交代勤務するシステムであったが、あらゆる交通道路は渋滞であったため他の職員は来れなかった。

父は、状況を知るためにラジオで確認した。しかし、地震が起きてすぐだったので被害がどれだけ大きかったのか分からなかった。

施設の中で炊き出しをした。夜は懐中電灯を持って、利用者のトイレ誘導をした。家が職場と近いので早めに出勤し、深夜まで仕事をした。コンビニやスーパーなどに物が入っていないので、食べ物が手に入らず、ご飯一日一食という生活を1ヶ月くらい送った。自分のことで精一杯だったそう。父は、家に帰った後、余震でアパートが倒壊するのではないかという恐怖があった。それでも寝た。余震が怖かった。

6 祖父の話

震災当時

大阪にある市場で仕事をしていた。仕事をしている最中に地震が起きた。その時、市場にいた人たちが一斉に飛び出てきたのが一番恐かったそう。高速道路の電灯が激しく左右に揺れていた。揺れが収まった後も仕事をした。仕事をしている人の中で家が倒壊したにもかかわらず仕事をしにきた人がいた。

7 知り合いの話

震災後

その方は西宮市にある9階建てのマンションに住んでいた。休みの日はいつも水を運んだ。仕事より水を9階まで運んでくるほうがしんどかったそう。

8 環境防災科

環境防災科を知ったのは、中学2年生の時だ。それまでは聞いたこともなかった。そもそも舞子高校すら知らなかった。どこにあるのかも知らなかった。よく友達に「京都？」と聞かれることがあった。僕も舞子高校は京都にあると思っていた。しかし、神戸だった。驚いた。

中学2年生の時にトライやる・ウィークで消防署に行きたいと思っていた。しかし、消防署に行きたいと

いう人が多かったため抽選になり、抽選に落ちた僕は行くことができなかった。行けなかった悔しさがずっと残った。高校で消防体験のできることがあるか必死に探した。そこで見つけたのが舞子高校の環境防災科だ。

環境防災科は阪神・淡路大震災がきっかけでつくられた。この学科は防災教育を推進する全国で初めての学科である。

9 夢と防災

僕の夢は消防士だ。なぜ消防士になりたいのかというと、僕は家族が大好きで、とくに祖父母が好きなので、祖父母が安心して暮らせるまちにしたいと思ったからだ。

中学生の時の僕は、頑張ることや一生懸命に何かに取り組むということがかっこ悪いと思っていた。何に対しても興味が湧かなくなり、ずっと楽な方へと逃げていた。そんな時にトライやるウィークがあった。僕は、消防署に行きたいと思った。しかし、行くことができなかった。そのため、消防体験したいと思い、環境防災科に行くことを目指した。

環境防災科に入ることができた。そして、消防体験もできた。満足だ。消防体験は思ったよりしんどかった。しかし、頑張ることや一生懸命に何かに取り組むということがどれだけ格好いいかを知ることができた。そこから消防士に興味を湧いた。

消防士は、火災の消火や救急や救助によって人々の安全を守る仕事だ。僕はそこに魅力を感じた。消防士には、「消火」、「救助」、「防災」、「予防」の4つの活動が主な任務である。

消火活動は、みんなが知っている通りの火を消す仕事だ。火災の通報を受けて、現場にいち早く出動し、火災現場からの出火をくい止めると同時に、現場や近隣などからの人命救助を実践する。また、延焼を最小限に抑えるため、出火状況や風向きなどを素早く把握し行動に移す。

救急活動は通報を受けて、交通事故をはじめ、一般事故によって怪我を負った人、また、急病人に対して応急手当を施し、医療機関に搬送する仕事だ。

防災活動は、災害を未然に防ぎ、被害を最小限にくい止めるための仕事だ。万一の事態に備えて、地域住民の防災に対する意識を高めると同時に、基本的な行動や避難経路を知ってもらうため、町内会や自治会を中心に、消火器を使つての初期消火、救出、救護の訓練などの指導を行う。小学校などで防災訓練を行うこともある。そのほか、火災や地震のレベルを想定したり、地域の地形に基づく被災パターンを想定したり、地域ごとの実状にあった訓練なども行う。

予防活動は、建物の防災上の安全性や消防用設備などの設置について、現場の実状を厳格に審査、検査し、その結果に基づく指導を行い、建築物の防火と安全確保に努める。

救助活動は、災害などで取り残された人たちの人命救助をする。たとえ、相手が自殺しようとしていても全力で救助する。

僕は、消防士になったら数えきれないほどの災害現場を経験したい。そして、予防課に入りたいと考えている。

消防の仕事は火を消すだけではない。火事の発生を未然に防ぐのも重要な仕事だ。その役目を担うのが予防課である。

僕は、予防課に入り、災害発生時に建物の利用者が的確にすばやく避難できるように通路が確保されているかを確認したり、消火器を使って初期消火できるように指導を行うなど正しい防火対策・防災対策や防災意識を高めるための広報活動を行いたいと思っている。しかし、人に防災意識を持ってもらい、予防に努めってもらうには、自分自身が災害現場を経験していなければ、実際の災害の恐ろしさや予防の仕方を知識でしか語ることができない。知識としての言葉だけでは説得力がないし、知識だけでなら災害の恐ろしさや予防の仕方はみんなすでに知っている。なので、数えきれないほど災害現場を経験して、知識だけでなく、自身の経験に基づいた実感のある指導を行っていききたい。そうやって、地域の人たちを守っていききたい。そして、災害による犠牲者を少しでもいいから減らしたい。

10 感想

普段、家族とは楽しい話をする。まじめな話をするとしたら進路の相談といったことだけだ。しかし、今回初めて親から阪神・淡路大震災のことを聞いた。とてもまじめな話だ。親とそういったまじめな話をする

のは慣れていなくて、とても恥ずかしかった。途中で話を止めたくなるぐらい恥ずかしかった。でも、親は真剣に付き合ってくれた。とても感謝の気持ちでいっぱいだ。親と阪神・淡路大震災の話をするのはこれが最初で最後だと思う。阪神・淡路大震災の話を親から聞いた後に楽しい話をしづらくなったからである。

阪神・淡路大震災のことを聞いて知ったことは、阪神・淡路大震災がきっかけで全ての人の防災意識が変わったわけではないということだ。大震災を経験していても、防災について無関心な人もいる。経験していない人で阪神・淡路大震災がいつ起きたのか知らない人もいる。阪神・淡路大震災や防災について関心がある人はそんなに多くないと思った。関心がないのは普通だと思う。僕も関心がなかった。しかし、それでも良いと思った。震災の恐ろしさを聞いたところで何になるというのだ。震災が起きた日を覚えているから何になるんだと思うし、無理に覚える必要はないと思うからだ。覚えておきたい人は覚えとけば良いと思う。ただ、常識だのなんだのと言って、強制させるのはよくないと思う。しかし、防災や教訓については少し関心があった。災害に備えているといないとは全く違うからだ。自分の命を守ることができて、身の回りの安全を確保することができる。そしたら、周りの人を助けることができる。これほど大切なことはないと思った。自助だけ徹底しておけば良いと思っていた。それが親から阪神・淡路大震災のことを聞く前の僕の思っていたことであった。

阪神・淡路大震災のことを親から聞いて学んだことがたくさんある。たくさん学んだからこそ考え方が変わった。防災や教訓だけでは意味がなく、震災の恐ろしさを知った上で防災や教訓を学ぶからこそ意味があると思った。だから、語り継ぐということがどれだけ大切なことか知ることが出来た。

災害で誰かが命を落とさないように、自分の命を守れるように環境防災科で学んだ防災や震災のことをしっかりと少しでも多くの人に伝えていきたいと思う。そして、阪神・淡路大震災のことを忘れないようにしていきたい。けれども難しいと思う。卒業してしまったら、そういったことに関心がなくなってしまうかもしれないからだ。

最後に疑問に思ったことがある。阪神・淡路大震災がきっかけでつくられた学科に震災を経験した人で入ろうとは思わなかった人がきつというはずだ。その人はどう思っていたのだろうか。

防災を続けること

安田 もえ

1 震災以前の生活

(1) 家族

当時は、私が生まれる約3年半前で家族3人。父当時30歳、母当時28歳、姉当時2歳。

今私たちが住んでいる家とは違い、スーパーやお店の上のマンション4階に住んでいた。母の姉（私の叔母）の家族も同じマンションの1つ下の3階に住んでいた。

2 1995年1月

(1) 前日 16日 静かな夜

前日の夜ソファに座っているとガタッとした感覚があり、この地震は震度1だったという。

いつもはうるさく鳴いているマンションの前のすずめが全く鳴いていないので「今日は静かやなあ。」という会話をした。月は満月で不気味な色をしていた。そのときは、次の日に大地震が来るなんて想像もしないただの日常の一部だったが、阪神・淡路大震災を思い出すたびに予兆だったのかもしれないと考えてしまう。

(2) 17日 午前5時46分

ダンプがぶつかったと思った。地震なんて言葉は思いつかなかった。とっさに父は、母と当時2歳の姉に覆いかぶさり守ろうとしたが、母は逃げようと必死だった。2歳だった姉は、恐怖で漏らしてしまった。すぐに、車で5分ほどのところに住んでいた母方の祖父が外からドアをどんどん叩いた。開かなかったドアは父と祖父が協力してやっと開いた。

(3) 赤い空がこっちへ来る

玄関に入ってすぐの部屋に大きな家具を固めていたので玄関側のほうは被害が大きかったが、寝室やリビングにはほとんど被害がなかったのが不幸中の幸いだった。偶然、中身が丸見えにならないようにと貼っていた強化ガラスのおかげで、食器は食器棚内から出ることなく、中で割れて粉々になる程度で済んだが、しばらく扉を開ける気持ちは起きず、そのままにしていた。

当時は、現在ほど家も建ち並んでおらず見晴らしがよかったため、県立須磨東高校のほうから見える赤い空がとても近く感じた。「火が来るかもしれない」ただそれだけが怖かった。

3 震災で見えてきたもの

(1) 両親

当時の家は、電気、(マンションの下にあるスーパーのための水のタンクが屋上にあったおかげで) 水も復旧が早かったため、祖父母や叔父・叔母だけでなくその友人などと過ごしていて避難所代わりのようになっていた。水汲みから帰ると知らない人がいることもあるくらいだった。混乱の中で協力する人と人の温かさを感じた。被害も少なく、他の地域に比べ恵まれた生活を送ることができていたため避難所に行こうという考えは全くなかったが、ガスは止まっていたので、電子レンジでできる限りの調理をした。マンションの下が酒屋で、割れた瓶からのにおいがひどかった。

タイル貼りの仕事をしていた父は、前日に行っていた現場に仕事道具を置いてきていたが、取りに行くこともできない状態だったため違う現場に移動になった。倒壊した家屋が多かったため、お金儲けばかりを考えた大工が多く、働くことにいい気はしなかった。足場の上で余震を体験したときはとても恐怖を感じた。

(2) 叔父

地下鉄長田駅の大開通の陥没を、「見ておかなくはいけないものだ」と感じ、須磨区にある自宅から歩いて見に行くと、途中で「〇〇小学校にいます」などの張り紙を何枚も目にした。

乗るはずだった六甲ライナーの被害を見て、1時間違っていたら生きていなかったかもしれないと感じた。会社のビルも傾いていた。

発生から1週間後まで自宅待機、それから2週間は損害保険の調査の仕事をした。「神戸に地震は来ない

と言われていた。」と被災者のほとんどが口をそろえ、自分自身も「神戸に地震が来る」なんて聞いたことはなかった。しかし、保険会社は神戸で地震が発生する可能性が高いことを知っていて地震保険を高く設定していた、と発生後の出勤で初めて知った。保険会社の仕事を終えると、神戸では仕事ができないため横浜へ単身赴任が決まった。2、3か月は「ああここで地震が来たら死ぬんやろうな。」と毎日思いながら橋を渡っていた。

(3) 叔母

震災前日の夜に、翌朝に炊き上がるようにと炊飯器をセットしていたため、ガスが正常に通っていたら火災にもつながっただろうと思った。それから怖くなり、今もガス炊飯器は使おうという気が起きない。通勤に利用していた阪神高速道路が倒れているのを見て、こどもも大きくないのに、と怖くなり会社を辞めた。「会社へ行ってくる。」と言った夫（私の叔父）に「行かんといて。」と言ってしまうくらい不安だった。

自宅が落ち着いてから見に行ったお墓も墓石が落ちてぐちゃぐちゃの状態になっていたそうだ。

大阪などへの遊びがてら被災地に興味本意で様子を見に来る他地方の人が嫌だった。

両手が使えるようにリュックサックを背負い、ぼうしとマスク（粉じん対策）を身に着けた人であふれた街は異様な光景だった。

4 2016年 21年が経って今

(1) 母

阪神・淡路大震災を経験した人の中には、「もうこんから大丈夫やろ。」「経験したからもうわかってるわ。」と言う人がいること、伝えるのが酷なこと、震災を体験していない私たちが、震災体験を思い出させていいのだろうかと感じていることを伝えうえで、震災体験をいつも淡々と話してくれる母に、思い出すことはしんどいかを質問してみた。

「大丈夫やで。」という返答が返ってくるという私の予想とは裏腹に、意外な答えが返ってきた。「うーん、母さんも、しんどくないなって思ってた。最近まで。でも、こないだ淡路の野島断層保存館行って、震度7を（起震体験コーナーで）体験して、ああ嫌やなって久しぶりに感じた。でも思い出すのは大事やって感じたよ。確かに、もえ達は知らんから偉そうになって思われるかもしれへんけど、経験した私らが覚えとかな。母さんも、震度7もう1回体験するまで思い出せてなかったもん。やっぱり忘れたらあかんから思い出させてくれるのは大事やよ。」

環境防災科を志望していると話した時も反対どころか理由すら聞かず、私が入学後に参加している活動について話すと聞いてはくれても、どう思っているかなどは言ってくれない母から出るには意外な言葉だと思った。

活動が多く休日の帰りが遅くなるのが続き、怒られた時は「何してるか何も知らへんくせに。」と思っていたが、母は、母自身も気づかない形で、思い出さないように、傷つかないようにしていたのかもしれないと感じた。

(2) 姉

当時2歳であり記憶は残っていないが、トラウマが残る姉に話を聴いた。

玄関にガラスが散らばっていて、「そっち行ったらあかん。」と怒鳴られたことだけは覚えていた。

姉は、現在大阪で一人暮らしをしながら保育士として働いているが、たとえ震度1でも地震速報が入ると家族や仲の良い友達が心配になって連絡をくれる。けれど、姉自身は携帯電話に入る地震速報や、訓練の速報を聞くだけで息切れがして頭が真っ白になってしまう。あんな速報で心の準備なんかできるほど克服できていない、と2歳の時に体験した地震は今も姉を苦しめる。

姉にとって阪神・淡路大震災の中で印象の大きかったものは毎年1月17日が近くなるとテレビで放送される、あの長田周辺からの火災により大きく黒い煙が上がる空からの映像。あれを見て、自分はいんなことを体験したのかと怖くなる。「熊本地震も、神戸と離れているのに現状が似ていて怖い。けど、生きてたってすごいって思う。」と話してくれた。

姉は、私が環境防災科に入りたいと言ったとき、「自分にトラウマがあるなしに関係なく素直にいいことやなと思った。」と思ってくれたと初めて知った。姉は、私が環境防災科志望を話したとき、人助けになることがしたいという気持ちがあり、その部分では、同じだと感じていた。

私が合格後に話した「姉の心のケアがしたい」という志望動機を聞いたときは、精神的に傷を負った人を癒すなら医療系や精神科医などを目指すこともできるけれど、災害で傷を負った人に対してというところに特化する道を選んだことに、そんな方法もあるのかと感心してくれていたことも初めて聞いた。

話すことに抵抗がないか聞いてみると、何年か前までは話すことも地震関連のニュースや写真を見ることにすら抵抗があったという。抵抗がなくなってきたきっかけは、結婚を意識する年齢になって、いつか自分が親になるのだから守ってもらってばかりではだめだ、とを感じるようになったこと。姉は、熊本地震の報道を受けて、家の近くの避難所や安全な場所を確認したり、東日本大震災では避けて見ていなかったニュースも見えるようになった。でも、姉の周りにはもちろん関心の薄い同世代がいる。その人たちが言う「2歳やったからわからんしな。」と本心ではないかもしれない、内心は重く受け止めているけれど怖いから表向きには軽くそう話しているかもしれない、と幼い時に経験した姉だからこそ感じることも教えてくれた。姉は、トラウマは無くならないけど軽くなったという。

姉からの話は直接聞く勇気がなく、何日も後回しにしてきた。語り継ぐ執筆締切前日になって電話で話を聞いた。姉が電話中にふと姉自身のトラウマについて言った「目で見て勝手に受けてしまった傷」という言葉は一生忘れることができないと思う。でも、語り継ぐ執筆がなければ私は姉から話を聞くことをこれからも避けていたかもしれない。こういう機会があってよかったと心から思う。

5 環境防災科13期生としての私

(1) 目指した理由

私が、環境防災科に入学したいと思ったのは2008年小学4年生の時だった。

当時、所属していた学校の代表委員会で、先生の提案により同年5月に起きた中国の四川大地震の募金活動しようということになった。正直なところ、四川省の場所もわからないまま活動を始めた。ぴんとこなかったのは私だけではなかったようで、1年前に行われていた新潟県中越沖地震の募金に比べ、全然集まらず悔しい思いをして、やっと地震に関心が向いた。

家へ帰りテレビを見ていると四川大地震のニュースでもちきりだったが、当時9歳の私にとっては、関心があるといっても他人事で、映像から恐怖は感じなかったが大変なことが起きているのは理解できた。私の隣でテレビを見ていた当時高校1年生の姉は、私とは様子がまるで違っていた。顔をしかめて震えていた。

6歳離れた姉は私の憧れの存在だった。大人っぽくて天真爛漫という言葉がよく似合う、いつもにこにこしている姉だったのに、地震は姉をこんなにも怖がらせるのか？こんな顔をさせてしまうのか？と、啞然とした。その時になって私は初めて姉を苦しめた阪神・淡路大震災というものが、いかに恐ろしいものだったのか感じた。

翌日、学校でよくお世話になっていた保健室の先生にこのことを話すと、「高校生でも現地へ行っている人がいるよ。」と教えてくれた。先生の家のおすぐ近くが舞子高校だったのだ。私はそれを聞いてから、舞子高校の場所も、環境防災科についても、よく知らないまま「環境防災科に行くねん。」と周囲の人に言い続け、志望校は一度も変わらず、環境防災科13期生となることができた。

しかし、変わったこともいくつかある。

私が環境防災科を志望したのは、姉のように災害で心に傷を負った人に、心のケアができる人になりたい、災害後いち早く現地でボランティアがしたいというのが理由だったが、今では防災にもっと力を入れたい、失われなくていい命を、傷つかなくていい心を、ひとつでも多く事前に救いたいと感じるようになった。

(2) 伝えるということ

環境防災科に入学してから伝えることの苦しさやむごさを知った。

聴覚特別支援学校の小学部で、「災害時要援護者の受援力」をテーマに授業をさせていただく際に、「助けてください、耳が不自由ですと伝えることが大切です。」

と無邪気なこともたちに向かって言うのが苦しく、1年に一度しか来られない高校生の私なんか、こんなことを言っているのだろうか、私には授業をした生徒さん全員を救う力なんてないのに、と感じ、次の教室に入れなくなってしまったこともあった。

募金活動などに参加すると、さまざまな災害の体験談をお聞きすることがある。家へ帰ると地震速報の音や映像を見るだけで吐き気や頭痛がするようになったときもあった。

2年生の冬の1・17追悼式では、黙祷の放送とともに涙が止まらなくなった。姉の心のケアがしたくて入

学して2年たっても、ニュースを見て震えていた姉を思い出すだけで私が怖くなってしまい話すら聞くことができていない、防災から離れたい、と息苦しくなったりもした。

（3）先輩の存在

中学生のころまでの私は、「先輩が作ってきた伝統」や「先輩のありがたみ」を感じたことはなく、人に対して特別な関心や興味がない人間だった。

それなのに、環境防災科に入学してからは「先輩が残してくれたものを後輩へ受け継ぎたい」と自ら思うようになった。

「私の跡継ぎになってね。」と言ってくれた11期生の先輩がいる。特別支援学校との交流で何度もお世話になった憧れの先輩だ。

その先輩は、私を何度も褒めてくれたし、何度も勇気づけてくれたし、なにより何度も怒ってくれた。

入学するまで親以外の人に、ほとんど怒られたことなどなかった。でも、その先輩は私を怒ってくれた。初めは、どうしてそんなに怒られないといけないのかと、その先輩がとても苦手だったが、怒ってくれる人がいることがどれだけありがたいことかを、先輩が卒業し自分が先輩という立場になってからとても実感している。

6 将来の私と防災

（1）行きたいと思える学校

私の夢は特別支援教諭として、こどもたちが「やりたい」と思ったことを全力でできるようにサポートすることと、こどもたちにたくさんの世界を知ってもらうことだ。

大きく分類すると教員志望だが、特別支援学校の小学部の先生になること、院内学級の先生になること、中学校の国語の先生として担任を持つこと、の3つの夢がある。

国語の物語を読んで登場人物の心情を考える授業が大好きだった。先生は人より多くの本を読んで人よりたくさんの物語の世界を知っているのに、さらに生徒の意見すべてを知ることができる仕事なんて、「ずるい職業だ。うらやましい。」と思ってから、漠然と先生を目指し始めた。

小学4年生のとき、ダウン症があり特別支援学級に所属していた子が、毎日泣いて人を叩くようになってしまい、特別支援学校への転校が決まった。転校先の特別支援学校の先生が、その子としっかりと向き合い、言葉にできない想いを受け止めようとする姿を見て、自分もそうなりたいと志した。また、入院生活が多かった私は小学校5年生の時放送された「赤鼻のセンセイ」というドラマを見て、衝撃を受けた。私が入院していた薄暗い病棟ではなく小児病棟内に明るい学校があって先生がいる、とても不思議な光景だった。私自身が病院の中で生活するこどもたちを笑顔にさせる先生になりたいと感じ、特別支援学校の先生と合わせて院内学級の先生を目指すようになった。

病気や障がいがあることで学校に思うように通えない子や転校・留年を余儀なくされた子が私の友達には多くいる。中学の時に発症した病気について話すことが怖く、高校ではあまり周囲に話せない子もいる。夢をあきらめてしまった子もいる。望んでなかったわけでもない病気や障がいと闘って頑張っているのに、みんなと同じ当たり前の生活ができないのはあまりにも残酷なことだと私は感じる。

入院中に出会った子がみんな口をそろえて言った「学校に行きたい。」という想いがもっと広がってほしい。学校に通えることは決して当たり前ではない。通いたくないと思いながら通っている人は多くいる。そんな当たり前の生活を送ることができているこどもたちにも「行きたいと思える学校」を作ることができる先生になりたい。

（2）災害時要援護者と呼ばれるこどもたちと一緒に生きる

私が目指す特別支援教諭という職業では、災害時要援護者と密接にかかわることになる。災害時要援護者は、死亡率が被災者住民全体の死亡率の約2倍になるというデータもある。しかし、防災を学んでいる私が特別支援教諭になったら、災害時要援護者だなんて一言で片づけたりしない。災害時要援護者は救えない命じゃない。失われなくていい命を救うために、目・耳・口・体・あらゆる部分を使ってやさしい防災教育を行う。

自分の生徒を守れる先生、自分の命を自分で守ることができる生徒を育てられる先生になりたい。

（3）実現のために

よく、後世に伝えていきたいと思いますと言われるが、それではいけないと思う。

大きな災害を経験したことがない後世だけでなく、もう自分は災害には遭わないと思っている人、もう経験したことがあるから大丈夫だと思い込んでいる人に気づきを持ってもらいたい。災害は、同じパターンなんて簡単なものもなければ、確実に生き残れる保証もない。だから、後世だけではなく、今を生きる人に伝えていきたい。

環境防災科が好きだ。といつも思う。環境防災科で、こんなにたくさんの活動をしていなければ感じなくてよかった悔しさも苦しさもあるけれど、やめたいと思ったことはない。ボランティアだって本当はなくてもいいことかもしれない。しなくてもいいことをどれだけ一生懸命やれるかだと思う。それが回り回っていつか何か、誰かのためになったら嬉しいという想いで今自分にできる防災を続けていく。

1 阪神・淡路大震災

はじめに

1995年1月17日午前5時46分52秒、淡路島を震源とする阪神・淡路大震災が発生した。最大震度7を記録した災害だった。当時、両親と1歳半になる私の姉は現在住んでいる家ではなく、西区にあるマンションの3階に住んでいた。午前5時46分、このときは家族全員が同じ部屋で寝ていた。この語り継ぐは両親の経験した話をもとに書いたものだ。ここに両親の経験を書き記し、未来の世代に両親の経験を語り継ごうと思う。

2 母の話

(1) 阪神・淡路大震災 発生直後

両親と1歳半の姉は川の字に布団を敷いて寝ていた。1月17日午前5時46分、大きな揺れで目が覚めた。今までに感じたことのない大きな揺れだった。父は地震だと気づき、頭上にあるたんすが母と姉の上に倒れてこないよう、2人の上に覆いかぶさった。いつまでも終わらない長い揺れに恐怖を感じた。揺れがおさまり、家の中を見渡すと家具が散乱していた。食器棚からは食器が全部落ち、ほとんどが割れてしまった。しかし、家族全員が大きな怪我をすることもなく無事だった。家の中は散乱したものの、住んでいたマンションに大きな被害はなかった。マンションにはひびが入ったが、家での生活が続けることができた。ただ、電気やガスといったライフラインはすべて止まってしまい、配給されたもので生活していた。いち早く復旧することを願っていた。そして、これからの生活への不安が募っていくばかりだった。

(2) それからの生活

ライフラインの止まった生活は不便だった。一番困ったことは水が出ないということだった。トイレも食事もお風呂も水が出ないことでできないことだと感じた。水は垂水区にある水道局に行き、並んで手に入れた。列に何回も並んで、重い水を持って家に帰った。水の大切さを学んだ。昼間には水を貰いに来た人で長い行列ができてしまうので、夜中に行くようにしていた。夜に行くと比較的人が少なく、すぐにもらえることができた。また、長時間並ぶことは1歳半の姉の負担にもなるのでできるだけ避けた。水が止まってしまったことで何日も風呂に入らず、体や頭を洗うことはできなかった。地震発生から1か月ほどは洗い流さないシャンプーで頭を洗っていた。水道局で水が少し多くもらえた日には、ガスコンロでお湯を2〜3杯沸かしてタオルで体を拭いていた。雪が降るなか、1歳半の姉を抱いて家の近所にできた銭湯に2時間並んだこともあった。ガスが通ったときは本当にうれしかった。ガスが通ったことで家で風呂に入ることができるようになったからだ。食事は家にストックしてあったカップラーメンや正月に余った餅を食べていた。また、飲み水が多少家にあり、あまり困ることはなかった。幸い食事に関して不便なことは少なかった。水が貴重だったので、できるだけ皿を使わないような食事をしていた。食べ物は電子レンジで温められるものを置いていた。

地震が起きてから毎日余震に怯えて生活するようになった。いつまた大きな地震が来るかわからないという恐怖におびえていた。夜に地震が来てもすぐに逃げられるように、寝るときは必ず枕元に靴を置き、いつでも外に出られるよう私服を着て寝ていた。物資をもらったり、ボランティアに直接助けてもらったことはなかった。ある程度の自立した生活を送れていた。家での生活が続けることができたからだろう。避難所生活だったら幼い姉の世話もたいへんだったと思う。家族全員が無事で、家での暮らしを続けられたことに感謝している。

(3) 今、思うこと

東日本大震災を機に津波への関心が強まった。阪神・淡路大震災以降に発生した災害の対応を見て本当に教訓が活かされているのかと思うことがある。避難物資の内容や、募金の使い道、高台移転などについてもたくさんの疑問がある。物資が一か所に集中してしまうことや、募金が直接被災者の役に立っているのか、無理な工事や転居をしてよいのか。また、介護の仕事をしているので、被災した高齢者のケアは行き届いているのかという不安もある。これから起こるとされている南海トラフ地震について怖いという意識はあ

る。しかし、いつ来るかわからないので、備えがあまりできていない。自分の家は大丈夫なのでは、という気持ちもある。しかし、阪神・淡路大震災を経験して水の大切さを知ったので、水は常備するようにしている。今回語ったことを機にもう一度阪神・淡路大震災に向き合い、これからの災害について家族で考えようと思う。

3 父の話

(1) 阪神・淡路大震災 発生直後

地震が発生した時間は、家族3人で同じ部屋に寝ていた。揺れが来た時、すぐに地震だと分かった。すぐに飛び起きて自分の身を守るのではなく、母と1歳半の姉の上に物が落ちてこないよう覆いかぶさるような形で姉を守った。姉を守っている間、長く大きな地震だと思った。しかし、揺れている間は、怖いなどの感情はなく、家族を守ることだけに精いっぱいだった。揺れがおさまった後、家の中を見回すといつもと世界が変わっていた。炊飯器や電子レンジはもとの場所からずっと離れたところの床まで飛んでおり、皿やガラスなども割れていた。家の中の物は壊れたり、傷がついた物もあったが、買い替えは不要だった。マンションにもひびが入っていたそうだが、家での生活を続けることができた。多少のひびなど少しも気にならなかった。次に大きな揺れが来ても逃げられるように、真っ先に玄関の扉を開けに行った。テレビで地震の様子を見たとき、まさかあんな大きな災害だとは思ってもいなかった。

(2) それからの生活

会社へ行こうとしたが、交通網がすべてストップしており、行くことができなかった。交通網が戻った日からはいつものように会社へ向かった。電気、ガス、水道はすべて止まってしまった。電気はとても早い段階で復旧した。地震から2〜3日経ったころにはテレビを見ることができた。ずっとテレビを見ていた。こんなにも大きな災害だったのかとニュースを見るたびに思った。ニュースを見るまでは、こんな大変なことになっているなんて思わなかった。長田の火災や高速道路が倒れていたことは衝撃だった。本当に家族全員が無事だったことに感謝した。ガスと水道は使えるようになるまでとても時間がかかった。何度も何度も水道局まで水をもらいに行ったことを覚えている。風呂を借りるため、地震で被害を受けなかった、姫路に住む親戚の家まで行ったこともある。雪の降るなか、銭湯に入るために2時間ほど並ぶこともあった。ライフラインが止まってしまう、一番生活で大変だったのはやはり水が使えなかったことだと思う。銭湯や姫路の親戚の家には何度も行けないので、風呂に入れない生活がずっと続いた。おそらくは地震発生から1カ月は家で風呂に入れなかっただろう。その間は水が要らないシャンプーなどで洗っていた。また、水が使えないことで不便だったのはトイレだった。トイレは一回ごと流すと水がもったいないので、数回分をまとめて、バケツの水で流していた。食べ物にはあまり困らなかった。家にあったカップラーメンなどをよく食べていた。家から近いお店が開いた時は買いに行くこともできた。

地震が起こった時、一番よかったのは、自分たちが住んでいた家で生活ができたことだった。幸い被害が少なく、家での生活が続けられたので、避難所生活を送ることにならなかった。家族だけでの生活が続けられたので、あまりストレスがたまらなかった。それに、1歳半の姉が避難所にいるととても迷惑だっただろう。こどもを安全に生活させることができたのでよかった。震災の時と変わらず、いまでも阪神・淡路大震災の映像を見ると被害の大きさを思い出す。阪神高速が倒れていたことは特に衝撃的だった。阪神高速は大阪に住む祖父母の家に向かうときなど通っていたからだ。あの高速道路が倒れるのかと思った。もし、大阪に向かう途中で阪神・淡路大震災が起こっていたらと考えるととても恐ろしいことだ。また、ボランティアとの接触がなく、自立した生活ができたことがよかった。

(3) 今、思うこと

阪神・淡路大震災から20年以上が経った今、当時のことを振り返ってみると、あまり覚えていない。当時は怖い、悲しいなどの感情より、生きることしか考えていなかった。それに家族を守ることだけに精いっぱい考える余裕などなかった。日本は自然災害の多い国であるし、人は自然災害には勝てないのだから、このような大災害にも向き合っていくしかないと思う。何が来るかわからないから備え方がわからないというのも事実だ。東日本大震災のような津波がきたら諦めるしかないだろう。また阪神・淡路大震災のような大きな地震が来て、生活が壊れても一から立て直そうと思う。なにか起きたら、その時にできる精一杯のことをし、家族を守るのか役目だと思っている。2016年4月に熊本県で震度7の地震が発生した。また、阪神・淡路大震災のようなことが起こるのかと思った。災害や災害対応に詳しいわけではないが、阪神・淡路大震災を経

験した者として熊本地震の報道を見ていると、改めて阪神・淡路大震災の教訓が生かされていないと思う。もう少し日本の政治は被災地への支援を考えるべきではないかと思う。すべての人への配慮を考えた支援、ボランティアでないと、阪神・淡路大震災の教訓が生かせていないと感じた。今後、教訓が生かされる社会になることを望んでいる。

4 私ができること

(1) 話を聴いて

私はこの語り継ぐを書くにあたって不安だったことがある。普段の生活で阪神・淡路大震災の話をするとはあまりなく、今回当時のことを聴いてよいのかということ、当時のことを話して両親が苦しかったことを思い出すことだ。しかし、両親は快く話してくれた。両親の住んでいた地域は被害があまり大きくなかったそうだが、それでもライフラインの被害はでていた。両親ともに話していたが、本当に水がないと不便だったらしい。また、家で生活を続けることができて本当に良かったと何度も言っていた。家族だけの空間、時間があったからこそ、ストレスを感じることは少なかったそうだ。姉への負担も少なかったらしい。前向きな気持ちを忘れず、協力しながら生活することができたそうだ。

また、私はとても悲しい気持ちになった。私は環境防災科に入り、阪神・淡路大震災を経験した外部講師のお話をたくさん聴かせていただいた。多くのボランティア活動にも参加させてもらった。家族に聴いたこと、感じたことを話していた。しかし、家族の気持ちを動かすことはできなかった。私自身のために、周りの人の命を守るために、環境防災科で防災を学んできた。それなのに、備えの大切さを伝えることができていなかった。阪神・淡路大震災を経験した本人にさえ災害の怖さを思い込ませることができなかった。本当にこのままでよいのだろうか。このままだと命を救えないのではないのか。私自身の意識もこのままでよいのだろうか。周りの人の意識を変えるには私自身が変わるべきではないのか、そう感じた。私自身の防災意識を高め、周りの人へ防災を伝えようと思う。もっと家族で災害に向き合い、考えようと思う。そして、高校を卒業すると同時に防災をやめるのではなく、生涯続けていきたい。

この「語り継ぐ」を書くにあたって、両親から被災当時の様子を聴くことができたのはとても貴重な時間だった。これまで語り部さんや外部講師の方に阪神・淡路大震災のことを、東北訪問では東日本大震災のことをお話ししていただいたが、人それぞれ生活、状況が違うからこそ、ひとりひとりの被災経験が違うということを知った。震災を経験していない私ができるのは、「伝えること」「備えること」「命を大切にすること」だと思う。話してくれた方の気持ちを無駄にしないよう、伝え広めていく。そして、将来の災害について考え備えたい。震災によって両親を亡くしていたら、私は生まれていなかったかもしれない。今生きていることは奇跡だと思う。今、生きているということ、あたりまえの生活ができていることに感謝し、毎日大切に生きていきたい。

(2) 環境防災科に入るまで

私は環境防災科に入るまで、災害や防災について深く学んだり、考えたことはなかった。ただ、私の通っていた小学校では、毎年1月になると総合の時間に阪神・淡路大震災についての授業が行われていた。内容はあまり覚えていないが、1月17日は神戸に住む人として忘れてはいけない日だと教えられてきた。それだけは、とても記憶に残っている。また、1月17日には全校集会が行われ、全校生徒で「幸せはこべるように」を歌った。毎年、阪神・淡路大震災について学ぶ時間があつたが、震災を身近に感じたことはなかった。私は大きな災害を経験しないだろう、神戸では地震なんて起こらないだろうと思っていた。

東日本大震災が発生したとき、本当にこれが日本で起こったことなのかと目を疑った。一日でたくさんの人が亡くなった。私と同じ年の人も亡くなった。それがとても恐怖だった。もし私が東北に住んでいたら亡くなっていたかもしれないと思った。あんなに大きな波が命を奪うなんて考えたこともなかった。それと同時に、ボランティアの存在を知った。全国から集まる人たちの姿はとても輝いていた。そのなかでも、1～2歳しか変わらない高校生が現地で活動する姿はとてもカッコいいと思った。そして環境防災科に入りたいと思った。

将来はカウンセラーになりたいと思った。東日本大震災をきっかけに心のケアをしている方がいることを知り、災害時に物資の支援だけが必要なのではないと知った。こどもが好きで、将来こどもと関わる職業に就きたいと考えていた私は、災害時に傷ついたこどもたちを救える人になりたいと思った。

（３） 環境防災科に入って、夢

いま私はカウンセラーではなく、新しい夢を持っている。環境防災科に入り、たくさんのボランティアに行かせていただいた。そのなかで聴覚障がいがある方や聾の方と出会った。そして、その方たちを支えられる人になりたいと思った。ボランティアとして関わるのではなく、密接に関わり生活の支援をしたいと思うようになった。１年間手話サークルで手話について学んだ。そのなかで見つけた私の今の夢は言語聴覚士になることだ。言語聴覚士は障がいや事故によって話すこと、聞くこと、飲み込むことが困難な方の生活を支援する職業だ。災害時には健常者だけでなく、災害時要援護者になってしまう方の命を守る人になりたいと思っている。災害時に患者さんの命を守り、生活を支援する人になりたい。そのような人になるには、環境防災科で学んだことを生かすことが大切だと思う。そして、手話の力をしっかり身に着けることが必要だ。災害の怖さ、備えの大切さを伝えることも大事だが、自らの命を守る防災を伝えたい。そして、これからも防災について学び、防災を広められる言語聴覚士になりたい。

1 はじめに

今（2016年）から21年前、私たちが住むこの街に未曾有の災害が起こった。多くの人が亡くなりその数は6434人にもおよぶ。私は、その3年後にこの世に生を受けているため、なにも体験をしていない。しかし、関係ないことでは決していない。今回、ショックであり覚えていないという母に思い出してもらい当時の体験を書いていく。

2 1月17日

（1）阪神・淡路大震災

阪神・淡路大震災は早朝5時46分に起きた。私の母親は寝ていた。当時のことはショックであり覚えていないというのが相当焦ったと言っていた。

（2）母の兄妹

当時母親は兵庫医科大学の救命センターで看護師として働いていた。その日は休みだった。叔母（母親の姉）は兵庫医科大学の泌尿外科で看護師をしており、夜勤をしていた。叔父は商船大学生で深江という土地でアパートを借りていた。

（3）被害

母と叔母とで住んでいた西宮にあるアパートの家具や食器棚はすべて倒れていた。母は二段ベッドの下で寝ていたので家具の下敷きにならずに済んだ。叔母も大丈夫だった。床がガラスだらけで靴なしではとても歩けない状況だったという。母と叔母は当時病院で看護師をしていた。叔母はその時間に11階建ての8階の大部屋（8人部屋）で20人ほどの患者の採血の最中だった。突然の揺れで、注射器が抜け、床が血だらけになったという。揺れでベッドは真ん中に移動していた。

母は叔父の生存を確かめるために、倒れた43号線を1時間半かけてバイクで走った。道中、コンビニに人が水や食料を求め暴動のように集まっていたという。母は叔父が活着していることを確認し、また、43号線の道なき道の上でバイクを走らせた。甲子園口周囲はほとんど家が倒壊していた。家を失った人が体育館に集まり、寝泊りをしていた。自衛隊員が食料の配布や風呂を沸かしてくれていた。叔父は、周りのアパートで下敷きになった住民の救助をしていた。

（4）数時間後

母親は救命センターに戻った。患者が救命センターに運ばれてくるとき、救急車に担架が全く足りず、畳や扉の上を担架の代わりとして使い、患者は泥だらけだった。ほとんどが重たい家具の下敷きになったのが原因の骨折や内臓破裂や、長時間、タンスなどのものに挟まれて、救助されたときに起こるクラッシュ症候群の患者が多かった。普段救命センターは第3次救急体制を取っており、軽傷の患者の場合は輪番の近隣の病院に回すことが多かったので、運ばれてくる患者は重症のことが多く、2人以上同時に受け入れることなどかつてなかったが、震災当日は、救急隊は搬送してくるばかりか、電話等のライフラインが遮断されていたため、直接一般市民の方が、畳や、扉などに負傷者を乗せ、ぞくぞくと担ぎこまれ、大きめの処置室は患者でいっぱいになり、廊下から入口付近まで負傷者であふれかえった。

当日夜勤のナースは20年のベテランナースでしかも救命士の資格も取得されている先輩だった為、患者の重症度を決め、優先して診るトリアージがしっかり出来ていたため、その先輩の手伝いをしながら、先輩から指示をもらい、動くことで精一杯だったと母は言っていた。

運ばれてきた50代の男性はタンスの下敷きになり、内臓破裂で助かる見込みはなく、点滴や酸素吸入ぐらいしか治療出来なかった。医者から絶飲食の指示が出たがずっと亡くなるまで「のどが渴いた、水が飲みたい」と言っていたそうだ。何度医師に確認しても、飲水の許可は下りず、希望が叶わぬまま、その方は数日後お亡くなりになられた。母は震災から数年して震災の記事が集められた記事が本になったり、出版されたりしたため、購入し記事を読んだところ、その男性の奥様が、「夫は死ぬまで喉が渴いたと言っていた」「あの時飲ませてあげられなかったのが心残りです」という内容を発見した。母はもっと医師に強く言って、少量の水でもよいのでの飲ませてあげれば良かったなと今でも当時を思い出すと心が痛くなるらしい。

別の患者の50代の女性は建物の下敷になり、左足と左腕を長時間挟まれ、救助された時にクラッシュシンдрームに陥り、搬送されてきた。一緒に住まわれていた旦那様は救急隊が助け出した時にはすでに息を引き取っておられた。K氏は「夫は無事なんですか」「夫は何処にいるんですか」と私たちナースに何度も質問されたが、治療に専念してもらいたいという思いと、現状を把握できていないK氏には今は夫の死を伝えるべきではないとスタッフで相談し、しばらくは、「旦那様は大丈夫ですよ」と答えるようにスタッフで統一することになった。質問されるたびに嘘をつかないといけないという罪悪感に母はさいなまれたという。しばらく「良かった、夫が無事で」と言われていたが、いつになっても面会に来られないことや、スタッフの答える時の表情などから、徐々に夫が亡くなっていることを自分なりに理解し、そのころから言葉数が減り、表情が暗くなられていった。症状が軽快したところでK氏は近くの病院に転院されていった。母は患者に嘘などついたことなどなかったため、あの時の対処方法はあったのだろうかと未だに結論が出ず、思い出すと辛くなると言っている。

(5) 大変だったこと

- ・電気、ガスが止まり、食事をするにも苦労した
- ・風呂は、毎日入れず、また入るときは、ガスコンロで鍋に湯を何度も沸かして入った
- ・暖房の入らない中での夜勤勤務は寒くつらかった
- ・携帯がない時代で固定電話ではなかなか繋がらなく困った
- ・夜勤で一番意識が朦朧としていたときで、また20人の患者の採血を5時半から7時までに行わなければならなかったため業務を遂行することを優先するあまり、事態を把握できず適切な行動がとれなかった
- ・短い期間に倒壊した町や亡くなられた人を大量に見たこと
- ・コンビニでの暴動する人々を目の当たりにし、また常に余震に怯えていた

(6) ショックだったこと

- ・被害の少なかった尼崎の銭湯に入りに行ったときのこと。銭湯の常連客らしきおばさんが聞こえるように大きく「汚いのが入ったら風呂の湯が汚れる」と言われ、冷たく傷ついたという
- ・叔父が倒壊したアパートから助け出した老人が後日また会ったときに「助けてくれん方がよかった」といわれた
- ・母と叔母が体育館にボランティアで行くと、被災者（母も叔母も被災者だが）は床に寝たまま、何の手伝いもせず、手伝ってもらうことが当たり前のような態度で感謝を表されず驚いた

(7) 教訓

- ・災害が起こりうるという認識を持っていなかったから、日々、災害が起こりうると思い、暮らさないといけない
- ・備蓄をしていればよかった
- ・重たく、背の高いタンスの近くで決して寝ない
- ・災害時は備蓄や水の出る状況であった場合は、自分の家だけが潤うことを考えるではなく、近場の住民にも分け合い、無いものを補い合い、みんなでその事態を乗り越えることが大切だ

3 まとめ

母や遠くに住む叔母と話をし、得たものはとても大きかった。1995年という激動の時代を生き抜いた人の話は同じ日本とは思えないようなものばかりで、見せてもらった写真も、同じ日本とは思えなかった。20年近くが経ち母の防災への意識は今でも高いと母は自分では言っている。しかしながら、部屋には布団の前には高いタンスがあり、非常用持ち出し袋も用意していると言っていたが、その中には、犬の糞を拾う用の袋しか入っていなかった。震災から20年近くが経過し、風化へと向かっているのだろうか。心の傷が癒えるのが風化とイコールで繋がっているような気がした。しかし、それは私の勘違いだった。私の家の倉庫には何かしら食料、飲料水など常に無くなったら買っては継ぎ足すような「ローリングストック法」をしている。やはり、震災を生き抜いた母の防災への意識は高かったようだ。

母は教訓をいくつか持っている。果たして、それは普段から意識的に考えているものだろうか。災害が起きた後に思い出して後悔するでは遅い。私が思うに、教訓とは、常に心に留めておく大事なものである。だから私は、人から聞いた教訓は絶対忘れないようにしている。教訓を生かすためにも、この先、どんな災害が起きてもいいように、自分自身を守る「自助」を広める防災活動をし、地域コミュニティを築き、自分

の住む町が災害に強くなるようにしていきたい。その前に自分の家の防災が不十分なところを家族で話し合いながら進めていきたい。

4 環境防災科に入ったきっかけ

私がこの学科へ入ったのはまぎれもなく祖父の影響だ。私は祖父も、祖母も、祖父母の家も、そこから見える景色も大好きだ。しかし、その景色が一瞬で壊れる出来事があった。私が小学校3年生の時に平成21年台風第9号が起きた。祖父母の家は裏手に山があり、家が泥だらけになった。1787棟にも及ぶ住宅被害が出た。その年は祖父の田んぼも畑もダメになった。土砂崩れにならなかったことと祖父母宅周辺の誰もけがをしなかったと聞いて母も私も安心した。祖父母は雨が多く降り出して、2階に登り、避難所へ行かなかったそうだ。当時、なぜ家にずっといるんだろう、と思っていたが祖父たちは防災への関心が高かった。もし、あの時、祖父母が無理に避難所へ行っていたらどうなっていたのだろうか。そう考えただけで恐ろしくなる。しかし、あのとき、祖父たちと違い、避難所が安全だと思い込んだ人たちは足元も見えない暗闇で溝の激流に飲まれ総計21人が亡くなった。その中には幼い子供もいたし、叔父の友達もいた。毎年8月はとても憂鬱な気分になる。そんな中学校2年生のときに祖父の家に泊まりに行った。祖父がある新聞を片手に私に見せてきた。その記事は環境防災科について書かれたものだった。私は舞子高校の近くに住んでいたが、当時、全く活動内容など、できたきっかけさえ何も知らなかった。祖父は、私に環境防災科を強く勧めてくれた。そこから私は、強く入学を望むようになった。佐用町も神戸にも防災を広めたいと思ったからだ。

もう佐用町の街並みは、今は完全に戻り、山の斜面には、土砂崩れ対策の器具が設置されてある。これまで、佐用町は大きな災害は起きなかった。そのため安全神話で何の対策もなく、ところどころ見える山の斜面が禿げているにも関わらず、平穩に私たちのように毎日を安心して暮らしていた。避難するときの注意点や避難しない方がいい場合があるのが十分に浸透していなかったのだろう。その背景には、地方の少子高齢社会にあるのだと私は思う。母が行っていた小学校は廃校になり、過疎化が進んできている。スーパーなどに行ってもお年を召された方が多く、子どもは滅多に見ない。そのため災害時や避難ルートを決めるとき、若者たちは高齢者をどうしたらよいのか分かっているのだろうか。祖父の家には、防災行政無線放送というものがついている。果たしてどの家庭にもついているのだろうか。以上のようなたくさんの防災への疑問がある。だから防災や減災の知識をたくさん身に付け、子どもにも分かりやすいよう噛み砕いて説明できるように、地方の防災活動に携わり、二度と同じ災害で死者が出ないように従事していきたい。

5 環境防災科を卒業して

私は今、看護師を目指している。なぜかというと人命救助に携わりたいと思うからだ。災害が起きたとき、けが人が絶対に出る。直接的なけがで苦しむ方もいるが、精神的に苦しむ方もいっぱいいるはずだ。佐用町では当時75歳のおばあちゃんが水害を苦に首をつって亡くなったと祖母から聞いた。私はそれを聞きとても悲しかった。なぜなら、助かったのになぜ自ら死を選んだのだろうか、もしかしたら私たちのだれかが関心を抱いていたのなら助かったのではないかと思った。

その背景には日本の高齢化、高齢者の孤立、さらに、地方部ではもっと様々な問題に拍車をかけている。だから、日本の地方部の防災に携わっていきたくと思う。手始めに、祖父母の家を訪れたい。寝室には高い家具はないか、地域とはコミュニティを築いているか、聞いてみる。備えあれば憂いなしという言葉があるように、備えの部分をしっかりできているかを確認し、また情報を共有できる地域との関わりも確認し、佐用で起こった直接的な災害による死、災害関連死のこのようなことが起きないように声をかけていきたい。

また、神戸で起きた阪神・淡路大震災で今も苦しむ方がいる。母もその一人で当時のことはショックで思い出せない、あるいは、記憶が飛んでいると言っていた。将来、看護師になったら、怪我はもちろんのこと、継続的に心の傷を癒せる看護師になりたいと思う。せつかく生き残った命の意味を重く受け止め、散らさないよう患者に寄り添いたいからだ。災害が起こった後の災害関連死を防ぐためにも避難所の被災者、車中泊の被災者のもとへ行きたい。被災者の手当て、公衆の衛生に努めるのもそうだが、一人一人のニーズを聞き、できる範囲のことは叶え、しっかり話を受け止め、心のケアをしたい。

今年に起きた平成28年（2016年）熊本地震。今、被災者に何をできることは少ないけれど、少なくとも私にできることは、関心を向けること、募金をすることだと思う。今、現地に行っても役に立つ知識や情報

も、技術などを私はすべて未熟だ。今の私はかえって迷惑になるかもしれない。だから大人になったとき私は災害時、役立つ知識、情報、技術すべてを兼ね備え、あたふたせず、冷静に対処できる看護師になりたいと思う。また、医療過疎といわれる地域に従事し、手当てが間に合わないといった事態を防ぎたいと思う。

6 熊本へ行く

私たちは来週、熊本へ行く。環境防災科に入らなければ経験することのできなかつたろうし、震災の現状を見ることができなかつたであろう。先生も仰っていたが、被災地は教科書ではない。少しでも被災地の復興につながる活動をし、自分なりの教訓を自分で作り、自分や家族を守るように、見てきたことを目に焼き付け、風化させないように、後世に残していきたい。被災地では被災者の方々に寄り添い、心のケアをしたいと思う。たくさん土産話という言葉が悪いが、持って帰って、来たるべく災害の教訓へと活かしていきたい。

7 最後に

今回、「語り継ぐ」で母から初めて深く震災の話を聞いた。あまり乗り気ではなかつたが、頼んだら億劫ながらも快く話してくれた母に感謝している。また、環境防災科へ入るきっかけを作ってくれた祖父、ずっと面接の練習をしてくれた中学の先生、そして自分も怖かつたくせに母親をずっと守っていた父。色々な偶然が重なり、今私はここにいる。「しあわせ運べるように」でもあるように、毎日を大切に生きていく。そして、阪神・淡路大震災をいつまでも忘れない…。

隠れた被災者

山本 泰成

1 プロローグ

(1) 震災へ

僕が生まれる3年前、1995年にその出来事は起きた。死者6434人を出した大災害、阪神・淡路大震災。この災害をきっかけに、社会の防災への意識・考えは180° 変わることになった。僕は阪神・淡路大震災がきっかけで作られた環境防災科で学んでいる。僕がこの環境防災科を選んだ理由は後に述べているが、環境防災科を選んだことも含め、すべてが阪神・淡路大震災の発生がきっかけだ。僕は語弊があるかもしれないが、阪神・淡路大震災という災害の恩恵を受けている面も大きい。

(2) 語り継ぐ

語り継ぐでは、阪神・淡路大震災を神戸市西区王塚台で経験した母に話を聞いた。大災害を経験したこととわかったこと。そのエピソードを聞いた。

2 前の日

(1) 震災まで

僕の母の実家は長崎だが神戸で仕事をしており当時、神戸市西区王塚台に一人暮らしをしていた。僕の父となる人と出会い、震災少し前から付き合い始めており、阪神・淡路大震災をきっかけに結婚した。

(2) 普段の生活

1995年1月14日～16日まで三連休で友人たちと遊び、西明石にある酒屋で酒を買った帰りに車を電柱にぶつけ、車屋に修理を頼んでいた。その日に布団に入ったのは午前2時頃だった。

3 揺れた日

(1) あのと看

そのようにいつも通りの生活を送っていた1月17日 午前5時46分、神戸市西区を震度6の烈震が襲った。ドーン！という音とともに気が付いたときにはベッドから吹き飛ばされていた。あとで気づいたことだが、このドーンという音は地震の音ではなく、ロフトのハンゴが倒れ、電子レンジをチョップしていた音だった。まず揺れ始めた瞬間はポルターガイスト現象が起きたと思い、「地震」という文字が頭に浮かばなかった。それらのようなことも含め、何が何かわからなかった。ただただ揺れる地面に身をまかせ、布団で頭を覆い、命を守ることに精いっぱいだった。実際の揺れは約15秒と言われているが、母は「揺れは1分以上続いたのでは」と語っている。それほど恐怖を感じた激しい揺れだったのだろう。揺れが収まり周囲に目をやると、テレビはテレビ台から落ち、タンスも引き出しが全て出た状態で前のめりに倒れていた。となりのキッチンがある部屋に行くと、前日に父の実家から貰ったメバルで作った味噌汁からメバルが跳ねたようにこぼれていた。さらにその上から砂糖が雪のように舞っていたという。ここには危険だと思い、一先ず外にでた。

(2) 助け

外に出てしばらく立ちすくんでいると、当時、交際していた現在の夫が車に炊飯器を積み、家族を乗せて助けに来た。そのときにご飯でおにぎりを作ってもらい車内で食べた。そのまま交際相手の実家に行き、近くにあった公衆電話で当時勤めていた西明石の会社に電話をした。幸い、会社の被害は少なかったようだ。

(3) 電話がつかまらない

明るくなり、一度帰宅した。家の中は散らかっていたが帰宅してすぐに長崎の実家に電話をかけようとしたが、繋がらなかった。このときには神戸周辺では電話回線がパンクする「輻輳」が起きていたのだろう。実家に連絡することができたのは発災から3日目のことだった。このときに「ほしいもの」を送ってもらったが届いたのは何週間かしてからのことだった。

4 震災が起きて

母は阪神・淡路大震災が起きてから数日間、家は電気・ガス・水道が止まってしまっていたため、友人宅に泊まっていた。大きな揺れが多く、眠れない日々が続いたようだ。

友人宅に泊まっていた時は、食べ物がなかった。このときに初めて本当の「空腹」を知った。母は長崎出身で、原爆を始めとした戦争教育を人一倍受けていたこともあり、戦時中の食糧事情について、空腹のエピソードを何度も何度も聞いていたが身を持って感じたのは阪神・淡路大震災の一度のみだと語っている。

友人宅に泊まって2日目の夜、テレビのニュースを見ていた友人が急に泣き叫んだ。母は何が起きたのかわからなかったが、友人は振り向いてこう言った「会社の同僚が亡くなった。」テレビでは「死亡が確認された方」というテロップが表示されていた。母は友人に掛ける言葉がないまま呆然としていただけだった。

3日目には友人らが集まって食料を持ち寄り皆で食事をした。このときの食事が初めて十分に食べ物を口にした瞬間だった。この食事までは震災への恐怖や不安から喉を通らなかったが、友人らが集まったことで少し安心できたと語っている。この話を聞き、僕は“食事”がもつ力を感じた。温かいものを食べることや、皆で食卓を囲むことの大切さについて考えさせられた。

5 困ったこと

(1) 災害で儲ける人

震災後、三宮の駅前などで「緊急援助」などといった看板を下げ、ウインナー一袋1,000円で売っていた。その店に並ぶ人などいないと思っていたが、子どもにどうにかして食べさせたいのか。親が買っている様子を見たそうだ。震災で困っている人の心理につけこんだ人々がいたことも事実だ。震災時の話では「行儀よく列に並んでいた」「思いやりで動いていた」などとよく言われるが、そのような都合の良い話だけでなく、現実では悪いことを企む人々もいる、人を陥れようとする人々もいる。そのようなことまで知ってこそ震災を知ることになるのではと思うと母は語った。

(2) 情報が入ってこない

母は神戸市西区王塚台に住んでいてライフラインはストップしていた。しかし、給水や食料の配給などどこで行っているのかの情報が入ってこなかったと語った。阪神・淡路大震災についての話を聞くと、「濃いコミュニティがあったから助かった」などと言う方が多い。しかし、そのコミュニティが完璧だった訳ではなく、策からこぼれている人々もたくさんいたことに目を向けなければならない。僕の母のようなことを語る人が一人でも居るということは、全ての人が困らずに助かったというわけではない。僕は僕の母のような人々を救える人になりたいと思う。

6 阪神・淡路大震災

母は震災があったからこそ父と結婚し、僕を産んだ。そのことでは震災という出来事に感謝している面もあるようだ。しかし、多くの人々の命が失われたことは事実だ。その悲しい面と震災で得れたことを別々に見ることで、震災を乗り越えられと母は語り、話を終えた。

7 環境防災科

(1) ボランティアとの出会い

僕は阪神・淡路大震災から19年目の年に兵庫県立舞子高等学校環境防災科に入学した。僕がこの特別な学科に入学したことも阪神・淡路大震災と関係している。小学校5年生のころ、総合学習の時間で、阪神・淡路大震災について学んでいた。そのときに初めて「災害とは」「阪神・淡路大震災とは」ということを知り、ショックを受けたことを覚えている。その勉強をしている最中、日本時間にして2010年1月13日のことだった。日本の反対側にある国、ハイチ共和国でM7.2の大地震が発生した。僕はこの地震のニュースを見た瞬間に「阪神・淡路大震災」のことを思い出した。「現地の人たちはきっと困っているだろう。何か助けることはできないのだろうか。」と考え、当時の担任の先生に相談した。そのときの先生はそのときの僕の考えや、意見などを真摯に聞いてくださって、募金活動を実際に行うことができた。これが僕にとっての初めてのボランティア活動だった。このころから、「災害」「ボランティア」という言葉に意識を持つようになっていた。

(2) 何もできなかった自分

そして中学校に入学する直前に東日本大震災が発生した。小学校の卒業式の練習を終え、帰宅するとテレビで黒い水が船を流し、街を飲み込んでいる映像を放送しているのが目に入った。これが「津波」と呼ばれるものだと思ったのは少し経ってからのことだった。15,894人もの死者を出す大災害になるとは思いもしなかった。中学校に入学し、僕は今すぐにでも募金活動や何かしらの支援に携わりたいと思った。しかし、これらのようなことを先生に伝えると、「中学校ではできない」の一点張りで協力を得ることができなかった。ボランティアへの理解が誰にでもあるものではないことがわかった。そして、東日本大震災のときには僕は何もできなかった。一人で踏み出す勇気があればなんとかなったのかもしれないが、結果的にどうにもならなかった。大きな壁を感じた。

このときに僕は「ボランティアや災害支援ができる環境に進みたい」と考えるようになった。

(3) 高校へ

そのような僕が選んだ環境が環境防災科だった。なぜこの学科のことを知ったのかははっきり覚えていないが、学校でボランティア活動を全面的にバックアップしてくれることや災害について学べるのが高校を選ぶ際に決め手になった。

(4) 東日本大震災の被災地

この高校3年までに東北に2度訪れることができた。初めて訪れたときは、「念願の東北」「小学校のときからずっと行きたかった」という思いに駆られ、少し浮かれたまま行ったことで大切なものを見落としてしまった。

(5) 大川小学校

しかし、一番自分の心が動いたのはその悔いをもとに行った高校2年のときの東北訪問だ。プログラムの一部で石巻市立大川小学校を訪れた。石巻市立大川小学校の周辺は住宅などが流され、ほぼ更地になっている。そのような小学校のグラウンドに歯磨き粉のチューブやシャンプーのボトルが落ちていることに気がついた。それはただ流されたわけではなく、日常が一瞬にして流されたことを表していた。このときにどれだけ自分たちが当たり前で過ごしている日常が脆いものなのだろう。と考えるようになった。僕はこの時から、普段の日々を一生懸命に生きるようにしている。

僕は東北を訪れて津波に流された住宅街の跡を見た。津波を経験した同年代の学生の話聞いた。意見も交わした。やはりそこで辿り着いた「大切にしなければいけないこと」は“日常”だと感じた。

この“日常”についての話をのちに僕の小学校時代の恩師にしたところ、涙ながらに頷きながら話を聞いてくれた。僕はこのときに人に自分の考えが伝わるとこのような反応をしてくれるのだ。と思った。それから、積極的に人に自分の見てきたもの、聞いたもの、体験したものを伝えようと決心した。

8 夢

(1) 災害が起きた街で

僕が生まれたころにはまだあった仮設住宅の姿も街から消え、神戸の街並みは元の姿を取り戻している。しかし、街並みが元に戻ったからといって、実際に体験した方々が阪神・淡路大震災のことを忘れていくはずがない。僕はそう思っていた。しかし、神戸で「防災の意識が低下している」と感じさせられる出来事があった。僕が参加した活動の一環で、JR垂水駅前で阪神・淡路大震災や防災についての街頭ヒアリングを行った。その際に「阪神・淡路大震災のような災害は怖いけど備えはしていないなあ」「震災後すぐは水や食料を備えていたけれど今はもう…」などといった声があったのだ。

これが震災後20年経った被災地の姿なのか、これでいいのだろうかと感じた。僕は「このままではいけない。」と考え、この活動のあとから、人をどうすれば動かせるのだろうか、どうすれば防災の大切さや災害を伝えることができるのだろうかということを考えている。

(2) 僕が目指すもの

僕の今の夢はメディア関係の職につくことだ。これは前述の経験をもとに志した夢だ。人々に防災を伝えることや災害のことを思い出してもらうことは難しい。そこで、最も人々に影響を与えることができるメディア関係の職を選んだ。将来、いかに効果的に情報を伝えるかを学び、防災を、災害に対する備えの大切さを広めていきたい。

9 災害

僕の母も語っていたが、災害には悲しい面、悪い面などのマイナスのこと以外にもプラスに捉えられることもあると思っている。実際に東日本大震災があったからこそ出会えた人々もたくさんいた。平成28年(2016)熊本地震があったからこそ持てた繋がりもあった。災害というものと前向きに向き合ってこれから将来、生きていきたいと思う。

10 最後に

(1) 母のような人

僕は母から震災時の話をこれまでに何度も何度も聞いていたが、ここまで詳しく話を聞くのは初めてだった。当時の状況が母の話を聞くにつれて頭の中に浮かび上がってくるのを感じていた。やはり、実際の被災者の話を聞くことはその災害への見方を変えることや、考え方を変えるきっかけになると思った。母はいつもこう言う「自分は被災者ではないかもしれない」家族や親戚や家を失ったわけでもなく、長田区などのように大きな被害を受けた地域に住んでいたわけでもない。しかし、僕の母は「被害が大きな被災者に隠れた被災者」だったと考える。これは「大きな被害を受けた被災者」をないがしろにしている訳ではない。母のような境遇の人々を少しでも減らしたいと考え、僕はこのように小さな被害しか受けておらず、声をあげることができない被災者を救えるような人になりたいと思う。

(2) わからないこと

また、僕は語り継ぐを書くことに限らず、災害についての記述をする際にあることをいつも感じる。それは「自分に何がわかるのか」ということだ。災害を実際に体験したわけでもなく、実際に見たわけでもない。もちろん、被災された方の悲しい気持ちへの理解はしようとしている。しかしいつもどこか、「この人の気持ちの1%もわからないのに何が僕に書けるのだろうか」と考えてしまう僕がいた。これは災害を経験すれば晴れる気持ちなのだろうか。経験するだけで分かるのだろうか。それとも、わからない前提で話を聞くべきなのだろうか。伝えるべきなのだろうか。そう考えたときにどうすればいいのか、僕は3年生になった今でも答えが出ない。これの答えが出るときは、災害を経験したときなのだろうか、もしかすると災害を経験しても答えは出ないかもしれない。しかし、自分が災害や防災・減災に興味を持ち続ける限り、僕は被災地に通い、話を聞き続けるだろう。

(3) これからの災害

これから将来、災害が起きるとすれば、これまでに発生した阪神・淡路大震災や東日本大震災などを超える規模のものが発生してもおかしいことはない。50Mを超える巨大津波や一つの地域をそのまま焼き尽くす噴火など、「SFの中の話で馬鹿げている」と言う人も多いが、実際に起こる可能性は0ではない。そのような災害が起きた際にはインフラは崩壊し、收拾のつかない事態になるだろう。行政や他人に頼れない中でいかに自分の命を守るのかをこれまで書き綴ってきたことと併せて考えていきたいと思っている。これを考えるためには歴史上の災害をさらに深くまで知らなければいけない。今回の語り継ぐの作成にあたり聞いた話に加えさらに多くの人から、多くのことを聞き、自分の経験の一部として次の災害に備える糧にしたい。

(4) 卒業してからは

卒業してからは人に何かを伝える勉強をしたいと考えている。それは伝え方だけでなく、伝える内容についてもだ。また、世界を広く見れる環境に自分の身を置きたいため、今、英語に力を入れて勉強している。これは英語を学ぶことで世界と触れ合える機会が増え、自分が知りたいこと、聞きたいことを知れたり、聞けたりするチャンスを増やすためだ。

災害というものは、防災・減災を学ぶだけでは被害を減らすことはできず、防災・減災を伝えるための言語、話し方、イラスト、音楽、法律、国際・国内情勢など様々なことに目を向け、学ばなければいけない。このように幅広い学問を学び、将来の世代へ防災・減災を伝えられる人、伝える人を目指す。

(5) 感想

僕はこの語り継ぐを書いて、これまでの3年間で“災害”を学んできたことを実感した。僕は懂れていた環境防災科に入学したが、災害について勉強した感覚がなかった。しかし、あるときに「災害を学んできたんだ」ということを感じた。それは母の話を聞いた時だった。母が話をしてくれたことに対して、一方的に受け身にならずにそこから話を広げることができた。そのほかにも阪神・淡路大震災についてのことが次から次へと思い浮かんでくることがや災害についての自分の思いが湧きあがってきた。高校時代に学んだことを

無駄にしないように活かしたいと思う。

また、これからも防災・減災を広い視野で学び、災害で命を失う人が出ないように困る人が出ないように人々に伝えていきたい。

知らないからこそ伝える

山本 千智

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災より3年以上も月日が経ってから産まれた。幼いころの記憶は少なく、復興したくさんの人々が行きかう街しか私は知らない。しかし母の経験を聞き、語り継ぎたい。

2 忘れることができない

(1) 前日の夜

母は前日の晩、大阪まで飲み会に行っていた。酔ってしまい先輩の家に泊まることも進められたが朝が早いからという理由から終電で神戸に帰ってきた。母はまだ結婚はしておらず実家暮らしだった。実家、私の祖母宅は最寄駅である阪急・王子公園駅より坂を30分ぐらい上ったところにある。最終バスもなく街灯だけで照らされた道を歩いていた母は、異様なぐらいの静けさに恐怖を感じていた。この異様な静けさは21年経った今でも鮮明に覚えている。およそ地震が発生する5時間前の出来事である。

(2) 発生直後から

発生する少し前の地鳴りに目を覚まし、数秒後襲われた激しい揺れに母は恐怖で動けなかったのである。祖母が母に安否を確かめるため2階で寝ていた母に声をかけたが母は恐怖から逃れられずしばらく布団に丸まっていたという。一方祖母は部屋をでて下に降りようとしていた。その瞬間祖父が1階から懐中電灯を照らした。祖父が懐中電灯を照らさなければ祖母は階段から落ちて亡くなっていたかもしれない。落ち着こうと思えば思うほど恐怖がこみ上げてきたという。

幸い家は倒れなかった。しかし家自体が南東方向に傾き、2階の大きな窓は突っ張り棒をしなければ隙間から風が入るといふ。倒壊しなかったものの家の中は酷かった。食器棚から食器が全部出ており、冷蔵庫とレンジの置いてある棚は移動しており、とても生活することはできなかった。そこで避難を決意し神戸市立上野中学校に避難した。

(3) 避難所での生活

母達3人と飼っていた犬1匹が避難所に移動したのはもう明るくなっていた9時頃だといふ。(ハッキリとは覚えていない)しかし上野中学校の体育館はごったがえしていた。寒い中入り口のすぐ傍しかあいておらずそこに居ることを決めた。祖母が連れて行くと言ひ連れてきた飼ひ犬は銅像のように静かに動かなかったといふ。1日目は慌てて過ぎし時の流れがまだ早く感じた。2日目になると地元の郵便局で働いていた祖父は避難所で見つけてきた仲間とともに郵便局へ向かった。1日目はバタバタとして過ごしたため本当の意味での辛い避難生活はここからだ。配給にしても毎日パンばかり母と祖母が「白ごはんが食べたいなあ」と言ひ合うと次の日からおにぎりばかり。貰えるだけありがたいと思ひていても後からテレビで観た東灘区の地域でのお弁当の配給や炊き出しに羨ましくなかったかと問われると、正直羨ましかったといふ。

「自分たちの地域だけ何で…」という思ひが強かった。

日に日に状況は落ち着いていったが母達は避難所から出ることができなかった。その大きな原因として余震の恐怖といふのがある。家で水が出始めた頃から家と避難所を往復する日々が続いたといふ。今ではありえないかもしれない、それでもなにかあったときに家から出られるようにドアを開けっ放しで、お湯も使えず冷たい水で顔を洗っていた。今聞けば「あんな泥棒さん入ってください言うとるようなもんやし、ようやくったわ」と笑っている。しかし本当に恐怖だったのだろうと考える。顔を洗っていても何をしていても一目散に逃げることを考えた母達の恐怖は計り知れない。

避難所生活をしながら家に片付けを行ひに自宅に戻りまた避難所に戻り往復する忙しい日々を過ごした。その合間にまだ結婚していなかったが父の実家のある北区から水やご飯を貰ったりしたこともあった。母は山を超えた先にある北区は震災前と変わらず、人々の温度差をも感じたとも言う。これは私が中学生の時の話になるが話してくれた先生自身も被災し教え子や生徒を亡くした。次の転勤先が北区の中学校であったがその中学で行う避難訓練は今のような生徒が笑ひながら行っていたといふ。同じ神戸市内でもここまで差がでてきたのだ。どれほどの悔しさ、悲しみ、そして辛いことだろうか。

(4) 普段の生活へ

母は当時栄養士としてではなく一店員として元町商店街にある服屋さんで仕事をしていた。土日には狭い店内がすれ違うのも困難になるぐらい人で溢れる店だった。遠方からくる客もたくさん居た、その客と話すのが母の楽しみであったとも言う。母は昔から旅行好きでその客が住む地域の話、特産物の話、何があるかどのようなところがいいかなど話し合うのが好きで、同じ県内でも違う話が聞くことができたなど、母の旅行好きをより一層好きにさせるものだった。しかし、地震以降あんなにも賑わった街に観光客という人達が居なくなった。そこで現実にはぶつかったという。「ああ、地震があったんや。神戸から人消えたなあ。」そんな呟きがふと漏れたようだ。地震というものは一瞬にして大切な人だけでなく、客という人達も失うのだ。

(5) 今の世代、私たちに伝えたい一言

母に最後に自分達の世代もしくはそれより若い世代に残したい一言を聞いてみた。これは昨年からはまった災害メモリアルアクションKOBÉで私達のチームが阪神・淡路大震災の経験を聞き最後に様々な人に聞いてきたフレーズだ。母は迷うこともなく「震災以降に被災地に行くこと」を挙げてくれた。「私が経験したように地震があったから行かへんっていう考え方だらけやったら、ほんまに被災地は復興していかへん。その街に行くこと、住んどる人と触れ合うこと、お金を落とすことが大事や。地震があったそれで終わったらあかん。しかもそれを直後だけでなく5年経っても10年経っても行うことが大事や。」母の答えは私の想像していたものより、もっと想いがこもっていた。今まで街頭インタビューをもちたことがあったが初めて聞いた答えだった。「やから、私は新潟にも東北にも関東にも行って、これから熊本にも行くんや。」一緒に行くことはできなくても、どんなことを想ったか、どんな人と関わったのか共有したいと思った瞬間である。

(6) 母の話を聞いて今思うこと

これまでニュースを見ながらだとか、ふとした時にしか聞けなかった被災経験を初めて聞いた。母は母であったなと感じる。そして環境防災科で「語り継ぐ」という卒業研究があつて良かったと思う。このような機会がなければ私は聞くこともなかったのではないかとも思う。本当は祖父の郵便局の話も聞いたかったと素直に今思うのである。しかし祖父は私の幼いころ亡くなってしまった。亡くなってからは何も聞くことが出来ない。今私達が語り継がなければならない使命にあるとも感じた。21年が経ち被災者の高齢化・震災を知らない世代が増える中私は何を伝えられることができるだろうか。今回も母の話を聞いて書いたが本当に母の想いを全部受け止め書けたのかどうかはわからない。しかし、忘れることができないという過去の話を開かせてもらった感謝の気持ちを表したいと感じる。

3 環境防災科

(1) 小中学校での防災教育

私の住む神戸市灘区は被害が二分化したとも言える。南は震度7の帯の地域であり火災が発生し、高速道路が倒れるなど被害が大きかったが、北は倒壊家屋が1軒もないなど区内でも被害の大小が分かれた。私の家があるのは北側、被害が比較的少なかった地域である。そのため小中学校でうけた防災教育は充分と言えるものではなかった。なぜか幼いころから阪神・淡路大震災には興味があった。学校で行う防災学習で十分に学習できなかったために祖母に頼み、阪神・淡路大震災を記録した写真集を見せてもらった。その本の写真に写る人の表情は今でも忘れない。

中学校では同じ学年の皆がこれほどまでに興味がないことに驚いた。「めんどくさい」と誰もが言っていた。避難訓練の後に行われる黙祷では、先生の誰かが涙を堪えている姿を見て「あいつ泣いとうで」と笑っている、そんな状態だった。私は驚いたが何も言えないその立場が悔しかった。

(2) 伝えたい・伝えなければならない

私は興味がある程度の「阪神・淡路大震災」を本気で学ぶということは考えていなかった。というより、選択肢がなかった。環境防災科を知ったのは数学の授業中。先生が言った一言である。普通なら流していたり聞いていなかったりする一言に興味を持ち、自分でそこから必死に調べた。3年での担任との面談で志望校を聞かれた私は「舞子高校の環境防災科」と答えたが、担任はもちろん学年の先生でもほとんど知らなかった。知らない高校・推薦でしかとってくれない学校に担任も親も否定的だった。担任からは「行ったとして何を学ぶんや。防災を学んだところで何になる。推薦は落ちるもんや。」と言われ面談でボロボロに泣いた悔しさもあった。それでも私は先生が涙を堪えていた姿、写真集で見た人々の表情を忘れることができなかった。伝えたい、伝えなければならないと思った。

(3)「環境防災科」

入学して知ったのは防災、震災に対しての温度差だ。クラスのメンバーでも防災に興味がない人もいた。志望理由は推薦だから早く終わるというだけで選んだという人もいる。最初は悔しかった。なぜ興味もない所に入ったのか「落ちた子の中には本気の子だって居たはずなのに」そう思えてならなかった。それでも専門科目の授業を通していく中で、自分にない意見・考え方に触れるたびに感心をし、様々なものの見方を知ることが出来た。私は反対されるなかでも「環境防災科」に入学して良かったと思う。ここでしか学べないこと、感じるができないことが多くあった。だからかもしれない、私がもっと学校における防災教育にお金・時間・労力をかけるべきだと思ったのは。

4 これから

(1) 必要な防災教育

防災教育が必要だと思うのは意識が低いと感じたためである。阪神・淡路大震災をもっと知らなければならぬと強く思うのだ。あの出来事を忘れてはいけない、そして次に活かされないといけないという思いがある。次に活かすためには知らないといけない、考えなければならぬと思う。学校は意見の交換や話し合いに最適ではないかと思う。自分と同じ年齢の年代の人と話すことで、私が感じることができたのと同じように様々な物の見方がわかるのではないかと思う。会社となると大規模にせざるをえない。また会社では立場などがあるため本音というのは難しいのではないかとも思う。そして南海トラフ巨大地震に備えるには「今」やらなければならないのである。

(2) どう伝えていくか

「今」やらなければならないことを私達はどのようにして伝えていくかが今後重要になっていくのではないかと思う。「伝える」という行為は「人の心を動かす」ということと似ているのではないかと考える。要するに「伝える」とは私達が思っている以上に難しいのではないか、そして本当に伝わったのか伝える側には分からない所もまた、難しい点だ。伝え方は様々である。それでもより心に響くものを私は見つけた。今正直私はどのようにしたら伝わるのか分からないのである。環境防災科で様々な経験をさせていただき、形は見えてきたように思える。大規模になるかもしれない・長期的になるかもしれない・伝わらないかもしれない、様々な不安だらけだがやってみたいと思う。私が環境防災科という場所で心動かされたように、たくさんの人に心を動かしてもらおうキッカケを作りたい。

(3)「キッカケ」をつくる

自らキッカケをつくるということは難しい。そこで私は神戸ではないが「尼崎ENGAWA計画」というプロジェクトに少しだけ関わらせていただいている。ここで出会う人達は自らキッカケを活用し自分の将来を創っていった人達ばかりである。これまでどこかに就職して働いている人達しか会ったことがなかった私には衝撃が大きかった。自分達で道を切り開いていくその姿勢がすごいと思う。わからない道を模索しながらも答えを見つけるその姿を見習いたいと感じるのである。

私はもう1つキッカケづくりということで、母の阪神・淡路大震災の経験を聞いた話の最後にも出てきたが「災害メモリアルアクションKOBE」というのに参加させていただいている。人と防災未来センターが主催で行っている10年続くプロジェクトである。最初は友達に参加するからという理由で参加した。私達の学年から私含め4人、1つ下の学年から2人。名前も知らなかった子達と7月末からスタートした。途中から迷走し誰もかもが嫌になりながらも1つの形にできたと思う。「阪神・淡路大震災が起こった瞬間あなたは何をしましたか。私達またはその下の世代に残したい一言とは。」様々な意見をいただいた。自分達が知らない阪神・淡路大震災について知ることができたと感じた。そしてこの思いを私達から発信することで、知らない人たちが興味をわくキッカケになればいいと思う。

(4) 将来の夢

将来の夢は看護師である。中学に入るまでは世界で戦争・紛争に苦しむ人たちを助ける医者を目指していたが、なぜ医者ではなく看護師に変更したのかは理由がある。それはオールマイティの看護師に憧れたからだ。医者は小児科や外科などの専攻がいるが私は全ての人をあらゆる面からサポートしたいと思い、医者から看護師に変更したのである。

もともと世界で活躍したいと思うようになったキッカケは、小学生の時にJICA研修団の人が外部講師で来てくれた時の衝撃である。日本にはない「いつ死ぬかわからない恐怖」「明日があるかわからない不安」

外部講師の方が見せていただいた写真の中に1つだけ今でも忘れられない写真がある。家族を亡くし自身は地雷で片腕を失ったのにも関わらず、笑っている女の子の写真だ。初めは強い子だけにしか感じなかったが、今思うのは無理してきつと笑っている部分もあったに違いないと思う。そのような戦争に何も関係のない子供たちをサポートしたいという思いから夢に繋がった。

しかし今は少し変化している。看護師という夢の形は変わっていない。しかし環境防災科で防災、阪神・淡路大震災を学ぶにつれて災害医療という言葉を知り行いたいと感じるようになった。災害医療とは大規模災害（地震、津波など）が起こり、多数の傷病者が同時に発生し、対応する地域の医療体制の能力を上回る場合の医療・医療体制を指す。また、パンデミック（感染症や伝染病の世界的流行）での医療対応を含むこともある。災害医療を行っている大きな機関として日本では日本赤十字社がある。

日本赤十字社の災害救護活動には、赤十字の人道的任务として自主的判断に基づいて行う場合と、災害対策基本法や武力攻撃事態等における国民の保護のための措置に関する法律（国民保護法）における指定公共機関として、国や地方公共団体の行う業務に協力する場合とがある。その中でも医療救護は災害時に備えて、赤十字病院の医師、看護師などを中心に編成される救護班を全国で約500班（約7000人）編成しており、災害が発生すると救護班（1班あたり医師・看護師ら6人）やdERU（国内型緊急対応ユニット）を派遣し、救護所の設置、被災現場や避難所での診療、こころのケア活動などが行われる。

私は日本赤十字社など他日本看護協会が行っているような災害支援ナースや、全国にある災害拠点病院に勤めたいと考えている。自分の知識がどこまで通用するのかわからない。それでも環境防災科に進んだら防災をすると決めていたから、これからも防災に関わりたいと思う。卒業後は看護系の専門学校に進まなければ国家試験が受験できないため、高校卒業後専門的に防災をすることはできない。それでもきっかけづくりで名前がでてきたプロジェクトに携わり続けたいと思う。

5 最後に

自分の将来の夢は不確かだが決まってきたと実感している。大きく自分の進路を変えてくれた環境防災科という場所に感謝したいと心から思う。そして環境防災科に突然進むと言い始めて、最初は反対をしながらもわかってくれ、ボランティアの話から授業での話クラスのメンバーの話。様々なことを聞いてくれ協力してくれ、環境防災科という道に進ませてくれた母にも感謝したいと思う。これから何ができるかわからない。それでも私は夢に向かって歩き続けたい、というより自分のしたいこと。人のサポートになることを全力するために、これからも頑張り続けたいと思う。そしてもうすぐ終わってしまう高校生活を全力で楽しみ、もっと「環境防災科」で学べることを学んでいきたいと思う。

6月には熊本被災地支援に行かせていただいた。熊本では「ボランティア」とは何かを考えるキッカケになった。クラス内の温度差は感じたが、この40人で行けたことが何よりの財産であると感じる。このメンバーだからこそ共感できたこと、反対にできなかったこと、様々あるが行けて良かった、行って良かったと思う。8月には東北に行かせていただいた。東日本大震災から5年以上経っていた東北は復旧復興にでさえも、地域差があった。自分が見てきたことを受け止めて、これから何ができるかを考えていきたい。熊本、東北「被災地」だけではない面もこれから見ていきたい。

語り継ぐということが、こんなにも難しいとは思わなかった。相手の言葉を自分の中で理解し変換すること、語ってくれる人の気持ちに自分が経験していないのになること、初めて行う自分には難しいことだらけだった。それでも全力で伝え受け止める姿勢はこれからも続けていかなければならないと思う。亡くなってからでは遅い「今」聞ける声を語り継げる声を自分たちの世代に、それより下の世代に伝える。知らないからこそ伝える。

阪神・淡路大震災により亡くなられた方、並びにご遺族の皆様にご冥福をお祈り申し上げます。

語り継ぐ

横山 楓華

阪神・淡路大震災

(1) 知らない震災

阪神・淡路大震災が起こったとき、私はまだ生まれていない。そのため、家族からの話や、当時の写真でしか見たことがない。しかし「知らない」で終わらせてはいけない。学ぶべきことはたくさんあるのだ。

(2) 概要

平成7年1月17日午前5時46分、淡路島北部で地震が発生した。この地震により、洲本で震度6を、豊岡、彦根、京都で震度5を、大阪、姫路、和歌山などで震度4を観測したほか、東北から九州にかけて広い範囲で有感となった。また、この地震の発生直後に行われた気象庁地震機動観測班による被害状況調査の結果、神戸市の一部の地域等においては、震度7であった。

気象庁は、この地震を、平成7年(1995年)兵庫県南部地震と命名したが、さらに政府は、被害の規模が特に大きいことに加え、爾後の復旧・復興施策の推進の擦に統一的な名称が必要となることが考えられることから、災害名を「阪神・淡路大震災」と呼称することを平成7年2月14日に閣議口頭了解した。

「阪神・淡路大震災の概要と被害状況」より

震災の概要	年月日時	平成7年1月17日5時46分
	震源地	淡路島北部(北緯34度36分、東経135度2分)
	震源の深さ	16km
	規模	マグニチュード7.3

気象庁発表より

人的被害	死者		6,434名
	行方不明者		3名
	負傷者		43,792名
施設関係等被害	住宅被害	全壊	104,906棟
		半壊	144,274棟
		一部損壊	390,506棟
		計	639,686棟

「阪神・淡路大震災について(確定報)(平成18年5月19日、消防庁)」より

(3) 母から聞いた話

阪神・淡路大震災が起こった当時、母は私の祖父母たちと加古川市に住んでいた。1月17日の5時46分、地響きとともに激しく家全体が揺れた。実際に揺れた時間は数十秒というものだったのだが、何分もの揺れに感じたようだ。

この時から、母は暗いところや揺れ、ゴゴゴ・・・という地響きのような音に敏感になり、トラウマを持ってしまった。

立ち上がれないほど揺れ、家にあった大きなピアノは動き、食器は床に散乱して足場を失っている状態だった。母が寝ていた部屋の電球は大きく揺れ、頭の上にあった家具が少しでも間違っていたら直撃していたかもしれない状況だった。朝の早い時間であったため部屋の中は暗く、電気をつけようにも怖くて動けず、割れたものなどを踏まないように一階に降り、やっとの思いで祖父母のもとに行ったようだ。

私も、祖父が撮った当時の写真を見せてもらったがこの部屋で寝ていたらどうなっていたんだろう・・・と思わせる写真ばかりだった。

加古川市は運よくライフラインが止まることもなく、電気や水道が使える状態だった。テレビをつけた時、神戸の状況を見てすぐには理解できないほど驚いたようだ。祖父は当時のテレビのニュースを録画したものも残している。地震発生直後のニュースでは、神戸などに大きな数字が表記されていたが、淡路島には

何も表記されておらず、安全だったんだなとみんなが思ったそう。しかし、実際には被害がなかったわけではなく、震源近くで正確な数字がすぐにわからなかったというのが現実だった。母が住んでいた家は大きく揺れたが、近所の家では地盤の関係上、ティッシュ箱が落ちる程度ですんだ家もあったそう。

（４）震災から学んだこと

私は阪神・淡路大震災当時にはまだ生まれておらず、写真や動画、被災された方の話しか聞いたことがない。しかし、その中でも学ぶことはたくさんあった。一番印象に残っているのは、高校1年生の時に聞いた語り部さんのお話だ。

その方は当時淡路島に住んでいた。5時46分、上下の動きが激しい揺れに襲われ、揺れの幅は時間がたつごとにだんだん広くなっていった。外は真っ暗で家の中はぐちゃぐちゃ。1月という真冬の時期で雪が降っていた。人を倒壊した家から助けようにもチェーンソーの歯はすぐダメになってしまい、結局1番役に立ったのは昔からある普通ののこぎりだった。

救助を待っている人の声はメディアのヘリの音でかき消され、それでも何とか地元の消防団と力を合わせて救出作業を進めたそう。

この時、消防団と力を合わせて早く救出作業ができたのは、日ごろの関わりが大きく影響しているそう。語り部さんが住んでいた地域には昔からの地域行事や避難訓練がたくさんあるそう。そのため、1人暮らしのお年寄りの方の家なども把握出来ていたためいち早く救出に向かうことができたのだ。

この話を聞いた時から、地域とのかかわりの大切さに気付くことができた。私が住んでいるところにも地域で参加するお祭りがあったり、子供たちが集まって春には泥だらけになりながら田植えを、秋にはそれを収穫して、冬にはそのお米をみんなでついて餅つき大会を行っている。小さいころから参加していたため、災害とは何の関係もないただの日常の一つだと思っていた。

しかし、子供が集まることで親同士も顔を合わせている。私たちは気付かない間に「日ごろからコミュニケーションをとっておく」という防災をこなしていたのではないかと思った。実際にこの行事には消防団の方もかかわっていて、私たちも何度も顔を合わせたことがある。

学校での避難訓練ももちろん大切だが、このような日ごろから自然にできる防災もとても大切だと学んだ。

（５）舞子高校 環境防災科

私は、舞子高校環境防災科で専門的に災害・防災について学んできた。

私がこの舞子高校に入学しようと思ったきっかけは中学3年生の時に東北の中学生と交流したことだ。

もともと母自体が防災活動に熱心で、それを小さいころから見ていたこともあり、少し影響されていたのだ。東日本大震災が起こった当時、津波の映像を見て、とても現実味がなく、映画のようだったことを覚えている。どうにか東北の現状を自分の目で見たいと思っていた時、宮城県の南三陸町に訪問し、現地の中学生たちと交流する機会ができた。

ちょうど震災から2年後だったため、空港も使うことができて、復旧が進んでいると思っていた。しかし現地に行ったら言葉を失った。2年という月日がたっていたため、がれきなどはほとんど撤去されていた。津波の後を感じさせるものがあるわけでもない。しかし復旧を思わせるものもないのだ。広い平地が広がっていて、草は自由に伸びて一本の道路のような道があるだけだった。

私たちの勝手な想像では、阪神・淡路大震災から回復を遂げた神戸を見ている分、2年たっているんだから町は元に戻っているだろうと思っていた。しかし、実際はがれきが撤去され、きれいになったものの、道路さえ直されておらず、家やお店も見当たらない。津波が起こる前の同じ場所の写真をを見せていただいた時には、まるできれいさっぱり掃除されてしまったようだと感じた。この原因は、神戸と違って人手が十分に足りているわけではなく、作業が思うように進まないことと、津波ですべて流されてしまったために最初からスタートしなければならないこと、津波危険区域に指定された土地の権利の問題などが重なっていることを高校になってから理解した。

中学生の子たちは交流の時たくさんの体験談を語ってくれた。いまだに連絡を取り合っている子もいるが、やはりあの時の記憶は忘れられず、津波に関連することにはトラウマがよぎって積極的に避難訓練にも参加できないと言っていた。

災害が起こった後、復旧・復興といえば多くの人が連想するのが「町の状況」ではないだろうか。災害で壊れてしまった家屋やビルが治ったら「復旧が進んでいる！」。しかし、私はそれだけが復旧・復興の対象

ではないと思う。人の心を復興させることも大切だと考えている。震災を忘れることはあまり良いことだと思わない。辛いかもしれないが、次の災害に備えられる一番の教材は自分の経験だと思っている。

私の友達のように思い出すのが嫌で、防災教育や避難訓練を嫌がる人は他にもたくさんいると思う。しかしそれでは、次いつ起こるか分からない災害に対して備えることができないのだ。急がずとも、ゆっくりと震災の経験と向かい合い、自分の経験を活かせるようになってほしいと思う。私は、その友達を見て、もっと私も災害について学び、正しい知識を身に付け、また心の面からもケアの方法を学んで、災害と向き合えるようにしてあげたいと思った。

この環境防災科では、過去の災害についての知識、これから起こるかもしれない災害に対しての対策、今までの反省、そして心のケアの方法を学ぶことができた。心の傷は、外から見えている傷ほど簡単に回復できない。それを自分が簡単に治せるとも思っていない。しかし、私の力が少しでも役に立てばと思っている。環境防災科で学んだ3年間の知識はこれから大切に使っていこうと考えている。

(6) 将来の夢

私は、小さいころから「練習しなくてもできること」だけをする癖があった。小学校のころには、ポスターやイラスト募集などで何度も賞をとったが、特に何もしていない。クラブ活動でたまたま触ったドラムが一回でできるようになったため中学校まで続けてきた。

逆を言えば、上手いかなかったことはすべて諦めてきた。薬剤師は給料がいいからと目指していたが勉強が難しいと聞いて諦め、絵がかけたので漫画家になろうと思えばいいストーリーが思いつかなかっただけで断念。

今思えば、情けないと思っている。そんな自分が初めて努力してでも頑張りたいと唯一思えたのが「歌」だった。

私が今目指しているのはボイストレーナーである。高校に入ったころは今とは違い、「アーティスト」を目指していた。初めのころは独学でいろいろ試してみたのだがあまり成果が出なかったために、ボイストレーニングを習うようになった。そこでお世話になった先生に、同じように「歌」と関われる仕事は他にないかと相談してみたところ紹介されたのがきっかけだった。

まず、ボイストレーナーというのは、歌手や声優などの声を使う職業の人に対して、正しい歌い方や声の出し方を指導したり、発声方法や歌唱技術などの専門的な指導をすることを仕事とする人のことをさしている。また発声と歌唱技術の指導だけにとどまらず、呼吸のメカニズムや姿勢と発声の関係なども指導する。ボイストレーナー自身に高度な発声、歌唱テクニックが不可欠だが、ボイストレーナーの最大の目的は、教える相手がうまく発声、歌唱できるようにすることで、指導力の高さが何より重要になる仕事だ。

今は歌唱テクニックを学んでいるが、高校を卒業してからトレーナーコースを受けて、指導するにあたってのノウハウや応用などを学ぶつもりだ。

初めてボイストレーニングを受けようと思った時に私が感じたのが、「歌が上手になりたいだけで通ってもいいのか」、「まだ高校生の自分が通っていいものなのか」という疑問だった。この疑問はきっと高校生だったから感じられたものだと思う。自分が実際に感じたものと同じような疑問を抱いて迷っている人でも受けやすい工夫をこらしながら、本格的に歌手活動や声を使った仕事を目指している人にも教えられるようになると思っている。

正直、防災とは直接関係があるわけでもなく、消防士や看護師の夢を持っている子たちに自分の夢を話すのがとても恥ずかしく感じていた。しかし、今は違う。自分のしたい仕事は関係なくとも、日ごろの生活に防災を取り込んでいこうと思っている。自分のやりたいことに全力をそそぎつつ、これからの防災活動も継続させていこうと考えている。

(7) これからの防災活動

私は、現在「防災士資格取得試験」に合格して、防災士として活動をしている。これは民間の資格であり、仕事につなげることができるわけでもない。ただ、学校外でも活動の幅を広げたいと思い、日本防災士会に入会した。

まず、防災士というものの役割を紹介する。

大災害発生時には、警察・消防・自衛隊などの公的な支援の到着が遅れるのが現実であり、災害規模が大きくなるほど救助・救援は遅くなる。市民は消防・自衛隊等の公的機関が機能発揮できるまでの概ね3日間を、各自の家庭、地域や職場において生命・財産の被害軽減に努める必要がある。避難・救助・避難所運

営等を、自治体、公的な組織やボランティアと協働して行う必要も生じる。そのため、普段から、防災意識の啓発、大災害に備える共助・協働の活動訓練、防災と減災、救助等の技術向上に取り組み、大災害に備えなければならない。

このような防災・減災活動を地域と一体となって進めていくのが防災士である。

実際に母は、防災士として任されたエリアの保育園や学校、時には大人などに向けて避難訓練を行ったり、救急救命の指導を行ったりしている。そんな母もこれが本職というわけではなく、普段は事務の仕事をしている。仕事というよりはボランティア活動に近いかもしれない。

私はいま、市民救命士の普通救命コースの資格を取得している。このほかにもいくつかコースがあり、小児、乳児の呼吸や心臓が止まったり、食物等が喉に詰まったときに必要な応急手当などが習得できる「小児コース」、普通救命コースなどのくわえて体位管理、搬送法などが習得できる上級コースがある。この上級コースを受講し、普段の生活やもしもの時のための知識や技術を身につけ、最終的に救急インストラクター講習を受けて、環境防災科で学んだ知識と講習で身につけた技術で、高校を卒業した後の防災活動の幅を広げていきたいと考えている。

（８）最後に

私の高校に入ってから悩みは、自分の夢と防災のつなげ方がわからなかったことだ。特に大学を目指しているわけでもなく、一般の仕事に就くわけでもなく、これからどうするか聞かれるときはいつも曖昧にごまかしていた。しかし、３年生になった今、違う形で継続させればいいと言う先生の言葉に救われた。実際、防災と直接つなげられる仕事はたくさんあるとは言えない。直接関係なくても、自分の生活の中で防災意識を大切に、仕事や自分の地域の防災意識を上げるきっかけになりたいと考えている。地域とのつながりを大切にしながら自分の家族、友人、たくさんの人にこれから伝えていければと考えている。

外側から見た大震災

義経 有貴

1 はじめに

自分の家族は阪神・淡路大震災の発生した1995年当時は名古屋に住んでいた。自分も当時はまだ生まれておらず、震災について語れないので当時の名古屋から見た阪神・淡路大震災について母に語ってもらった。

2 名古屋から見た阪神・淡路大震災

(1) テレビで見た地震直後

母は当時名古屋に住んでおり明け方に揺れで目を覚ました。震源は名古屋近郊だと予想したが、テレビをつけて神戸の大きな地震だったことにとても驚いた。母が当時勤めていた会社は全国に支店があり神戸にも支店を持っていた。そのため神戸支店の無事を確かめるためにも職場のテレビは一日中つけたままで、地震の起きた一月十七日は仕事にならなかった。

テレビの映像は空撮が多かった。レポーターが被害状況を伝えているものの、知らない町なので元の姿がどんな姿なのかわからず困惑した。「神戸の大丸が…」と報道されても元の建物の姿を知らないので被害の大きさが漠然としか伝わらなかった。メディアも何を報道すればいいか分かっておらず、的を射ない報道でパニックに陥っているように見受けられた。

(2) 支援のありかた

今までこんなことが起きたことがなかったので、とにかく会社で募金を行うことになった。阪神・淡路大震災以前にも災害は起きていたが、社内募金は初めてだった。

募金という名前だが、金額が定められているうえに半ば強制的なもので現在のような募金とは全く異なるものだった。しかし、テレビの映像にショックを受けていた母は「やらなきゃ」という使命に燃えており、このような募金に対する疑問や不満は感じなかった。多くの人が、早く神戸を復興しなければ経済が大変なことになると思っていたし、募金をして支援をするのが当たり前だと感じていた。

募金は様々なコミュニティで行われた。そのため顔の広い人は会社、町内会、婦人会など様々なところに募金していた。募金というより、神戸に送るお金を集金する感覚だった。当時は募金に対する理解が浅かった。

被災地での活動は自衛隊などのプロに任せて、自分たちは募金で支援しようという考え方だった。自分たちが被災地に行ってできることなど何もないと思っていた。

震災直後には「自粛」のムードも広まった。災害で自粛について騒がれるのは母の知る限り初めてのことであった。

(3) 神戸に住んで

神戸に来たら地震について現地の人に話を聞こうと思っていたが、なかなか話してくれなかった。思い出したくないという人が多くいるのを目の当たりにして、神戸の人が震災によって受けた心の傷の大きさを知った。

震災メモリアルパークや人と未来防災センターなどに足を運んだ。当時テレビ越しに見た映像の一部を実際に目にして、震災の残酷さや怖さを実感した。震災の後を当時のまま残すことは自分のような他県から来た人間やこれからの子供たちにとって大切なことだと思った。

実際に住んでみると町はとてもきれいで復興が終わったと思っていたが、神戸で暮らしていく中で実際はまだ復興は終わっていないことを知って驚いた。

神戸に来てよかった。神戸に来たことでいろんな人からの話や体験を通して経験の大切さを知ったし、そこから「いまやれることをやる」「何事にもチャレンジする」という自分の人生の芯が見つかった。

3 母の話を聞いて

母の話の中で大きく驚いたのは、阪神・淡路大震災当時に行われた募金が半強制的だったことだ。自分は環境防災科のボランティアの一環として何度か募金活動のお手伝いに参加したことがあるが、一度も強制的

に集金したことなんて無い。すべて募金してくださる方の善意だ。

自分は初めから募金は善意で行うものだと思っていたし、金額を定めて回収するなんて間違っていると思う。その一方で何の疑問も抱かず当然のようにその募金に応えた当時の人たちはすごいと思う。まさに日本全体が一致団結して神戸の復興を応援していたのではないだろうか。

現在は一口に被災地支援と言っても様々な方法がある。以前のように募金という一つの手段で人々が一致団結して支援をするのは難しいけれども、それぞれに合った独自の方向からの支援でより多様な支援を行うのも大事だと思う。

4 環境防災科

自分が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、中学校の頃にはまった『シムシティ』というゲームだ。このシムシティは、自分が市長となって都市を開発していくシミュレーションゲームだ。所詮はゲームなので実際には考えられない無茶も通用する。完全な都市作成シミュレーションとは言えないが、今までスポーツゲームやアクションゲームしかやってこなかった自分にとって画面の中のリアルな町を自分の手で作り上げるというのはまるで本当の市長になったかのような最高の体験を提供してくれた。こうして自分は画面の中の町の長となった。

わけも分からず風上に石炭火力発電やごみ処理施設などを乱立させて住民が次々と病に倒れて財政破綻した後から、わからない単語を調べるようになった。実際の都市づくりとはどのように行われているのか地図を参考に施設の位置を吟味するなど、本気で架空の町づくりに取り組んだ。

ようやく人口もそれなりに増え納得できるような町が完成した矢先、悲劇が起こった。

災害の直撃である。シムシティにはランダムに災害が起こるようになっており、その災害が自分の作り上げた都市を破壊しつくした。地震で壊れた瓦礫を撤去してほとんど更地になった都市を見ていると、東日本大震災を思い出した。東日本大震災はゲームなんかではない、現実に関東で起こった出来事だ。

ゲームの中では多くの人が死んだ。実際の震災ではどれだけの方が亡くなったのだろう。

ゲームでは超高税率にして何とか破産を防いだが、現実ではどうなったのだろう。

いつも楽しんでたゲームが急に恐ろしく感じた。

災害に自分の町をめちゃくちゃに破壊されてから、災害に強い町づくりについて調べ始めた。しかし、調べても出てくるのは市役所や建設会社のサイトばかりで専門知識のない自分にとってはほとんどわからなかった。

都市を破壊されてからしばらくたって、ついに自分は受験生となった。ゲームをやめてからしばらくたった夏前のある日、同じ部活の友達が舞子高校環境防災科のオープンハイスクールに誘ってくれた。夏休みに一緒に参加すると、防災を専門に学んでいることや、いろんな講師をお招きして専門的なお話をしていただく機会があることがわかった。自分は進学するならここしかないと思った。卒業先の進路に市役所職員があったのも決め手の一つだ。ゲームを通して自分は町づくりを実際に行う市役所の方々に憧れていた。

実際に環境防災科に入ると想像以上に実践的でより細かい知識を学べた。ゲームの中ではワンクリックで簡単にできる水道管の敷設や電力のシステムも実際には高校生の頭では理解しきれないような専門的な技術と知識の上で成り立っていた。

防災科で学んだ知識を使ってシムシティをしていたが、とうとう限界が来た。

お金が足りないのだ。

災害のインフラ被害は「この水道はP-DESだから本当はここに水が通る」といった具合にイメージで補完できる。しかし、ゲーム内の都市の財政や市民の財産はイメージではどうにもならない。自分は環境防災科で学ぶにつれてゲームと現実との埋めようのない差に気付かされた。お金だ。

ゲームでの存在以上に現実世界でのお金は大事で貴重な存在だった。

考えてみれば当然だ。時間がたっても家は勝手に生えてこないし、指先一つで市役所は立たない。災害に強い町をつくろうと配置にこだわっても、肝心の建物が金欠でボロボロだったら災害に強い町とは言えない。

「災害に強い町づくりを後押しする金融のシステムが必要だ」

自分は環境防災科に入ってこのように考えるようになった。

5 将来の夢

自分の将来の夢は、災害に強い町づくりを金融面で支えていくことだ。

現在の金融業界の取り組みとして、災害後の再建のために「災害保険」が存在するほか、災害一時金やBCM格付融資において防災対策に熱心な企業に低金利での融資を行うなど、金融業界は様々な形で防災に関わっている。

いざ進路を考えたとき金融の進路に進むか、前から興味があった市役所に進むか悩んだ。防災をよりしっかり学んで社会で活躍したい思いもある一方で、金融というフィルターを通して一度外側から災害に強い町づくりについて考えてみるのも魅力的に思えたからだ。

悩んでいた自分を後押ししたのは金融業界の防災への取り組みの少なさだった。金融業界には防災関連の金融商品が少ない。

この事実を知った時、自分は経済学を学んで金融業界で防災に関する商品を作り出していきたいと強く思ったのである。

(1) これから

舞子高校には非常に多くの外部講師の先生が来校してくださるが、金融関係の講師が来校したことは自分が過ごしてきたこの3年間で一度もない。金融は防災という視点から見ると非常に規模の小さい分野なのではないだろうか。

インフラ関係や行政の行う防災関連の事業に比べて金融分野の防災事業の認知度が低いのは事実だろう。だが、上記に挙げた取り組みのように防災に金融が全く関わっていないわけではない。

それにもかかわらず、金融系業界における防災へ向けた取り組みが一般に認知され難いのは何故だろうか。自分は金融業界全体が、防災に関して意識を向けていないからではないかと思う。

インフラ関係や行政やマスコミは防災と密接なかわりがある。業務の中に防災的な役割が存在するため防災に対する取り組みも盛んだ。しかし、その他の業界では防災についてどれだけの貢献をしているだろうか。

どの職業にも防災的な貢献が求められているにもかかわらず、防災に携わっている業界・企業は少ない。様々な業界が防災・災害について考え、各々の役割をこなせば社会の防災力は格段に上がるはずだ。

金融業界では現在も防災に関連する商品が生まれ続けている。だが、それらの商品は金融商品全体でみると非常に少規模だ。防災は生活に密接にかかわる分野なので防災関連の金融商品に対するニーズは極めて高いだろう。つまり、防災的な金融商品の少なさはこれからの金融業界の防災貢献の伸びしろの高さだと考えられる。

自分は金融関連の職に就いて、金融業界が防災に向けて大きく舵をとる切っ掛けを作る「イノベーター」になりたい。

6 さいごに

最初にこの語り継ぐを作ることを聞いたとき、母に話を聞こうとは思っていなかった。理由は母が神戸で阪神・淡路大震災を経験していなかったからだ。環境防災科での学習を通して被災地の声の大切さや、体験の貴重さを学んできた自分は被災地信仰のような価値観を形成しつつあった。恥ずかしい話ではあるが、自分は当たり前のように「やはり、話を伺うとすれば神戸の被災者の方だろう」なんて考えていた。

この歪んだ価値観を矯正出来たきっかけは和田先生の「神戸の外から見た阪神・淡路大震災もある。」というお言葉と、「私だって話そうと思えば話せる。」と自信ありげな母の言葉だった。

実際に母に話を聞くと最初は昔のことなので思い出しながら話していたのだが、次第に記憶が鮮明に思い出せたのか非常に細かい内容の話や、質問したこと以外の話などを溢れ出したかのように話してくれた。気が付いたら母の言葉を聞き逃すまいと自分も外部講師の話を聞くのと同じように真剣に話を記録していた。

実際に現地で被災したのか、していないのかは関係ない。その当時、どんな場所から、どんな視点で災害を見ていたのか。そこから後世に何が伝えられるのか。こういったことについて語り継いでいくことが大事なのだと思つた。自分が生まれてから、様々な災害があった。どの災害も自分は外側から眺めてきたがこれから先はまだ多くの災害が起こるだろう。その中で自分が実際に被災することも当然あり得る。日常から非日常へと変わるその時、生き残ることができるかどうか。過去の災害で何が起こったかを語り継ぎ、適切な行動を想定外が起きた時にとれるようにすることが大事だと思う。

長田区での被災

余嶋 芹絵

私は現在長田区に住んでいる。長田区は阪神・淡路大震災で最も火事の被害が大きかったところだ。そこでどういったことが起こったのかみんなに知ってほしい。

1 阪神・淡路大震災の概要

(1) 地震の発生状況

平成7年1月17日、5時46分、兵庫県南部に震度6、場所によっては、震度7の強い地震が発生した。この地域としては、昭和27年に記録した吉野地震の震度4をはるかに上回る大きなものであった。

震源地	淡路島北部 北緯34度36分 東経135度02分
震源地の深さ	16 k m
各地の震源	震度7 (神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、北淡町、一宮町、津名町の一部) 震度6 (神戸・洲本) 震度5 (豊岡) 震度4 (姫路) など
マグニチュード	7.3

(2) 地震の特徴

人口350万人余が密集し、日本の経済活動の中核を担う淡路北部から神戸市および、阪神地域の直下で発生した内陸・都市直下型地震であった。

深さ16 k mという比較的浅い部分で発生し、断層が横にずれることにより起こったもので、大きなエネルギーが一挙に解放されるタイプであった。

(3) 被害の概要 … 被害の特徴

大きく3つに分けて説明しようと思う。

1. 大都市を直撃した大規模地震だったため、電気、水道、ガスなどの被害が広範囲となるとともに、鉄道、新幹線、高速道路、新交通システム、都市間交通・地下鉄が損壊し、生活必需基盤（ライフライン）に壊滅的な打撃を与えた。
2. 古い木造住宅の密集した地域において、地震による大規模な倒壊、火災が発生し、とくに私の住んでいる神戸市長田区、そして兵庫区などでは大火災が多発した。
3. 神戸・阪神地域という人口密集地で発生したため、多数の住民が避難所での生活を余儀なくされた。

2 震災の前日

いつもと変わりのない1月16日。いつものように家の家事をし、いつものように仕事をしていた。しかしこの日母は何を思ったのか、寝る前に貴重品などをカバンにつめ、服などの着替えや上着を枕元に置いていたそう。普段こんなことはしなかったのだが、その日に限ってなぜかそういう行動をとったのだ。また、いつもならしまっているはずの父の登山用の靴が出ていたそう。

3 1月17日 (震災当日)

(1) 午前5時46分

地響きが鳴り、「ドーン！」という飛行機が落ちたかのようなすさまじい音と、母の叫び声で父は飛び起きた。大きな揺れで家具が倒れ、物という物が次々落ちてゆく。一体何が起こったのかまったく把握できず、とにかく姉（当時8ヵ月）の身を確認した。すると、幸いなことに姉は寝相が悪かったため、落ちてきたタンスの下敷きにならずに済んだ。この時寝相が悪くなければ、タンスの下敷きとなり、赤ちゃんだった姉の命はなかっただろうと思う。

揺れがおさまったあと、とりあえず出ようと思ったが扉の前で熱帯魚の水槽が倒れて割れていたので、た

またま出しっぱなしにしていた父の登山用の靴を履いて進んだのであった。

(2) 揺れの後

家は崩れなかったが、様子を見ようと外に出るとあたりにはガスの臭いが漂っていた。どうやらガス管が破壊してしまったらしい。その際、周りの人々が「絶対タバコ吸うなよー!!」「ライターつけんなよ!!」と叫んでいたようだ。ガスが漂っている中、火の元があれば大爆発になりかねない。

そんな中、近所に住んでいる女性が頭から血を流していたので、学校付近にある「協同病院」という大きな病院へ運ぶことになった。病院へ行く際、本町筋商店街が見えるのだが屋根はすべて地面に落ちていたのだ。そんな光景を目の当たりにしながら、院内に入って行った。待合室では床やイスに多くの負傷者が集まり、いつもの病院の静けさは一つもない。両親が待合室にいと、救急で担架に運ばれてきた知人の姿があった。心肺蘇生を受けながら入ってきたが、その人は結局かえらぬ人となってしまった。両親はその光景が今でも忘れられない。また、そののちに、かつてうちの店にバイトに来ていた男の子も亡くなったそうだ。

(3) 避難所で

その後、とりあえず近くの小学校へ避難した。一瞬の出来事で状況があまり呑み込めず、しばらく母は座りながらぼーっとし、赤ちゃんだった姉を抱いていた。けれど避難所でも安心する暇などない。余震はまだ続き、母は揺れるたびに姉をギュッと抱きしめる。

その日の昼。誰だかまったくわからないが、姉にミルクの入った哺乳瓶を持ってきてくれた人がいた。「これちょっと冷たいかもしれへんけど飲みな。」と渡してくれたのだ。今はミルクの温度などどうでもいい。もらえただけでも感謝だった。お礼を言ったあと、哺乳瓶を手で温めて飲ませた。

4 震災から数日後

(1) 私の家では

私の家は阪神・淡路大震災が起こる半年前に家を建てたので、家の中は荒れてしまったが、建物自体はあの大地震に耐えることができた。家は4階建てになっており1階はカウンターが数席と座敷が2つ、2階は広い座敷の宴会場、3、4階は我が家になっている。

1、2階には、「学校の体育館で寝るのは腰が痛い」という人や「床が冷えて眠れない」という人が避難してきた。幸い私のお店は飲食店を営んでいたため、食料などにあまり困ることはなかった。けれど、電気が止まっているので季節が冬とはいえ冷蔵庫のものが腐ってしまう。この時期フグを取り扱っていたので、もったいないし腐ってしまう前に食べようということになり、被災しているのにご飯が「てっちり」だったそうだ。

(2) 自警団結成

震災から数日後、「火事場泥棒」の報告が多発した。震災から日にちが経てばもちろん食料などもなくなってき、必要だと思うものも増えてくるだろう。けれどどんなに状況が変わろうが泥棒は泥棒である。やってはいけないことにはかわりはない。

震災から3、4日後「自警団」が結成された。私の父もこれに加わった。夜に町を集団で歩きパトロールをするだけだが、それだけでも火事場泥棒の件数は大幅に減ったのであった。

5 実家へ

北区に住んでいるじいちゃんとおばあちゃんが車で迎えにきた。まだ姉が幼かったというのもあり、父を残して母と姉は車に乗り母の実家へ向かった。家を出たのは16時だった。

ミルクもオムツもないまま向かったのが、行き先の近くの薬局によった。店内はぐちゃぐちゃに荒れており、その中から探しながら掘り起こしてもらった。値段もまったくわからない状態だったので「値段はこんなものでいい」と店員さんが安く売ってくれた。

店を出て実家へと進んだのはいいが、有馬街道が一か所崩れていたのが、ノロノロと進むはめになった。家を出たのが16時に対し、着いたのは夜の20時30分を過ぎていた。

実家の方は被害が少なく、電気やガス、水道が通っていたので不自由はしなかった。テレビで地元の様子を改めて見ると、とても悲惨なものだった。私の家は国道二号線のすぐ近くに建っているが、灘の方で高速道路が倒れていると知ったときはとても驚いたそうだ。

6 体験談を聞いて

私は早生まれの1999年生まれて、阪神・淡路大震災の体験はしていない。だから親から話を聞いたときは、なかなか想像ができない出来事ばかりだった。地震が起こった際、「飛行機が落ちてきたような音」や「何か大きなものが家に激突したような音」など様々だが、どれも体験したことがないため、まったくわからない。今まで何度か地震は体験したことがあるが、せいぜい強くても震度5弱ほどだったと思う。

環境防災科に入る前の幼いころ、防災にあまり興味のなかった昔の自分は、少し異常かもしれないが、地震が起こった時「怖い」という思いよりも、「うわー、地震や。すごっ」というような感じで地震が起こるという珍しさの方が勝ってしまうのが正直なところだった。だが、どんなに小さな地震が起こっても、隣で寝ている母は私と弟を寄せ集め、おおいかぶさるように守っていた。あれほどの大地震を体験していれば少しの揺れでも起きてしまうそう。

あと数十年後に南海トラフ地震が必ず起きると言われている。最近では、震度3ほどの地震がテレビをみているときに、よく緊急地震速報として流れてくるのだ。とくに和歌山の方などで地震が起きるたび、私は「あー、そろそろ近いうちに南海トラフ地震が起こりそうだな。」と思う。普段はあまり気にしていないが、地震が起こったとき携帯からも緊急地震速報専用の通知音が鳴り響くとき、鳴るとわかっていても、「恐怖」といっていいものか、よくわからないが不安が胸をよぎるのだ。

もし今この瞬間、大地震が起こったら、自分はこういった対応ができるのだろうか。

環境防災科の3年生だと名乗っているが、いざ実際に起こったとなると的確に動ける自信がない。この学科でたくさんの防災を学んできたが、それを活かしたことが自分にできるのか、ただ学んできただけの人間となってしまうのか、不安がたくさんある。阪神・淡路大震災では、状況がうまく飲み込めていない人や、「この時間の電車に乗らなければ会社に遅れてしまう」など、普段のことをしなければ、と思う人たちがいた。私も混乱し状況がうまく把握できないかもしれない。だが、私たちがそこで率先して行動をとらなければ、環境防災科の意味がない。考える前に、先に行動。目の前のことをなさなければならないのだ。災害時は1分1秒が命取りなのだから。

災害が起こった時、先ほどのように混乱し行動がとれないかもしれないが、日々訓練をしていればきっとそんなことはないはず。岩手県釜石市で起こった「釜石の奇跡」が証明しているのではないかなと思う。

「釜石の奇跡」は、日々の訓練の成果で、一人ひとりが「逃げる」ことを実践してくれた。そのおかげで、小学生1927人、中学生999人の命が助かり、生存率は99.8%だった。だが、病気で学校を休んでいた子や、近所に住んでいる高齢者を助けようとした少女を含めて、釜石市では残念ながら5人の小中学生が亡くなってしまった。死者がでてしまった時点で、完璧に訓練の成果がでた、または成功したとはいかないが、訓練あってこそこれだけの人々が救えたのではないかなと思う。

日々の「防災」の重要性はわかったが、これをいったいどう広めていくのか、どう習慣づけてもらうか、そしてどうやって防災意識をもってもらうかが問題なのではと思う。そこで私なりに考えてみた。

まずは、地域が一団とならなければいけない。地域の住民同士がバラバラでは、まともに行動できない。そこで、地域で何かしらのお祭りをしてみてはどうかなと思う。私の住んでいる長田区では、毎月商店街でフリーマーケットや屋台を出したり、鉄人広場でイベントをおこなったり、長田ならではの「くつつこまつり」などが開催されている。このようにお祭りなどをおこなうことで、人と人が接する機会が増え、コミュニティの向上をはかることができるのではと思う。さらに、コミュニティの向上だけでなく、まちおこしにもなるのだ。今やもはや阪神・淡路大震災を機にさびれてしまった「六間道筋商店街」も少しずつこれで明るさを取り戻してきている。以前の六間道筋商店街は見たことがない。だからこそ、これでもかといわんばかりの明るさを取り戻したいと思っている。

次にどう防災を習慣づけてもらうかだ。習慣とは日々常日頃からやっていたいかなければ身につかない。だが、防災を常日頃からは行うのは、防災を仕事としている人か、防災の専門家などしかできなく、一般の人々にはとても困難に思える。そこでだ。小学校や中学校で防災を学んでもらおうと思う。そんなこと簡単には無理なのではと思うかもしれないが、簡単にできるのだ。それはお昼の放送などだ。多分どの小学校や中学校にもお昼の放送があるだろう。そこで、お昼の放送として防災の知識をピックアップして流すという簡単なものだ。たとえ放送に興味がなくとも、流すだけと流さないのでは大きく変わってくる。わかりやすくととえてみるとすると、授業でもなんとなく聞いていても、テストのときに「あー、なんか先生がこういうことを言っていたな。」となるのと同じような感じだ。流すだけでも十分に違ってくる。もちろん毎日しっか

り放送を聞いてくれる人もいるだろう。また、放送を流す側としても、いい勉強になるのではと思う。中学生はどうだかわからないが、小学生のような小さな子どもたちは、よく学校であったことを親や親せき、近所の人に話すことはないだろうか。「今日学校でこんなことがあったんだよ」や「今日体育のかけっこで一番をとったんだよ」など学んだこと、自慢できること、様々な話をしてくる。それを活かすというのも目的の一つだ。子どもから大人に防災を伝えてもらうのだ。防災などは専門的なことが多いが、小さな子どもでもわかることだってある。けれど、どんなに簡単な内容でも命を救える方法となるのだ。

最後にどう防災意識を持ってもらうかだ。先ほどの話では「子どもから大人に防災を伝える」のが目的だが、話だけではいざ災害が起こった時、行動には移せない。実践はやはり大切である。地域のコミュニティが向上してきたところで、次におこなうのは「防災訓練」だ。長田区の私の母校である真陽小学校は海拔が5メートルほどで、南海トラフ地震が起こったとき、ハザードマップでは津波にのまれる予想なのだ。そこで実施されたのが、警察官が付き添いの避難訓練。避難経路の確認などがおこなわれた。実際に参加してもらうことでより高く意識を持ってもらえと思う。

私はこの訓練が長田区だけでなく、他の地域・市・県に広なればいけないと思う。災害に襲われて大打撃を受けた長田区は、確かに前より防災意識が強まった。同じ被害・悲劇を繰り返すまいと。でも、他の地域はそうあってはいけない。1000年に1度の大地震、阪神・淡路大震災での悲惨な出来事があるのだから、それが生かせられなければいけない。出来事が無駄となってしまつては、亡くなった多くの人々に申し訳ない。同じ出来事をくりかえさない。それを忘れてはいけない。

私は将来警察官になれたらなと思っている。最初はただ自分の好きな柔道を将来に生かしたいと思って目指した夢だ。また、環境防災科に入ってから自衛隊を考えたこともあった。災害時、自衛隊は警察・消防よりも人員と自活能力が高く、装備もすごい。中でも一番人々を助けることのできる仕事だ。けれど、自衛隊は時間が経ち、することを終えれば撤退していつてしまい、その後のサポートはしない。だが、そんな中撤退することなく住民のそばにいて、継続的に地域に寄り添う活動ができるのは警察官だけだと思ったからだ。私は長田区が大好きである。そして、警察官はどの防災機関よりも一番地域に密着している仕事であるから、私は警察官になりたいと思ったのだ。

警察官になれたら、地域の防災リーダーとなれるように努力していきたいと思っている。また、警察官になっても防災を広げていくために、外部講師としてみんなに防災の大切さ・重要性を知ってもらいたい。将来は防災を極めていきたいと考えているので、自衛隊や消防の方と一緒になれたらなと思っている。

災害は0には絶対できない。でも被害を軽減したり、少しでも防ぐことはできるのだ。災害の多い日本が、どんなに大きな勢力の災害にも負けないようにするために、私は少しでも多く役に立てるだけの人間になりたいと思っている。



兵庫県立舞子高等学校

〒655 - 0004 神戸市垂水区学が丘3丁目2番
Tel : 078 - 783 - 5151 Fax : 078 - 783 - 5152